

日向市所在

お か

岡遺跡（第6・7次調査）

さ か も と

坂元第2遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4

2012

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第212集

『岡遺跡(第6・7次調査次調査)・坂元第2遺跡』正誤表

ページ・図番号	誤	正
凡例 2 遺構の縮尺	炉穴... 1/30	炉穴...1/40
P9 写真1	調査前状況 南から	調査前状況 北から
P22 左段 蛤形粗製剥片	蛤形粗製剥片(第21図35~38)	蛤形粗製剥片(第21図35~37・39)
P36 左段上から6行目	126は組織痕をもたないが	125は組織痕をもたないが
P36 右段上から2行目	135~141は平基式	134~140は平基式
P36 右段下から1行目	150は打面転移が	152は打面転移が
P38 左段上から1行目	152は尾鈴山溶結凝灰岩で、	149は尾鈴山溶結凝灰岩で、
P38 左段上から2・3行目	153はホルンフェルス製で	150はホルンフェルス製で
P40 左段上から4・5行目	短軸に抉りを入れるもの(177~178)、長軸に抉りを入れるもの(179~184)がある。182と183	短軸に抉りを入れるもの(174・175)、長軸に抉りを入れるもの(176~181)がある。179と180
P73 右段の下から1行目	内面にはタタキ痕、	内面には当て具痕、
第14表302 手法・調整等の内面	タタキ	当て具痕



岡遺跡第6・7次調査区全景（北東から）



岡遺跡第6次調査区全景（南西から）



岡遺跡第 6 次調査区 出土縄文時代晩期土器



岡遺跡第 7 次調査区 出土縄文時代石斧

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施して参りました。本書は、平成21～23年度にかけて実施した日向市大字平岩に所在する岡遺跡、坂元第2遺跡の発掘調査の成果を記載しております。

今回報告する岡遺跡は、縄文時代早期の集石遺構や炉穴が検出され、遺物も縄文土器や弥生土器等が出土しました。また、中世～近世の掘立柱建物跡も検出されました。坂元第2遺跡では、縄文時代早期の集石遺構が検出されました。

今回の調査で得られた多くの成果が、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成24年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 森 隆茂

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成 22・23 年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した日向市岡遺跡（第 6・7 次調査）・坂元第 2 遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関する報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により、宮崎県教育委員会が調査主体となり、同県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
 - 岡遺跡第 6 次調査
 - 基準点・グリッド杭等の設置・・・(株)創研
 - 空中写真撮影・・・(有)ふじた
 - 岡遺跡第 7 次調査
 - 基準点・グリッド杭等の設置・・・(株)日向測量設計株式会社
- 4 現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の担当者が行った。
- 5 整理作業は、各遺跡の担当者が、整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。なお、一部の石器実測及びトレースについては、岡遺跡第 6 次調査は(株)九州文化財研究所に、岡遺跡第 7 次調査は(株)アコードへそれぞれ業務委託した。
- 6 自然科学分析として、放射性炭素年代測定を(株)古環境研究所に委託し、その成果報告については、第 4 章に大嶋昭海が編集して掲載した。
- 7 本文の執筆は分担して行い、第 2 章・第 3 章は飯田博之、第 4 章は竹下昭彦、第 5 章は大嶋昭海、第 6 章は中川みな子、第 7 章は松浦朋彦が執筆した。
- 8 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書全体は柳田晴子・中川みな子が編集した。
- 9 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
- 2 遺構・遺物実測図の基本的な縮尺は以下のとおりである。
 - 遺構 土層断面図...1/80、掘立柱建物跡...1/80、土坑...1/30・1/40、集石遺構...1/30、炉穴...1/30、溝状遺構...1/40・1/60
 - 遺物 縄文土器...1/4、弥生土器...1/3、土師器・須恵器...1/3、陶磁器類...1/3、石核・剥片・石鏃・石匙...2/3、石斧...1/3、石錘・スクレイパー・礫器・敲石・凹石・磨石・石皿...1/4、その他の石器...1/3・2/3、火打石...1/1
- 3 本書に使用した主な略記号は次の通りである。
 - SB = 掘立柱建物跡 SC = 土坑 SE = 溝状遺構 SG = 道路状遺構 SH = ピット・小穴
 - SI = 礫群・集石遺構 SP = 炉穴 Gr = グリッド Tr = トレンチ K-Ah = 鬼界アカホヤ火山灰
- 4 本書で使用した標高は海拔高であり、方位は座標北(G.N.)を基本として一部の平面図・遺構実測図は磁北(M.N.)を用いた。なお、図面上で座標北はG.N.と明記し、磁北(M.N.)に関しては未表記である。
- 5 石器の節理面は 1 点鎖線で、敲打痕の認められる部分は波線の で表示した。
- 6 石器実測図への表現として以下のようにした。
 - 図面上で明示できない範囲については矢印とコ・ス・マ・トで示した。
 - コ = 敲打痕 ス = 磨痕 マ = 摩滅 ト = 砥痕
 - 実測図中の網掛けは磨面・砥面、黒塗りはガジリを表す。
 - 石斧についても削痕範囲を網掛けにて表現している。
- 7 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。
- 8 本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」としたものは、「尾鈴山酸性岩類」の主体をなす溶結凝灰岩(WT1・WT2)を指す。遺跡で認められる「尾鈴山酸性岩類」には他に花崗閃緑斑岩・火山角礫岩などが含まれるが、遺物や遺構の一部として「尾鈴山酸性岩類」が利用される場合、厳密な岩石名の特定が困難なことも多い。このため、本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」と記した資料には溶結凝灰岩を主体としつつも、他の「尾鈴山酸性岩類」を含む可能性があることを付記しておく。

本文目次

第 章	はじめに	
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査の組織	1
第 章	遺跡の環境	
第 1 節	地理的環境	3
第 2 節	歴史的環境	3
第 章	調査の経過	
第 1 節	平成 21 年度の調査	6
第 2 節	平成 22 年度の調査	6
第 3 節	グリッド杭の設置	6
第 章	岡遺跡第 6 次調査の成果	
第 1 節	調査の方法と経過	8
第 2 節	基本層序	10
第 3 節	旧石器時代の遺構と遺物	12
第 4 節	縄文時代早期の遺構と遺物	14
第 5 節	縄文時代晩期の遺構と遺物	27
第 6 節	その他の時代の遺構と遺物	43
第 7 節	小結	46
第 章	岡遺跡第 7 次調査の成果	
第 1 節	調査の方法と経過	47
第 2 節	基本層序と遺物包含層の認識	48
第 3 節	縄文時代の遺物	51
第 4 節	弥生時代～古墳時代の遺物	72
第 5 節	古代の遺物	73
第 6 節	中世～近世の遺構と遺物	75
第 7 節	小結	80
第 8 節	第 6・7 次調査のまとめ	81
第 章	坂元第 2 遺跡調査の成果	
第 1 節	調査の方法と経過	83
第 2 節	基本層序	85
第 3 節	縄文時代の遺構と遺物	86
第 4 節	弥生時代～古墳時代の遺物	89
第 5 節	まとめ	89
第 章	自然科学分析	
第 1 節	岡遺跡第 6 次調査・坂元第 2 遺跡の放射性炭素年代測定	90
第 2 節	岡遺跡第 6 次調査のテフラ分析	91
報告書抄録		巻末

挿図目次

第 1 章 はじめに

第 1 図 東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図	2
------------------------------	---

第 2 章 遺跡の環境

第 2 図 周辺遺跡分布図	5
第 3 図 岡遺跡と周辺地形との高低差	5

第 3 章 調査の経過

第 4 図 岡遺跡調査区およびグリッド配置図	7
------------------------	---

第 4 章 岡遺跡第 6 次調査の成果

第 5 図 岡遺跡第 6 次調査区 調査区周辺地形図	9
第 6 図 岡遺跡第 6 次調査区 土層断面図	11
第 7 図 岡遺跡第 6 次調査区 旧石器時代遺構・遺物分布図	12
第 8 図 岡遺跡第 6 次調査区 礫群実測図	13
第 9 図 岡遺跡第 6 次調査区 旧石器実測図	13
第 10 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代早期遺構分布図	15
第 11 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代早期遺構集中部詳細分布図	15
第 12 図 岡遺跡第 6 次調査区 集石遺構実測図	16
第 13 図 岡遺跡第 6 次調査区 土坑実測図	17
第 14 図 岡遺跡第 6 次調査区 SP1 実測図	18
第 15 図 岡遺跡第 6 次調査区 SP2 実測図	18
第 16 図 岡遺跡第 6 次調査区 SP3 実測図	19
第 17 図 岡遺跡第 6 次調査区 SP4・5 実測図	19
第 18 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代早期遺構出土石器実測図	20
第 19 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代早期土器実測図	22
第 20 図 岡遺跡第 6 次調査区 旧石器時代～縄文時代早期石器実測図（1）	23
第 21 図 岡遺跡第 6 次調査区 旧石器時代～縄文時代早期石器実測図（2）	24
第 22 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代早期末～前期土器実測図	26
第 23 図 岡遺跡第 6 次調査区 層の遺構・遺物分布図	27
第 24 図 岡遺跡第 6 次調査区 層の遺物垂直分布図	27
第 25 図 岡遺跡第 6 次調査区 SC10 実測図	28
第 26 図 岡遺跡第 6 次調査区 SC10 遺物分布図	28
第 27 図 岡遺跡第 6 次調査区 SC10 出土土器実測図	29
第 28 図 岡遺跡第 6 次調査区 SC10 出土石器実測図	30
第 29 図 岡遺跡第 6 次調査区 埋蔵出土土器実測図	31
第 30 図 岡遺跡第 6 次調査区 埋蔵出土状況実測図	31
第 31 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代晩期土器実測図（1）	33
第 32 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代晩期土器実測図（2）	34
第 33 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代晩期土器実測図（3）	35
第 34 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代晩期土器実測図（4）	36
第 35 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代石器実測図（1）	37
第 36 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代石器実測図（2）	38
第 37 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代石器実測図（3）	39
第 38 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代石器実測図（4）	40
第 39 図 岡遺跡第 6 次調査区 a・b 層上面遺構分布図	43
第 40 図 岡遺跡第 6 次調査区 a・b 層上面遺構実測図	44

第41図	岡遺跡第6次調査区	弥生時代～中世遺物実測図	45
第 章 岡遺跡第7次調査の成果			
第42図	岡遺跡第7次調査区	調査区周辺地形図・トレンチ配置図	49
第43図	岡遺跡第7次調査区	土層断面図	50
第44図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代早期土器実測図	54
第45図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代早期・晩期土器実測図	55
第46図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代晩期土器実測図(1)	56
第47図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代晩期土器実測図(2)	57
第48図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代晩期土器実測図(3)	58
第49図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代晩期土器実測図(4)	59
第50図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代石器実測図(1)	60
第51図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代石器実測図(2)	61
第52図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代石器実測図(3)	62
第53図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代石器実測図(4)	63
第54図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代石器実測図(5)	64
第55図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代石器実測図(6)	65
第56図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代石器実測図(7)	66
第57図	岡遺跡第7次調査区	縄文時代石器実測図(8)	67
第58図	岡遺跡第7次調査区	弥生時代～古墳時代土器実測図	72
第59図	岡遺跡第7次調査区	古代土器実測図	74
第60図	岡遺跡第7次調査区	遺構分布図	76
第61図	岡遺跡第7次調査区	掘立柱建物跡実測図(1)	77
第62図	岡遺跡第7次調査区	掘立柱建物跡実測図(2)	78
第63図	岡遺跡第7次調査区	中世～近世遺物実測図	79
第64図	岡遺跡第6・7次調査区	基本土層比較図	81
第 章 坂元第2遺跡調査の成果			
第65図	坂元第2遺跡	調査区周辺地形図	84
第66図	坂元第2遺跡	土層断面図	85
第67図	坂元第2遺跡	遺構・遺物分布図	86
第68図	坂元第2遺跡	1号集石遺構(SI1)実測図	87
第69図	坂元第2遺跡	1号集石遺構(SI1)構成碟データ	87
第70図	坂元第2遺跡	2号集石遺構(SI2)実測図	87
第71図	坂元第2遺跡	縄文時代遺物実測図	88
第72図	坂元第2遺跡	弥生時代～古墳時代土器実測図	89
第 章 自然科学分析			
第73図	岡遺跡第6次調査区	におけるテフラ分析結果	92
第74図	岡遺跡第6次調査区	暦年較正結果	92

表目次

第 章 岡遺跡第6次調査の成果			
第1表	岡遺跡第6次調査区	旧石器計測表	13
第2表	岡遺跡第6次調査区	集石遺構一覧表	16
第3表	岡遺跡第6次調査区	土坑一覧表	17
第4表	岡遺跡第6次調査区	炉穴一覧表	19
第5表	岡遺跡第6次調査区	縄文時代早期土器観察表	25

第 6 表	岡遺跡第 6 次調査区	旧石器時代～縄文時代早期石器計測表	25
第 7 表	岡遺跡第 6 次調査区	包含層以外出土土器観察表	26
第 8 表	岡遺跡第 6 次調査区	縄文時代晩期土器観察表	41
第 9 表	岡遺跡第 6 次調査区	縄文時代晩期石器計測表	42
第 10 表	岡遺跡第 6 次調査区	弥生時代～中世土器観察表	45
第 章 岡遺跡第 7 次調査の成果			
第 11 表	岡遺跡第 7 次調査区	縄文土器観察表	68
第 12 表	岡遺跡第 7 次調査区	縄文時代石器計測表	70
第 13 表	岡遺跡第 7 次調査区	弥生時代～古墳時代土器観察表	73
第 14 表	岡遺跡第 7 次調査区	古代土器観察表	74
第 15 表	岡遺跡第 7 次調査区	掘立柱建物跡一覧表	78
第 16 表	岡遺跡第 7 次調査区	中世～近世遺物観察表	79
第 17 表	岡遺跡第 7 次調査区	近世遺物計測表	79
第 章 坂元第 2 遺跡 調査の成果			
第 18 表	坂元第 2 遺跡	基本層序	85
第 19 表	坂元第 2 遺跡	縄文土器観察表	88
第 20 表	坂元第 2 遺跡	縄文時代石器計測表	88
第 21 表	坂元第 2 遺跡	弥生時代～古墳時代土器観察表	89
第 章 自然科学分析			
第 22 表	測定試料前処理・調整法および測定法		92
第 23 表	放射性炭素年代測定結果		92
第 24 表	岡遺跡第 6 次調査区におけるテフラ分析結果		92

写真図版

図版 1	岡遺跡第 6 次調査区 (調査区遠景、調査区東壁、調査区西壁、谷部巨礫集中、礫集中、SI5、SI1)	94
図版 2	岡遺跡第 6 次調査区 (SI2、SI3、SI3と散礫、SC9焼土検出、炉穴状土坑完掘状況、SC5・SP1完掘状況、SP3完掘状況)	95
図版 3	岡遺跡第 6 次調査区 (SP4・SP5・SP2、SC10遺物出土状況、埋甕出土状況、道状遺構検出状況、層完掘状況)	96
図版 4	岡遺跡第 6 次調査区 (旧石器時代の遺物、縄文時代早期 遺構出土の遺物、縄文時代早期の土器 縄文時代早期石器(1)縄文時代早期末～前期土器)	97
図版 5	岡遺跡第 6 次調査区 (SC10出土土器、SC10出土石器、縄文時代晩期土器(1)、(2))	98
図版 6	岡遺跡第 6 次調査区 (縄文時代晩期土器(3)～(6)、縄文時代晩期石器(1))	99
図版 7	岡遺跡第 6 次調査区 (縄文時代晩期石器(2)～(4)、弥生時代終末期～古墳時代初頭土器、弥生時代～近世遺物)	100
図版 8	岡遺跡第 7 次調査区 (調査区近景、調査区遠景、調査風景、SB1～5)	101
図版 9	岡遺跡第 7 次調査区 (縄文時代早期土器、縄文時代晩期土器)	102
図版 10	岡遺跡第 7 次調査区 (石鏃・石匙、石斧)	103
図版 11	岡遺跡第 7 次調査区 (石錘、スクレイパー・礫器、その他の石器)	104
図版 12	岡遺跡第 7 次調査区 (石皿、敲石、凹石・磨石)	105
図版 13	岡遺跡第 7 次調査区 (弥生時代～古墳時代土器、古代土器、中世～近世遺物)	106
図版 14	坂元第 2 遺跡 (調査区全景、調査風景、SI1検出状況、SI1敷石検出状況、SI1敷石下礫検出状況、SI1完掘状況)	107
図版 15	坂元第 2 遺跡 (SI2検出状況、SI2完掘状況、調査区南西部壁面土層堆積状況、出土土器、出土石器)	108

第 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（日向～都農間）約19.7kmの埋蔵文化財所在状況について、県文化財課は、平成17年度に予定路線内に32遺跡、306,700㎡の分布調査結果を西日本高速道路株式会社九州支社に提示した。その後、当該区間は、平成17年度末までに関係市町との設計協議が終了し、18年度末には用地買収に着手した。この間、当区間の平成26年度供用開始が公表され、平成19年11月には、発掘調査対象地の見直しがされ、暫定2車線261,400㎡に面積が減少した。

平成20年7月1日、『埋蔵文化財発掘調査協定書』が西日本高速道路株式会社九州支社長と宮崎県知事との間で締結され、発掘調査範囲や体制、全体の実施計画、調査費用の概算額が提示された。その後、同年10月17日付けで「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を結び着手できる可能性がある10遺跡3,500㎡の発掘調査に着手した。平成21年1月には、用地取得や文化財調査の進展を条件に平成25年度の供用開始が努力目標となったが、平成23年11月末現在32遺跡中26遺跡は完全に調査を終了、未着手は3遺跡を残すのみとなっている。

岡遺跡は、平成17年3月に実施した分布調査では、遺物の採集はなかったが、地形等から考慮して遺跡の広がる可能性が高く、広い範囲を協議必要箇所とした。その後、平成20年2月に行った踏査では、縄文土器や弥生土器片、石斧等の遺物を採集している。

通知文書は、西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所長から平成21年4月1日付けで埋蔵文化財の発掘について通知が提出され、4月24日付けで「発掘調査」の指示が県教育長名で回答されている。

具体的な協議は通知文書から遅れ、平成21年11月から本格化した。工事工程の都合上、構造物施工箇所を中心に、用地引渡し前に地権者の承諾を得て調査を行った。

坂元第2遺跡は、岡遺跡と同様、平成21年11月から協議を開始し、地権者の承諾が得られた箇所から調査に着手していくこととなった。通知文書についても

岡遺跡と同様の措置が講じられている。

第 2 節 調査の組織

調査組織は以下のとおりである。

【調査主体】 宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

平成21年度（岡遺跡第1～3次）

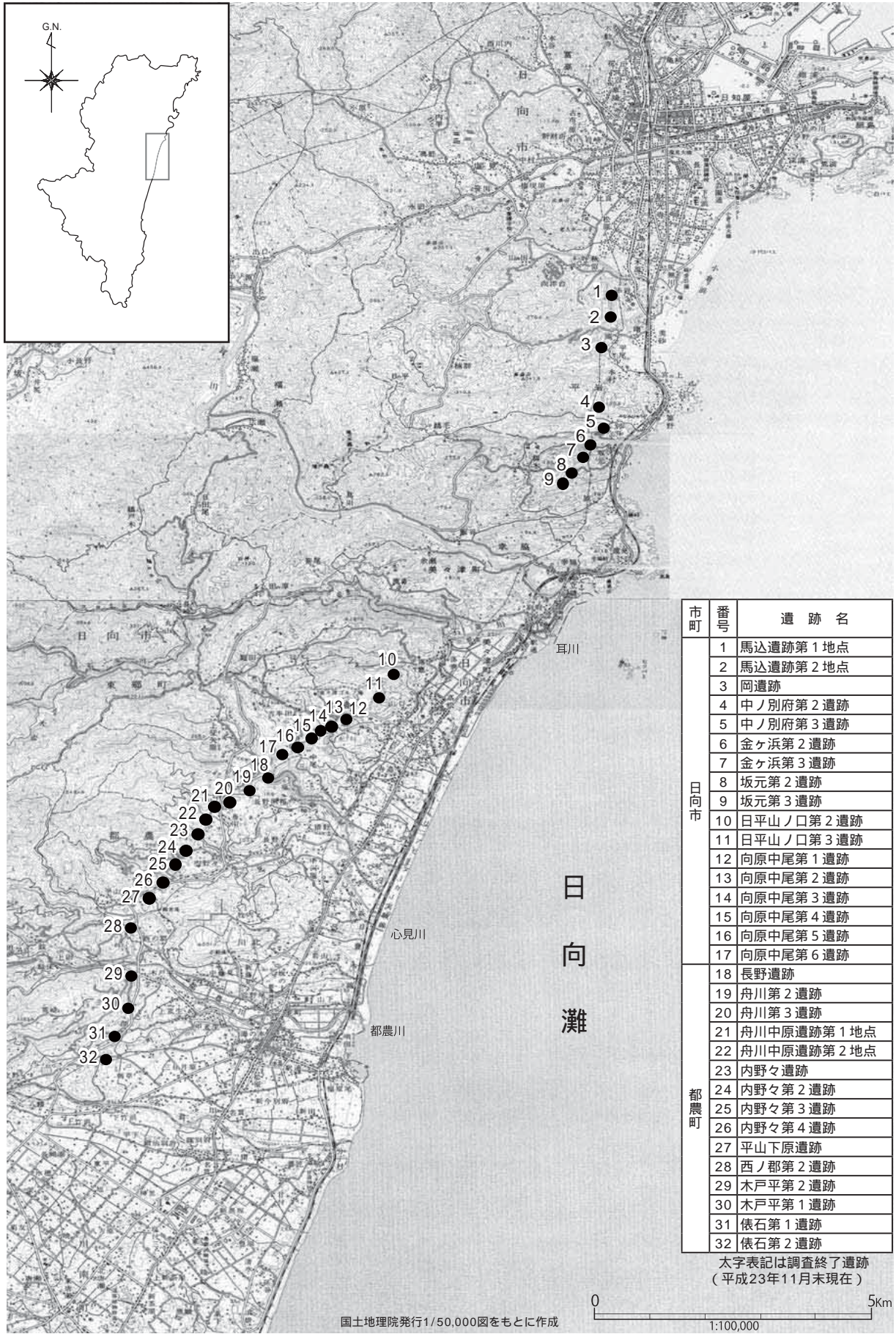
所 長	福永 展幸
副所長兼総務課長	長友 英詞
主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
調査第一課長	長津 宗重
副主幹兼調査第一担当リーダー	飯田 博之
調査第一担当主査	崎田 一郎
調査第一担当主任主事	藤木 聡

平成22年度（岡遺跡第4～8次）

所 長	森 隆茂
副所長	北郷 泰道
総務課長	矢野 雅紀
副主幹兼総務担当リーダー	長友由美子
調査第一課長	長津 宗重
副主幹兼調査第一担当リーダー	飯田 博之
調査第一担当主査（第4・6次）	泊 俊一郎
調査第一担当主事（第4・6次）	大嶋 昭海
調査第一担当主査（第5・7・8次）	竹下 昭彦
調査第一担当主事（第5・7次）	中川みな子
調査第一担当主事（第8次）	久保田陽香

平成23年度（岡遺跡整理作業・坂元第2遺跡）

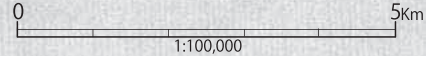
所 長	森 隆茂
副所長	北郷 泰道
総務課長	坂上 恒俊
副主幹兼総務担当リーダー	長友由美子
調査第一課長	長津 宗重
副主幹兼調査第一担当リーダー	飯田 博之
調査第一担当主任主事	柳田 晴子
調査第一担当主事	中川みな子
調査第一担当主事	大嶋 昭海
調査第一担当主査（坂元第2遺跡）	橋本 英俊
調査第一担当主査（坂元第2遺跡）	松浦 朋彦



市町	番号	遺跡名
日向市	1	馬込遺跡第1地点
	2	馬込遺跡第2地点
	3	岡遺跡
	4	中ノ別府第2遺跡
	5	中ノ別府第3遺跡
	6	金ヶ浜第2遺跡
	7	金ヶ浜第3遺跡
	8	坂元第2遺跡
	9	坂元第3遺跡
	10	日平山ノ口第2遺跡
	11	日平山ノ口第3遺跡
	12	向原中尾第1遺跡
	13	向原中尾第2遺跡
	14	向原中尾第3遺跡
	15	向原中尾第4遺跡
	16	向原中尾第5遺跡
	17	向原中尾第6遺跡
都農町	18	長野遺跡
	19	舟川第2遺跡
	20	舟川第3遺跡
	21	舟川中原遺跡第1地点
	22	舟川中原遺跡第2地点
	23	内野々遺跡
	24	内野々第2遺跡
	25	内野々第3遺跡
	26	内野々第4遺跡
	27	平山下原遺跡
	28	西ノ郡第2遺跡
	29	木戸平第2遺跡
	30	木戸平第1遺跡
	31	俵石第1遺跡
	32	俵石第2遺跡

太字表記は調査終了遺跡
(平成23年11月末現在)

国土地理院発行1/50,000図をもとに作成



第1図 東九州自動車道(日向~都農間)関連遺跡位置図(S=1/100,000)

第 章 遺跡の環境

第 1 節 地理的環境

本書で報告する岡遺跡と坂元第 2 遺跡は、宮崎県日向市大字平岩に所在する。

日向市は、総面積336.29km²、人口64,354人（2012年1月1日現在）である。太平洋に面しているため、気候は温暖で、年平均気温はおよそ17度であり、冬期に降雪を見ることはほとんどない。また、平均湿度は70%前後、年間降水量は2,000mmを超えている。一方、日照時間も2,000時間を超えており晴天に恵まれた地域でもある。

本市は九州の東部、宮崎県の北部に位置し、尾鈴山系の北端にあり、東臼杵郡門川町境から続く北域の海岸線は、出入りの多いリアス式海岸で、児湯郡都農町に繋がる南端域は平滑な砂利の海岸線である。市内の大部分を山地が占め、海岸線の直近まで迫り、平野や扇状地は極端に狭く散在的である。陸地の基盤にあたるのは、主に日向層群（四万十帯）と尾鈴山酸性岩類である。日向層群は、それまで海底にあったものが新生代古第 3 紀～新第 3 紀にかけて陸地化したもので、砂岩、泥岩、頁岩から構成されている。一方、尾鈴山酸性岩類は、流紋岩、石英斑岩、凝灰岩等の特徴を示しており、日向岬一帯～耳川北域の海岸線では波蝕を受けた柱状節理を見ることができる。この 2 つの基盤は、東郷地区の坪谷から塩見地区の坪谷川、耳川、塩見川南岸に続く遠見山断層線によって分かれ、この断層の北部が日向層群、南部は尾鈴山酸性岩類であり、岡遺跡・坂元第 2 遺跡が所在する平岩地区は、断層よりも南部に位置している。

なお、平岩という地名については諸説あるが、郷土の地域史家である佐藤忠郎によれば、「平岩のヒラは山のきわということで、高森山から、段丘上に海へ向けて広がる地形的な特色と美しい砂浜の小倉ヶ浜と金ヶ浜海岸にはさまれた屹立した岩があることが地名由来とみられる」⁽¹⁾とされる。段丘形成面には岩肌が露出している場所もあり、平岩地区の秋留や土々呂毛の採石場では、花崗斑岩を採石している。また、岡遺跡第 6 次調査区内の南端も採石場であったようだ。

岡遺跡は、旧石器時代～近世の散布地として周知の遺跡であり、標高20m～30mの海成中位段丘上にある。その段丘を下り、低位段丘から平野を1km先に日向灘を、南西2kmに高森山（341.8m）を望み、川幅は狭いものの、高森川が遺跡を横切るように流れている。遺跡付近には、湧水や井戸がみられ、現在も農業用水や水道代わりに用いている家もあるほど、水が潤沢な場所でもある。

坂元第 2 遺跡は、東に日向灘を臨む標高約80mの丘陵上に位置している。近隣には、遺跡の南麓を流れる砂田川をはじめ、数本の小河川があり日向灘に注いでいる。東麓には標高20～30mの海成中位段丘上に、坂元の小集落が営まれており、集落周辺には金ヶ浜、中別府、鍛冶屋ヶ平などの旧石器時代～縄文時代の遺跡が所在する。

第 2 節 歴史的環境

これまで平岩周辺において、埋蔵文化財の発掘調査が行われた事例が少なく、考古資料の多くが表面採集に留まるため、詳細については不明である。

旧石器時代

平岩地区には、旧石器時代の遺跡は5箇所確認されている。標高20mの海成段丘上に位置している中別府遺跡では、小型のナイフ形石器が出土している。本市で出土した石器の石材の多くは、本県の五ヶ瀬川流域から採取される無斑晶流紋岩や大分県姫島産黒曜石などが使われており、この時期から既に大分県との交流が行われていたことを窺わせる。

縄文時代

平岩地区では、縄文時代の遺跡は10箇所確認されており、その多くが海成段丘上に位置している。金ヶ浜遺跡は、岡遺跡の約2km南に位置し、2基の集石遺構が無文土器を伴う層から検出され⁽²⁾、中別府遺跡では、塞ノ神式土器が出土している。平岩地区の南に隣接する幸脇地区の権現崎遺跡では、押型文土器が出土し、7基の集石遺構が円弧を描くような位置から検出され、その中心付近から柱状岩が立った状態で出土し

ている。

後期から晩期になると、本市内では遺跡数が増加する傾向にあるが、集落の発見例は未だなく、東草場遺跡で円形プランの竪穴建物跡が1軒検出されているのみである。

この他、平岩地区では、後・晩期の散布地として馬込、本村、鍛冶屋ヶ平、原、鶺毛A、鶺毛Bなどの遺跡が知られている。

弥生時代

平岩地区では、中別府遺跡で中期の下城式とみられる甕形土器が出土しているのみである。この他、秋留、馬込、本村、坂元、原、鶺毛Bなどの遺跡が散布地として知られている。隣接する財光寺地区では、松原第3～5遺跡では表採ではあるが、方形石庖丁が確認されている。

古墳時代

市内には、28基の古墳が確認されていたが、多くが滅失している。6基あったとされる前方後円墳についても1基を残すのみである。

平岩地区においては、平岩小中学校の敷地に旧県指定岩脇2～7号墳が所在し、そこから南西約1kmに1号墳がある。いずれも墳丘の大部分を失っているが、これらのうち5基が前方後円墳であったとされている。2号墳の発掘がおこなわれており、直刀、銚身、刀子等が出土し、埋葬施設は粘土槨で、その上に積石を施した一種の積石塚の可能性があると報告がなされている。隣接する幸脇地区には、旧県指定岩脇8～11号墳があり、いずれも円墳であったとされている。10号墳とみられる墳丘跡から6世紀後半～末の須恵器壺と埴瓶を採集している。この他、近隣には、財光寺地区の比良山古墳があり、5世紀後半～6世紀初頭とみられる須恵器の高坏を採集している。

古代

布痕土器が、市内2箇所の遺跡から出土しているが、調査例が少ないため詳細は不明である。本市内には『延喜式』に記載された西海道が通っていたとされ、周辺には刈田、美弥といった駅の想定地があり、美弥駅が美々津に比定されている。平岩地区は、刈田～美弥間に所在しており、官道のルートは、おおむね現在の旧国道10号線沿いを通っていたとも言われているが、

はっきりとはしていない。地区内には、官道関連地名として、坂ノ下、馬込、峠、馬溝等の地名がみられる。散布地としては、馬込、平尾、本村、元市などの遺跡が知られている。

中世

市内には、伊東氏48城の一つである日知屋城、門川城とともに「日向三城」と呼ばれた塩見城跡や中山遺跡があり、中世の掘立柱建物跡や輸入陶磁器等が確認されている。

平岩地区には、本村城が所在し、現在も残る本村という地名から、かつて平岩の中心地であったともされている。本村城は、丘陵の先端付近を削平し、3箇所の曲輪を設け、3つの堀切を刻んでいるが、周辺との比高差は大きくない。この本村城跡の約200m東には、曹洞宗幸福寺が所在し、文禄5(1595)年に松葉源之丞景守が創建した古刹と伝えられている。境内には、景守の子孫とみられる松葉式部が万治2(1659)年に建立した「臼八鳥」銘の墓石があり、幸福寺と松葉氏の深い関わりが読みとれる。平岩地区では、この他に秋留城、初木ノ城の城跡がある。

近世

近世の遺跡は調査例が少なく、詳細は不明である。現在の日向市域は、江戸時代初期には延岡藩に属していたが、藩主有馬氏が元禄3(1690)年に発生した山陰・坪屋村百姓逃散一揆による政道不行届を問われ、元禄5(1692)年に越前国糸魚川に転封になり、日向市域のほとんどが幕府領となった。以後、幕府直轄の代官所支配を受けて幕末に至っている。

註

(1)佐藤忠郎1985『郷土の地名雑録』地域文化研究所

(2)日向市教育委員会1988『金ヶ浜遺跡』

参考文献

日向市教育委員会1985『日向市遺跡詳細分布調査報告書』

日向市史編さん委員会2006『日向市史 自然編』日向市

日向市史編さん委員会2009『日向市史 資料編』日向市

日向市史編さん委員会2010『日向市史 通史編』日向市

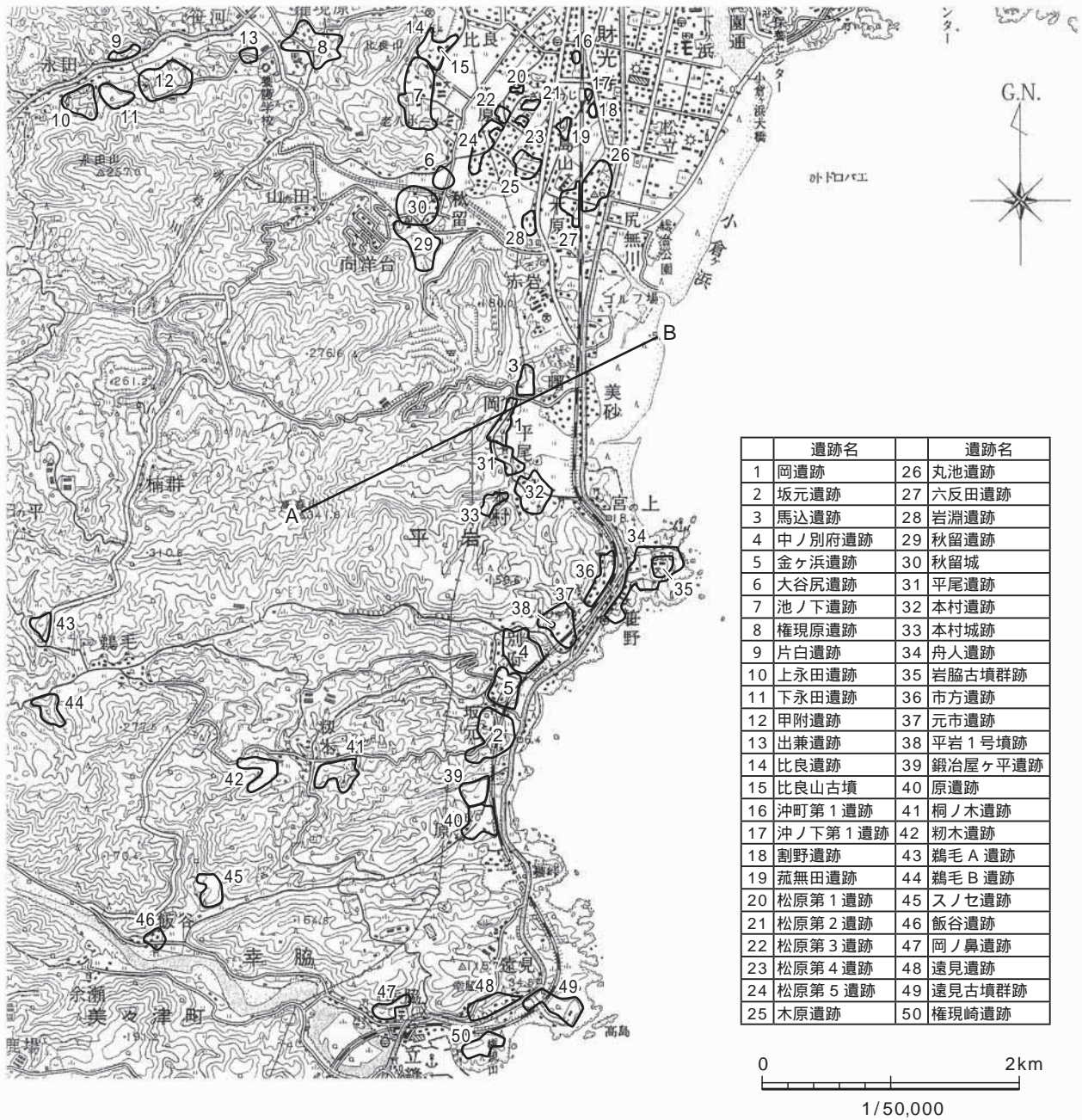
宮崎県教育委員会1972『宮崎県文化財調査報告書第16集』

宮崎県教育委員会1998『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 地名表・分布地図編』

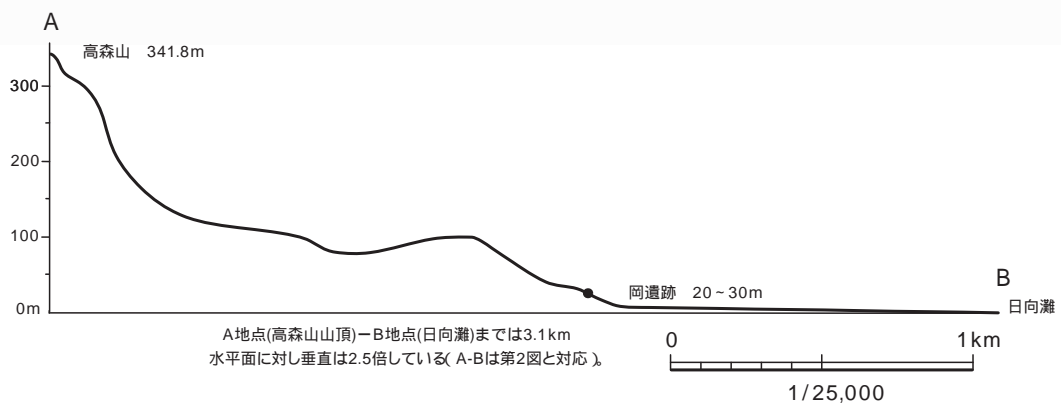
宮崎県教育委員会1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 詳説編』

宮崎県埋蔵文化財センター2004『中山遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第93集

宮崎県埋蔵文化財センター2008『板平遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第176集



第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)



第3図 岡遺跡と周辺地形との高低差(日向灘から)

第 章 調査の経過

第 1 節 平成21年度の調査

岡遺跡の発掘調査については、第 章の調査に至る経緯でも述べたように、平成21年11月から協議を本格化させている。

全体の調査対象面積が40,000㎡と日向～都農間の中で最大であり、工事の工程上たいへん重要になる部分でもあるため、調査を少しでも進捗させるよう、用地交渉がある程度まとまった箇所から随時行うこととなった。

第 1 次調査は平成22年 1 月14日から翌15日にかけて実施し、調査対象1,400㎡に対して140㎡のトレンチを設定して重機により掘り下げを行った。

トレンチの一部に、二次堆積アカホヤ火山灰層と考えられる層が確認され、縄文時代早期と晩期の土器片、弥生時代～古墳時代と考えられる土器片、そして布痕土器片や須恵器片等の遺物が出土した。

第 1 次調査の結果、遺物包含層が確認されたトレンチを中心に、継続して調査を実施する範囲を1,900㎡に設定して第 6 次調査として継続することとなった。

第 2 次調査は、平成22年 2 月16日から18日までの3日間行った。調査対象面積は6,000㎡、実掘面積は120㎡である。4箇所の調査地に計11本のトレンチを設定して人力で掘り下げを行った。調査の結果、一部のトレンチから遺物が出土しており、周辺部をさらに広げて再度調査を実施する必要性が生じた。

第 3 次調査は、平成22年3月10日から翌11日にかけて実施した。調査対象面積は、2,720㎡、実掘面積400㎡であった。調査は重機を使用し、対象地に12本のトレンチを設定して掘り下げを行った。第 2 次調査で遺物が出土したトレンチ付近を広げていき、遺物包含層の残存状況を確認した。結果、調査対象地の一部に褐色土（アカホヤブロック含む）層が検出され、層中から縄文時代晩期の土器片、石斧が出土した。

第 2 節 平成22年度の調査

平成22年度は第 4 次から第 8 次調査を実施した。

第 4 次調査は、平成22年 6 月 7 日から 6 月 8 日ま

で、第 5 次調査も同時期に行い、7 日～9 日まで実施した。

第 4 次調査は、2,500㎡の範囲を対象に、100㎡のトレンチを設定し、重機での掘削を行った。その結果、遺構も遺物も見られず、調査を終了した。

第 5 次調査は調査対象面積3,800㎡、8本のトレンチを設定し、重機と人力により掘削を行った。その結果、二次堆積アカホヤ火山灰層と考えられる黄橙色土層が残存しており、縄文時代晩期の土器を中心に、早期の土器片も出土した。この他、埋土が灰褐色土のピットや土坑と考えられる遺構を検出した。調査の結果、二次堆積アカホヤ火山灰層が確認できた範囲と、第 3 次調査で遺物の出土した範囲を含む3,160㎡を第 7 次調査で継続して行うことになった。

第 6 次調査は平成22年 7 月 7 日から平成23年2月25日まで1,870㎡を対象に実施した。前述したように第 1 次調査で遺物が出土し、継続して調査を行った部分である。詳細については第 章で記述する。

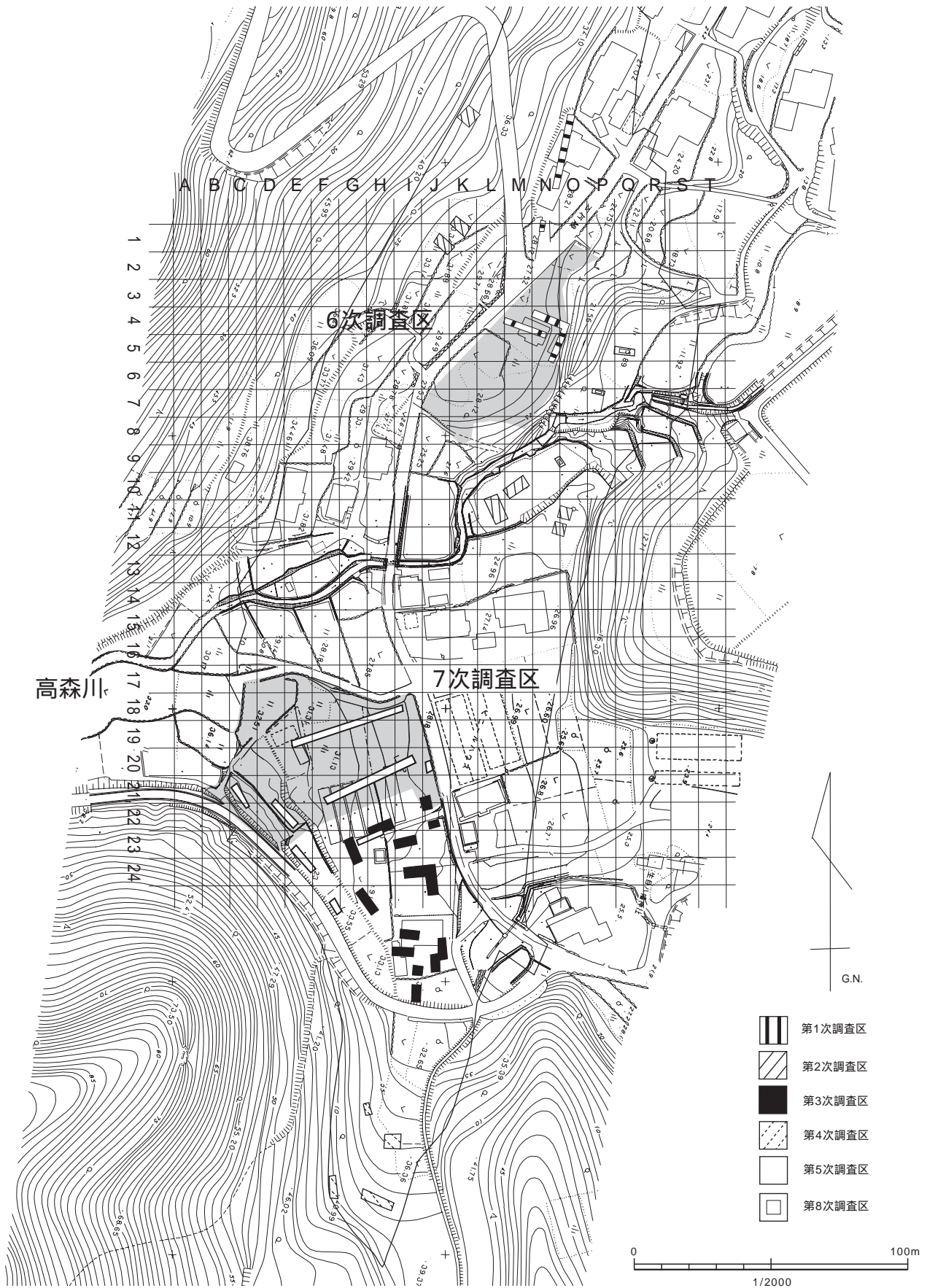
第 7 次調査は、平成22年 7 月20日から11月19日まで実施した。途中、対象地に隣接する畑が地権者の意向により追加調査できることになったため、新たに400㎡を追加して計3,560㎡を調査した。詳細については第 章で記述する。

第 8 次調査では平成22年12月21日から12月22日まで2,100㎡を対象に、100㎡のトレンチを設定し、まず人力での掘削を行ったが、盛土が厚かったため、人力での調査は不可能と判断し、調整を行い、再び、平成23年 2 月22日に重機での掘削を行った。その結果、遺構も遺物も見られず、調査を終了している。

第 3 節 グリッド杭の設置

遺構・遺物の記録は、国土座標（世界測地系）に沿って設定したグリッドによるものである。

グリッドは、A-1Gr（X = 58260.00・Y = 68250.00）を起点として、X軸にはアルファベットを、Y軸にはアラビア数字を用いて、10mメッシュのグリッドを設定した（第 4 図）。



第4図 岡遺跡調査区およびグリッド配置図

第 章 岡遺跡第 6 次調査の成果

第 1 節 調査の方法と経過

岡遺跡第 6 次調査は、平成22年 7 月 7 日～平成23 年 2 月 25 日まで行なった。第 章で述べたように、第 6 次調査に先立ち実施された第 1 次調査で、二次堆積アカホヤ火山灰層から、黒色磨研土器、石錘などが出土していたことから、岡遺跡は縄文時代晩期を中心とする遺跡との認識で調査に入った。調査前は、竹および立木が覆い茂っており、調査区南側は竹林であったため、伐採作業を行ない、調査を開始した。

7 月 27 日より重機による掘削作業を行ない、8 月 1 日より作業員と共に掘削作業に入った。先行トレンチにより二次堆積アカホヤ火山灰層は、a、b、c と細分し、それぞれを遺構面として調査を行なった。層には縄文時代、弥生時代～古墳時代、古代、一部に中世など様々な時代の遺物が混じっていたことより、a、b、c をさらに上下に細分し、取り上げを行ない、層の生成と各時代との関係を探った。a 層と b 層で時期不明の遺構が検出され、b 層掘削中には縄文時代晩期の埋甕と土坑が検出された。なお、時期不明の遺構は整理作業の結果、古代末、中世の遺構面であったと思われる。

11 月前半には 層の調査を終えたが、10 月段階での、確認トレンチ掘削中に、下位層に焼土を伴う遺構が検出された。遺構は、始良Tn火山灰層（以下、AT）に掘り込んであり、その状況から縄文時代早期の炉穴である可能性が高まり、調査期間を23年 2 月まで延長する事となった。層からATまでは 2 つの間層が存在し、その時点では、炉穴の掘り込みがATからしか確認できなかったが、層からはその時点で遺物の出土がなく、土石流層と考えられたこと、ATのより上位からの掘り込みである可能性を考慮したことより、層からの調査を行なうこととなった。なお、調査区の南側では 層に近いところで岩盤が検出されていたので、調査範囲からは除外し、層が堆積しておらず下位の層にも遺物がみられなかった。調査区南側は 層の堆積が確認できていたので調査範囲を広げた（第 6 図参照）。

11 月の半ばに重機によって、無遺物層である c 層と土石流層である 層の上部を取り除いていたところ、層から遺物が出土したことより、11 月末から人力による掘削作業に切り替えた。その後、層まで掘削して集石遺構などを検出した。ただし、炉穴のプランは確認できなかったため、層を細分した b 層まで掘削し、遺構検出を行なったが、明確でなく、層まで掘削し、炉穴の調査を行なった。

その後、AT 下位層の確認調査を行ない、遺構・遺物などは確認されなかったため、2 月 25 日に調査の全工程を終了し、宮崎県埋蔵文化財センターにて、3 月より整理作業を行なった。



調査前状況 南から（写真 1）



調査風景 西から（写真 2）



第5図 岡遺跡第6次調査区周辺地形図

第2節 基本層序

本節では、第6次調査区の基本層序を記す。第6次調査区は後述するように、旧くは谷地形となっており、その谷地形が埋没していく過程を経て、現在の地形が成り立っている。なお、その埋没過程も単純ではなく、変化に富む土層堆積を見せる。ただし、大きくみると、以下のような層の堆積過程を捉えることができる。以下、層位ごとにみていく。

層は、暗褐色土層(10YR3/3)で表土である。一部、調査区南東部には、近代に営まれたと目される褐色土(10YR4/4)の耕作土層がある。本土層は下位層の遺物が多く混ざっていた。調査段階では、これを層として扱っていたが、本土層を確認できるのは主にM6Gr周辺範囲のみであることなどから、これをbとし、表土の一部として細分する。a層は、中世～現代の遺物を包含しており、b層は耕作の影響により縄文時代の遺物も含んでいる。

層は、鬼界アカホヤ火山灰層が二次的に堆積した層と考えられ、縄文時代早期～古代末(一部中世)までの遺物包含層である。層は、アカホヤ火山灰と黒色土の混じり土であるが、その混じりの濃淡で、a層・b層と大きく2つの層に細分ができる。また、無遺物層であるc層も確認しており、一次堆積のアカホヤ火山灰の可能性もある。以下、層の細分を述べる。

a層は、暗褐色土層(10YR3/4)で、黒色土の混じる割合は大きく、縄文時代早期末～古代末までの遺物を包含している。古代末までに形成されたものと思われる。

b層は、褐色土層(10YR4/6)で、b層になると縄文時代晩期の遺物が多くなっていくことより、縄文時代晩期の遺物包含層であった可能性が高いが、弥生時代終末～古墳時代初頭のものも比較的多く混じる。なお、b層は、場所により堆積が違い、風倒木による攪乱が激しく、上位層の遺物の混じりこみも多く見られた。

c層は、a層、b層に比べ、色調が極めて明るく、明褐色(7.5YR5/8)～明黄褐色(10YR6/8)の土層で、遺物などは確認されなかった。調査区全体に均質に堆積はしていないものの、一次堆積のアカホヤ火山灰層の可能性もある。

層は、暗赤褐色(5YR4/4)粘土質層であり、層が混じるa層とb層に細分される。特徴的なのは、非常に粘性が強く、2～5mmの白色・赤色の軽石、拳大の礫が多く混じることである。土石流により形成されたものと考えられ、縄文時代早期の遺物を含む。調査区のほぼ全体を覆うが、調査区南西の最も堆積が厚い場所から、北および東へグラデーショナル気味に粘性はなくなり、軽石・礫ともに減少していく様相が見て取れる。

なお、層中から集石遺構が1基検出されており、土石流である層が一気に形成されたものでなく、断続的に堆積したものである可能性がある。ただし、土層断面の観察ではその痕跡は確認できなかった。

層は、旧石器時代～縄文時代早期の遺物包含層と思われ、断続的に堆積しており、粘性・色調の違いでa層とb層とに細分される。

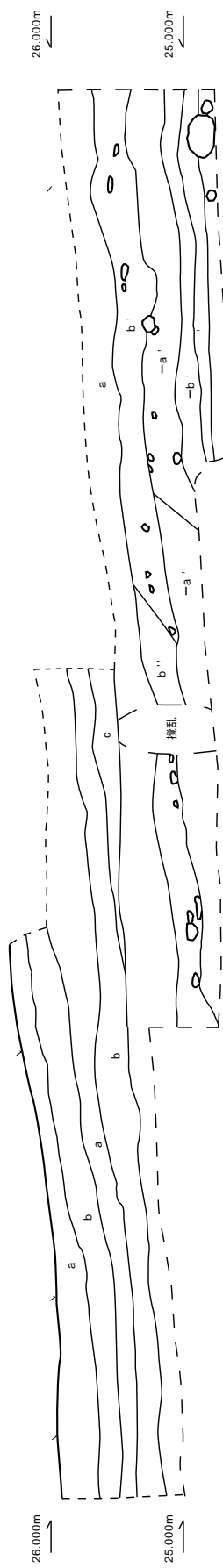
a層は黒褐色土層(7.5YR3/2)で白色軽石を多く含み、わずかに拳大の礫を含む。粘性はあり、しまりも非常に強い。

b層は黒褐色土層(10YR2/3)で、白色軽石をまばらに含む。粘性はあるものの、a層にくらべると弱く、しまりは強い。旧石器時代包含層と考えられるが、遺物はほとんど出土しない。

詳細は第5節で述べるが縄文時代早期前半の遺構は、a層～b層の間に営まれている。

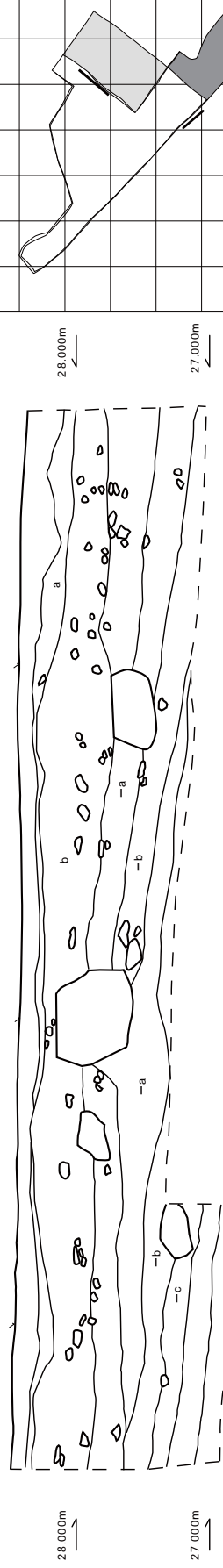
層はAT堆積層である。AT粒子の混ざり方でa、b、cに分かれている。a層は黒褐色土層(7.5YR2/2)で、白色軽石が混じることより、層との混じり土と思われる。b層は暗褐色土層(7.5YR3/3)でc層は層との混じり土である。なお、ATの堆積は谷部ではみられず、堆積が不安定で、シャリシャリとする火山灰層のすきまに黒色土が混じる様相を示し、ピット等との判別が困難であった。平坦部に近づくにつれ堆積が厚くなり安定している。なお層ではテフラ分析を実施しておりAT火山灰であることが確認されたが、ATには含まれない角閃石も混入していることに注意を要する(第4章)。

層は、褐色土層(7.5YR4/4)で、層は黄褐色粘土層である。どちらも、遺構・遺物などは確認されていない。層の下は岩盤層であった。



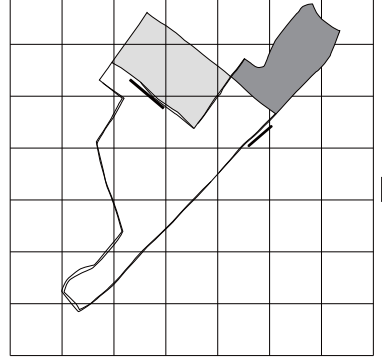
土層注記

- a 褐色土(10YR4/4) 表土
- b 褐色土(10YR3/4) 粘性わずかにあり、しまりややあり、わずかに炭化物が入る。耕作土が。
- a' 暗褐色土(10YR3/4) 粘性わずかにあり、しまりややあり、まばらにアカホヤ火山灰が混入しており、2次堆積の過程で旧表土と層が混じりあった土と認められる。
- b' 褐色土(10YR4/6) 粘性ほとんどなく、しまりあり、しまりあり。アカホヤ火山灰の混じり土であるが、a層に比べ、アカホヤ火山灰の比率が高い。極小の炭化物をまばらに含み、グラデーシオン気味であるが、上の方がわずかに黒い。わずかな差違だが、旧表土となっていた可能性がある。
- c 明褐色土(7.5YR5/8) 粘性なし、しまりなし。非常にバサバサとしており、a、bと違い、黒色土はほとんど混じらず、遺物も包含しないことから、1次堆積アカホヤ火山灰の可能性がある。調査区全体にはみられない。
- a 褐色土(10YR4/6) 粘性あり、しまりあり。層と層の混じり土。
- b' 暗赤褐色(2.5YR3/2) 粘性非常に強く、硬く、しまり。1-2mm程度の軽石(白80%、赤20%)が非常に多く混じる。拳大の礫を多く含むのが特徴。b層に近いが、b層よりしまりは強く、白い粒々が斜めに入る。
- b' 暗赤褐色(5YR3/2) より漸移的に粘性、しまりに弱くなる。また、含まれる白色軽石も割合少なくなり、赤色の軽石がほとんど見られなくなる。
- a' 黒褐色(10TR2/3) 粘性ややあり、しまり弱い。シルト土。aに比べ軽石が少くない。
- a 黒褐色(10YR2/3) 粘性、しまりにほとんどない。a'よりさらに軽石が少なくなる。
- b' 黒褐色(10TR2/2) 粘性ややあり、しまりあり。aに比べしまりがあり、軽石の入り方も aが少なくなる。基本層序の bより軽石の入りが少ない。
- ' 暗褐色(10YR3/3) 粘性ややあり、しまりなし、と が混ざったような土で、軽石(1-8mm)や微細なATが混ざる。
- 黄褐色(10YR5/8) 粘性、しまり非常に強い、粒子はきめ細かく、黄褐色軽石を多く含む、ジャリジャリとする砂が固まったような礫? が混ざる。



土層注記

- 褐色土(10YR4/4) 粘性なし、しまりは強い、非常にバサバサとしており、軽石を多く含む。
- a 褐色土(10YR4/6) 粘性なく、しまり強い。粒子は粗く、白色軽石(5mm)が混ざる。と が混ざった土で、炭化物をわずかに含みバサバサとしている。
- b 暗赤褐色(5YR4/4) 粘性非常に強く、硬く、しまり。軽石(1-2mm)が非常に多く混じる。拳大の礫を非常に多く含むのが特徴。層に近いが、層よりしまりは弱く、白い粒々(軽石)が斜めに入る。
- a 黒褐色(7.5YR3/2) 粘性、しまりに強い、軽石を大量に含むが、より少ない。拳大の礫がまばらにある。粒子はきめ細かく、粘土層といえる。
- b 暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性は弱く、強くなる。白色軽石を含むが入り方はまばらであり、粒子は aに比べ粗いが、細かくなる。
- a 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性ややあり、しまりあり。ATが混ざり、漸移層(ブラックバンド)にわずかに軽石(2-3mm)を含む。若干シャリシャリとする。無遺物層。
- b 褐色土(7.5TR4/4) 粘性ややあり、しまりなし。AT火山灰層
- c 褐色土(7.5TR3/3) ATとの漸移層?
- 褐色土(10YR4/4) 粘性ややあり、しまりなし。
- 黄褐色(10YR5/8) 粘性、しまり非常に強い、粒子はきめ細かく、黄褐色軽石を多く含む、灰白色軽石も含む。ジャリジャリとする砂が固まったような礫? が混ざる。



調査範囲および土層断面設定図

第6図 土層断面図

第3節 旧石器時代の遺構と遺物

3-1. 概要

遺物整理の過程で、後期旧石器時代と考えられる石器を数点認定しえたので、礫群1基と石器3点を後期旧石器時代の所産として報告するものである。もっとも、旧石器時代と認定された遺物は、谷部にのみ出土しており、流れ込みによるものと思われる。また、礫群と認定したのも、層的に層上面であったことによるもので、遺構面の認定はできなかった。ただし、

層であるAT火山灰の堆積がなくなる境での検出のため、確実に層に伴うともいえない。よって、旧石器時代に相当する独立した層は確認できていないが、遺物出土状況が層と同様のため、b層に後期旧石器時代に相当する層があったものと考えられる。

3-2. 遺構 (第9図)

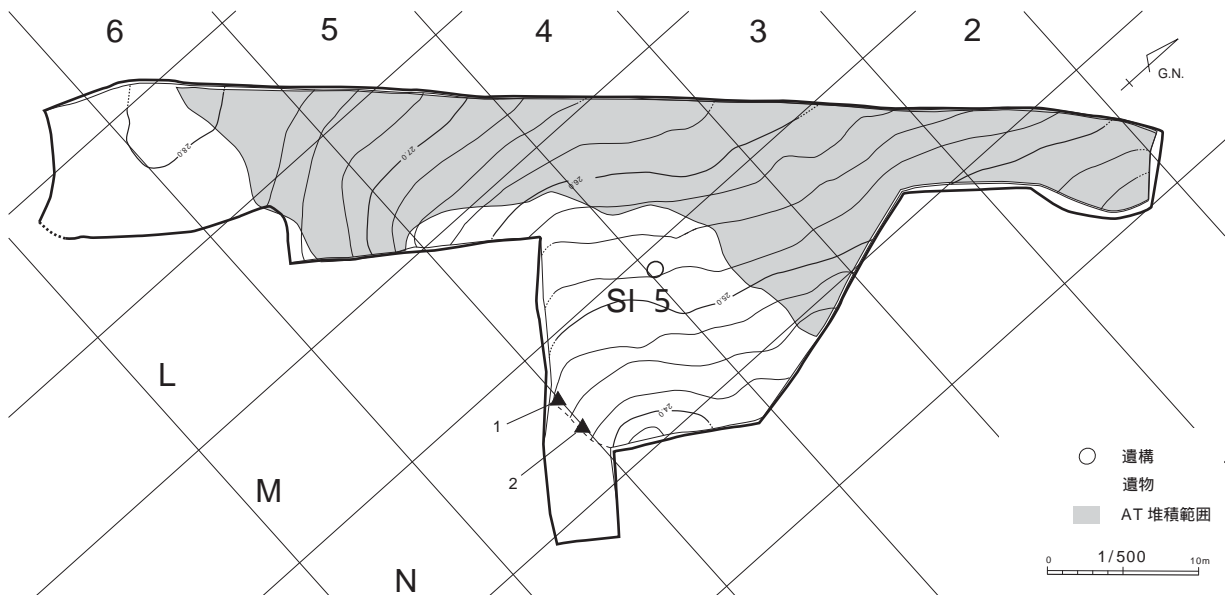
遺構は礫群1基 (SI5) である。AT火山灰の堆積が薄くなるところで検出されており、ほぼ層の上に営まれている。立地としては、緩やかな斜面地となっており、谷がやや深くなる縁辺部にあたる。構成礫は

尾鈴山溶結凝灰岩で、170cm×90cm程の範囲に10～15cmの拳大の赤化した総重量3.85kgの礫が東側に数個固まり、5～10cmの小礫が回りに伴い、それが北西の方角へ散布している状況がうかがえる。地形に即して言い換えるならば、谷の縁を標高の高い方へ伸びているといえる。

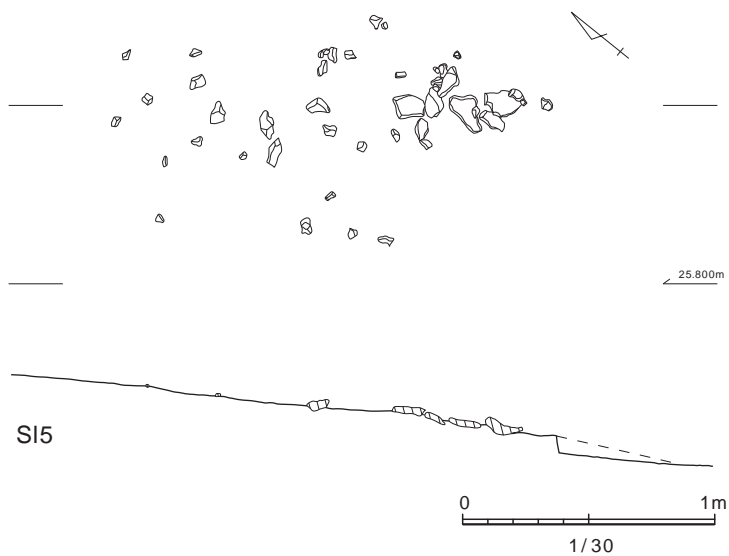
3-3. 遺物 (第9図1～3)

遺物は、搔器1点・剥片1点・石刃剥片1点である。なお、石材は全て珩質頁岩製である。層では珩質頁岩製の石器が多く出土しているが、縄文時代のものと区別が困難であったため、確実にと思われる資料のみ報告をおこなう。

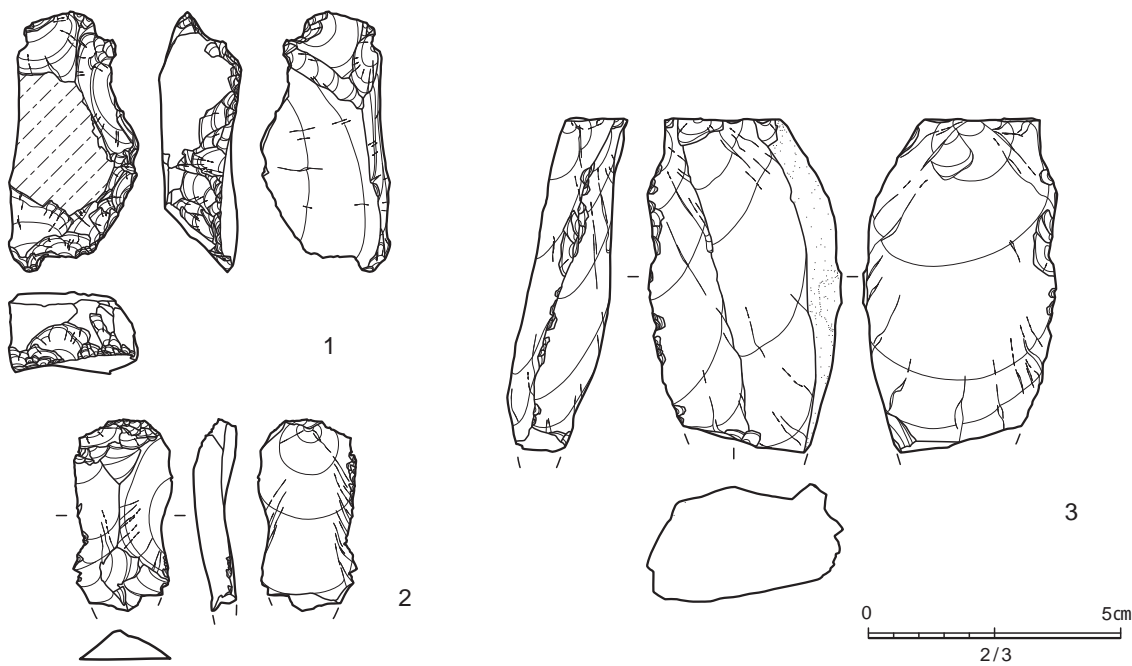
1は搔器で、横長に剥ぎ取った剥片の左側縁部に加工を施し、急角度の刃部をつくりだしている。2は縦長剥片である。3は石刃技法による剥片で、背面で縦長剥片の石核として使用された後、打面転移し、石刃を剥離している。また、側面には、微細剥離の二次加工が施されている。



第7図 旧石器時代遺構・遺物分布図



第8図 岡遺跡第6次調査区 礫群実測図



第9図 岡遺跡第6次調査区 旧石器実測図

第1表 岡遺跡第6次調査区 旧石器計測表

遺物番号	器種	石材	出土層位	出土地点	X座標	Y座標	Z座標	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
1	搔器	珪質頁岩	層	包含層	-68300.384	58413.497	27.074	5.1	2.6	1.7	22.4
2	縦長剥片	珪質頁岩	層	包含層	-68300.840	58416.032	26.776	3.8	2.0	0.9	5.6
3	石刃剥片	珪質頁岩	層	包含層	-			6.6	3.9	2.3	52.8

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

4-1. 概要

基本層序の a層が縄文時代早期に相当する層である。基本的に 層は土石流層と考えられ、a層と共に縄文時代早期の遺物包含層となっている。しかしながら、場所によっては ~ 層の判別が難しい所もあり、層序による時期区分などは困難であった。ただ、後に述べるように、遺構と遺物の検討から 層検出の遺構を早期前半、 層検出の遺構を早期後半と捉えた。従って、 層と 層の区別が必要な箇所については、適宜触れていく。

4-2. 縄文時代早期の地形把握 (第10図)

往時の地形は谷地形となっている。基本的には調査区の東側からの谷が深く入っており、調査区東端では1~2m程の巨礫が集中していた。遺物も、谷底に集中しており、流れ込んだ様子がわかる。なお、調査区北側では10~30cm程の礫が集中する場所があり、それも谷地形による流れ込みが要因と考えられた。よって第6次調査区では北と南の2本の谷が流れていたと考えられる。なお、縄文時代早期の旧地形把握は、AT(層)上面で行なった。これは早期生活面より下位層での地形把握となるが、 層では縄文時代早期の遺構検出が困難であったためである。もっとも、堆積状況から、地形そのものは 層上面と 層上面で大きな違いはない。

4-3. 遺構

遺構は、縄文時代早期前半の炉穴5基・集石遺構3基・土坑9基、早期後半の集石遺構1基が検出された(第10図)。特に遺構が集中する箇所は、L5Gr一帯で、散礫が伴い、遺構が密集して検出された(第11図)。先に指摘した谷地形との関係が考慮される。遺構検出は a層上面、 b層上面、 層上面でおこなった。 層 ~ a層上面では散礫が検出された。散礫を取り除くと a ~ b層上面で集石遺構や炉穴、土坑が検出された。もっとも、殆どの炉穴は 層ではプランの確認が困難で、炉穴とその他の遺構では検出面が違うが、生活面はほぼ同一であったと考えてよいと思われる。以下、各遺構の報告をおこなう。

集石遺構 (第12図)

縄文時代早期の遺物を含む 層自体に拳大の礫が多く混じることから、集石遺構の認定には慎重を期したが、4基を検出した。基本的に掘り込みはない。

SI1は、 層掘削中に検出された。本調査区唯一の 層検出遺構で、早期後半に比定される。 層自体に10cm台の礫が多く混じることから、集石遺構としての認定は難しかったが、本遺構のように、同規模の礫がまとまって検出された例がなかったため、集石遺構として認定した。

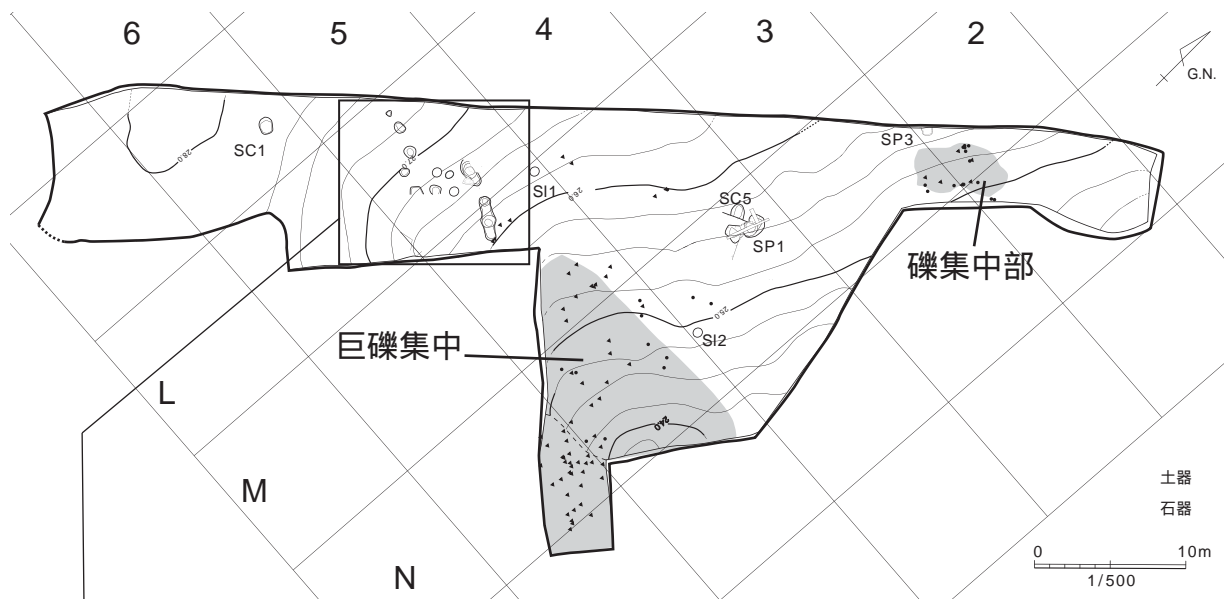
SI2は、風倒木痕に切られるように検出した。本来は、直径120cm程の円形状をなしていたと考えられるが、木が倒れる際に半分が破壊されたものと考えられる。倒木の際に動いたと考えられる拳大の礫が付近に散布していた。早期前半に比定される。

SI3・SI4は、L5Grの散礫を取り除いたところ検出された。基本的な規模もほぼ同一である。SI4は、重なっていた散礫の構成礫とサイズなどが同一であるのに注意されるが、散礫下に礫がある一定度のまとまりを有するという点を考慮して集石遺構とした。早期前半に比定される。

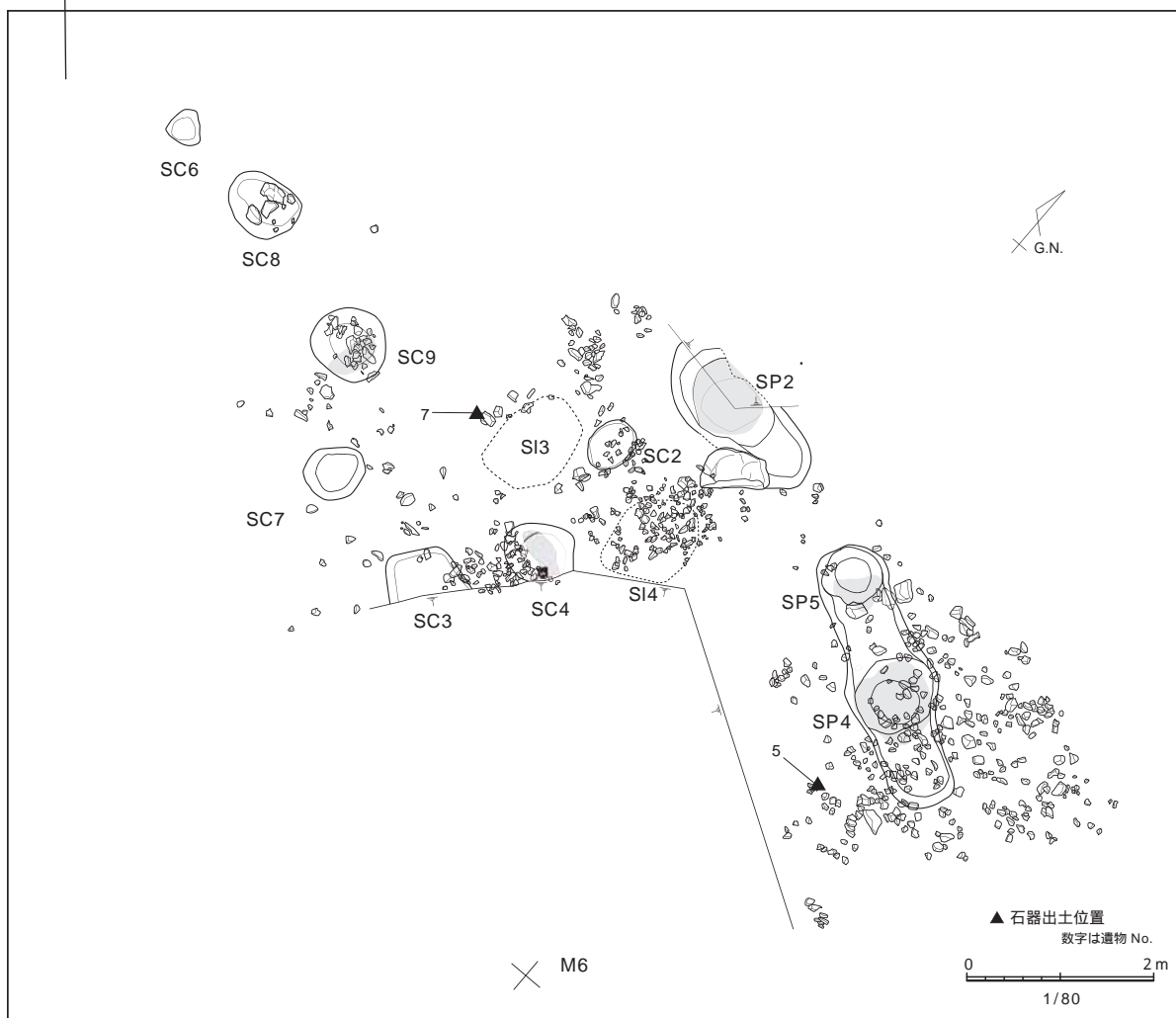
土坑 (第13図)

9基検出しており、いずれも早期前半に比定される。どれも比較的浅いが、検出面の問題である可能性が高い。焼土または炭化物堆積層をもつのが3基検出された。

焼土を有しないのは、SC1・SC2・SC3が該当する。SC1は、隅丸方形を呈す土坑である。他の遺構から比較的離れたところで検出された。基本的に 層が埋土となる。SC2は、楕円形で、SP2のすぐ南側で検出された。散礫を除去したところ検出されたものである。焼土は有しないが炉穴との関係性も考えられる。かなり浅いことから、散礫が埋土の一部になっていたと思われる。SC3は、一部しか検出できなかったが、散礫の下から検出された。非常に浅く、SC2と同様に散礫が一部埋土になっていたと考えられる。焼土または炭化物が見られるのはSC4・SC5 ~ SC9が該当する。これらの土坑は炉穴の可能性が高いが、確定はできないため、炉穴状の土坑として扱う。SC4は、不整形円形を呈し、中心部から東西へ焼土面が延びている。SC3



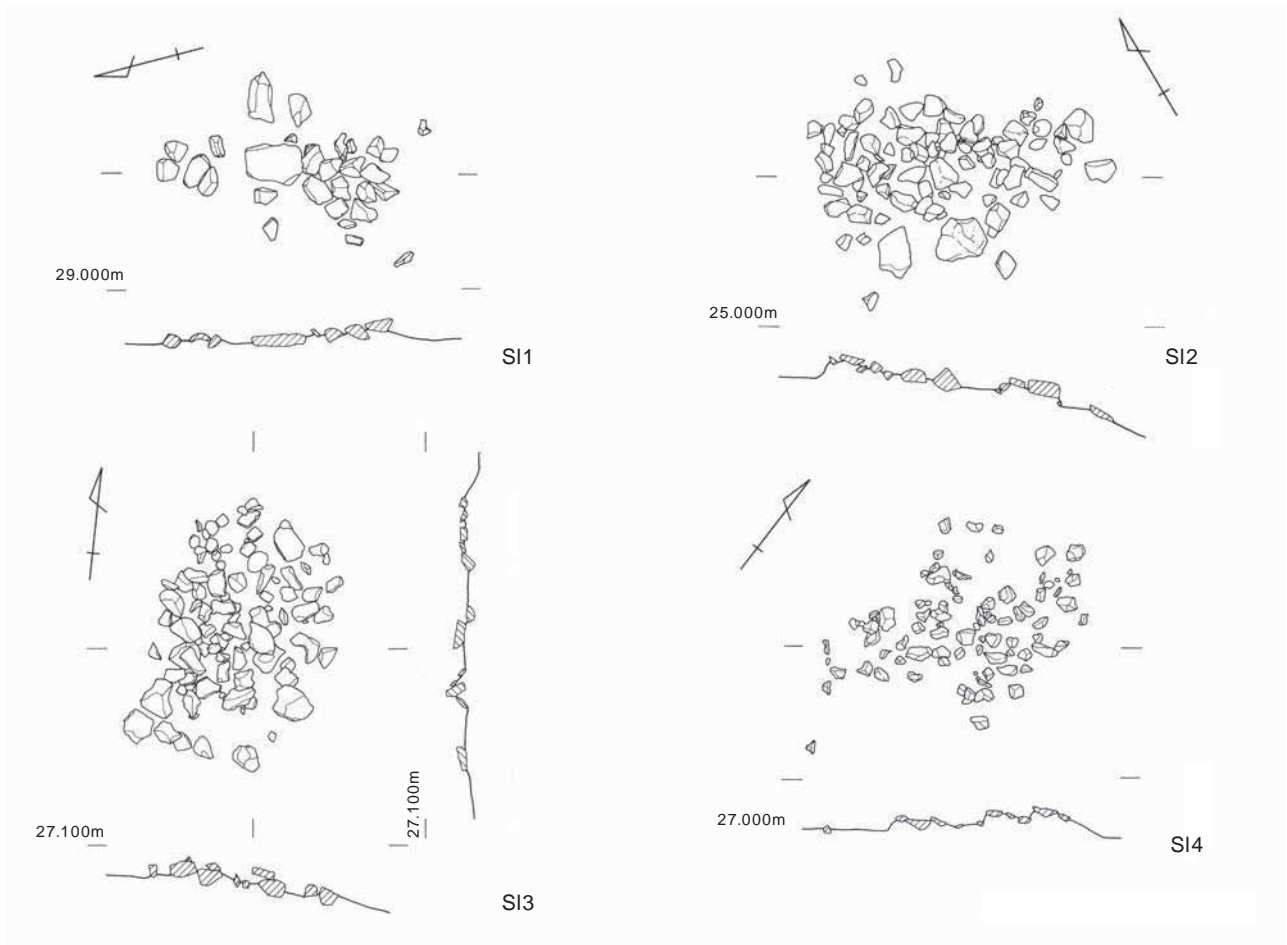
第 10 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代早期遺構分布図



第 11 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代早期遺構集中部詳細分布図

のすぐ横で検出されているため、一連の遺構である可能性もある。SC5は、SP1の西側で検出された。SC8とSC9は、中央部に20～30cm程の礫がまとまって、検出された。集石遺構の可能性もあるが、礫は配置されたのではなく、埋没時に伴った可能性が高いため、土坑として報告する。なおSC9は礫の下に焼土層が厚く堆積し、床面から打製石鏃が出土している（第13図）。チャート製で、基部に抉りをもつ（第18図4）。

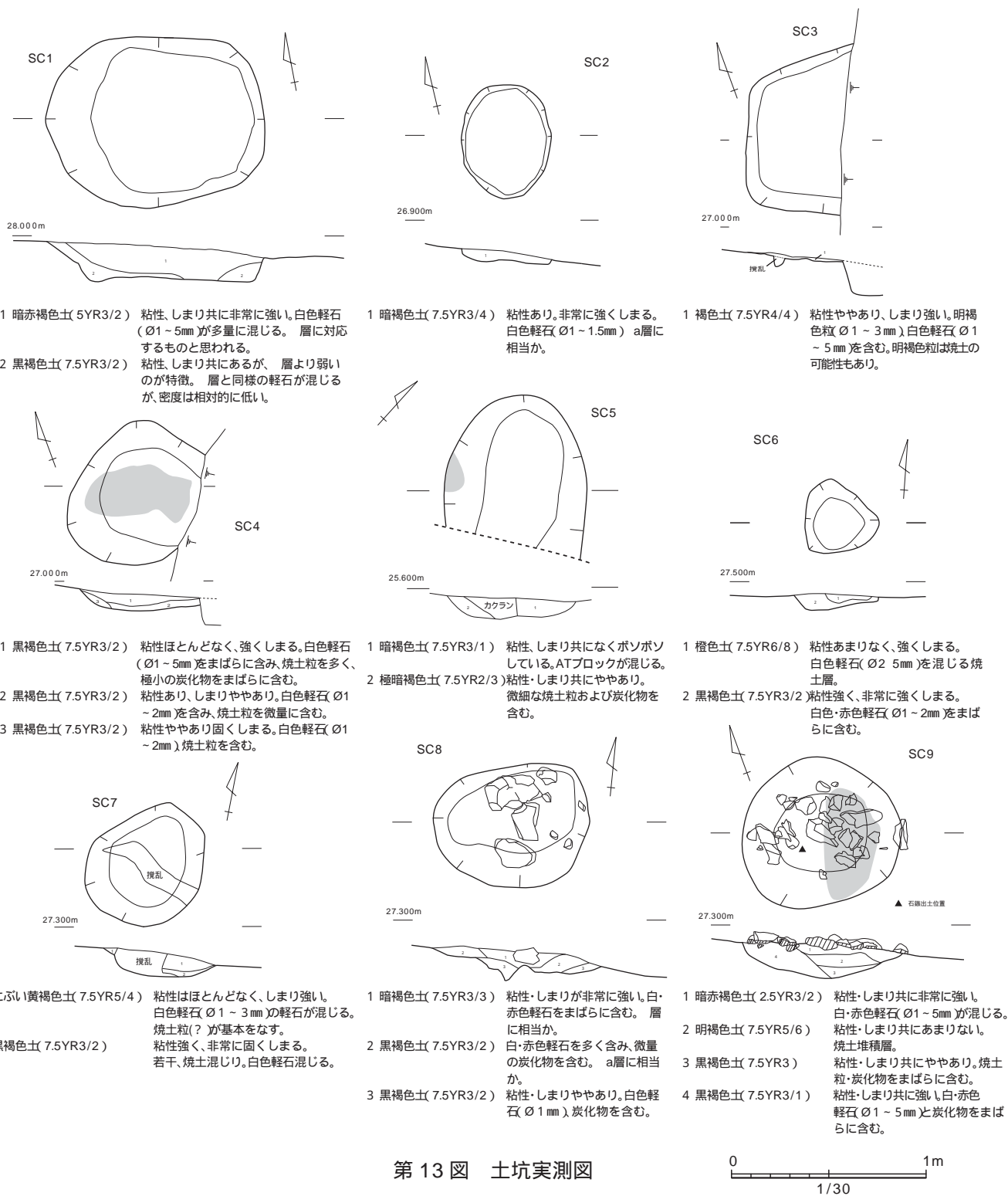
これらの土坑の内、特に焼土を伴うようなものは、炉穴との関係性が考慮されることは先に述べた。それは、第1に焼土を伴うこと、第2に、近接して、連なるように検出される特徴による。特にSC3・SC4・SC7・SC9・SC8・SC6は連なって西側に延びているようにもみえることから炉穴であった可能性が高いといえる。



第12図 岡遺跡第6次調査区 集石遺構実測図

第2表 岡遺跡第6次調査区 集石遺構一覧表

遺構名	出土位置	検出面	構成礫	礫範囲 (cm)	重量 (kg)	時期	備考
SI1	M4	層	尾鈴山溶結凝灰岩	100×80	12.0	早期後半	
SI2	O4	層	尾鈴山溶結凝灰岩	125×104	23.5	早期前半	風倒木による攪乱を受けている
SI3	L5	層	尾鈴山溶結凝灰岩	109×89	26.0	早期前半	
SI4	L5	層	尾鈴山溶結凝灰岩	110×85	9.5	早期前半	散礫直下に検出



第 13 図 土坑実測図

第 3 表 岡遺跡第 6 次調査区 土坑一覧表

遺構	位置	検出面	炭化物	焼土	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面プラン	備考
SC1	K5				113	88	16	長楕円形	
SC2	L5				59	46	6	長楕円形	
SC3	L5			?	90	49	2	長楕円形?	
SC4	L5				62	75	9	不整円形	炉穴の可能性高い
SC5	N4				78	72	18	長楕円形?	炉穴の可能性高い
SC6	L5				80	63	10	不整円形	炉穴の可能性高い 焼土上層の埋土に礫を含む
SC7	L5				39	37	7	不整円形	炉穴の可能性高い
SC8	L5				65	59	11	不整円形	炉穴の可能性高い
SC9	L5				82	76	18	不整円形	石鏝1点出土 炉穴の可能性高く焼土上層の埋土に礫を含む

炉穴（第14図～第17図）

5基検出している。土坑の項で述べたように、一部の遺構なども、炉穴に含まれる可能性があるが、ここでは、燃焼部が存在し、縦長に掘り込みの延びが確認できたもののみを炉穴として報告する。なお、時期が特定できるような遺物は出土していないが、SP2、SP3、SP4では放射性炭素年代測定をおこなっており、概してBP9490±35～9380±30の間に収まる（第1章参照）。

SP1（第14図）

軸を北にとり、残存長軸115×短軸55×深さ31cmを計る。長径1mほどの巨礫を重機で取り除き、下を精査したところ、検出された。巨礫は遺構の埋没過程に伴うものの可能性がある。トレンチにより燃焼部の多くを失う。焼土面と北側の掘り込み面の間の様相が平面では判然としませんが、トレンチによる土層観察の結果、掘り残しによるブリッジの可能性がある。しかし、土層堆積が不安定であったので、断定はしがたい。南に燃焼部をもち、ブリッジを潜り、北方へ煙道が伸びる構造である。

なお、SP1の西側では、SC5が検出された。燃焼部を共有する炉穴群となる可能性が考慮されたが、ブリッジ痕跡が見られないこと、SP1の燃焼部とのレベル差が大きく違うこと、煙道部の存在を考慮すると極端に浅い炉穴が想定されることより、直接の関係性は想定しがたい。

SP2（第15図）

軸を北西にとり、残存長軸197×短軸80×深さ46cmを計る。トレンチにかかる形で検出され、一部を失っているが、a層からの掘り込みが確認できた。1層には、層相当の土石流が流れ込んでおり、廃絶時には穴がある程度空いていた状況が考えられる。なお、本炉穴の一部には幅70cm程の巨礫と重複している箇所がある。その出土状況から、巨礫が先行して存在しているにも関わらず一部重複しながら掘り込みがなされていた可能性がある。

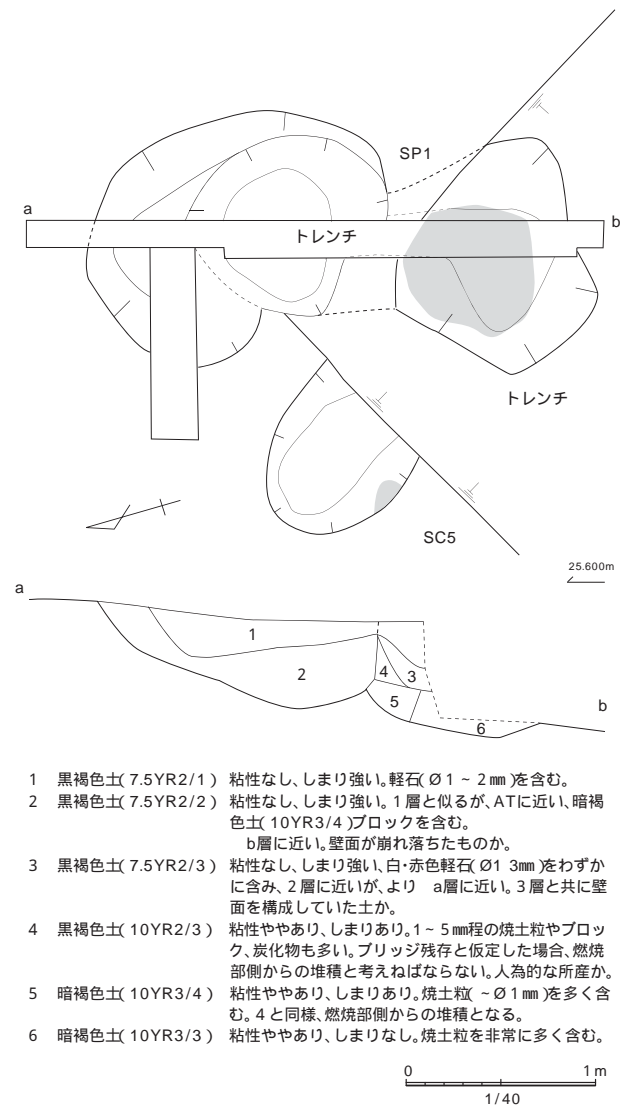
SP3（第16図）

軸を北西にとり、残存長軸53×短軸78×深さ50cmを計る。調査区の一部にかかるように検出された。層上面まで掘削したところ、焼土が点々と検出され、

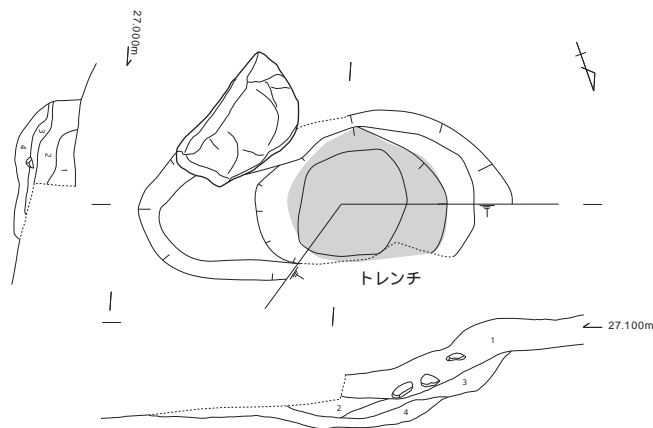
その存在が認識されたが、プランは明確ではなく、層上面で検出した。焼土堆積土層の観察からは、複数回にわたる土の掻き出しが確認された。

SP4・SP5（第17図）

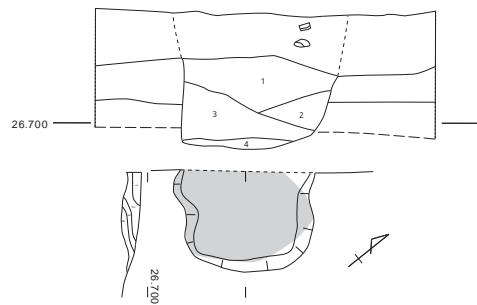
散礫を取り除き、楕円形のプランで検出した。2つの焼土面が検出され、東側をSP4、西側をSP5とした。残存長軸284×短軸101(SP4)・77(SP5)×深さ27(SP4)・17(SP5)を測る。SP4の焼土は上下2枚に分れて堆積している。特に、非常に焼きしまった8層は、最大13cmの厚さで堆積している。2つの機能面があったと考えたいが、6層の方は8層に比べ、しまりが弱く、掻き出しに伴ったものである可能性もある。SP5は、SP4に比べ、焼土範囲もせまく、堆積も薄い。ブリッ



第14図 岡遺跡第6次調査区 SP1 実測図



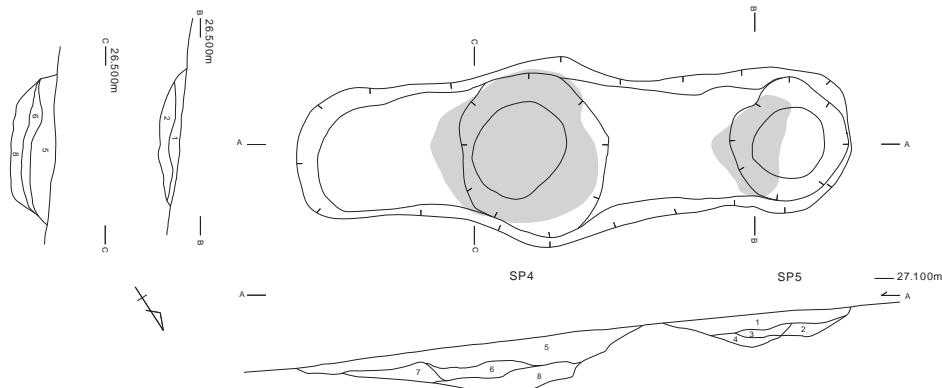
- 1 暗赤褐色土(5YR3/2) 粘性層で、粘性・しまりが非常に強い。拳台の礫を混じる。白・赤色の軽石(Ø1~5mm)を多く含む。基本土層の層に相当する。
- 2 極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性・しまり共に非常に強い。白・赤色の軽石(Ø2~3mm)を含む。1層に似るが、より基本土層の層に似ているため、ブリッジ崩落の痕の可能性あり。
- 3 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強く、しまり強い。白・赤色の軽石(Ø2~3mm)を含む。1・2層に似るが、極小の焼土粒を含む。
- 4 褐色土(7.5YR4/4) 粘性ややあり、しまり非常に強い。白・赤色の軽石をわずかに含み、2層に似るが、多くの焼土が堆積している。



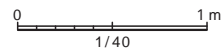
- 1 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性ややあり、しまりややあり。焼土・炭化物を多く含む。
- 2 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性、しまりややあり。炭化物、焼土粒をまばらに含む
- 3 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性、しまりややあり焼土粒および焼土ブロック(Ø1~10mm)、炭化物を非常に多く含む。
- 4 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性ほとんどなく、しまりが強い。焼土粒(Ø~2mm)の焼土粒、炭化物を微量に含む。

第15図 岡遺跡第6次調査区 SP2 実測図

第16図 岡遺跡第6次調査区 SP3 実測図



- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり、しまりあり。白・赤色軽石(Ø1~3mm)をまばらに含む。極僅かに焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性強く、しまりあり。白・赤色軽石(Ø3~5mm)が混じる。炭化物を含む。
- 3 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性なく、しまりややあり。わずかに白色軽石が混じり、焼土粒を多く含む。
- 4 褐色土(7.5YR4/4) 粘性ややあり、固くしまる。焼土の堆積が著しい。
- 5 黒褐色土(10YR2/3) 粘性ややあり、しまりややあり。Ø1cm程の軽石?が非常に多く混じる。焼土粒、炭化物をまばらに含む。
- 6 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性ややあり、やや固くしまる。白色軽石をわずかに、焼土粒を多く、炭化物がまばらに混じる。第2機能面と考えられる。
- 7 黒褐色土(10YR2/3) 粘性ほとんどなく、しまりあり。白色軽石(Ø2~3mm)が混じり、微細な焼土粒・炭化物が若干みられる。
- 8 明褐色土(7.5YR5/8) 粘性ほとんどなく強くしまる。基本的な土は黒褐色(10YR2/3)であるが、非常に多くの焼土粒を混じり、第一機能面と考えられる。



第17図 岡遺跡第6次調査区 SP4・SP5 実測図

第4表 岡遺跡第6次調査区 炉穴一覧表

遺構	位置	検出面	主軸	焼土	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	年代測定年(BP)	備考
SP1	N4		N 15°E		115	55	31	-	
SP2	L5	a	N 70°W		197	80	46	9380±30	微細土器片出土
SP3	O2		N 51°W		53	78	50	9490±35	
SP4	M5		N 56°W		284	101	27	9490±30	2つの焼土面有り 機能面が2つ
SP5	L5・M5		N 56°W			77	17	-	

ジ部がより北西部へ延びていたものと考えられる。なお検出面の関係で、両焼土面をもつ炉穴の切り合い関係は不明であるが、SP2との関係からSP4が最初に築かれ、その一部を利用する形で、軸を谷に沿わせるように、SP5がつくられたと考えられる。

散礫（第11図）

遺構の多くはL5Grで検出されている。先に述べたように、L5Gr一帯では、層掘削時に散礫がみられ、それらを取り除くと、炉穴3基、土坑5基、集石遺構2基が検出された。これらの散礫は、基本的に遺構に重なるように検出されている。

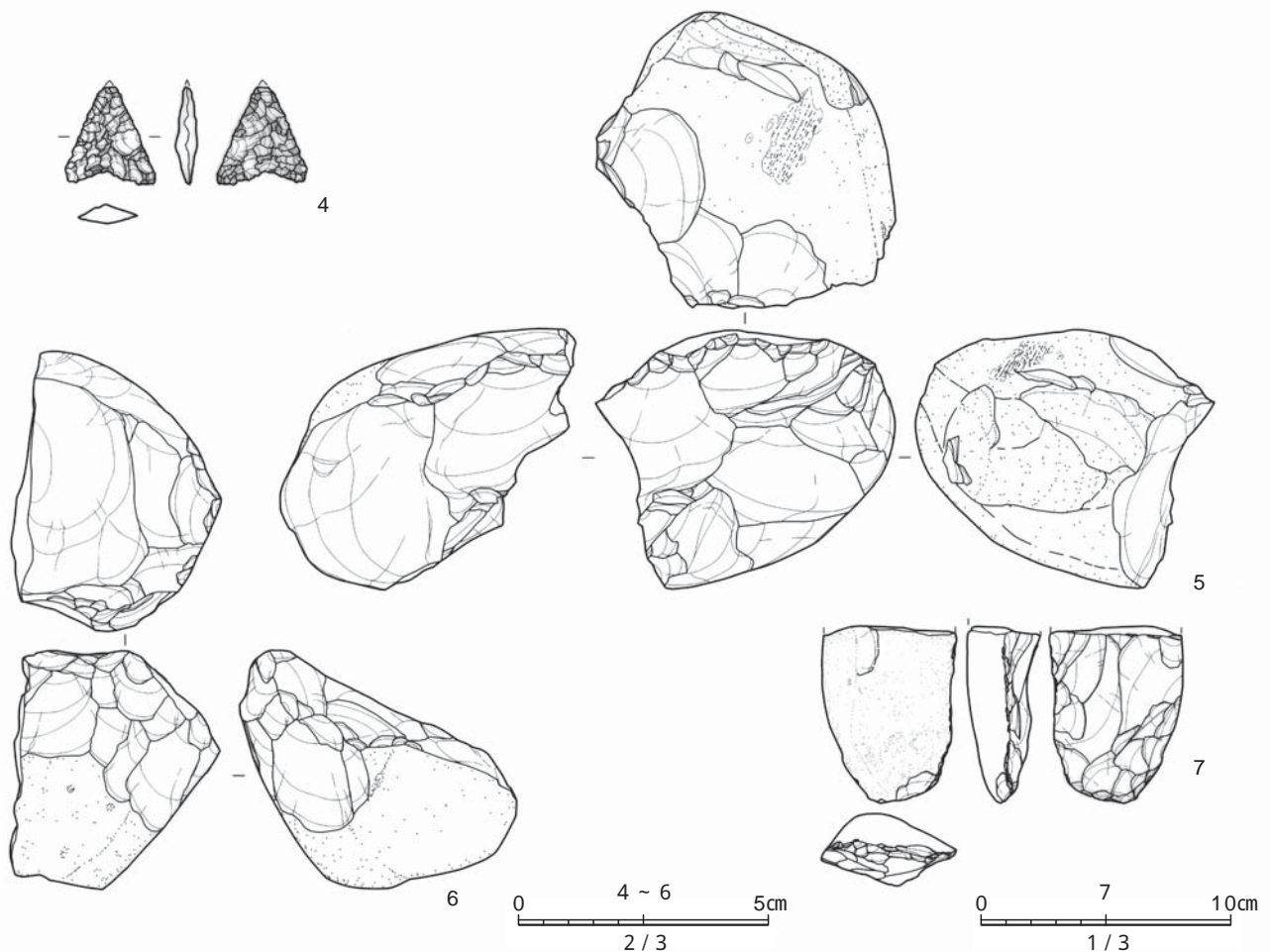
構成礫は尾鈴山溶結凝灰岩で、サイズなどSI3とSI4に非常に似通っていた。このことから、L5Gr検出の

散礫の元々の由来は、SI3・SI4等の集石遺構に伴っていた可能性が高いものと考えられる。

なお、散礫は地形に沿うように谷側へ延びていく様が見て取れるが、これは人的な所作というより礫の使用後、自然の営力で谷側へ落ち込んだと考えられる。

散礫出土遺物（第18図5～7）

散礫に混じり、打製石斧1点と石核2点が出土している。5は頁岩製の石核で、最初に左側面で幅広剥片をとり、打面転移後、小さい不定形剥片をとっている。6はホルンフェルス製の石核で、打面転移が顕著である。7は打製石斧で片面は礫面全体に残し、明瞭ではないが細かい剥離で刃部を形成する。基部は欠損したものである。



第18図 岡遺跡第6次調査区 縄文時代早期遺構出土石器実測図

4-4. 包含層出土遺物（第19～21図）

ここでは、縄文時代早期の包含層出土遺物を示す。遺物の多くは、調査区東側の谷部に集中している（第10図）。これは地形的な要因と、層に代表されるように、第6次調査区が土石流の流れ道、または終着地であったことによるものと思われる。縄文時代早期の遺物は、層と層に混在しており、その明確な出土層位が明らかでなかったが、層の遺物、特に調査区東側は原位置を保っている可能性は薄いと思われる。調査区西側の一部は層と層の区別が明確であり、層位的発掘が可能であった。ただし、大型の礫が流れ込むように出土した礫集中区に示されるように、2つの谷が複雑な様相を呈していたため、調査区の大部分は層と層を明確に分別しての遺物取り上げは困難であった。よってここでは、層、層出土のものを縄文時代早期の遺物として報告したい。

土器（第19図）

土器は、明確に遺構に伴うものは存在せず、包含層出土のもののみで、その数は非常に少ない。基本的に無文土器が大半を占め、早期前半の円筒形土器、押型文、早期後半の手向山式が1点ずつみられる。8は調査区北部の礫集中区で、礫に混じるように出土した。口縁部がラップ状に大きく外反し、胴部は、くの字状に屈曲し張り出す、いわゆる手向山式土器の形態をもつ。施文および調整は口唇部～胴部まで全面に縄文が施され、胴部の張り出し部に刻目突帯を貼付け、突帯部から上の胴部上半には横方向の沈線を充填した三角文に似た幾何学凹線文、口縁部には縦方向の沈線が施される。また内面にはナデ成形の後に口縁部端から、最大屈曲部にわたり5条の波状文が施される。外面の文様は幾何学文など丁寧なつくりなのに対し、内面は波状文の形態や条間の間隔のばらつきが目立つ。9は押型文土器で、1点のみ出土している。内外面共に横位の山形押型文を施している。内面は、口縁とほぼ平行に施され、外面は口唇部から少し空白帯をおき、斜方向に施文される。10は外面口唇部から、平行した工具で沈線が施される円筒形系の土器である。11～16は無文土器で、風化が激しいものが多く、6点を図示した。13は口縁がわずかに波状になっている。

層出土であるが、混入品の可能性もある。

石器（第20図・第21図）

層には、一部旧石器が混じっていると思われ、縄文時代早期の石器との区別がつかない場合が多い。よって、ここでは、旧石器時代～縄文時代早期の石器として報告する。

石鏃（第20図17～23）

打製石鏃は7点出土している。挟りがなく、二等辺三角形状を呈す平基式のもの（17～19）と、挟りをもつもの（20～23）がある。17と19は共にチャート製でサイズもほぼ同大で、素材面をわずかに残す点で共通するが、17はつくりが非常に丁寧であるのに対し、19は粗く対照的である。20は、唯一の頁岩製である。23は、姫島産黒曜石製で、表面左側が欠損しているが、右側と脚部のサイズが違っており非対称であった可能性がある。22はチャート製で、半分および脚部を欠損している。作りは粗く、裏面には素材面を残す。

スクレイパー（第20図24～26）

スクレイパーは3点出土している。24はホルンフェルス製で、風化が著しく剥離は明瞭ではないものの、刃部を比較的広く形成する。25は珪質頁岩製で、石核を再利用し、刃部をつけている。26はチャート製で、礫面を残し、刃部を急峻に形成している。

楔形石器（第20図27）

安山岩製の楔形石器である。ただし、上部の打面は強い力で潰れたような形跡をみせるものの、下部は折れたようになっているため、確実ではない。ただ、下部の折れ、または欠損が裏面にまで及んでいるため、強い衝撃により、剥がれたものの可能性があり、楔形石器として報告する。

剥片（第20図28）

流紋岩製の剥片である。

石核（第20図29、30）

石核は、珪質頁岩製（29）と砂岩製（30）がある。29は打面転移が激しく、右側面、左側面、最終剥離面へと転移している。

2次加工剥片（第20図31～34・41）

31・32は、削器状に刃部を取り付けるもので、33は礫器としての使用が考えられる。



第19図 岡遺跡第6次調査区 早期土器実測図

蛤形粗製剥片（第21図35～38）

主に層で比較的多く出土した。砂岩製のものが多く、35は大型の剥片で、下縁の一部以外の両側縁に二次加工を施している。36は長楕円形を呈し、下縁ではなく側縁部に二次加工を施す。37は側縁部を細かな剥離で整えている。39は下縁に刃部を作っているが、打点のある側（上縁）にも、調整が加えられている。

蛤形粗製剥片石核（第21図38）

粗製剥片の石核が出土している。砂岩製の楕円形の円礫で、表方は長軸側から、裏面は上端から2回の剥離が確認できる。

打製石斧（第21図40）

40は基部片である。片面は礫面をそのまま残している。

礫器（第21図42・43）

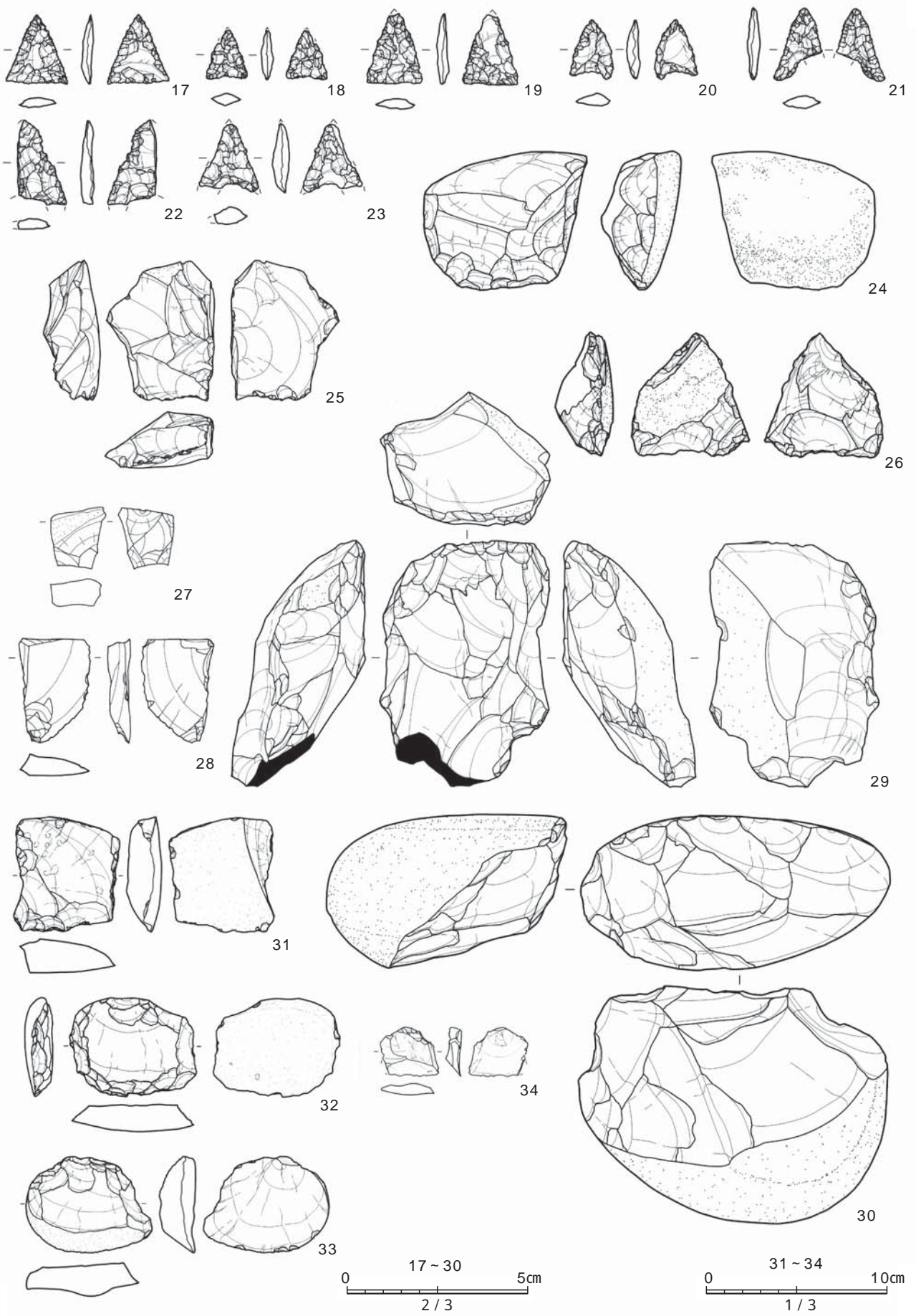
42は粗い刃部と、取手のような基部をもつ礫器であるが、基部には明瞭な敲打痕を残しており、敲打石としても使われていたことがわかる。43は石斧の未整品ともとれるものである。

凹石（第21図44・45）

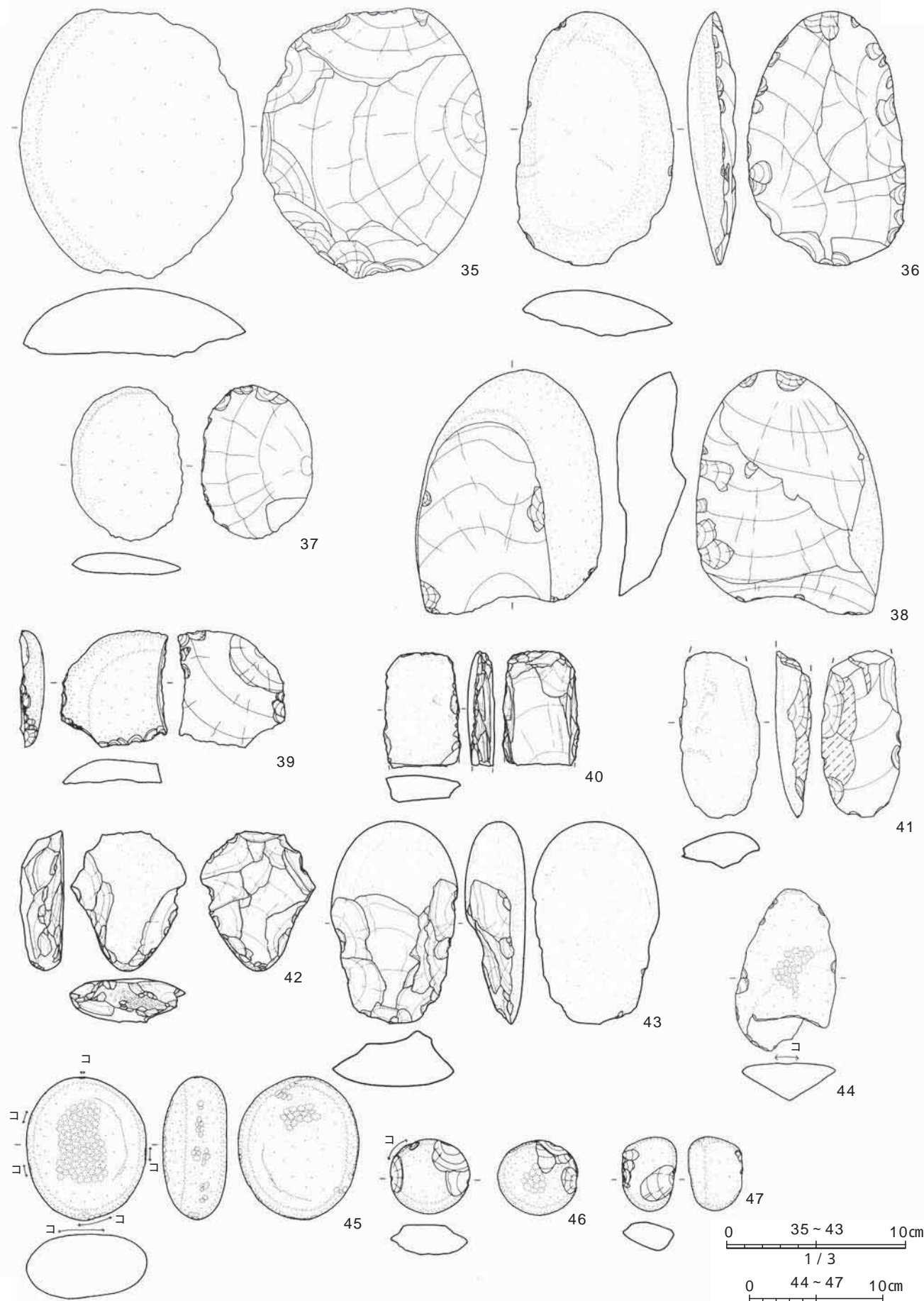
44は中心部の1点のみが激しく敲打されている。45は中央部、短軸および長軸の両端に明瞭な敲打痕がついている。

石錘（第21図46・47）

石錘は2点が出土している。46は長軸に抉りをいれるが、両端で抉りの入れ方が違う。なお、敲打痕が明瞭についており、敲打石としても用いられたと思われる。47は短軸を浅く剥離するもので、深い抉りを作っていない。



第20図 岡遺跡第6次調査区 旧石器時代～縄文時代早期石器実測図(1)



第21図 岡遺跡第6次調査区 旧石器時代～縄文時代早期石器実測図(2) ^{1/4}

第5表 岡遺跡第6次調査区 縄文時代早期土器観察表

遺物番号	種別	器種	部位	出土層位	出土地点	時期	文様	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考
8	縄文土器	深鉢	口縁		磯集中	早期末	幾何学文・縄文	斜方向の縄文	横方向の工具ナデ	4mm以下の灰白色、2mm以下の浅黄橙、透明光沢粒を含む。	良好	にぶい黄橙色 (7.5YR6/4)	手向山式土器
9	縄文土器	深鉢	口縁		包含層	早期	山形押型文	口唇部ヨコナデ	横ナデ	1mm以下の灰白色砂粒をまばらに含む	良好	明赤褐色 (2.5YR5/7)	押型文
10	縄文土器	深鉢	口縁		包含層	早期	沈線	櫛状工具(?)による縦方向の沈線	ナデ	1mm程度の赤褐色の粒を含み、にぶい赤褐色 (5YR5/4)を呈す。	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	円筒形土器
11	縄文土器	深鉢	口縁		包含層	早期	無文	風化著しく不明	横ナデ	Ø1mm以下の白色砂粒を多く含み、2mm程度の鉱物をまばらに含む	良好	明赤褐色 (5YR 5/6)	無文土器
12	縄文土器	深鉢	口縁	a	包含層	早期	無文	風化著しく不明	風化著しく識別不能	Ø4mm程の黒色・白色鉱物をわずかに含み、Ø3mm以下の浅黄橙色、灰白色砂粒をまばらに含む	良好	明黄褐色 (10YR7/6)	無文土器
13	縄文土器	深鉢	口縁		包含層	早期	無文	風化著しく不明	風化著しく識別不能	Ø1～2mmの白色砂粒、Ø2～3mmの赤褐色鉱物をまばらに含む	良好	明黄褐色 (10YR7/6)	無文土器
14	縄文土器	深鉢	胴部		包含層	早期	無文	横方向のナデ	ナデ	Ø1～2mmの白色砂粒、Ø2～3mmの赤褐色鉱物、透明光沢粒、黒色光沢粒をまばらに含む	良好	褐色土 (7.5YR6/4)	無文土器
15	縄文土器	深鉢	胴部		包含層	早期	無文	風化著しく不明	風化著しく不明	Ø1～2mmの白色砂粒、Ø2～3mmの赤褐色鉱物、透明光沢粒、黒色光沢粒を多く含む	良好	明褐色 (7.5YR4/6)	無文土器
16	縄文土器	深鉢	胴部		包含層	早期	無文	ナデ	指押え・不定方向のナデ	Ø1～2mmの白色砂粒、赤褐色鉱物をまばらに、透明光沢粒、黒色光沢粒を多く含む。100mmほどの大きな灰白色鉱物が複数入る。	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	無文土器

第6表 岡遺跡第6次調査区 旧石器時代～縄文時代早期石器計測表

遺物番号	器種	石材	出土層位	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
4	石鏃	チャート		SC9	2.0	1.8	0.5	1.1
5	石核	頁岩	a	散礫	5.2	6.0	6.0	186.3
6	石核	ホルンフェルス	a	散礫	4.8	4.2	5.6	101.9
7	石斧	頁岩		散礫	7.1	5.4	2.9	108.5
17	石鏃	チャート	a	包含層	1.9	1.7	3.5	0.8
18	石鏃	チャート		磯集中	1.4	1.1	0.3	0.4
19	石鏃	チャート	a	包含層	2.0	1.5	0.3	0.7
20	石鏃	頁岩	a	包含層	1.6	1.2	0.3	0.5
21	石鏃	チャート	a	包含層	2.0	1.3	0.4	0.5
22	石鏃	チャート	a	包含層	2.3	1.3	0.4	1.0
23	石鏃	姫島	a	包含層	1.9	1.7	0.5	0.8
24	削器	ホルンフェルス		包含層	3.8	4.6	2.2	39.2
25	スクレイパー	珪質頁岩		包含層	4.0	5.2	2.1	39.5
26	削器	チャート	a	包含層	3.4	3.3	1.6	15.1
27	剥片	安山岩		包含層	1.7	1.4	1.3	2.5
28	剥片	流紋岩		包含層	2.8	2.0	0.6	4.0
29	石核	頁岩	a	包含層	6.8	4.7	3.7	108.4
30	石核	砂岩		包含層	4.3	8.6	6.7	299.0

遺物番号	器種	石材	出土層位	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
31	二次加工剥片	珪質頁岩		包含層	6.3	5.8	1.9	92.9
32	スクレイパー	砂岩	a	包含層	5.5	7.0	1.6	76.2
33	二次加工剥片	砂岩	a	包含層	5.3	7.0	2.0	77.0
34	二次加工剥片	珪質頁岩		包含層	2.7	3.3	0.9	6.0
35	蛤形粗製剥片	砂岩		包含層	12.5	15.0	3.8	901.6
36	蛤形粗製剥片	砂岩		包含層	14.1	8.2	2.6	334.7
37	蛤形粗製剥片	砂岩		包含層	6.2	8.6	1.2	77.0
38	蛤形粗製剥片	砂岩		包含層	13.6	10.3	4.2	678.0
39	蛤形粗製剥片	砂岩		包含層	6.5	6.0	1.4	68.5
40	石斧	珪質頁岩		包含層	6.4	4.3	1.5	65.7
41	石斧	砂岩	a	包含層	9.2	4.4	2.0	90.7
42	礫器	砂岩		包含層	7.8	6.5	2.4	118.0
43	礫器	砂岩	a	包含層	11.2	7.1	3.4	309.5
44	凹石	砂岩		包含層	11.2	7.0	2.7	207.3
45	凹石	砂岩		包含層	10.7	9.0	4.8	610.5
46	石鏢	砂岩	a	包含層	5.6	6.0	2.3	100.1
47	石鏢	砂岩	a	包含層	5.5	4.1	2.1	65.7

包含層以外から出土した早期～前期の遺物

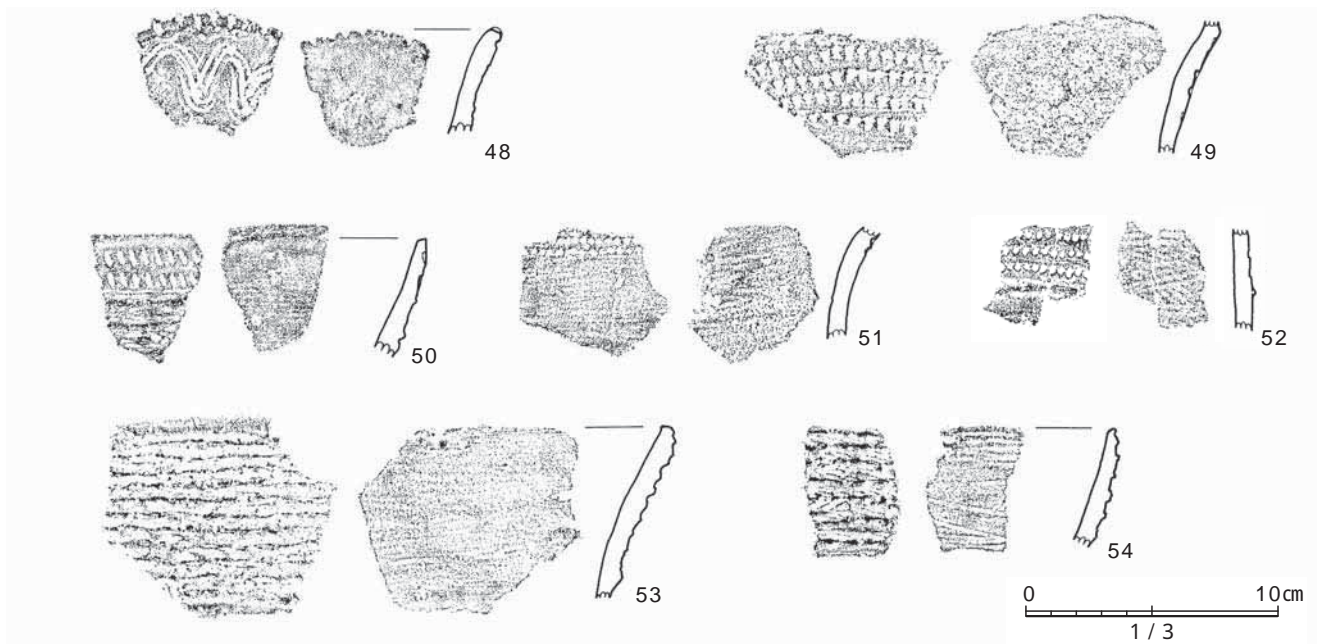
・ 層が縄文時代早期の遺物包含層ではあるが、早期の土器と思われるのは、層である二次堆積アカホヤ火山灰層および、表土からも出土している。なお、これらの土器は b層には含まれず、M6Grに集中する傾向があることから、元々は a層形成時に流れ込んだものと言える。また、石器も石材から、早期に比定される可能性のあるものもあるが、確定はできないため、ここでは土器のみの報告を行なう。紙面の都合上、前期と思われる遺物も合わせて報告する。

縄文時代早期末～前期の土器（第22図48～54）

48は口縁が波状になり、口唇部には貝殻による刻

み目が施される。直下には、幅1～1.5mm程の2条の平行線が辿る波状文が施される。49は貝殻連続刺突が施される。50は口縁下に2段にわたり貝殻刺突がなされ、その下に凹線によって、突帯状になっている。51は、屈曲部に巻貝によると思われる刺突がある。52は竹管による刺突が3段以上になされ、その下に突帯をもつ。

53・54は轟式系の土器と思われる。53はラッパ状に口縁が開き、口縁部直下から11段のミミズばれ状の突帯が3mmほどの間隔をおいて施される。54は内湾してラッパ状に開く口縁で、6条以上のミミズばれ状の突帯をもつ。



第22図 岡遺跡第6次調査区 縄文時代早期末～前期土器実測図

第7表 岡遺跡第6次調査区 包含層以外出土土器観察表

遺物番号	種別	器種	部位	出土層位	出土地点	時期	文様	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調
48	縄文土器	深鉢	口縁		表土	早期末	波状文・口唇部刻み	横ナデ	斜方向ナデ	Ø1～5mm以下の灰白色砂粒、1mm以下の金雲母を多く含む。	良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)
49	縄文土器	深鉢	頸部	a	包含層	早期末～前期前半?	貝殻刺突	横ナデ	横ナデ	Ø1～2mmの黒色光沢粒、透明砂粒、1～2mm以下の灰白色砂粒をまばらに、Ø5mm程の灰白色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい橙色 (7.5YR6/4)
50	縄文土器	深鉢	口縁		M6 落ち込み	前期前半	刺突文・突帯	横ナデ	横方向の貝殻条痕・ナデ消し	Ø1～2mmの黒色光沢粒、透明砂粒、Ø1～2mm以下の灰白色砂粒をまばらに、Ø5mm程の褐灰色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい橙色 (7.5YR6/4)
51	縄文土器	深鉢	頸部		風倒木	早期末～前期前半?	連続刺突(巻貝)	不定方向のナデ	貝殻条痕・ナデ消し	Ø1～2mmの黒色光沢粒、透明砂粒、1～2mm以下の灰白色砂粒をまばらに、Ø3～5mm程の灰白色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい橙色 (7.5YR6/4)
52	縄文土器	深鉢	頸部		M6 落ち込み	早期末～前期前半?	連続刺突(竹管?)	横ナデ	横ナデ	Ø1～2mmの黒色光沢粒、透明砂粒、1～2mm以下の灰白色砂粒をまばらに、Ø4～5mm以下の灰白色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい橙色 (7.5YR6/4)
53	縄文土器	深鉢	口縁	a	包含層	前期前半	突帯(ミミズばれ状)	工具ナデ(横方向)・ナデ消し	条痕ナデ消し	Ø1～2mmの黒色光沢粒、Ø1～2mm以下の灰白色砂粒をまばらに含む、Ø1～2mmの透明砂粒を多く含む	良好	橙色 (7.5YR7/6)
54	縄文土器	深鉢	口縁	a	包含層	前期前半	突帯(ミミズばれ状)	貼付突帯	条痕・ナデ	Ø1～2mmの黒色光沢粒、透明砂粒、1～2mm以下の灰白色砂粒をまばらに含む	良好	明赤褐色 (2.5YR5/6)

第5節 縄文時代晩期の遺構と遺物

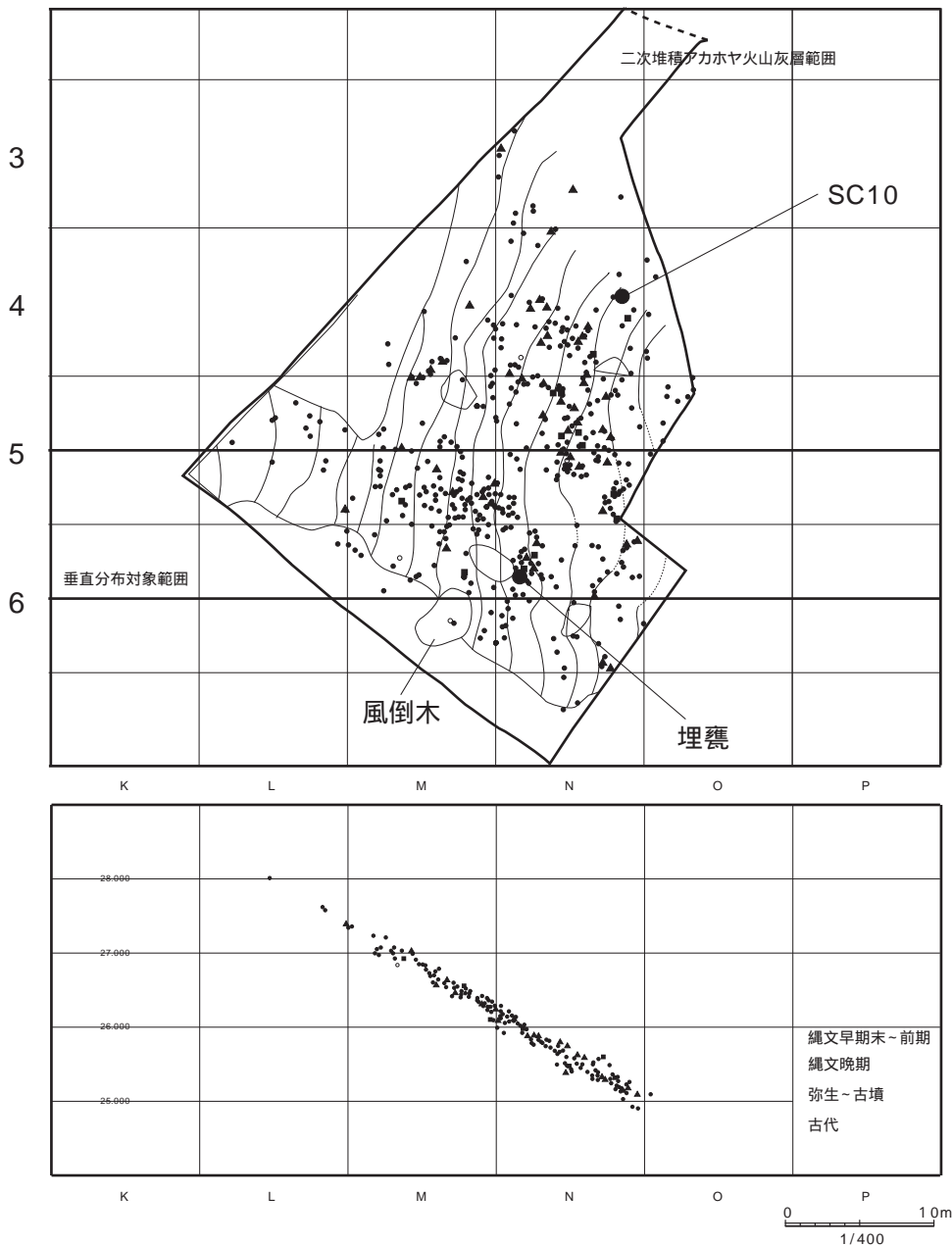
5-1. 概要 二次堆積火山灰層について

ここでは縄文時代晩期の遺構と遺物について報告を行なうが、その前に、二次堆積アカホヤ火山灰層と縄文時代晩期遺構面の関係について述べておきたい。

縄文時代晩期の遺物は層である二次堆積アカホヤ火山灰層から出土している(第23、24図)。基本的に層は縄文時代～古代までの遺物が混じっている層で、その構成は、a、b層共に基本的には変わらないものの、b層では、縄文時代晩期の遺物がより主体的になる。第24図に層の垂直分布図を示したが、弥生時代以

降の遺物は、レベル的に大きなバラツキがみられるが、晩期の遺物はある程度安定した分布を示す。少数ながら、中世の遺物が層で出土していることなど、風倒木による攪乱や、傾斜面ということで遺物の上下はあるものの、縄文時代晩期の生活面が第6次調査区には一部残っていたと考えるのが妥当と考えられる。

上記のような状況から遺構検出は困難であったが、遺構は2基検出している。ただし、遺物分布をみる限り、遺物が集中している箇所も存在し、検出できなかった遺構もありえたと考えられる。



第23図 層の遺構・遺物分布図(上) 第24図 層の遺物垂直分布図(下)

5-2 . 遺構 (第23図)

土坑 1 基と埋甕 1 基を検出した。

SC10 (第25図・第26図)

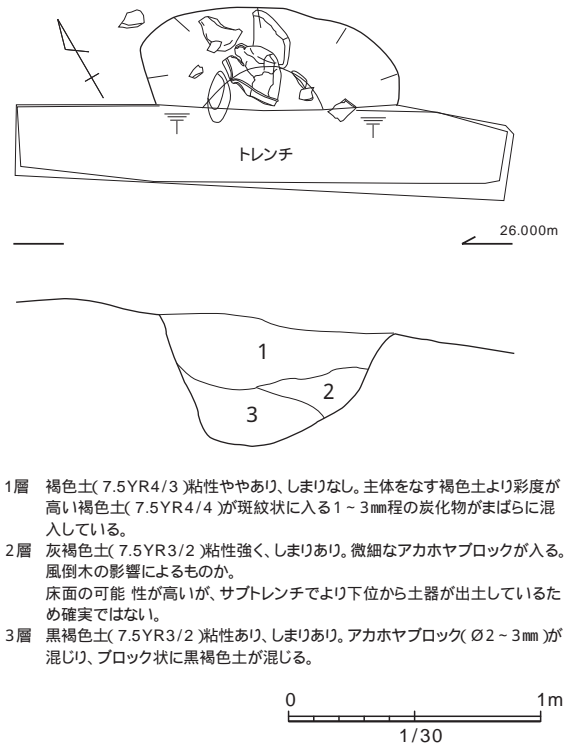
b層掘削時に遺物が集中する場所があり、その下から検出された。しかしながらプランは明確に確認できず、さらに掘り下げたところ、浅鉢形土器が台石などと共に転がり込んだような状態で出土し、遺構と判明した。しかしながら、遺物検出面より下位の埋土からは遺物が出土せず、遺物も落ち込むように検出されたことより、その機能の詳細は不明である。住居等の施設であった可能性も否定できない。また、サブトレンチで、遺構床面と思われる場所より下位から出土した土器片が、より上層の遺物集中の土器片と接合するなど、一部、風倒木による攪乱を受けている可能性が高く、その一括性は十分ではない。

SC10出土遺物 (第27図・第28図)

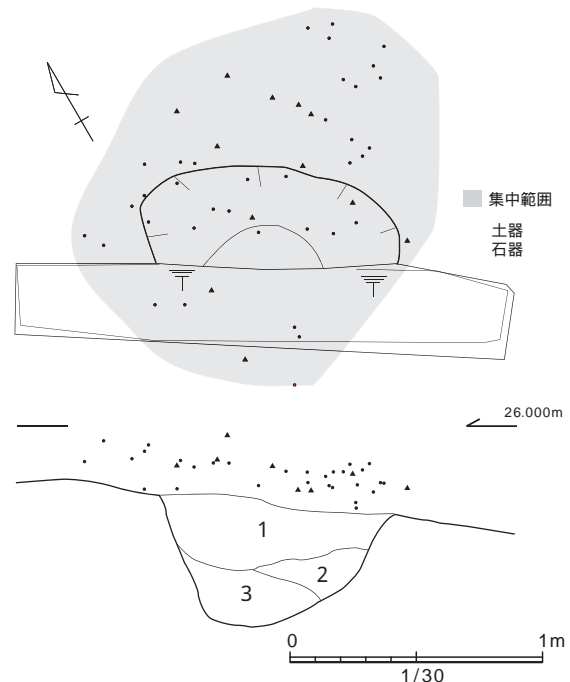
55は無刻目突帯をもつ深鉢形土器と思われるが、下記の調整技法が浅鉢形土器と共通することより、浅鉢形となる可能性もある。推定口径37cmの半粗製半精製土器で、内面をミガキ、外面は貝殻条痕を施した後、口縁に近い部分にのみ残り粗くナデ消す。突帯は貼付後、上側を幅広く、下側を幅狭くナデている。

56はほぼ完形の状態で出土した。平底の安定感のある形態をしており、粗製浅鉢形土器とされるものに近い形態で、内面を粗いミガキで仕上げている点が特長的である。なお、外面にもわずかにミガキの痕跡がみられる。口唇部に鱗状および中心部に凹みがある山形の突起をもっており、口縁部下に貼付突帯をもつ。なお、鱗状突起は一部欠損している。突帯は、3～5mm程の比較的細い断面三角形で、口唇部から2cm程下で土器の周囲を回り、山形の突起の凹みへ向って収斂する。なお、本土器は、山形の突起をはさんで反対側も右上がりとなっていることから、形状は定かではないものの、山形突起を挟んで反対方向に鱗が対になっていた可能性がある。

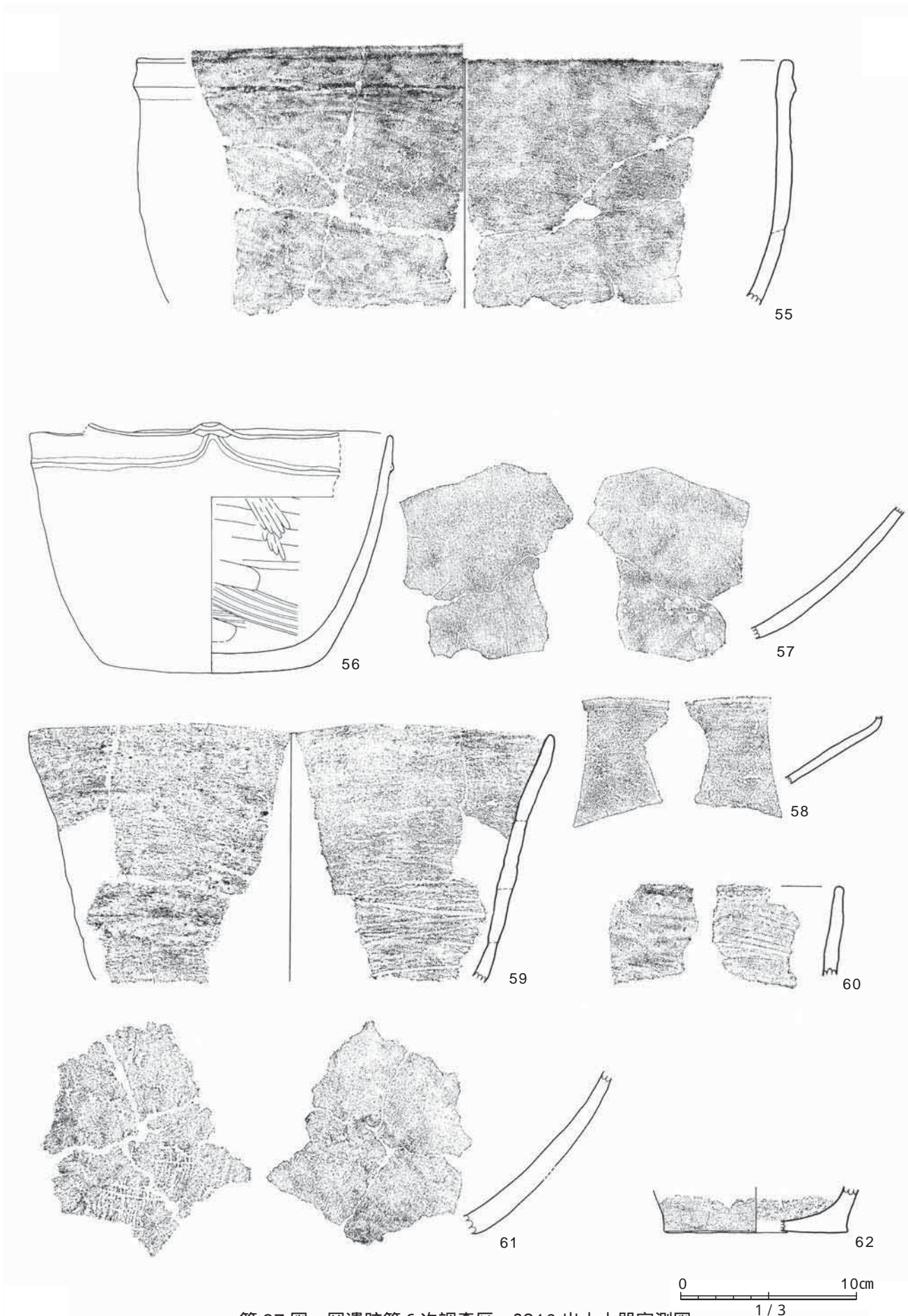
57・58は黒色磨研の精製浅鉢片である。内外面ともに横方向に丁寧なミガキを施す。59は粗製深鉢である。口縁が波状気味になっており、口縁部から胴部にかけて、胴部から底部にむかうところで屈曲がみら



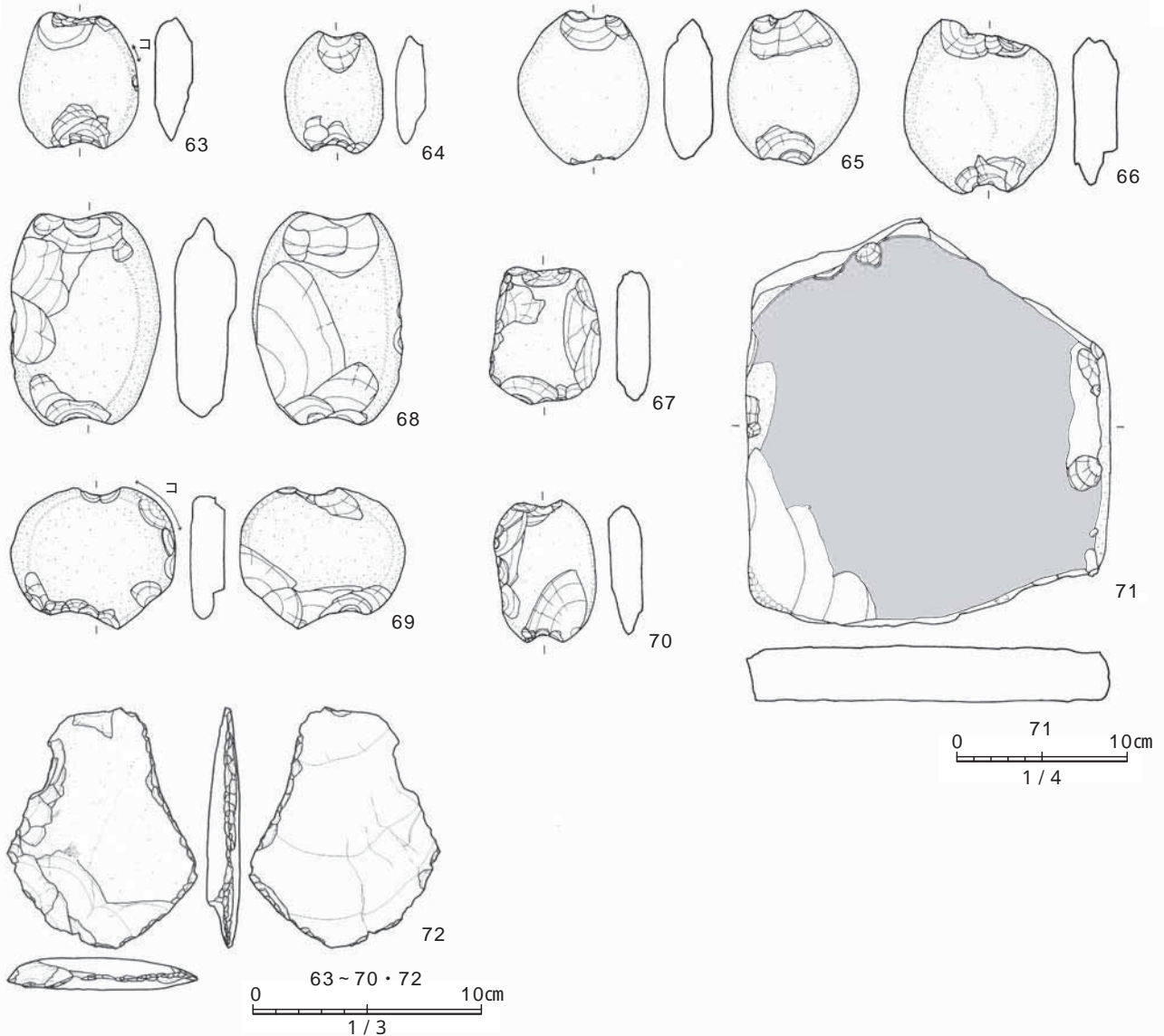
第25図 SC10 実測図



第26図 SC10 遺物集中分布図



第27图 岡遺跡第6次調査区 SC10 出土土器実測図



第28図 岡遺跡第6次調査区 SC10 出土石器実測図

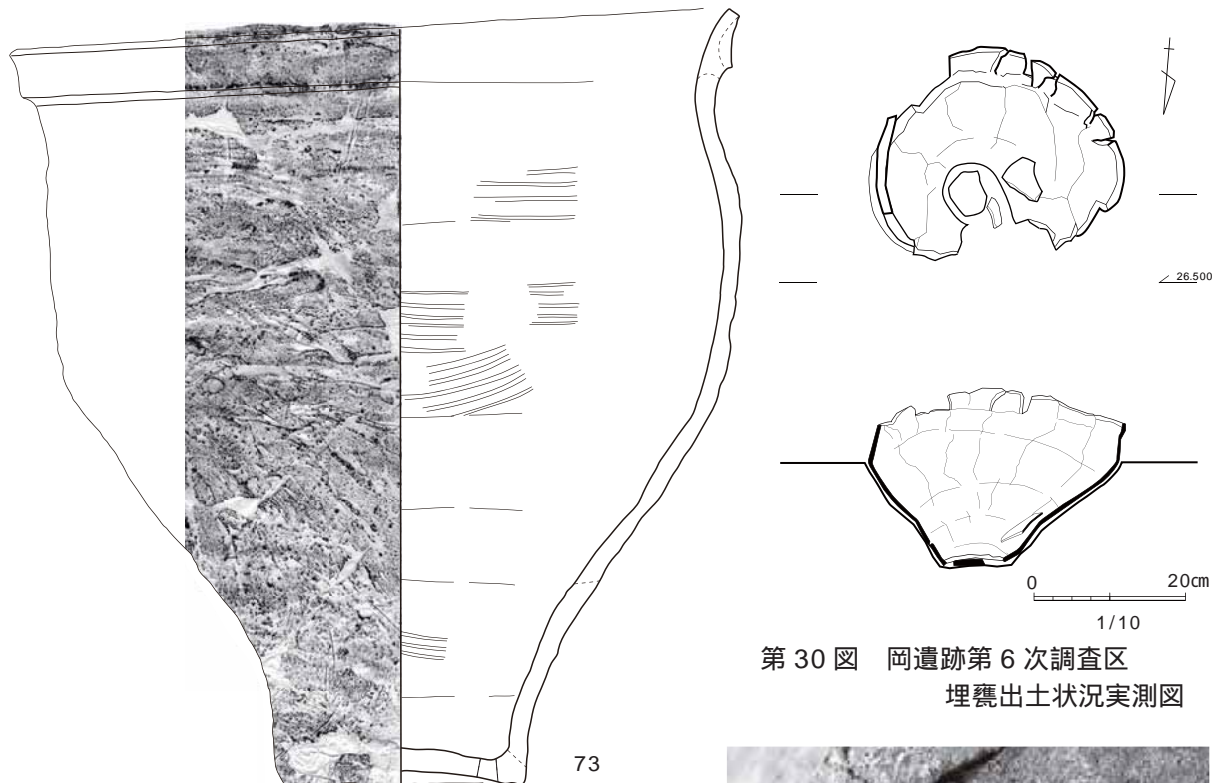
れる。60は無文土器で、61は組織痕土器の胴部である。風化により、編目ははっきりとはしないものの、底部はボール状であると思われる。62は深鉢形土器の底部片である。63～70は石錘で、67～70は、抉りをもつ面だけでなく、側面の剥離もおこなう。69は短軸に抉りを入れ、その肩には敲打痕を伴っている。71は台石で、磨面の他に細かい剥離や敲打痕など見られ、多様な用途が伺える。72は打製石斧で左側面にゆるく抉りを入れ、基部から、刃部へ大きく撥形に広がっている。

埋嚢（第29・30図）

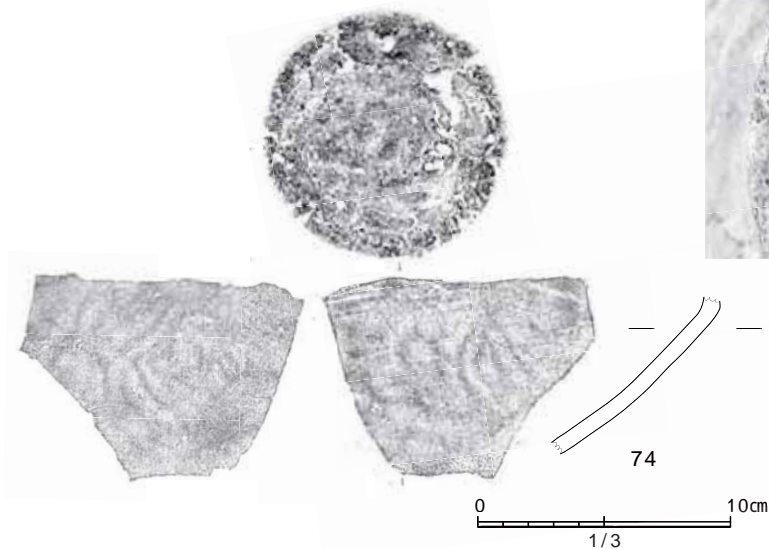
埋嚢を1基検出している。深鉢形土器が半分を欠損し、ややつぶれた状態で出土した。欠損がどの段階の所産かは不明であるが、土器の内面に少し浮いた状態

で浅鉢片が出土していることにより、土圧等の二次的な可能性が高い。73は、埋嚢として利用されていた深鉢で、無刻目突帯をもつ口縁部から、わずかにくびれ、胴部へ至り、底部はやや上げ底で張り出しはない。調整は、外面を粗いナデによって、底部付近を縦に施した後、胴部付近まで斜方向へ、胴部からは横方向へ施している。内面は、貝殻条痕を横方向へ施す。円盤状の底部の回りに一巻き粘土紐を回し、粘土帯を積み上げている状態を想定できる。なお、底部には、楕円形の圧痕があるが、その特定はこの度、果たす事ができなかった。

74は深鉢の中から出土した精製浅鉢片である。内外面とも丁寧に研磨されている。やや暗褐色を呈すが、黒色磨研土器と思われる。



第30図 岡遺跡第6次調査区
埋甕出土状況実測図



第29図 岡遺跡第6次調査区 埋甕出土土器実測図



写真3 底部圧痕

5-3 . 包含層出土の土器

土器は、深鉢・浅鉢・鉢に大別した。ただし、深鉢と鉢形は、破片では判別がつかないものが多いため、ここでは、粗製土器(類)・その他の土器(類)・精製土器(類)の大分類を行なう。なお、各類型は、それぞれアルファベットで細分し、適宜器種に触れる。

類 粗製土器

a類(第31図75～77)

口縁を肥厚させている深鉢を分類した。75は、1.5

cm程の粘土帯を口縁部上端に貼付けている。76は、肥厚の範囲が3cmと広いこと、肥厚部上端と下端を残しその間を意図的にナデて突帯をつくりだそうとしているようにも見える。77は肥厚部上部に明瞭な段をつけている。

b類(第31～第32図 78～95)

無刻目突帯を口縁下に一条めぐらせたものを分類した。なお、突帯にはその製作技法および形態に3種類あることが確認できたので、b 1～3類に細分する。

b-1類(第31図78～80)

口縁端から地続きになっている、口縁肥厚風な突帯をもつものを分類した。基本的に、おおまかな形状の粘土紐を貼付け、上半部を口縁端から突帯頂部上半まで幅広くナデ、下部を幅狭く掻きとる様にナデて突帯を形成している。基本的に突帯の剥離面は下部に顕著で、比較的丁寧な作りである。78は突帯が口縁部端から突帯頂部まで緩やかに続き、口縁端から突帯頂部までの間隔が3.5cmと幅広い。79は貼付部はさほど広くはないが、口唇部から突帯頂部まで丁寧にナデている。80は突帯下部を強くナデて、突帯の下に凹部ができています。

b-2類(第31図81～84)

基本的な作り方としてはb-1類の方法によるが、突帯が独立したような形態をもつ。基本的に手捏調整で、粗雑な作りが多い。81・82は比較的粗雑な作りで、83は、突帯上部をナデる時に突帯頂部を5mm程の幅で残し、わずかに断面蒲鉾形になる。84は口縁部上部とは独立したような断面形をみせるが、作り自体は上部の方に幅広に粘土を貼り、横方向にナデて成形している。下部には粘土の剥離が顕著である。

b-3類(第31図85～88)

突帯部が口縁から独立した形態をもつもの。突帯部の上下とも幅狭に均等に形成されており、あらかじめ形成する幅を揃えた粘土紐を貼付けてものと思われる。精製のものと同製のものがある。85は外面調整に貝殻条痕を縦に施すのが特徴である。基本的に岡遺跡出土の深鉢は内面にのみ貝殻条痕で調整する。86は突帯断面が丸みを帯びた形態となる。87は極めてわずかに突帯が付いているのが特徴である。88は手捏ねによる突帯の形成、上下にみられる剥離が明瞭である。

b-4類(第31図89～92)

b-3類に鱗状突起がつくものである。破片では不明なものが多いが、突帯が口縁と常に平行ではなく、一周する途中で上に上がるものが多い。89は鱗は明瞭でないが、波状気味となる。91は左向きの鱗を持ち粗雑な突帯は徐々に右上がりとなる。92は右向きの鱗をもつもので、突帯は徐々に左上がりとなる。

b-5類(第31図93～95)

93～95は、強いナデにより、口縁部近くに明瞭な段をつけ、突帯を形成するものを分類した。突帯下部にも横ナデを施す。

c類(第32図96～101)

孔列文土器を分類した。器形は浅鉢～鉢形土器である。96～98はb-3類と同様な突帯をもち、外側からの未貫通穿孔で、96は右側が、97・98は口縁部左側が上がり、鱗の可能性はある。97は1孔のみ貫通しているが、完全な貫通でなく、意図的でない。孔列間距離はバラツキがある。なお、96～98は胎土、穿孔方法、突帯の形態が似ており、同一個体の可能性がある。99はb-2類と同様な突帯をもち、内側から直径3mmほど貫通穿孔している。なお、胎土が他の土器の多くとは違い、角閃石を含まず、赤褐色を呈する。100は孔の半分のみ残存していて詳細は不明であるが、両面穿孔である。101は突帯をもち、貫通穿孔してある。

d類(第32図102～110)

無文土器を分類した。102・105は無文の深鉢形土器である。105は内面が貝殻条痕風であるが、仔細にみると凹凸間に微細な平行線があるため、板状工具による擦過の可能性はある。106・107は小型の鉢形土器で、つくりは粗く、口縁部～胴部までの煤の付着が顕著である。

e類(第33図111～119)

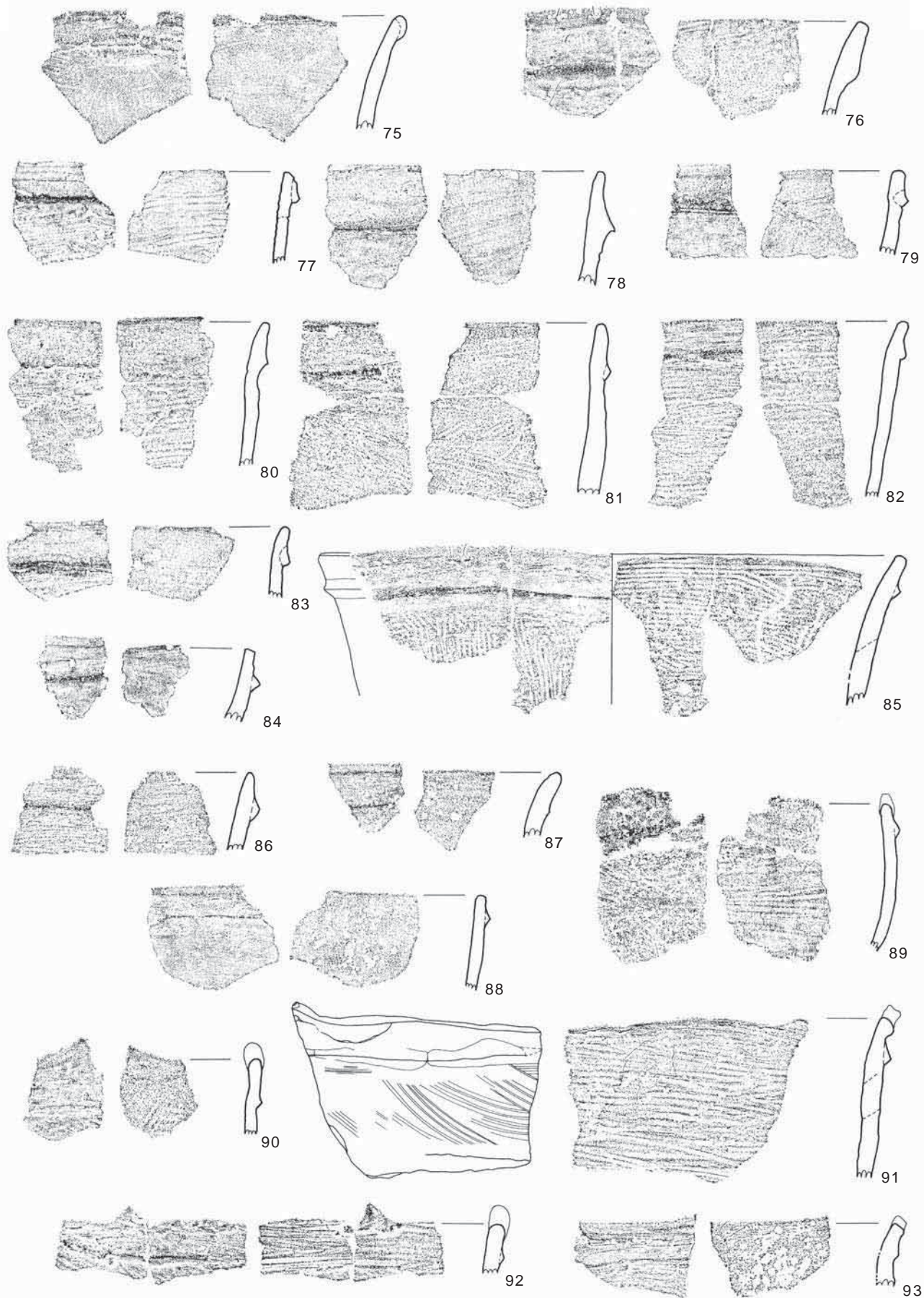
底部を分類した。111・112は張り出すような底部をもち、113～115は張り出しが弱い。114は底部に網代痕をもつ。116～118はすばまるような底部をもつ。119は底部端部のみ張り出す。なお、111・113・115・117・118は、同一の場所で破片となっており、円盤状の底部との繋目であった可能性が高い。

類(第33図120～127)

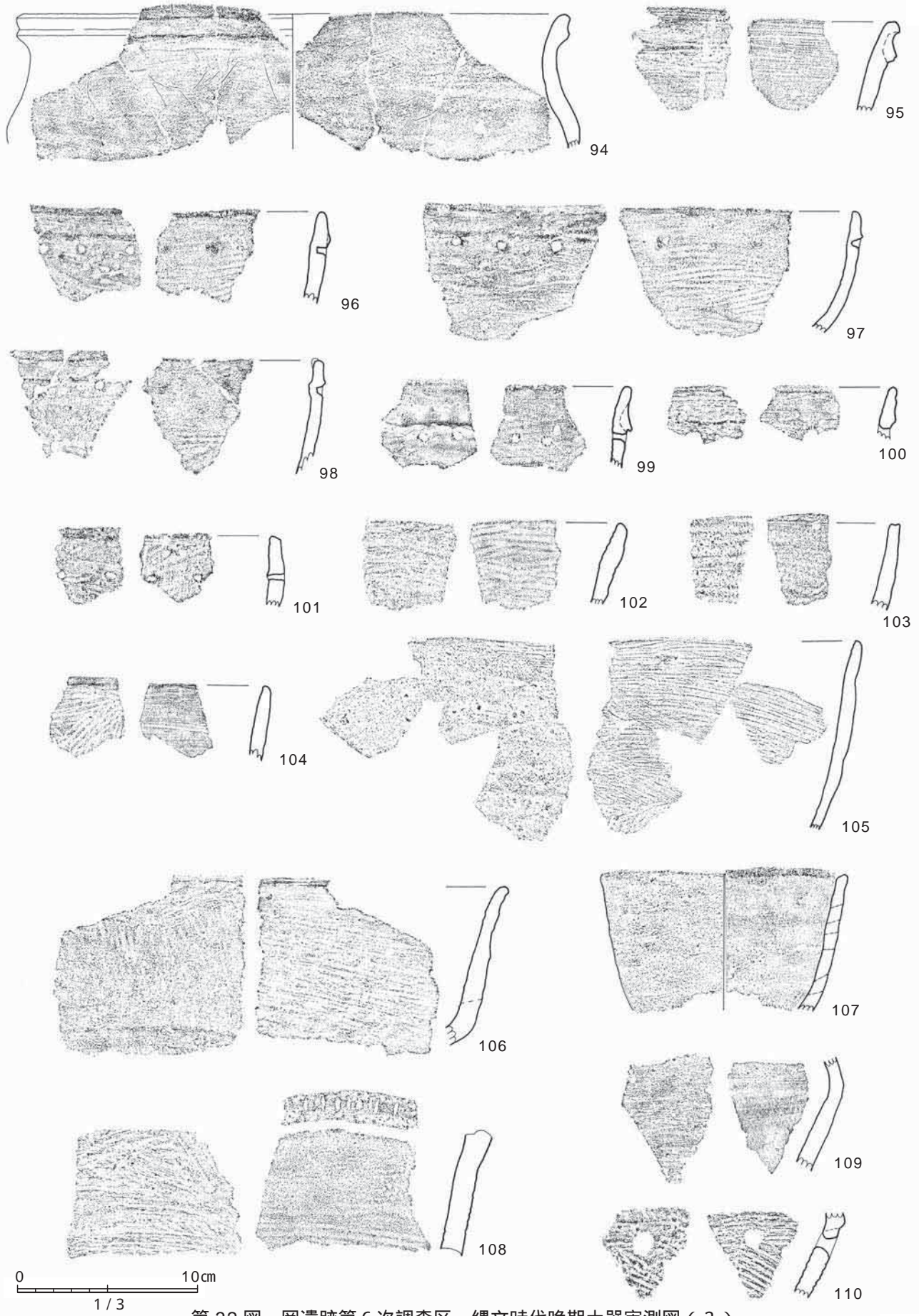
外面粗製で、内面をミガキ、またはそれに近いナデにより丁寧に調整されたものを分類した。

a類(第33図120～125)

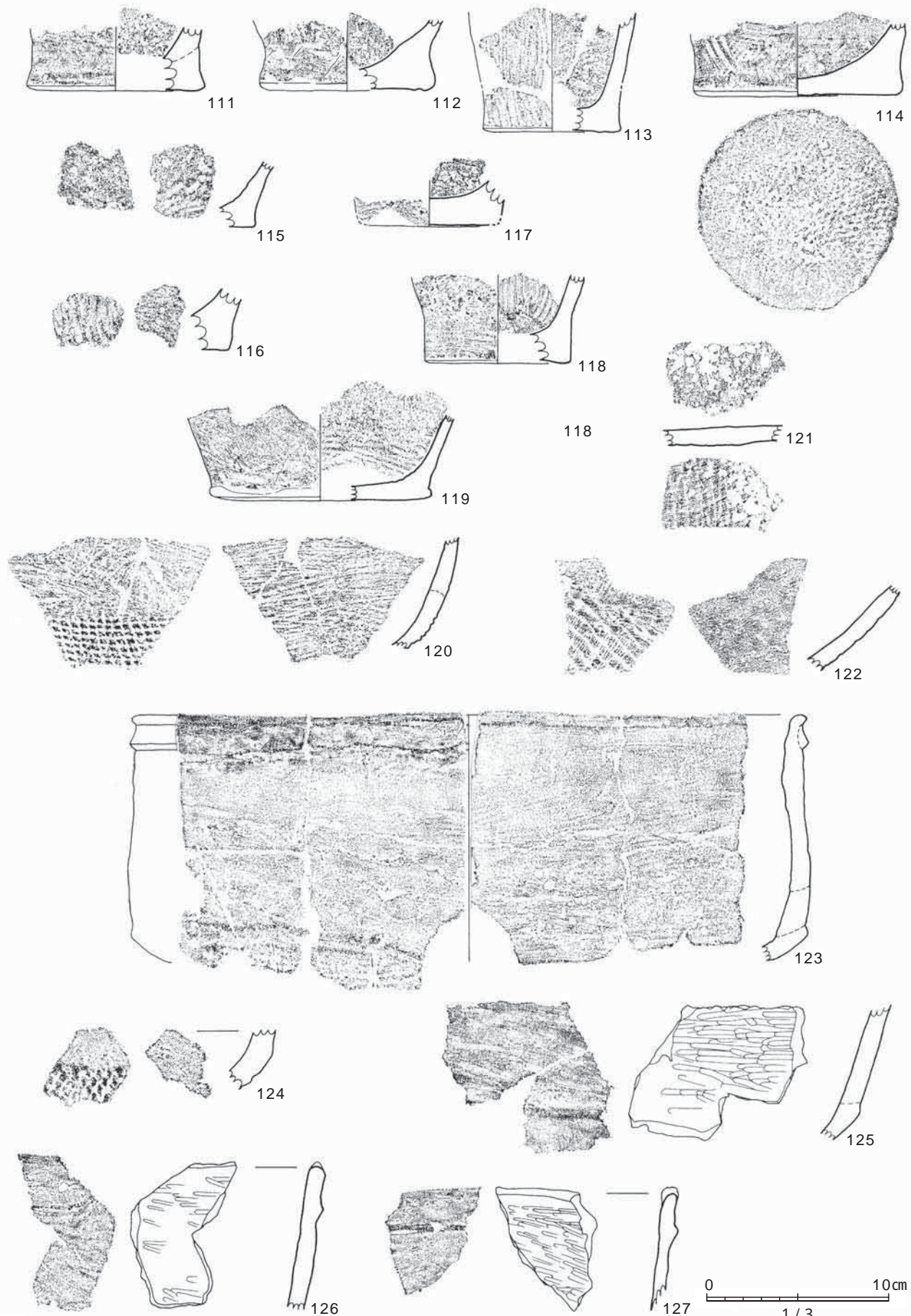
組織痕土器を分類した。ただし、内面の風化が著しく、調整が明らかでないものも多く、ミガキなどを明確に施しているものはない。しかしながら、本来は組織痕があった可能性のある土器などに丁寧なミガキが残されているものがあることから、ここでは便宜上、



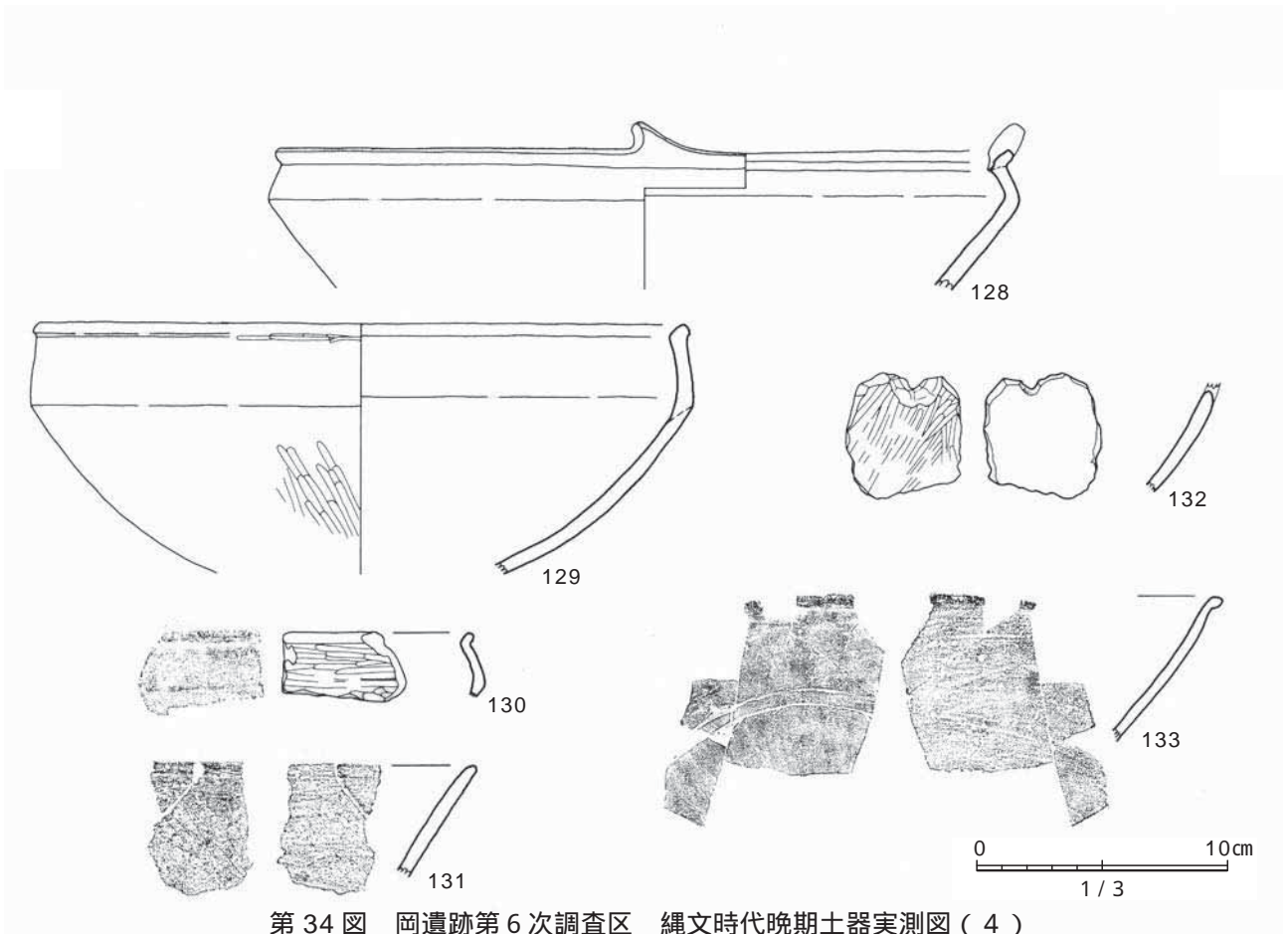
第31図 岡遺跡第6次調査区 縄文時代晩期土器実測図(1)



第32図 岡遺跡第6次調査区 縄文時代晩期土器実測図(2)



第33図 岡遺跡第6次調査区 縄文時代晩期土器実測図(3)



第34図 岡遺跡第6次調査区 縄文時代晩期土器実測図(4)

類とする。120・121は、編布圧痕をもつ。122～124はモジリ網痕をもつもので、組織痕から胴部にかけての屈曲を経て口縁にいたるもの。123は底部から胴部への屈曲部まで組織痕をもつ。組織痕端部から約4cm上まで、粘土の剥離が激しい。b 2類と同様な突帯をもつ。126は組織痕をもたないが、124と同様な器形で、底部～胴部への屈曲部の粘土の剥離の仕方が同一であるなど、共通性を多く認められることから、本分類に含めた。組織痕はナデ消している可能性がある。

b類(第33図126、127)

鱗をもつ黒色土器で、外面はナデて、内面のみ磨いており、b-3類と同様な突帯をもつ。126は左向きの鱗をもち、突帯は右上がり、127は右向きの鱗をもつ。

類 精製土器(第34図128～133)

精製の浅鉢である。128は右側へと傾斜する鱗を有し、口縁部内面に浅い凹線が巡る。風化により調整は不明。131・132は黒色磨研土器である。131は両面穿孔が施されている。133は三叉文をもつ。

5-4. 包含層出土の石器

層は二次堆積のため、縄文時代早期、または弥生時代以降のものも混じっている可能性もある。

石鏃(第35図134～143)

石鏃は12点中10点図示した。135～141は平基式である。136は素材面を多く残し、側辺は直線的であるものの、基部両端は内にすぼまる。136は素材を剥離した時の歪みを残し、製品化される。141・142は基部が片方のみ突き出る不定形な形。143は基部に対して全長が長い。基部は直線的で、細かい剥離による調整は片面にのみ見られ、未整品の可能性もある。

楔形石器(第36図144～145)

両極打法による石器を分類した。144は左右両面に裁断面がある。145は上面、左側面に裁断面があり、右側面は剥離が施され、尖っている。

スクレイパー(第36図146)

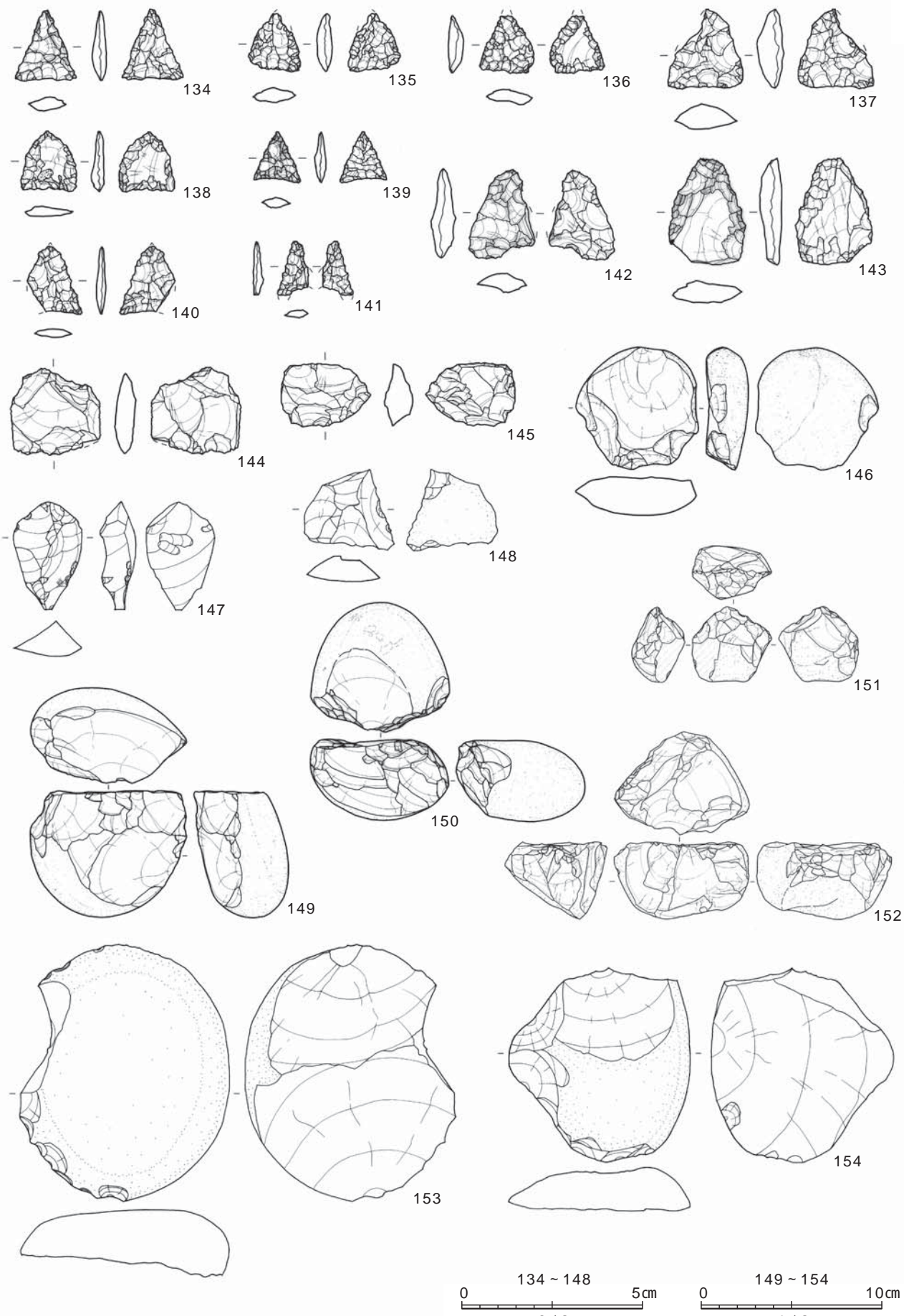
スクレイパーは1点出土している。146はホルンフェルス製で、剥離は明瞭でないが、剥ぎ取った素材面をそのまま残し、刃部は急角度につけられ、搔器と思われる。

剥片(第35図147、148)

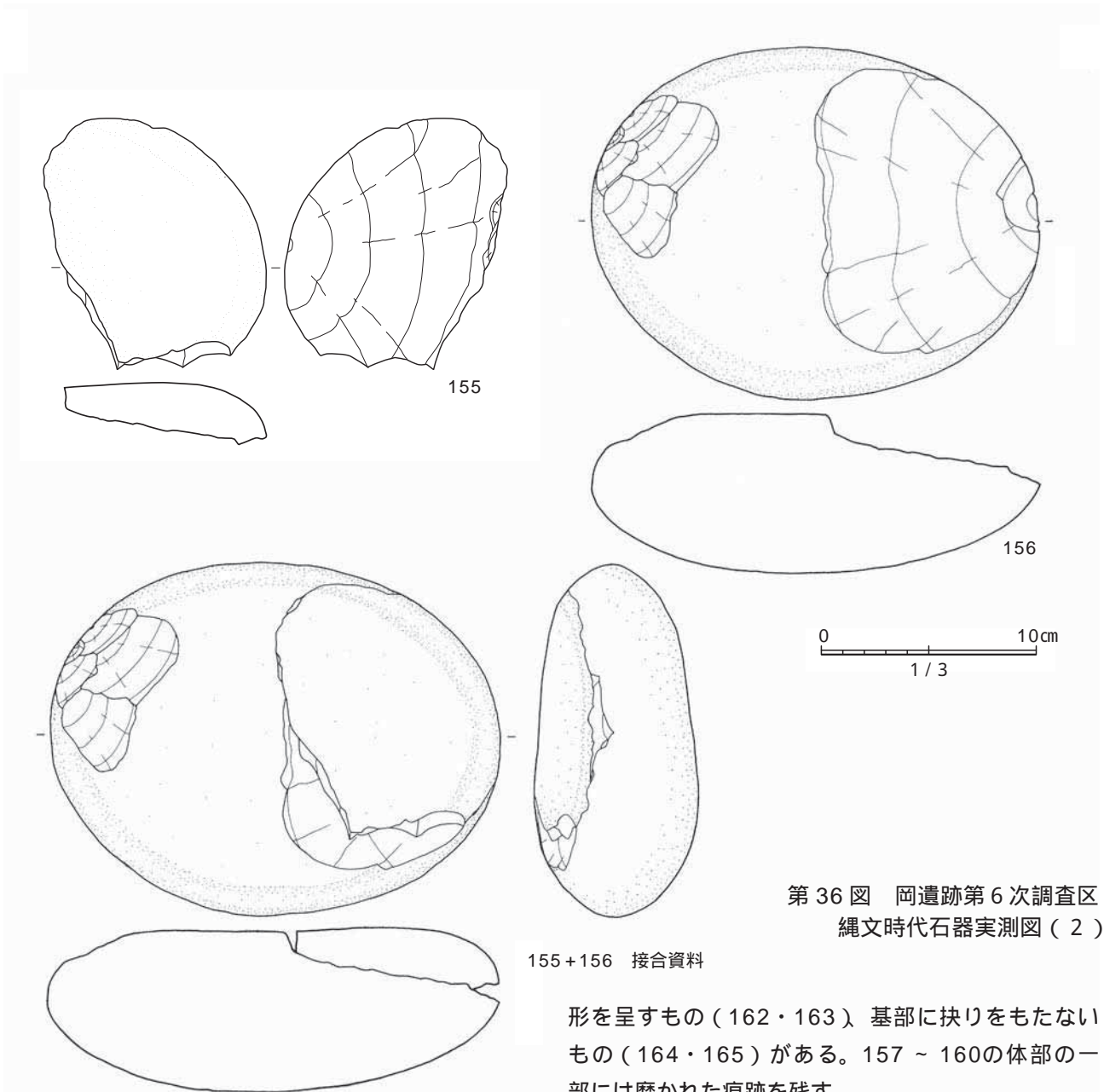
剥片は、2点図示した。148は西北九州産と思われる黒曜石である。

石核(第37図149～152)

150は打面転移が顕著で、基本的に不定形剥片を剥



第 35 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代石器実測図 (1)



第36図 岡遺跡第6次調査区
縄文時代石器実測図(2)

155+156 接合資料

離している。152は尾鈴山溶結凝灰岩で、打面転移を繰り返して、比較的大きな不定形剥片を剥離する。153はホルンフェルス製で、比較的大きな不定形剥片を剥離し、一部、細かい剥離がみられる。

粗製剥片および石核(第38図153~156)

・ 層出土の蛤形粗製剥片と区別し、粗製剥片として報告する。153~154は二次加工製品、155の剥片と156の石核は接合資料である。長軸側の頂部を打面とし、剥片を剥ぎ取っている。

打製石斧(第37図157~165)

打製石斧は、挟りもち、最大幅が挟り部端にあるもの(157~161)と、基部より刃部幅が長く、撥

形を呈すもの(162・163)、基部に挟りもちをもたないもの(164・165)がある。157~160の体部の一部には磨かれた痕跡を残す。

磨製石斧(第37図166~167)

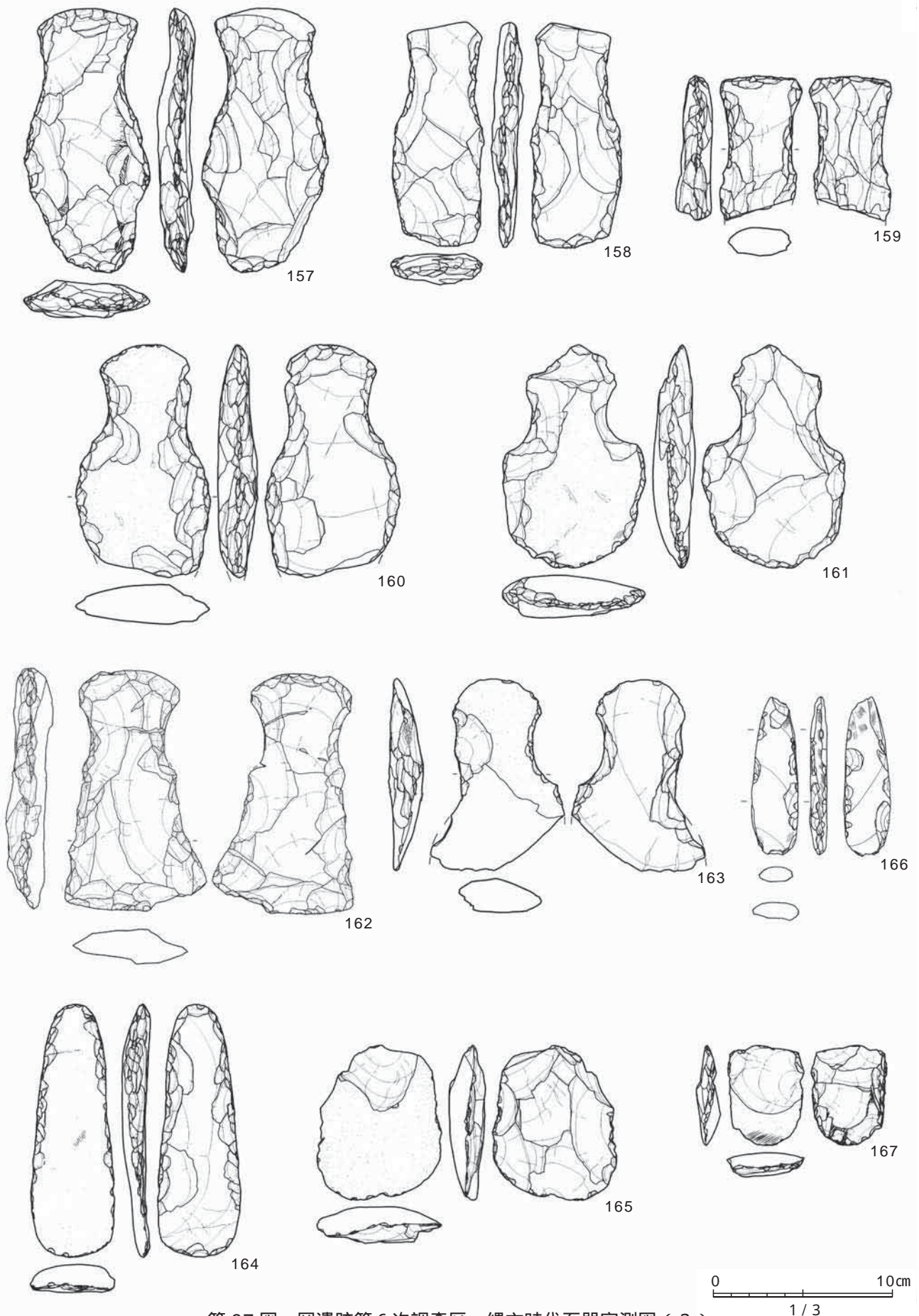
2点出土している。166は鑿状石器ともいえる、側縁まで丁寧に面取りがおこなわれる。167は刃部片面の礫面を磨き、そのまま残す。

円盤状石器(第38図168・169)

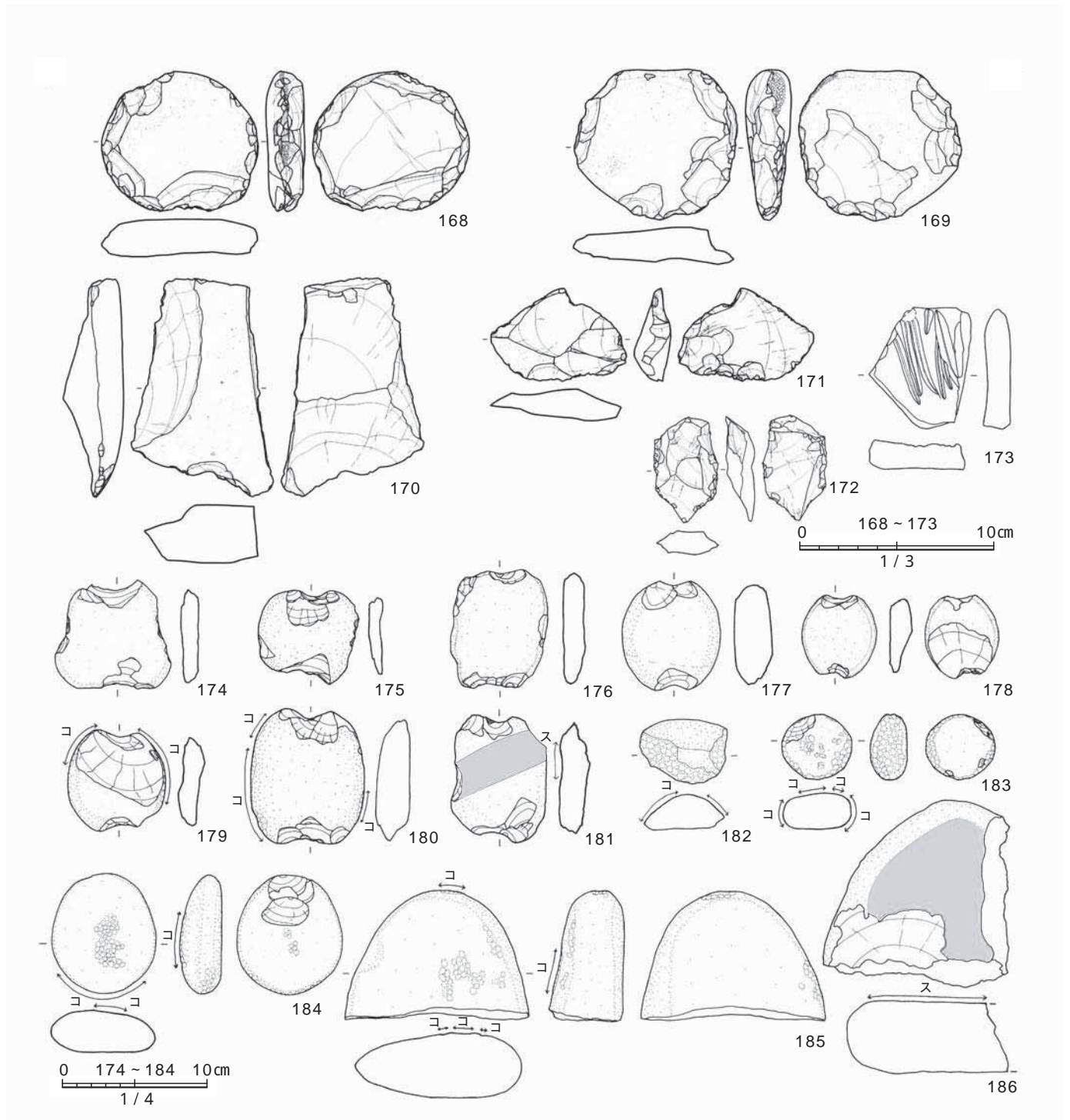
2点が出土。168は比較的丁寧に、169は粗く成形される。どちらも側縁部に敲打痕をもつ。

二次加工剥片(第38図170~172)

173は尾鈴山溶結凝灰岩の比較的大きく礫面を残した剥片を利用し、先の尖った先端部に二次加工を施す。174は横長剥片の縁部に二次加工を施す。175は縦長剥片の側縁部に微細剥離を施したものである。



第 37 図 岡遺跡第 6 次調査区 縄文時代石器実測図 (3)



第38図 岡遺跡第6次調査区 縄文時代石器実測図(4)

砥石(第38図173)

砥石は1点出土している。

石錘(第38図174～181)

短軸に抉りを入れるもの(177～178)、長軸に抉りを入れるもの(179～184)がある。182と183は側面に敲打痕が巡り、181は、擦れ痕が抉り間を斜めに入る。

敲石(第38図182～184)

3点出土。183はよく使い込まれたマルチツールといえるもので、敲打痕がほぼ全周にまわる。

凹石(第38図185)

敲打痕は全面ではなく、2点に集中している。

台石(第38図186)

片面は一面、擦面となっている。

第8表 岡遺跡第6次調査区 縄文時代晩期土器観察表

遺物番号	時期	器種	部位	出土層位	出土地点	外面調整	内面調整	法量			胎土	焼成	色調	備考
								口径	底径	器高				
55	晩期	深鉢	口縁-胴部	b	SC10	工具ナデ?、ナデ消し	ミガキ	37			4mm以下の灰褐、浅い黄橙、灰白、黒色光沢粒を含む	良好	橙色 (7.5YR6/6)	丁寧なつくり。
56	晩期	浅鉢	完形	b	SC10	粗いミガキナデ	貝殻条痕・ナデ、粗いミガキ	27.5	12.7	14.2	φ2mm以下の黒色光沢粒をわずかに、3mm以下の褐灰色鉱物、5mm以下の灰白色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	縁を2対もっている。突帯は全周したのちに左右均等で上面が凹凸縁に収められている。
57	晩期	深鉢	胴部	b	SC10	ミガキ	ミガキ				φ1mm程の黒色光沢粒、透明光沢粒、2mm程の灰白色粒を含む	良好	灰黄褐色 (10YR6/2)	黒色磨研土器。炭素の吸着が足りないのか、一部が黒色化するに留まり、全体的に暗褐色を呈す。
58	晩期	精製浅鉢	頸部	b	SC10	ミガキ	ミガキ				φ3mm以下の浅黄橙砂粒、φ2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明砂粒を少量含む	良好	暗灰 (N3/1)	最小幅2.5mmで非常に丁寧に作られている。
59	晩期	深鉢	口縁	b	SC10	工具ナデ	貝殻条痕・ナデ	(29.6)			φ2mm以下の透明砂粒、灰白色鉱物を多く含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	口縁がわずかな波状を呈している
60	晩期	深鉢	口縁	b	SC10	工具ナデ(横方向)	貝殻条痕(不定方向)				3mm以下の灰褐、灰白、黒色光沢粒を少し含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
61	晩期	浅鉢	胴部	b	SC10	工具ナデ・組織痕	ミガキ				5mm以下の灰白色を非常に多く含む、1mm程の透明光沢粒、黒色光沢粒を含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	1.5cm幅ほどの工具でナデている。
62	晩期	深鉢	底部	b	SC10	ナデ	ナデ	(10.4)			3mm以下の黒色、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒をまばらに含む	良好	橙色 (5YR7/6)	
73	晩期	深鉢	ほぼ完形	a	埋蔵	ナデ(縦織篋?)	貝殻条痕	29	9.45	30.8	3mm以下の灰白色、1mm以下の透明光沢粒、黒色光沢粒を含む	良好	明赤褐色 (5YR5/8)	ほぼ完形で出土。底部に圧痕あり。
74	晩期	精製浅鉢	胴部	a	埋蔵	ミガキ	ミガキ				1mm以下の、輝石、黒色光沢粒を含み、2mm程の透明光沢粒を含む	良好	褐色 (7.5YR5/1)	
75	晩期	深鉢	口縁-胴部	a	包含層	工具ナデ	ナデ				3mm以下の灰白色粒、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	口縁部を肥厚させたような突帯。
76	晩期	深鉢	口縁	a	包含層	工具ナデ	ナデ				φ2mm以下の灰白色粒、φ1mm程の透明光沢粒、黒色光沢粒を含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
77	晩期	深鉢	口縁	b	包含層	工具ナデ	貝殻条痕?				3mm以下の灰白色、にぶい黄褐色、灰褐色の砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	
78	晩期	深鉢	口縁	b	包含層	工具ナデ	工具ナデ				2.5mm以下の灰白色を多く、1mm以下の透明光沢粒、黒色光沢粒を少し含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	口縁部を肥厚させたような突帯。
79	晩期	深鉢	口縁	b	包含層	工具ナデ	工具ナデ				3mm以下の灰白色、灰黄褐色、灰褐色、浅黄褐色の砂粒を含む	良好	褐色 (7.5YR6/6)	突帯下に成形時の沈線あり。
80	晩期	深鉢	口縁-胴部	a	包含層	工具ナデ	工具ナデ、ナデ消し				3mm以下の橙色粒を少量含み、5mm以下の灰白色粒、3mm以下の褐灰色粒を多く、黒色光沢粒をわずかに含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	突帯下部をナデており著しく凹んでいる。
81	晩期	深鉢	口縁-胴部	b	包含層	工具ナデ	貝殻条痕、ナデ				2mm以下の灰黄、灰白、灰褐、淡黄色、黒色光沢粒を含む	良好	明黄褐色 (10YR7/6)	突帯は比較的丁寧なつくりで、断面形である。
82	晩期	深鉢	口縁-胴部	b	包含層	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕				2.5mmのにぶい黄橙、灰黄、灰白色鉱物、1mmほどの黒色光沢粒を多量に含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/6)	黒色光沢粒を多量に含むのが特徴的である。比較的薄いつくりである。
83	晩期	深鉢	口縁	a	包含層	工具ナデ	ナデ				3mm以下の灰白色、灰黄褐色、灰褐色、浅黄褐色の砂粒を含む	良好	褐色 (7.5YR6/6)	
84	晩期	深鉢	口縁	a	包含層	ナデ	条痕後にナデ				2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の灰白色砂粒を少し含む	良好	褐色 (5YR6/6)	非常に丁寧に作られた突帯である。
85	晩期	深鉢	口縁	a	包含層	貝殻条痕(縦) 工具ナデ(横)	貝殻条痕	(31.5cm)			4mm以下の橙、褐色砂粒をまばらに、3mm以下の灰白、2mm以下の黒色光沢粒を多量に含む	良好	褐色 (5YR7/6)	
86	晩期	深鉢	口縁	a	包含層	工具ナデ	工具ナデ				2mm以下の浅黄、灰黄褐、黒色光沢粒を含む	良好	にぶい黄色 (2.5Y6/4)	突帯は断面半円形に近いが、貼付けてつくられている。
87	晩期	深鉢	口縁	b	包含層	ナデ	ナデ				3mm以下の明赤褐色、褐灰色砂粒、1mm以下の灰白色、3mm以下の黒色光沢粒を多く含む	良好	褐色 (5YR7/6)	突帯は極めて小さい。
88	晩期	深鉢	口縁-胴部	不明	包含層	工具ナデ・ナデ消し	ナデ				φ2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明砂粒、φ3mm以下の灰白色鉱物をまばらに含む	良好	明黄褐色 (10YR6/6)	突帯が剥がれた部位に条痕がみられることから、調整まで終えて最終段階で突帯を貼付けたことがわかる。
89	晩期	鉢	口縁-胴部	b	包含層	工具ナデ	貝殻条痕				φ2mm以下の褐灰色鉱物を多く含む、φ1mm以下の透明砂粒、黒色光沢粒をわずかに含む	良好	明黄褐色 (10YR7/6)	波状口縁となる。突帯は下部を工具(貝?)で面取りしている。
90	晩期	浅鉢	口縁	a	包含層	ナデ	ナデ				2mm以下の角閃石をまばらに、φ2mm以下の透明砂粒、3mm以下の灰白、黒褐色鉱物を多く含む	良好	明褐色 (7.5YR5/6)	縁付きの突帯。突帯は面取りでつくられているが、比較的粗い。
91	晩期	浅鉢	口縁-胴部	b	包含層	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕				4mm以下のにぶい黄褐色砂粒をわずかに、3mm以下の灰白色砂粒、2mm以下の黒色光沢粒を多く含む	良好	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	およそ6.5cmほどの単位で粘土紐をつくり、貼付けている。
92	晩期	浅鉢	口縁	a	包含層	ナデ	貝殻条痕				2mm以下の灰黄、灰白色、にぶい黄褐色、灰褐色、黒色光沢粒を含む	良好	褐色 (7.5YR6/4)	
93	晩期	深鉢	口縁	a	包含層	工具ナデ	工具ナデ				5mm以下の灰白色を多く、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	突帯の上と下を工具により、ナデて成形している。突帯部は貼付けている。
94	晩期	深鉢	口縁-胴部	a	包含層	工具ナデ	工具ナデ				1mm程の透明光沢粒、黒色光沢粒、5mm以下の灰褐色、灰白色を多く含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	
95	晩期	深鉢	口縁	a	包含層	工具ナデ	貝殻条痕				3mm以下の黒褐、灰黄、灰白、にぶい褐色、黒色光沢粒をまばらに含む	良好	明黄褐色 (10YR6/6)	突帯は断面半円形に近く、肥厚させて、上部をナデてつくります。
96	晩期	浅鉢	口縁	b	包含層	工具ナデ?	横方向の貝殻条痕・ナデ消し				φ1-2mmの黒色光沢粒、φ1-2mmの透明砂粒をわずかに含む、φ1-3mm以下の灰白色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	外側から焼成前穿孔している。3つの孔列の内、真ん中のは穿孔が深く裏面が膨らんでいる。口縁はわずかに波うち、縁状を呈すと思われる。孔は直径5mmほどの長楕円形を呈すが、最短幅は3mmである。孔の間隔は1.6-2.2cmである。
97	晩期	浅鉢	口縁	a	包含層	不定方向の工具ナデ	横方向の貝殻条痕・ナデ消し				φ1-2mmの黒色光沢粒、透明砂粒、φ1-2mm以下の灰白色砂粒をまばらに、φ2-5mm以下の灰白色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	突帯を貼付けた後、外側から穿孔している。穿孔は概して深く、3つの孔の内1つはわずかに貫通している。しかしながら、これは意図的ではない。孔は径4mmほどの円形で、わずかに左斜め方向から穿孔してある。先端になるにつれわずかに窄まる小棒状工具を使用している。孔の間隔2-2.5cm
98	晩期	浅鉢	口縁	b	包含層	工具ナデ?	横方向の貝殻条痕・ナデ消し				φ1-2mmの黒色光沢粒、φ1-2mmの透明砂粒をわずかに含む、φ1-2mm以下の赤褐色鉱物をわずかに含む	良好	明黄褐色 (10YR6/6)	外側から焼成前穿孔している。孔は径4mmの円形を呈し、最短幅は3mmである。本孔列土器文だけ、色調と穿孔方向が違う。
99	晩期	浅鉢	口縁	a	包含層	横ナデ	横方向の貝殻条痕・ナデ消し				φ1-2mmの黒色光沢粒、φ1-2mmの透明砂粒をわずかに含む、φ1-2mm以下の灰白色鉱物をわずかに含む	良好	褐色 (7.5YR7/6)	内側から焼成前穿孔しており、貫通している。孔は径4mmほどの円形であるが、最短幅は2.5mmである。孔の間隔1.4cmである。本孔列土器文だけ、色調と穿孔方向が違う。
100	晩期	浅鉢	口縁	a	包含層	工具ナデ?	ナデ				φ1mm程の黒色光沢粒をわずかに含む、φ1mm以下の透明砂粒、φ1-2mm程の灰白色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	両面から焼成前穿孔している。孔は径9mmほどの円形を呈す。
101	晩期	浅鉢	口縁	b	包含層	工具ナデ?	不定方向の貝殻条痕・ナデ消し				φ1mm程の黒色光沢粒をわずかに含む、φ1-2mm以下の透明砂粒、灰白色鉱物をわずかに含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	外側から焼成前穿孔しており、貫通している。孔は径4mmほどの円形を呈すが、最短幅は2mmであり、穿孔は径2mm程の棒状工具を使用したものと考えられる。最短幅孔の間隔は2.2cmである。
102	晩期	深鉢	口縁		包含層	貝殻条痕	貝殻条痕				2mm以下の灰黄、にぶい黄、灰褐、にぶい黄褐色砂粒、黒色光沢粒を含む	良好	褐色 (5YR6/6)	
103	晩期	鉢	口縁	a	包含層	工具ナデ?	ナデ				2mm以下の灰黄、にぶい黄褐色、灰白、黄褐色の砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	微妙な幅広縁が3条程巡る。
104	晩期	鉢	口縁	a	包含層	貝殻条痕(不定方向)	工具ナデ(横方向)				1mm以下の褐灰、にぶい黄橙を少し含む	良好	褐色 (10YR4/1)	胎土および、調整方法も、ほかのものど違う。
105	晩期	深鉢	口縁	b	包含層	工具ナデ(右から左下へ)	貝殻条痕				φ1mmほどの透明砂粒をまばらに、φ1mm-4mmほどの灰白色鉱物を多く、φ1mmほどの赤褐色鉱物をわずかに含む	良好	明黄褐色 (10YR6/6)	巻目による調整は胴部が右下から左上へ、その後、口縁付近を横方向へ施す。
106	晩期	浅鉢	口縁-底部付近	a	包含層	貝殻条痕?・工具ナデ	貝殻条痕				φ2mm以下の黒色光沢粒をまばらに、φ2mm以下の透明砂粒、3mm以下の赤褐色鉱物、5mm以下の灰白色鉱物を多く含む	良好	黄褐色 (10YR5/6)	縦方向(右下から左上へ)に貝殻条痕を施したのち、横位に工具ナデを施す。
107	晩期	鉢	口縁	a	包含層	工具ナデ(左下から右上へ)	工具ナデ(左下から右上へ)	(13.2)			φ2mm以下の黒色光沢粒をまばらに、φ2mm以下の透明砂粒、4mm以下の灰白色鉱物を多く含む	良好	黄褐色 (10YR5/6)	内傾接合の様子仔細に観察できる。胴部-口縁部へかけての煤の付着が著しい。

108	晩期	深鉢	胴部	a	包含層	工具ナデ	貝殻条痕				3mm以下の浅黄、淡黄、灰黄褐色砂粒、黒色光沢粒を含む	良好	明黄褐色 (10YR6/6)	接合のための刻み目と思われる刺突がみられる。
109	晩期	深鉢	底部	b	包含層	工具ナデ(横方向)	ナデ				2mm以下の褐灰、灰白色、0.1mm以下の明赤褐色、黒色光沢粒を少し含む	良好	明黄褐 (10YR7/6)	
110	晩期	深鉢	口縁	a	包含層	斜方向の貝殻条痕	横方向の工具ナデ・斜方向の貝殻条痕				0.1 - 2mmの黒色光沢粒、0.1 - 3mm以下の灰白色砂粒をまばらに含み、0.1 - 2mmの透明砂粒を多く含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	補修孔あり。
111	晩期	深鉢	底部	a	包含層	工具ナデ	不明	(9.8)			3mm以下の明褐、褐灰、1mm以下の透明光沢粒をまばらに、3mm以下の灰白色粒を多く含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	
112	晩期	深鉢	底部	b	包含層	貝殻条痕・工具ナデ	ナデ	(9.4)			5mm以下の明赤褐色をまばらに、8mm以下の灰白、6mm以下の灰、2mm以下の黒色光沢粒を多く含む	良好	褐色 (7.5YR6/6)	
113	晩期	深鉢	底部付近 - 底部	a	包含層	貝殻条痕(縦)	貝殻条痕	(7.6)			3mm以下の灰白色、2mm以下の褐灰色粒をわずかに、2mm以下の黒色光沢粒を多く含む	良好	褐色 (5YR6/6)	内外面ともに貝殻条痕
114	晩期	深鉢	底部	b	包含層	貝殻条痕・ナデ消し	貝殻条痕	10.9			3mm以下の灰白、褐灰色粒、透明光沢粒をわずかに、2mm以下の黒色光沢粒を多く含む	良好	褐色 (7.5YR7/6)	底部に圧痕(網代)
115	晩期	深鉢	底部	a	包含層	ナデ	貝殻条痕				1mm以下の透明光沢粒を少し、4mm以下の灰白、褐灰、黒色光沢粒を多く含む	良好	褐色 (5YR6/6)	
116	晩期	深鉢	底部	a	包含層	工具ナデ	工具ナデ	(9.8)			2mm以下の黄灰、灰白、黒色光沢粒を少量含む	良好	褐色 (7.5YR6/6)	
117	晩期	深鉢	底部		包含層	貝殻条痕	貝殻条痕				2mm以下の灰白、黒色光沢粒を少量含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/6)	
118	晩期	深鉢	底部	a	包含層	貝殻条痕・工具ナデ		(8.0)			3mm以下の明赤褐色、灰白、2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む	良好	褐色 (5YR6/6)	
119	晩期	深鉢	底部		包含層	工具ナデ・貝殻条痕	貝殻条痕	(11.9)			2mm以下の灰白、石褐色をまばらに、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
120	晩期	浅鉢	底部 - 胴部	a	包含層	モジリ網痕・工具ナデ	工具ナデ				2mm以下の浅黄橙、透明光沢粒、黒色光沢粒を多く含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
121	晩期	浅鉢	底部付近	a	包含層	編布痕	風化				3mm以下の浅黄橙、褐灰、2mm以下の黒色光沢粒を含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
122	晩期	浅鉢	胴部		包含層	編布痕	工具ナデ?				3mm以下のにぶい黄橙、2.5mm以下の灰白、褐灰、黒色光沢粒、2mm以下の透明光沢粒を含む	良好	浅黄褐色 (10YR8/4)	
123	晩期	浅鉢	口縁 - 底部付近	a	包含層	工具ナデ?、ナデ消し	工具ナデ?、ナデ消し	(35.0)			2mm以下の灰白色、透明光沢砂粒、黒色光沢粒をまばらに含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	底部にのみ組織痕がついている。あまり明瞭ではないが、組織痕より上位にも輪積痕がある。
124	晩期	浅鉢	底部付近		表土	モジリ網痕	風化				3mm以下の浅黄橙、褐灰、2mm以下の黒色光沢粒を含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
125	晩期	浅鉢	胴部 - 底部	b	包含層	工具ナデ(横方向)・ナデ消し	丁寧なミガキ				3mm以下の褐色粒、2mm以下の灰白、褐灰色粒をまばらに含み、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む	良好	にぶい橙 (7.5YR6/4)	
126	晩期	浅鉢	口縁	a	包含層	条痕、ナデ消し	ミガキ				3mm以下の黒色光沢粒黒褐、灰白、灰黄、にぶい褐色	良好	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	突帯は胴部付近で上方へ曲がる。丁寧につくられているが、突帯の下部は、成形により、薄くなっている。
127	晩期	鉢	口縁		包含層	ナデ	ミガキ				3mm以下の黒色光沢粒、灰白、黄褐、黄灰、黒褐色鉱物をまばらに含む	良好	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	突帯は断面形で、丁寧なつくりである。口唇部から、内面にかけて丁寧に磨かれている。
128	晩期	精製浅鉢	口縁 - 胴部	a	包含層	風化	風化	(29.5)			0.1 - 3mm以下の透明砂粒、0.1mm以下の金雲母を多く含む	良好	黄褐色 (10YR8/6)	幅は若干厚く、作りは丁寧。
129	晩期	精製浅鉢	口縁 - 底部付近	a	包含層	ミガキ	風化	(25.6)			0.1mm以下の黒色光沢粒をわずかに含み、0.2mm以下の灰白鉱物、名赤褐色、透明砂粒をまばらに含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	ミガキは全面に施されているわけではない。
130	晩期	精製浅鉢	口縁 - 胴部	a	包含層	ミガキ	ミガキ				0.2mm以下の明褐色、0.1mm以下の黒褐色、透明砂粒を少し含む	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	工具?でつけられたキズ?が多く見られる。内面は丁寧にミガキされている。
131	晩期	精製浅鉢	口縁	a	包含層	横ナデ・斜方向へのミガキ	横方向へのミガキ				0.1 - 2mmの透明砂粒、0.1 - 2mmの灰白色砂粒を多く含む	良好	褐色 (10YR4/1)	胎土に角閃石を含まず、在地のものではないと思われる。
132	晩期	精製浅鉢	胴部		包含層	斜方向のミガキ	風化				0.1mm以下の透明砂粒、0.2mm以下の淡黄褐色を少量含む	良好	黒褐色 (2.5YR3/1)	補修孔?あり。
133	晩期	精製浅鉢	口縁 - 胴部	a	包含層	ミガキ	ミガキ				0.1mm以下の黒色光沢粒をわずかに、1mm以下の極小透明砂粒を多く含み、1mm程度の灰白色鉱物をまばらに含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	口縁から胴部にかけてのわずかな屈曲部の下に幅1mmほどの刻線を刻んでいる。全体的に丁寧なつくり。

第9表 岡遺跡第6次調査区 縄文時代・近世石器計測表(長さ・幅・厚さcm・重量g)

遺物番号	器種	石材	出土層位	長さ	幅	厚さ	重量	遺物番号	器種	石材	出土層位	長さ	幅	厚さ	重量
63	石鐘	砂岩	b	6.9	7.2	2.2	186.5	157	石斧	頁岩	a	14.8	7.1	2.1	221.0
64	石鐘	尾鈴山溶結凝灰岩	b	5.7	7.2	1.7	110.4	158	石斧	ホルンフェルス	a	12.6	5.1	1.8	121.2
65	石鐘	砂岩	b	8.6	9.0	2.9	283.4	159	石斧	ホルンフェルス	a	8.1	4.6	2.0	86.2
66	石鐘	尾鈴山溶結凝灰岩	b	8.9	10.2	2.7	334.9	160	石斧	砂岩	a	12.9	7.6	2.2	239.0
67	石鐘	頁岩	b	6.5	8.0	2.0	160.8	161	石斧	砂岩	a	12.4	8.0	2.4	227.5
68	石鐘	砂岩	b	8.8	11.7	3.6	523.6	162	石斧	頁岩	a	13.2	8.0	2.3	229.6
69	石鐘	尾鈴山溶結凝灰岩	b	9.6	8.2	2.0	230.8	163	石斧	砂岩	a	10.8	7.5	1.9	116.5
70	石鐘	砂岩	b	5.9	7.5	2.0	126.2	164	石斧	砂岩	a	14.1	4.7	1.6	111.3
71	台石	尾鈴山溶結凝灰岩	b	23.8	20.7	3.3	2700.0	165	石斧	ホルンフェルス		8.7	7.0	2.0	128.1
72	石斧	砂岩	b	10.6	8.4	1.5	115.6	166	石斧	頁岩	a	8.7	2.6	1.0	31.4
134	石鏃	チャート	b	1.9	1.2	0.4	0.8	167	石斧	珪質頁岩	b	5.6	4.3	1.4	29.2
135	石鏃	チャート	a	1.6	1.5	0.5	0.8	168	円盤状石器	頁岩		7.2	8.1	2.0	170.1
136	石鏃	チャート	a	1.6	1.5	0.4	0.8	169	円盤状石器	砂岩	b	7.8	8.4	2.4	184.1
137	石鏃	頁岩		2.2	2.1	0.7	2.7	170	2次加工剥片	尾鈴山溶結凝灰岩	b	11.2	7.3	3.1	233.0
138	石鏃	頁岩	風倒木	1.7	1.6	0.4	0.8	171	2次加工剥片	珪質頁岩	a	4.8	7.0	1.9	49.8
139	石鏃	チャート	b	1.4	1.3	0.3	0.3	172	2次加工剥片	珪質頁岩		5.4	3.3	1.5	23.7
140	石鏃	チャート		1.9	1.5	0.3	0.6	173	砥石	砂岩	a	6.7	5.2	1.5	54.0
141	石鏃	砂岩	a	7.8	9.3	2.3	260.3	174	石鏃	頁岩	a	8.0	7.5	1.3	109.4
142	石鏃	姫島	b	2.5	1.8	0.7	1.9	175	石鏃	頁岩	a	6.9	5.3	1.0	58.6
143	石鏃	頁岩	a	3.0	2.1	0.6	3.6	176	石鏃	尾鈴山溶結凝灰岩	a	6.7	8.0	1.5	128.7
144	楔形石器	チャート	b	2.5	2.4	0.8	4.6	177	石鏃	砂岩	a	6.7	7.5	2.7	201.0
145	楔形石器	チャート	b	2.4	1.8	0.9	3.5	178	石鏃	頁岩		5.1	5.4	1.5	52.8
146	削器	ホルンフェルス	b	6.8	7.2	2.4	137.5	179	石鏃	砂岩	b	6.7	7.0	1.9	102.6
147	剥片	黒曜石	b	3.0	1.9	1.0	3.7	180	石鏃	砂岩	a	7.8	9.3	2.3	260.3
148	剥片	西北九州産黒曜石	a	2.2	2.5	0.7	3.1	181	石鏃	頁岩	a	6.5	8.8	2.3	162.7
149	石核	尾鈴山溶結凝灰岩		7.0	8.6	5.3	400.0	182	敲石	石英	a	4.5	5.5	2.4	62.2
150	石核	ホルンフェルス	b上	4.5	7.7	7.2	325.0	183	敲石	頁岩		4.5	4.8	2.5	83.6
151	石核	珪質頁岩	Tr1-2	4.2	4.4	3.0	54.0	184	敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	a	8.2	7.2	2.9	229.4
152	石核	珪質頁岩	b上	4.3	7.5	5.7	202.5	185	凹み石	尾鈴山溶結凝灰岩		8.6	11.4	4.5	697.9
153	粗製剥片	尾鈴	b	14.2	11.5	3.6	713.1	186	台石	尾鈴山溶結凝灰岩	a	12.8	12.7	5.1	1177.4
154	二次加工剥片	尾鈴山溶結凝灰岩	b	10.7	10.0	2.4	319.0	212	火打石	大田井産チャート		1.2	1.3	0.8	1.1
155	粗製剥片	尾鈴山溶結凝灰岩	a	11.8	10.4	2.9	363.9								
156	粗製剥片	尾鈴山溶結凝灰岩	a	16.3	20.8	7.4	3100.0								

第6節 その他の時代の遺構と遺物

6-1. 概要

a層では、弥生時代～古代末の遺物、層からは中世～近世の遺物が出土した。また、a層上面とb層上面で遺構が検出されている。a層出土の下限遺物から考慮して、a層上面が中世以降、b層上面が古代末の遺構面である可能性が高い。

6-2. 遺構

b層上面での検出遺構は、確実なものとして道状遺構1条、古代末以降の時期不明遺構として土坑3基、小穴12基、溝状遺構2条が検出された。

小穴（第39図）

調査区北西で多く検出された。検出面はb層であるが、検出した場所周辺はa層の削平が著しく、a層からの掘り込みの可能性があり、遺物の出土もないことから、時期は不明である。分布状況だけ示す。

土坑（第40図 SC11・SC12・SC13）

道状遺構の脇で検出された土坑で、調査区を延長した際に断面で検出されたため、半分を失っている。遺物の出土はなく、用途は不明である。SC11は床面が長楕円形となっている。

溝状遺構（第40図 SE1・SE2）

溝状遺構を2条検出した。どちらも、a層掘削中に検出しており、a層に掘り込まれたと考えられる。SE1は、両端に小礫が密集していた。

南端は、地形的に岩盤層が非常に近く、礫が散乱しており、確実に遺構に伴うとはいえないが、北端は人

為的な可能性が高い。SE2は層が削平により薄いこともあり、非常に浅い。なお、遺物は出土していない。道状遺構（第40図 SG1）

調査区の北東で北東から南西に向う幅1m程の硬化面が検出された。形状から道の跡と考えられる。図に示した範囲で硬化が顕著だが、南西に続くものと思われる。本遺構はb層上面で検出され、古代末のものである可能性が高い。

6-3. 弥生時代～古墳時代初頭の遺物（第41図188～197）

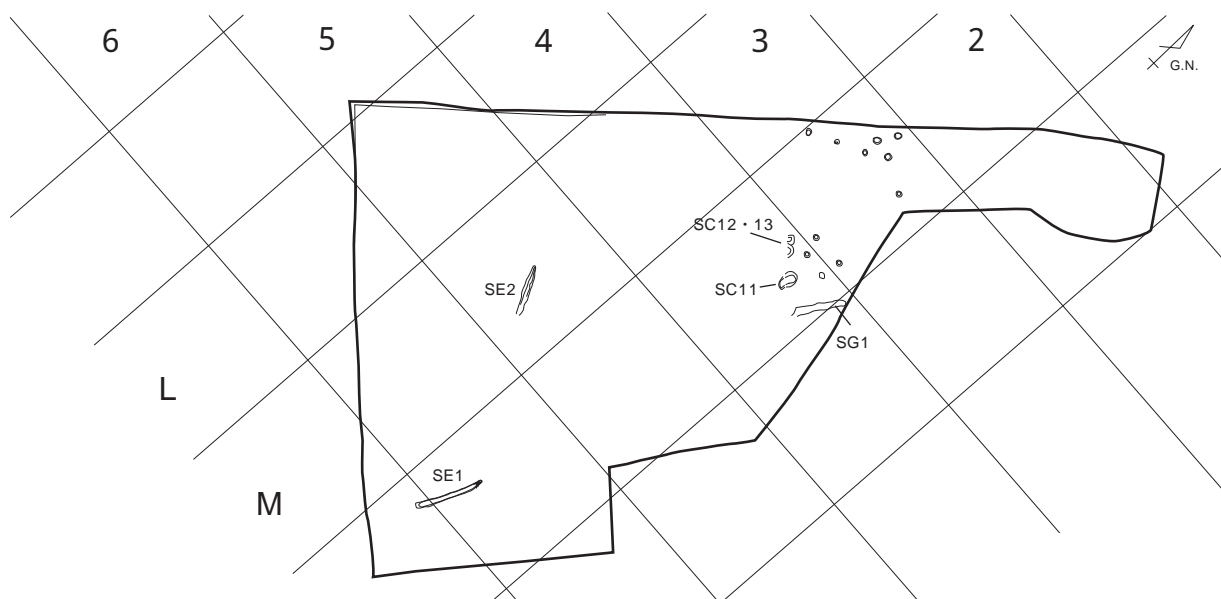
187・188は小型の甕で、188は風倒木痕から2片に割れた状態で出土した。188は、頸部に×印の刻目突帯を有し、胴部にはタタキ調整を施す。189～191は甕、192は鉢、193は（長頸）壺の口縁部である。195～197は平底の底部片である。

6-4. 古代～中世の遺物（第40図198～211）

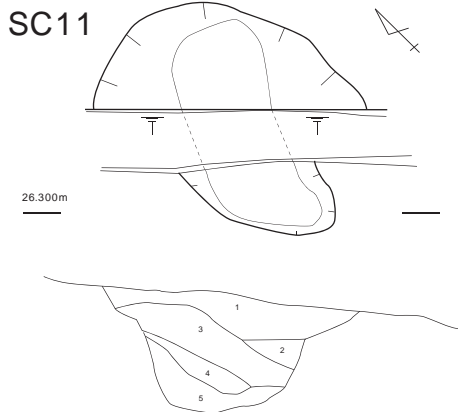
層から、須恵器甕（197～200）・蓋（200）布痕土器（202～204）土師器高台付椀（205・206）・坏（207）が出土している。197～199は甕で、198は内面に車輪文タタキが施される。200は自然釉と思われる釉が外面一面にかかる。202の布痕土器は幅が厚く、口縁部外面にも一部布痕がみられる。層では土錘（204）も出土した。層からは、土師器の小皿（208）・皿（209）・坏（210）、備前の甕（211）が出土している。

6-7. 近世の遺物（第41図212）

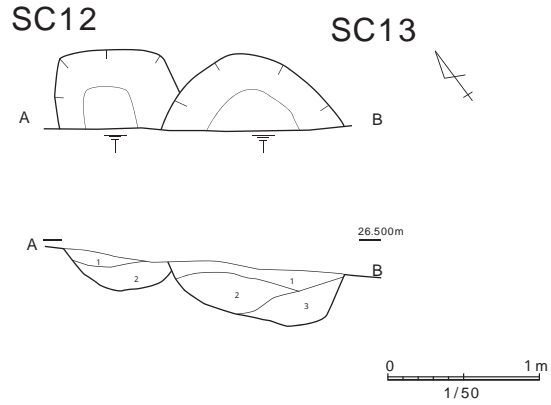
212は、徳島県大田井産チャートの火打石である。



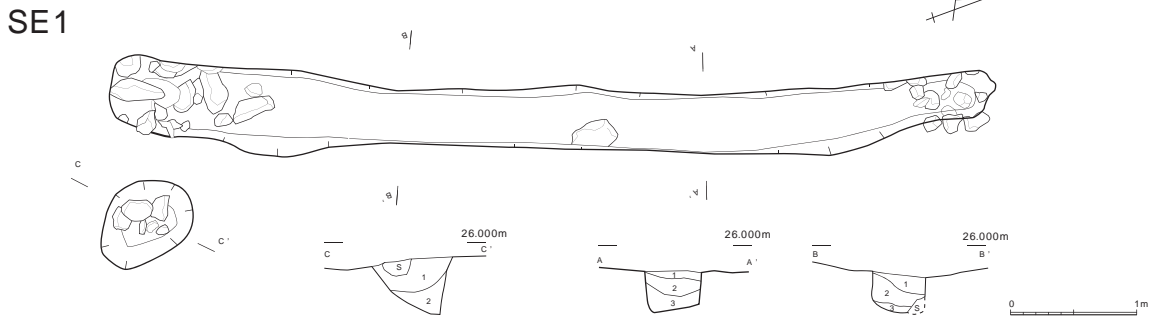
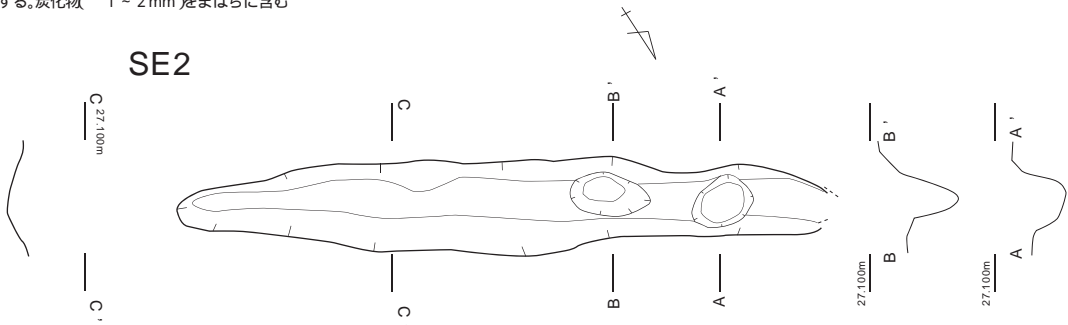
第39図 a・b層上面遺構分布図



- 1 褐色土(7.5YR4/3)粘性ややあり。しまりなし。小石(1cm)をわずかに含む。炭化物をわずかに含む。
- 2 明褐色土(7.5YR6/5)粘性ややあり。しまりなし。粘性はあるものの、全体的にバサバサとする。炭化物をわずかに含む。
- 3 にぶい褐色土(7.5YR4/5)粘性なし。しまりなし。全体的にしまりはないが、ブロック状に非常にしまった土が入る。炭化物(1~3mm)を多く含む。
- 4 褐色土(7.5YR6/4)粘性ややあり。しまりなし。
- 5 褐色土(7.5YR4/4)粘性、しまり共にややあり。上層の埋土と違いサラサラとする。炭化物(1~2mm)をまばらに含む。

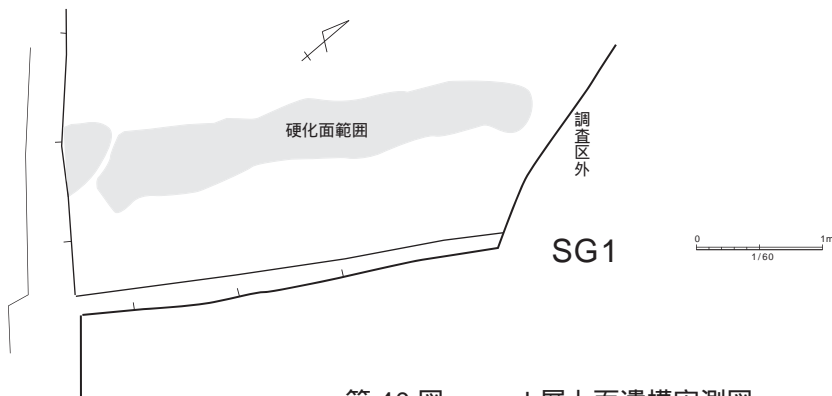


- 1 にぶい褐色土(7.5YR4/5)粘性ややあり。しまりなし。11号土坑の層と似ているが、こちらの方がしまる。わずかに炭化物を含む。
- 2 褐色土(7.5YR4/3)粘性、しまり共にあり。微小(1mm)の炭化物を含む。

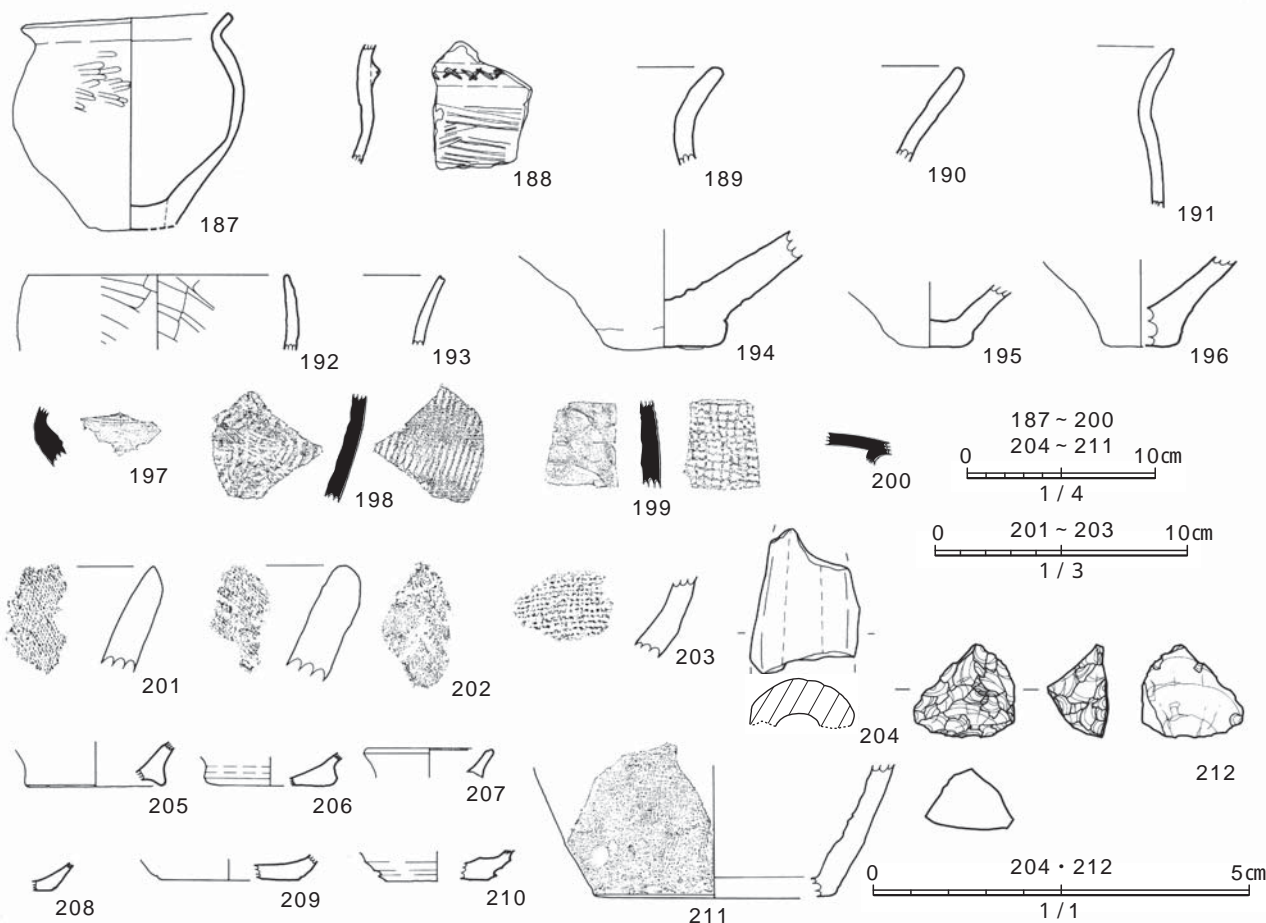


- 1 黒褐色土(7.5YR3/2)やや粘性あり。しまりなし。黒色粒子を含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/4)やや粘性あり。しまりなし。黒色粒子(1mm)を含み、アカホヤブロック(1cm)を含む。

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3)粘性、しまり共になし。白色・橙色の粒子(1mm)を含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/4)粘性はなし。しまりややある。黒色・橙色の粒子(1mm)を含み、赤色粒子を微量に含む。
- 3 褐色土(7.5YR4/6)やや粘性あり。しまりなし。アカホヤブロック(1cm)を含む。



第40図 a・b層上面遺構実測図



第41図 岡遺跡第6次調査区 弥生～中世遺物実測図

第10表 弥生時代～近世の土器・石器観察表

遺物番号	時期	種別	器種	部位	出土層位	出土地点	外面調整	内面調整	法量			胎土	焼成	色調	備考
									口径	底径	器高				
187	弥生	弥生土器	小型甕	完形		風倒木	ミガキ	ナデ	11.2	4.8	11.6	4mm以下の黒と赤茶褐色の粒を多く含む。3mm以下の灰白色の粒を少量含む	良好	黄橙色(10YR8/6)	風倒木箱から、2つに割れた状態出土。完形に復元される。
188	弥生	弥生土器	甕	頸部	a	包含層	タタキ	ナデ				3mm以下の明赤褐色、にぶい赤褐色、2mm以下の灰白、1mm以下の褐灰色粒を少し含む	良好	浅黄橙色(7.5YR8/4)	突帯の切り込みは、左下がりに浅く入れた後、右下がりに深く切り込む。
189	弥生	弥生土器	甕	口縁		表土	ナデ	ナデ				6mm以下のにぶい黄褐色、4mm以下のにぶい橙色、1mm以下の黒色光沢粒を含む	良好	浅黄褐色(10YR8/4)	
190	弥生	弥生土器	甕	口縁	a	包含層	ナデ	ナデ				3mm以下の灰褐色、灰白、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の褐灰色粒を含む	良好	淡黄色(2.5YR8/3)	
191	弥生	弥生土器	甕	口縁-胴部	a	包含層	ナデ	ナデ				5mm以下の黄褐色粒、3mm以下のにぶい黄褐色粒、1mm以下の黒色光沢粒、透明光沢粒を含む	良好	淡黄色(2.5YR8/3)	
192	弥生	弥生土器	鉢	口縁	a	包含層	刷毛目	刷毛目	13.8			5mm以下の褐灰、4mm以下の灰白、3mm以下のにぶい黒色粒を少し含む	良好	黄褐色(7.5YR8/6)	
193	弥生	弥生土器	垂	口縁	a	包含層	ミガキ	ミガキ				4mm以下のにぶい赤褐色粒を多く、3mm以下の灰白色、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	良好	橙色(7.5YR7/6)	
194	弥生	弥生土器	甕	底部	a	包含層	ナデ	工具ナデ	4.7			6mm以下の灰白、5mm以下の淡黄、2mm以下の褐灰色粒を多く含み、4mm以下の炭化物を少し含む	良好	にぶい黄褐色(10YR7/4)	径6mmほどに復元される円形?の工具が側面に押し当てられている。
195	弥生	弥生土器	甕	底部		表土	工具ナデ	工具ナデ	3.7			5mm以下の褐灰、にぶい褐色、4mm以下の灰白、2mm以下の黒色光沢粒を少し含む	良好	褐色(7.5YR7/6)	
196	弥生	弥生土器	甕	底部	a	包含層	ナデ	ナデ	4.1			4mm以下のにぶい赤褐色粒を多く、3mm以下の灰白色、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	良好	浅黄色(2.5Y7/4)	
197	古代	須恵器	甕	頸部	a	包含層	回転ナデ	回転ナデ				1mm以下の淡赤褐色、黒色粒を少し含む	堅緻	灰白色(2.5Y7/1)	
198	古代	須恵器	甕	頸部	b	包含層	平行タタキ	車輪文タタキ				1.5mm以下の灰白、黒褐、1mm以下の黒色光沢粒を少し含む	堅緻	灰白色(5Y7/1)	
199	古代	須恵器	甕	胴部		風倒木	格子目タタキ	指押さえ				3mm以下の褐灰色粒、1mm以下の灰白粒を含む	堅緻	灰オリーブ(5Y6/2)	
200	古代	須恵器	環?	蓋		表土	回転ナデ	回転ナデ				3mm以下の褐灰色粒、1mm以下の灰白粒を含む	堅緻	灰オリーブ(5Y6/2)	
201	古代	布痕土器	布痕土器	口縁	a	包含層	ナデ	布目圧痕				4mm以下の淡褐色、2mm以下の明赤褐色、5mm以下のにぶい橙色、1mm以下の暗赤褐色、2mm以下の透明、褐灰色の光沢粒を少し含む	良好	橙色(2.5YR6/6)	布目は細かく、口縁部端まで届いている。
202	古代	布痕土器	布痕土器	口縁	a	包含層	ナデ	布目圧痕				2mm以下の灰白、暗褐色、にぶい黄褐色の粒を多く含む。1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む	良好	浅黄色(10YR8/4)	布目はやや大きく、一部、口縁部の外側まで覆っている。
203	古代	布痕土器	布痕土器	胴部	b	包含層	ナデ	布目圧痕				3mm以下の褐灰、灰白、黒褐色、浅黄褐色粒を多く含む。3mm以下の透明光沢粒を含む	良好	にぶ褐色(7.5YR5/4)	布目はやや大きい。
204	古代?	土製品	土鍾	破片	b	包含層	ナデ	-	-	-	-	1mm以下の灰白、褐灰、雲母を含む	良好	にぶい黄褐色(10YR6/4)	中心が膨らむ形態をしており、内面の穿孔も外側に向かって先細りとなっている。外面に黒斑あり。
205	古代	土師器	高台付椀	底部		包含層	回転ナデ	回転ナデ	4.2			2mm以下のにぶい褐、赤褐色粒を多く含む	良好	浅黄褐色(10YR8/4)	
206	古代	土師器	高台付椀	底部	a	包含層	不明	不明	7.1			3mm以下のにぶい赤褐色、1mm以下の褐灰、灰白の粒を多く含む、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	良好	淡褐色(5YR8/4)	
207	古代	土師器	環	口縁	a	包含層	回転ナデ	回転ナデ	6.6			3mm以下の明赤褐色、1mm以下の灰白、黒色光沢粒を少し含む	良好	褐色(5YR7/6)	
208	中世	土師器	小皿	底部		風倒木	回転ナデ	回転ナデ				1mm以下の赤褐色、褐色粒を少し含む。1mm以下の透明光沢粒を多く含む	良好	褐色(5YR7/6)	
209	中世	土師器	皿	底部		表土	回転ナデ	回転ナデ	7.4			2mm以下の赤褐色、1mm以下の黒色、透明光沢粒を多く含む	良好	褐色(5YR7/6)	
210	中世	土師器	環	底部	b	包含層	回転ナデ	回転ナデ	5.3			2mm以下の赤褐色、赤灰、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	良好	褐色(7.5YR7/6)	
211	中世	陶器	甕	口縁	b	包含層	横ナデ	横ナデ				2mm以下の褐灰、にぶい橙、1mm以下の黒色光沢粒を少し含む	良好	褐色(5YR7/8)	

第7節 小結

岡遺跡第6次調査区では、旧石器時代、縄文時代早期・晩期、弥生時代～古墳時代、古代、中世～近世と大きく6時期の遺構・遺物を確認した。ここでは、第6次調査区の遺構・遺物についてまとめたいが、旧石器時代、弥生時代～中世までは遺構・遺物も少量であることから、ここでは、縄文時代早期と晩期のみに触れ、他の時代については総括においてまとめたい。

縄文時代早期

縄文時代早期では、前半と後半の2時期の遺構と遺物が確認された。早期前半では、炉穴5基、土坑9基、集石遺構3基を検出し、早期後半では集石遺構1基を検出している。なお、早期前半と考えられる炉穴の年代測定をおこなった結果BP9490±35～9380±30の範囲におさまり、包含層出土の土器もa層から貝殻円筒形系土器、稲荷山式相当の押型文土器が出土していることから、出土遺物と概して合致しているといえるであろう。

炉穴について

炉穴は5基検出されており、その形態は、SP2、SP3では不明瞭なものの、SP1、SP4、SP5で顕著なように、燃烧部の張り出しが大きく、床面形態で燃烧部から煙道の間にくびれがつくような形態をしている。また、その深さは、掘り込みの様子が確認できたSP2では46cmほどで、幾分低い、ブリッジ崩落によるものの可能性もある。なお、炉穴は調査区南側の谷を利用し、主軸を西に向ける南グループ（SP2、SP4、SP5は1つの群を構成していたと思われ、焼土をもつ土坑も含まれていた可能性が高い。）と、北側の谷を利用し、主軸を北～北西に向ける北グループ（SP1、SP3）に分かれて存在していた。この在り方を考慮すると、炉穴状土坑を炉穴であったとするならば、南グループに、より炉穴が密集する傾向を示している。これは南側の谷の方が深く、谷風を利用するのに適していたためであった可能性が高い。なお、散礫がこの南西グループ周辺にのみ見られたことも南側の谷の重要性を示唆する。

縄文時代晩期

縄文時代晩期は、土坑1基と埋甕1基が検出された。遺物は、黒川式期のもので構成されている。内容は、

無刻目突帯をもつ深鉢、精製浅鉢、組織痕土器、孔列文土器などの無刻目突帯文期にみられる組成を一通り有している。本文で述べたように、遺構は検出されたものの、縄文時代晩期の明確な生活面の検出はできず、その多くは、縄文時代早期～古代末（一部中世）までの遺物と混じりあいながら出土したため、明確な層位的裏付けは得られなかった。

したがって、ここでは第6次調査区出土の土器の様相を該述して、簡潔にまとめたい。土器の形態では、深鉢・鉢・粗製浅鉢・精製浅鉢に分かれる。ただし、口縁部のみからは深鉢と粗製浅鉢の区別が困難であったので、ある程度全形がわかるものを中心とする。

深鉢は、胴部最大径から口縁部までは緩やかに内湾する。底部がやや上げ底で、下部の顕著な張り出しはみられない。粗製浅鉢は、口縁が直立～やや内傾し、胴部～底部への屈曲が比較的明瞭なもの、所謂ボール状の底部をもつものがある。精製浅鉢は、口縁部が立ち上がるもの、胴部径が口縁部径を上回り、胴部からの屈曲部が「く」の字状になるものなどがある。

遺物の定量的分析を経ていないため、詳細は課題であるとしても、概ね時期的には、黒川式の中でも新段階⁽¹⁾のものが中心であると思われる。

なお、最後に無刻目突帯について触れておきたい。無刻目突帯文は深鉢と粗製浅鉢に施されているが、本文では、突帯の製作技法の観点から細分をおこなった。すなわち、口唇部近くから粘土を貼付け、上部を幅広く横ナデする技法、ある一定度の粘土紐を貼付け、工具または手捏ねで成形する技法である。深鉢にはを主体に、わずかにが、浅鉢はを中心成形されている。この差異の意味については詳細に述べる余裕はないが、注目すべきはの技法が見られる56の浅鉢である。本土器の突帯は、口縁部下を一周して繋がらずに、凹みをもつ山形状の突起に収斂される構造をもつ。91・92・126も突帯が口縁と平行せずに、鱗の近くで右または左上がりになる点を考慮すると、これらも同一構造の突帯をもっていたと思われる。この構造の突帯は、製作方法を考慮すれば当然であるが、の技法のみと親和性をもつ点は重要である。

註

(1) 堂込秀人 1997「南九州縄文土器の再検討 入佐式と黒川式の細分」『鹿児島考古』鹿児島県考古学会

第 章 岡遺跡第7次調査の成果

第1節 調査の方法と経過

1-1. 調査区の設定

本調査を始めるにあたって、便宜上、調査区をA区とB区に二分し、さらに、それぞれの区を1～4区と細分して調査を進めた(第42図参照)。なお、出土した遺物は、区画ごとに番号をつけて1点ずつ、あるいは一括で取り上げた。

1-2. 発掘調査の方法

本調査は、表土である層を重機で除去した後、二次堆積の鬼界アカホヤ火山灰層である層上面にて、遺構検出作業を行った。精査の結果、中世～近世頃のピット81基、掘立柱建物跡5棟を検出した。

次に、Tr1～Tr3トレンチを設定し(第42図)、層の堆積状況を確認した後、掘削を行っていった(トレンチの断面図は第43図、土層注記詳細については第2節参照)。

遺構実測図は1/20で記録し、写真記録は主として35mmモノクローム・リバーサル写真およびデジタルカメラを併用し記録した。

1-3. 発掘調査の経過

日誌抄

- H22.0720 重機による駐車場及び事務所等設置場所の整地。
- 0721 表土剥ぎ。
- 0723 事務所・作業員棟・トイレ設置。
- 0802 作業員投入(15名)。
A-1・2区：層上面の精査作業及び遺構検出。遺構確認できず。
- 0817 作業員追加(1名)。
- 0819 A-1区：層掘削開始。
- 0825 A-1区：層完掘、写真撮影。
- 0826 A-1・2区にかけて東西方向のトレンチ(Tr1・2)を設定・掘削。
A-2区：層掘削開始。
- 0830 Tr1・2の土層断面実測。

- 0908 A-3・4区に東西方向のトレンチ(Tr3)を設定・掘削。
- 0913 A-2区：層の完掘・写真撮影。
- 0914 A-3区：層の掘削開始。
遺構検出。ピットを確認。
- 0915 Tr3の土層断面実測。
- 0922 A-4区：層の掘削開始。
遺構検出。ピットを確認。
- 0928 重機による表土、石の除去とトレンチ掘削。
- 0929 A-4区：層遺物包含層の完掘。
- 1004 作業員追加(4名)
- 1008 B-4区：層の掘削開始、遺構検出。
ピットを確認。
- 1012 B-2・3区の遺構検出状況の写真撮影、
遺構の掘削開始。
- 1025 ピットの土層断面図実測。
- 1102 遺構完掘。遺構実測。
B-2区：層完掘。
- 1104 B-3区：層完掘。
- 1105 調査区全体精査。
- 1109 調査区全体の完掘写真撮影。
追加の400㎡の調査。1.5×1.5mのトレンチを4箇所設定し、人力による掘削。
- 1111 撤収作業。
- 1115 遺構実測。
- 1118 機材運搬。調査終了。



発掘作業風景

1-4 . 整理作業及び報告書作成

平成22年12月～平成23年11月の期間で整理作業を行った。水洗、注記、選別、計測等の作業を行った後、遺物台帳を作成した。平成23年2月から接合作業を行い、3月に遺物実測作業に入った。一部の遺物は拓本作業を行い、遺物実測図および現場実測図はトレース作業を経て、レイアウト、版下作成を行った。

報告書作成にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター報告書マニュアルに則って作成した。



整理作業風景(水洗)



整理作業風景(拓本)

第2節 基本層序と遺物包含層の認識

岡遺跡は、日向灘を東に臨む標高約30mの海成段丘上に位置し、段丘のほぼ中央を小河川の高森川が流れている。第7次調査区は高森川の南に隣接し、川の作用によって土砂が流れ込み堆積した範囲にあると想定される。よって、土層堆積の状態には、ばらつきがあり、本調査区内では安定した層序が見られなかった。

このような土層堆積状況で、基本層序を設定することは難しかったが、A-1・2区の北側(Tr1)とA-1～4区の南側(Tr2・3)の壁を土層観察用の壁面として利用した。土層は色調、土質により分類し、～層に分けることができた。

層：褐色。近世～現代の堆積土で、表土・客土層で

ある。この土層中には、縄文時代早期～近世の様々な遺物が混在する。耕作によって層が掻き混ぜられたことが原因だと思われる。

層：鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積で、主に縄文時代～中世の遺物包含層である。堆積状況は、A-1区が比較的厚く、B-1・4区には、この層が全く見られなかった(第43図参照)。この層は、さらに、a層、b層、c層と細分できた。

a層：褐色(Hue10YR4/6)、粘性はやや低く、しまりは中程度。縄文時代早期～中世までの遺物を含む。

b層：黄褐色(Hue10YR5/6)、粘性はやや低く、しまりはやや弱い。灰白・褐灰粒(～5mm程度まで)を極微量に含む。縄文時代早期と晩期の遺物を含む。

c層：黄褐色(Hue10YR5/6)、粘性はやや低く、しまりはやや弱い。礫(10～20cm程度)を多く含む。無遺物層である。

層：暗褐色(Hue10YR3/3)で、粘性はやや低く、しまりは強い。礫(15～40cm程度)を多く含む。この層以下は、遺構、遺物を含む層はなかったので、層以下を第7次調査区の地山層とした。

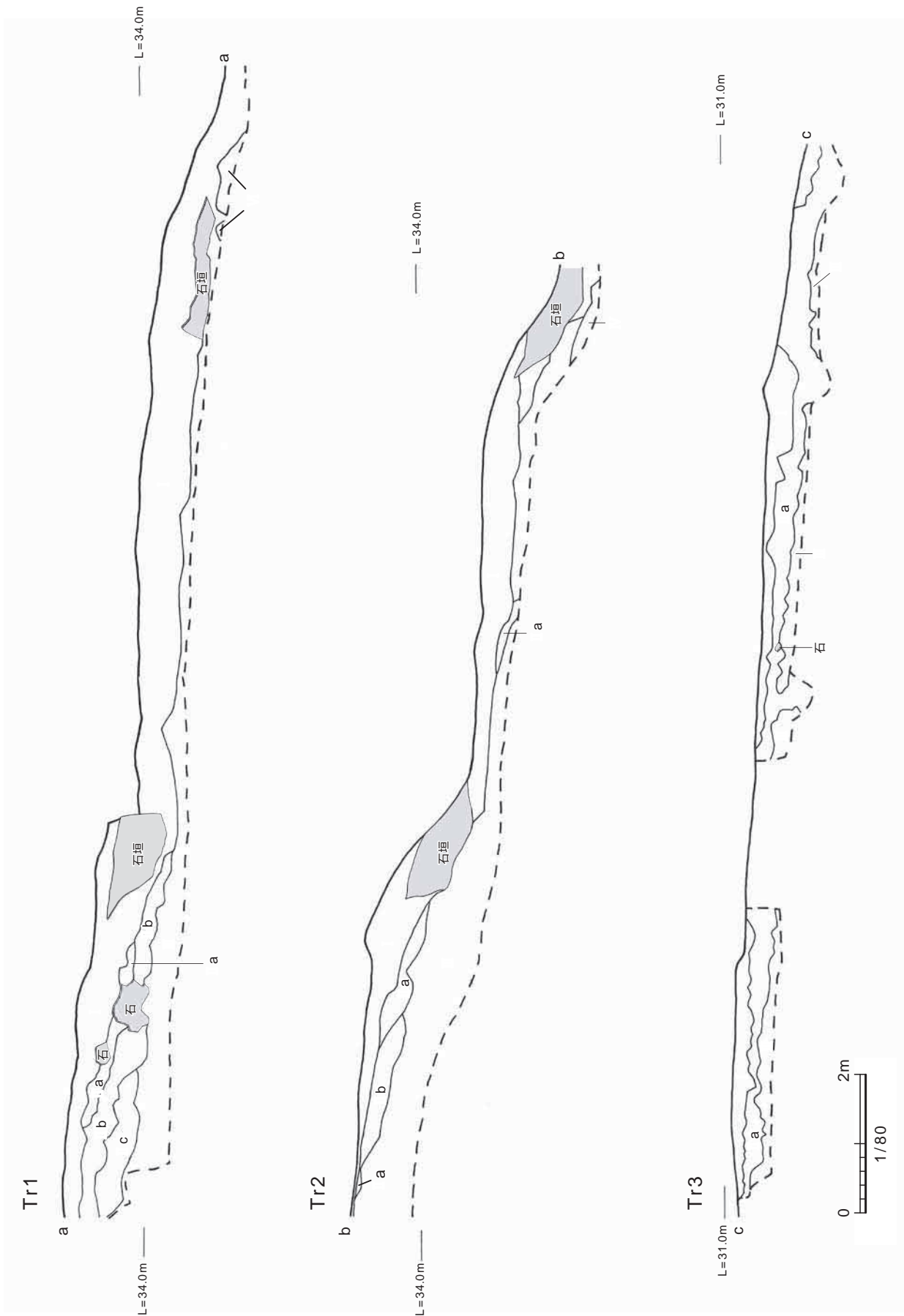
層：黒褐色(Hue10YR2/3)で、粘性は中程度、しまりは強い、灰白・褐灰粒(～5mm程度まで)を少量含む。また、25cmくらいまでの礫を多く含む層である。A-2区の南壁(Tr2)の斜面にのみ見られる層で、同じ区画内でも広がりは見られず、他の区画でも確認できなかった。

層：暗褐色(Hue10YR3/4)で、粘性は中程度、しまりも中程度。灰白・褐灰粒(～5mm程度まで)、小礫(～2cm程度まで)を少量含む。層と同様にA-2区の南壁(Tr2)の斜面にのみ見られる層である。同じ区画内でも広がりは見られず、他の区画でも確認できなかった。

層：褐色(Hue10YR4/4～4/6)で、粘性はやや低く、しまりはやや弱い。灰白・褐灰粒(～5mm程度まで)、小礫(～20cm程度まで)を多量に含む。A-2区の北壁(Tr1)の斜面にのみ見られる層で、同じ区画内でも広がりは見られず、他の区画でも確認できなかった。



第42図 岡遺跡第7次調査区 調査区周辺地形図・トレンチ配置図 (S=1/1,000)



第43図 岡遺跡第7次調査区 土層断面図 (S=1/80)

第3節 縄文時代の遺物

第7次調査区においては、縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物包含層である層より縄文時代早期および晩期の遺物が出土している。これらの遺物は、特にA-3・4区、B-2・3区からの出土が多かった。

調査区内で出土した縄文時代の遺物は、遺物全体の約8割を占めていた。

3-1. 土器

ここでは出土土器を形態および文様によって分類した。

早期の土器は、大別すると押型文土器、縄文土器、撚糸文土器、貝殻文系土器に分けられる。

晩期の土器は突帯文土器、孔列文土器、無文土器、組織痕土器、精製土器に分けられる。器種については、残存率が悪く分類が困難なものは鉢と記した。

押型文土器（第44図1～9）

1～4は外面に山形押型文が施されている口縁部片である。1・3の内面には口唇付近に縦位の短凹線文が施され、その文様の下にもまた山形押型文が見られる。

5～8は外面に楕円押型文が施された口縁部片で、7は胴部片ある。5～7の内面はナデ調整、8の内面には浅く薄い沈線文が施されている。

9は外面に格子目押型文が施された口縁部片である。その内面には棒状押圧文が施されている。この口縁部の破片はSH17ピットの埋土中より出土した。これ以外に、調査区内では格子目押型文の土器は出土していない。

縄文土器（第44図10・11）

10・11は外面に無節縄文が施されている口縁部片である。内面はナデ調整が施されている。10は風化が著しく文様が不明瞭である。

撚糸文土器（第44図12）

12は外面に撚糸文が施されている土器の胴部片である。撚糸の幅は1mm弱で糸と糸の間隔が不規則にあいている。調査区内では、この胴部片1点しか出土していない。

貝殻文系土器（第44・45図13～28）

13～28は貝殻文が施された土器の破片である。

13・14は各破片の形状から円筒形深鉢であることが考えられる。

17は調整に貝殻条痕が施されている。その表面に長さ約5cmで刻目のある粘土紐が複数貼り付けられている。このタイプの施文は天道ヶ尾式土器に見られる特徴と類似する。

18～25は口唇部に工具による刻目、貝殻条痕、貝殻腹縁による連続刺突文、横位または斜位の沈線文が施され、塞ノ神式土器にみられる特徴と類似する。

26～28は口唇部に工具による刻目が入り、貝殻による斜位や横位の条痕が余すことなく施されている。26は口縁部にカーブが見られる為、波状口縁の可能性もある。26～28は鎌石橋式土器にみられる特徴と類似する。

その他の土器（第45図31～34）

31～33の土器は縄文時代早期末から前期初頭の土器で、31・32の内面には横位の貝殻条痕文、外面には横位の貝殻条痕文とナデ調整、半截竹管による連続刺突文が施されている。33は内面が横位のナデ調整、外面は半截竹管による押し引き文と、波状文が施されている。

34は縄文時代中期と考えられる台付皿の口縁部である。

突帯文土器（第45～47図35～58・64～67）

本調査で出土した縄文土器の中で最も多いのが突帯文土器である。突帯文土器は無刻目突帯と刻目を有するタイプに分けられる。

35～58は無刻目突帯文土器の口縁部片である。口縁部外面に無刻目突帯文が施されている。内面はほとんどが横位のナデ調整であるが、36・37・40・45・55～57には貝殻条痕文も見られる。無刻目突帯文は2つに分類でき、口唇から口縁部の半ばまでを肥厚させた擬似突帯（35～47）と粘土紐を貼り付けた突帯（48～58）がある。36に関しては、突帯は前者に属するのだが、他と異なるのはその胎土である。胎土に5mm大の粒を多く含むので、表面がゴツゴツしていて粗い作りになっている。

64～67は刻目突帯文土器の口縁部片である。口縁部外面に刻目突帯文が施されている。また、外面には横位のナデや貝殻条痕による調整も見られる。内面は

ほとんどが横位のナデ調整であるが、64には横位の貝殻条痕文も見られる。刻目突帯の施文方法により2つのタイプに分けられる。64・65のように細い粘土紐を貼り付け、その上に刃の細い工具で刻み目をつけたタイプ、66・67のように粘土紐を波立たせて貼り付け、その上に刃の幅が厚い工具で刻み目をつけた刻目突帯が見られる。

孔列文土器（第47図59～63）

59～63は孔列文土器の口縁部片である。口縁部付近の外面に刻目突帯文が施され、その突帯部分の下には未貫通の孔列文が施されている。また、外面には横位のナデ調整が施されているものや、62・63のように横位の丁寧な貝殻条痕文による調整も見られる。内面は横位の工具ナデもしくは貝殻条痕文による調整が見られる。59は底部が欠けてはいるものの、元来の形状が復元できる。底部からほぼ垂直に立ち上がりやや外反している。

無文土器（第48図68～85）

68～85は粗製深鉢・鉢の無文土器片である。内面、外面に横位の工具ナデもしくは貝殻条痕文が施されている。80は底部から外傾して、やや内湾気味に立ち上がり、胴部最大径を測る位置で稜をもって内側に屈曲する。

組織痕土器（第49図86～90）

86～90は外面に繊維による組織痕が見られる。内面は貝殻条痕文もしくは横ナデで調整してある。

精製土器（第49図92～105）

92～105は精製土器の鉢もしくは浅鉢である。内面、外面ともにミガキが見られる。口縁部は、くの字に屈曲する形態、ただ外反する形態、口唇部付近が膨らみをもつ形態の3種類が観察できる。

脚付鉢（第49図106）

106は脚付鉢の脚部である。外面は脚の縁に粘土紐が張り付けられている。

沈線文土器（第49図91）

91は外面に沈線文が見られる。内面は横方向の貝殻条痕文、口唇部は横位のナデが施されている。

3-2. 石器

出土した石器は総数589点である。このうち166点

について、ここで報告する。大半が遺物包含層（層）から出土したが、表土出土の石器もある。ほとんどは縄文時代に属すると考えられる。

黒曜石は、肉眼で観察できる情報により分類を行った。第7次調査区では姫島産の黒曜石が最も多く見られた。

以下器種別に報告する。

石核・剥片（第50図107～115）

107・108は姫島産黒曜石の石核である。109はチャート、110は珪質頁岩の石核である。

111～113は姫島産黒曜石の剥片で、112と113は接合することができた。

114の剥片と115は接合関係にある。どちらも大部分に磨面が見られる。

使用痕剥片（第50図116・117）

116・117はいずれも珪質頁岩の剥片である。剥片の状態で使用され、使用しているうちに刃先が欠けていったのではないかと考えられる痕が見られる。

石鏃（第51図118～145）

第7次調査区で出土した石鏃は、無茎の凹基形あるいは平基形に限られている。

118～130は、縄文時代早期の押型文系土器の時期に見られる石鏃で鏃形を呈している。118に関しては、表面に一部研磨がかかっている。138～144は三角形を呈している。石材は、118は珪質頁岩、119・120・122～128・130・134・135・138～143はチャート、121は凝灰岩、129は姫島産のガラス質安山岩、131～133・136・137は姫島産黒曜石、144・145は安山岩である。

トロトロ石器（第51図146）

146は長さ2.4cm幅1.4cmで石鏃に類似するが、先端と両脚部は丸みを帯びており、いわゆるトロトロ石器として分類した。縄文時代早期の押型文系土器の時期に見られる。石材は北九州産の黒曜石で、本遺跡ではこの1点のみ出土した。

石匙（第51図147～152）

147・148・151は安山岩、149は姫島産黒曜石、150は黒曜石（産地は不明）、152は珪質頁岩である。ここでは3つのタイプが見られる。147～149は二

等辺三角形型で、147は148・149に比べて小型である。150・151は扁平二等辺三角形型。152は鉞形の山刀形を呈し、茎部は抉り込みを簡単に入れた程度で調整されている。

石斧（第52・53図153～171）

153～159は頁岩、160～168は砂岩、169・170は尾鈴山溶結凝灰岩。155・157・160～165・169・170は礫の一部を加工しただけのいわゆる礫斧で、両面あるいは片面を加工し、部分的あるいは片面全体に礫面を残す。長幅比が2：1前後の長楕円形である。166～168は縄文時代後期から見られる土掘り具の用途を持つ石斧であるが、第7次調査区では、後期の土器が出土していないことから晩期の遺物と考えられる。163・164・170は重量のある大きなつくりをしている。156・159の刃部は研磨されていることが観察できるが、上部は欠損している。171は蛇紋岩で両端に刃を有し、全体に研磨されている。

石錘（第53・54図172～209）

172は頁岩、173～178、180は尾鈴山溶結凝灰岩、179・181～209は砂岩の石錘である。

205に関しては短軸を打ち欠いている。短軸を打ち欠いて作る石錘は縄文時代早期に多く見られるが、この1点に関しては、完成品ではなく使用した痕跡も見られないことから、早期の石錘とは考えにくい。これ以外の石錘は長軸を打ち欠いている。後期の土器が出土していないことから縄文時代晩期の石錘だと思われる。

スクレイパー（第55図210～214）

210～212は砂岩、213は頁岩、214は尾鈴山溶結凝灰岩のスクレイパーである。212は欠損している。

礫器（第55図215～217）

215は砂岩、216・217は尾鈴山溶結凝灰岩の礫器である。

敲石（第55・56図218～239）

218～221・223～227は砂岩、222・228～232・234は尾鈴山溶結凝灰岩、233・235・238は珪質頁岩、236は流紋岩、237・239は石英の敲石である。

凹・敲石（第56図240～242）

240～242は尾鈴山溶結凝灰岩の凹・敲石である。

凹石（第56図243～251）

243・247～250は砂岩、244～246は尾鈴山溶結凝灰岩、251は珪質頁岩の凹石である。

磨石（第56図252～262）

252～261は尾鈴山溶結凝灰岩、262は砂岩の磨石である。

石皿（第57図263・264）

263は尾鈴山溶結凝灰岩、264は砂岩の石皿で、いずれも欠損している。共に片面に磨面が見られ、平坦で中央がわずかに凹む。264は一部、敲打痕も見られる。

石錐（第57図265）

265は安山岩の石錐である。厚さ4mm、素材剥片の形状を留めながら錐部の両側縁に調整加工が施されている。長三角形に近い形状である。

横刃型石器（第57図266）

266は頁岩の横刃型石器で、縄文時代後期から晩期に見られる。長軸の一側面に刃がある。

異形石器（第57図267）

267は頁岩で、石材の長軸の片縁に加工の痕がみられ、その先端部分には一部摩滅した痕が観察できる。

砥石（第57図268）

268は珪質頁岩で、欠損しているため全体の大きさは不明だが、非常に小型で薄い砥石である。

有孔円盤形石製品（第57図269）

269は頁岩で、ノジュールによって中心部に孔が開いたと考えられるが、磨面がみられるので、有孔円盤形石製品とした。

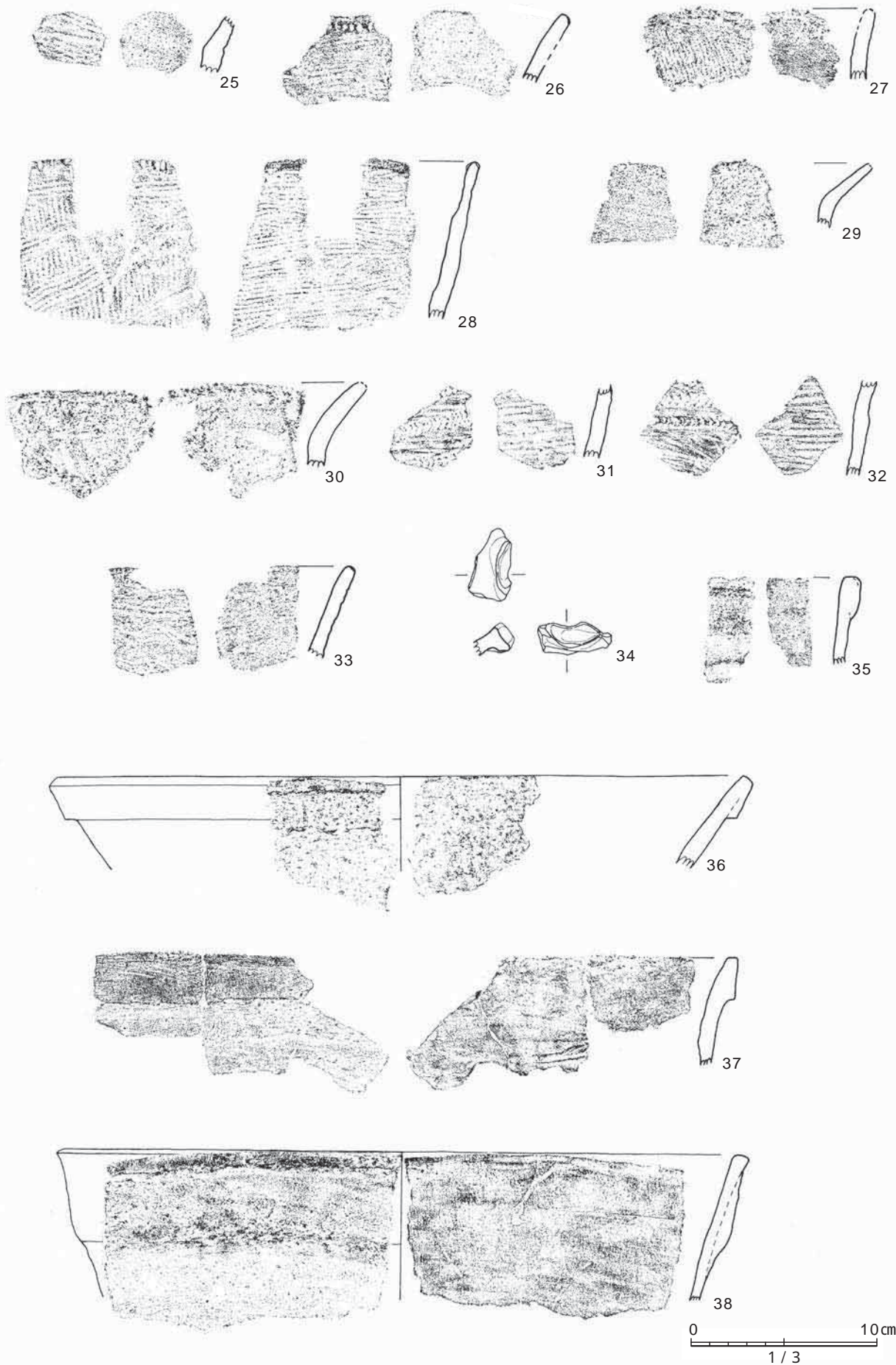
環石（第57図270）

石材は砂岩。片方はB-2区、もう片方はB-3区と互いに10m以上離れた地点で割れた状態で出土した。接合するときれいなドーナツ型を呈す。中央孔周囲を除く全面に敲打痕と磨面が見られる。

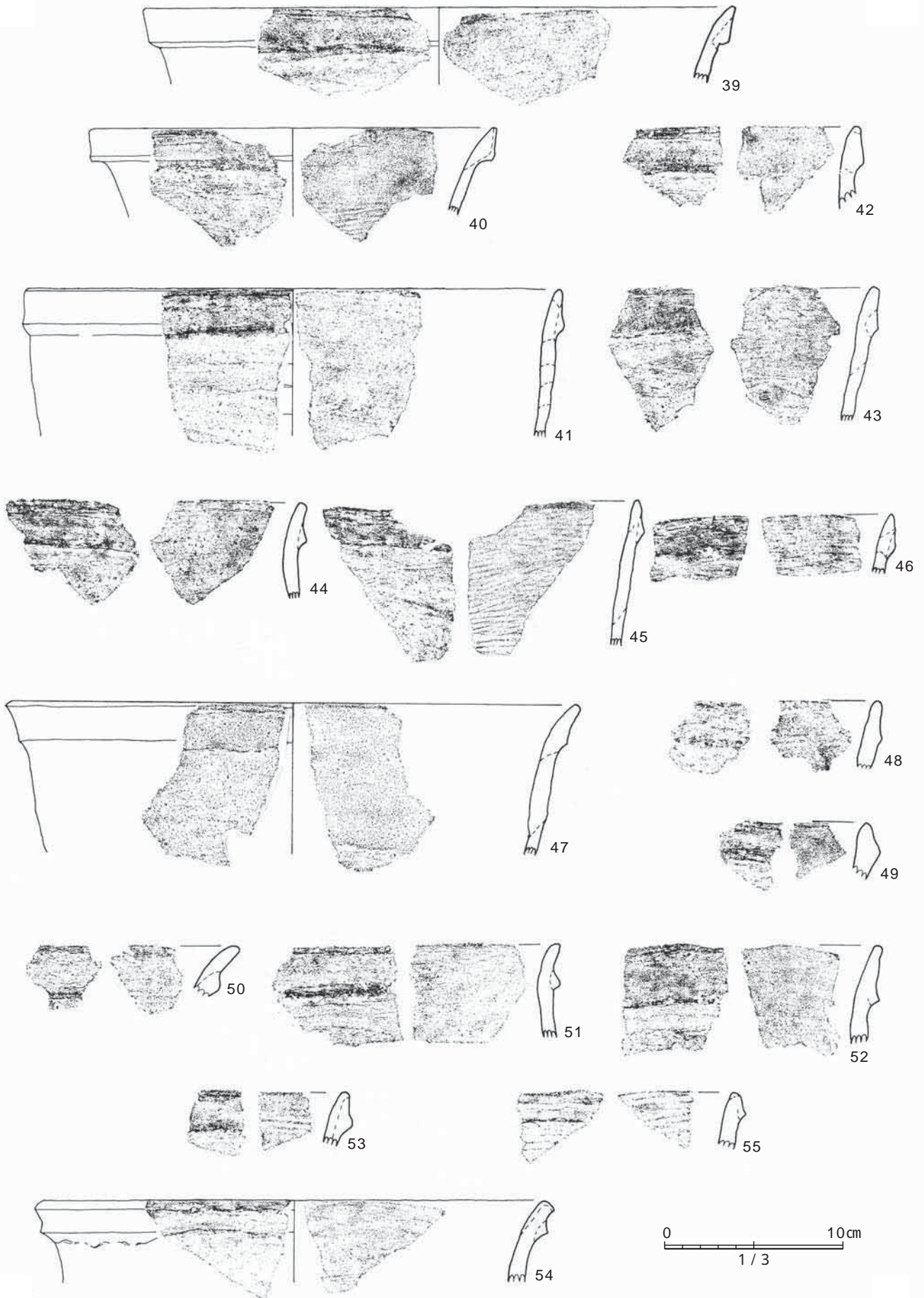
中央に孔があり円盤状で周縁に刃のある物を環状石斧とするが、270の場合は周縁に刃が見られないことから、環石と分類した。



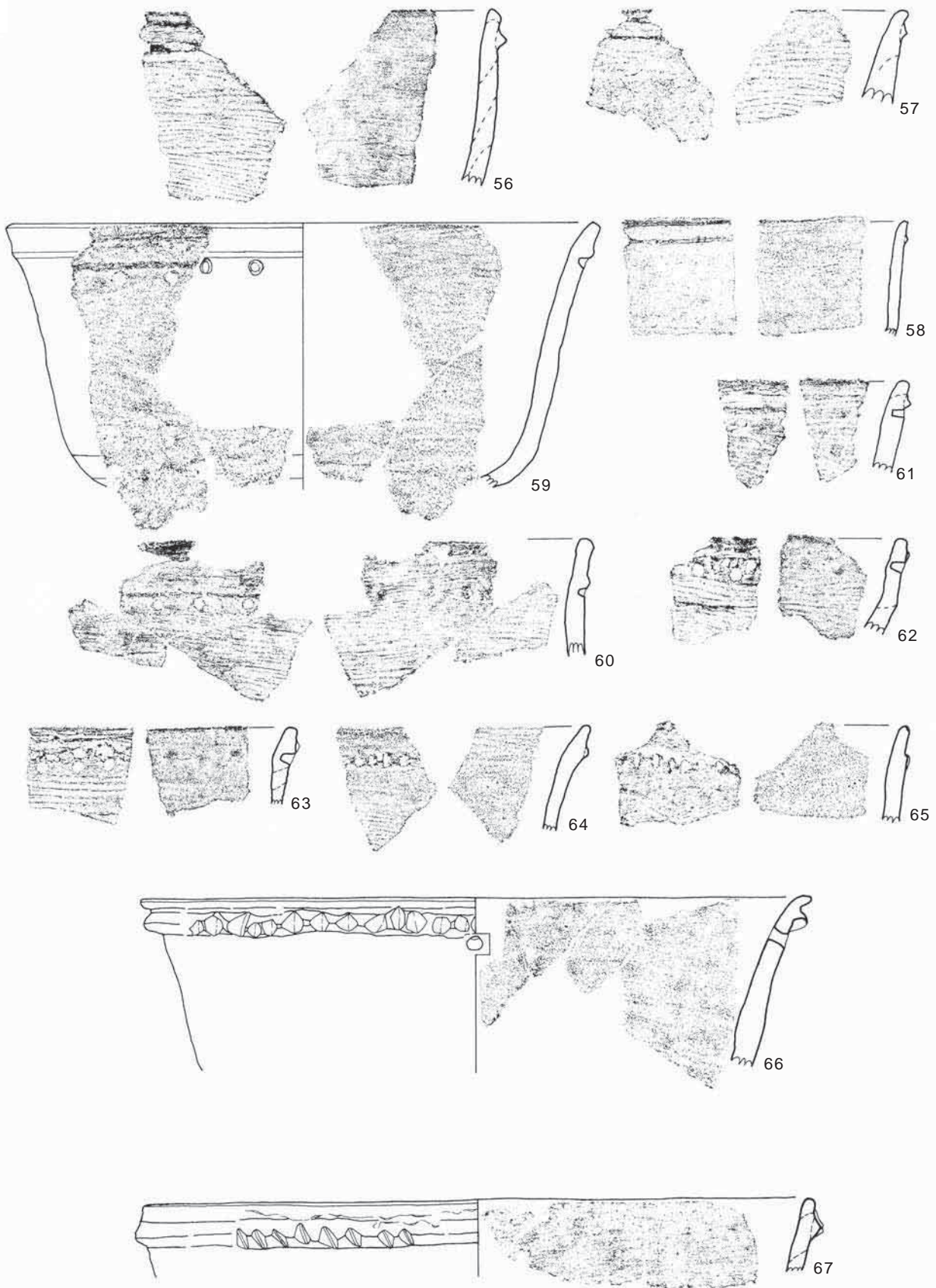
第44図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代早期土器実測図



第 45 図 岡遺跡第 7 次調査区 縄文時代早期・晩期土器実測図

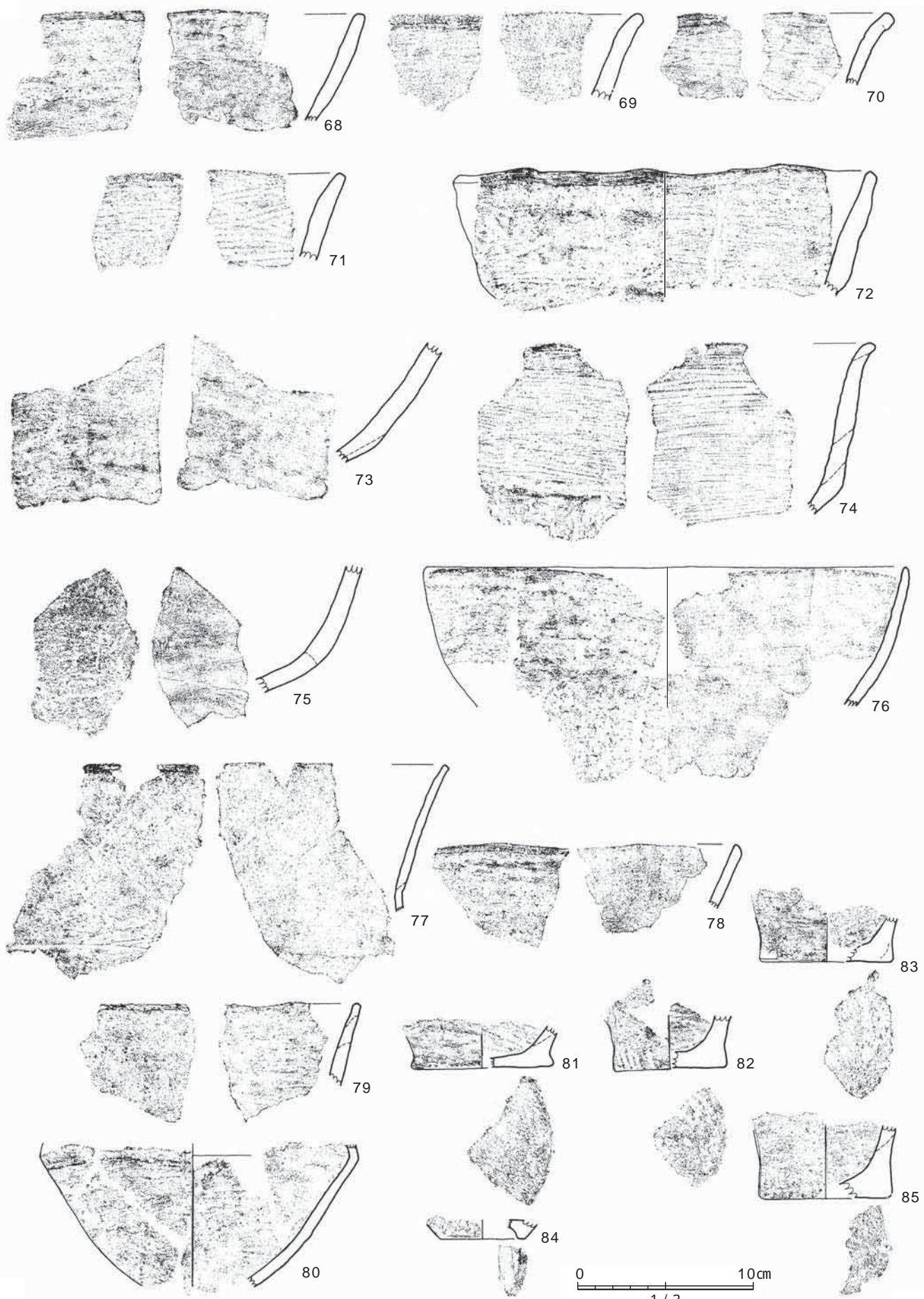


第46図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代晩期土器実測図(1)



0 10cm
1/3

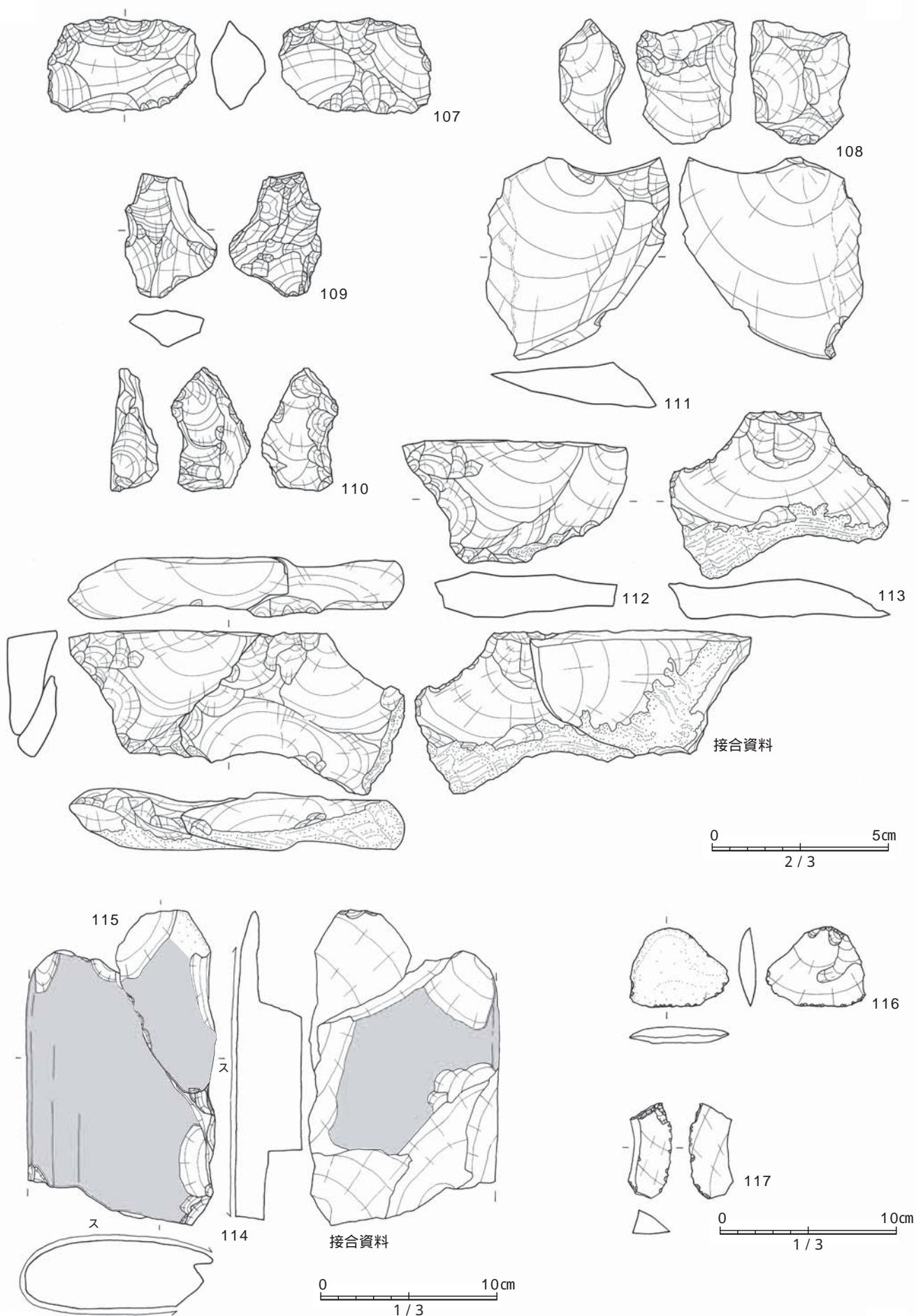
第47図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代晩期土器実測図(2)



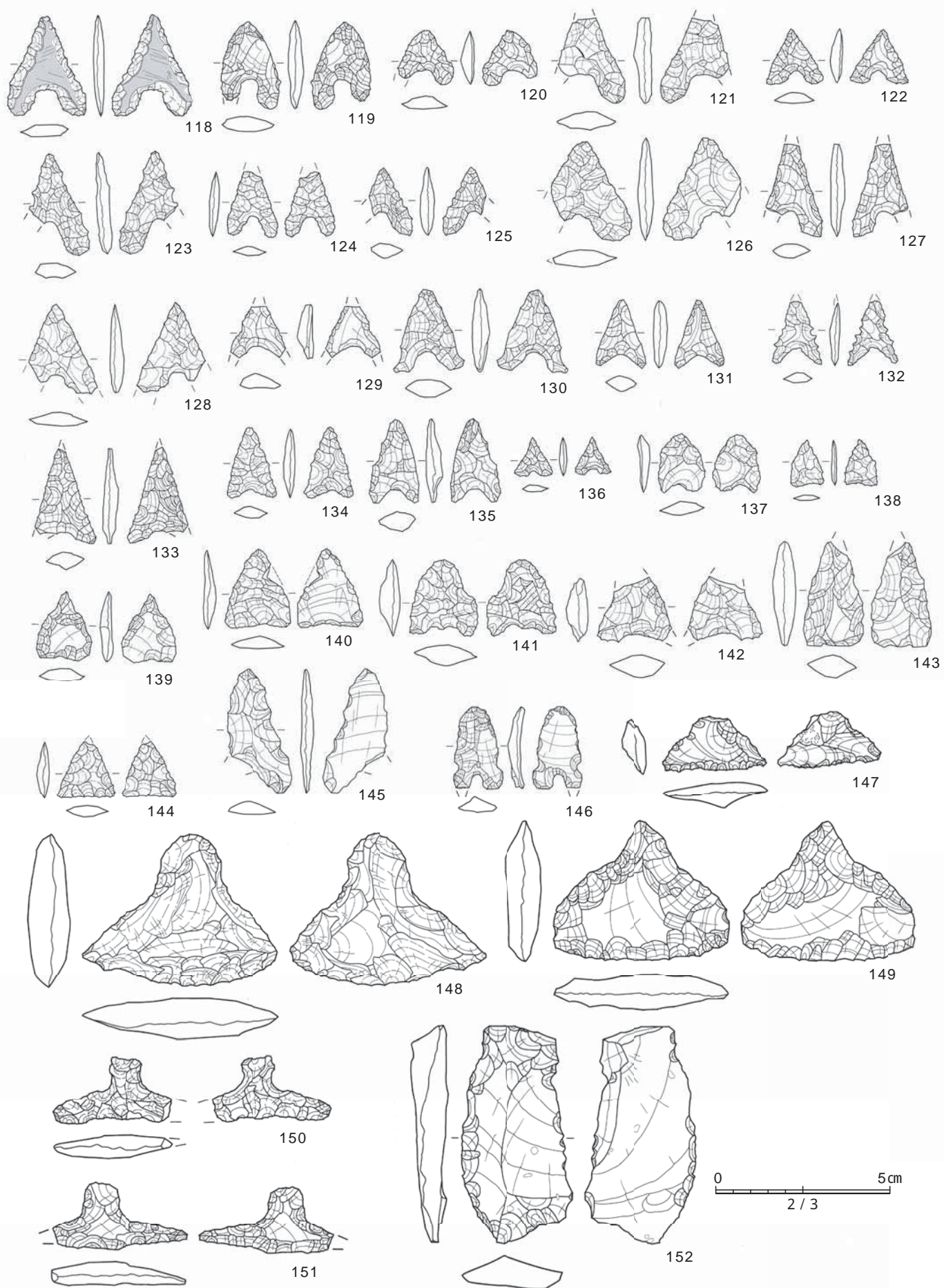
第48図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代晩期土器実測図(3)



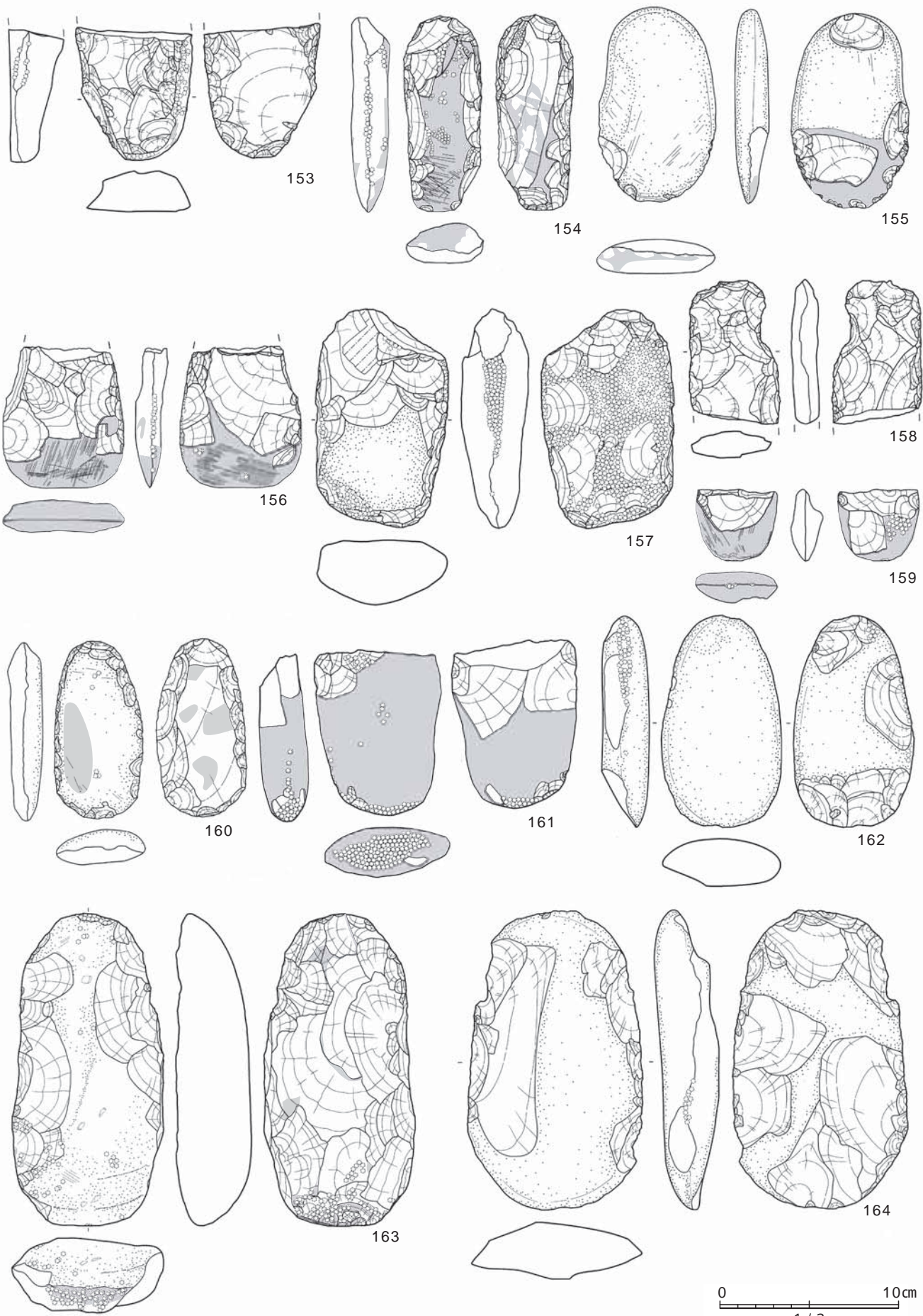
第49図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代晩期土器実測図(4)



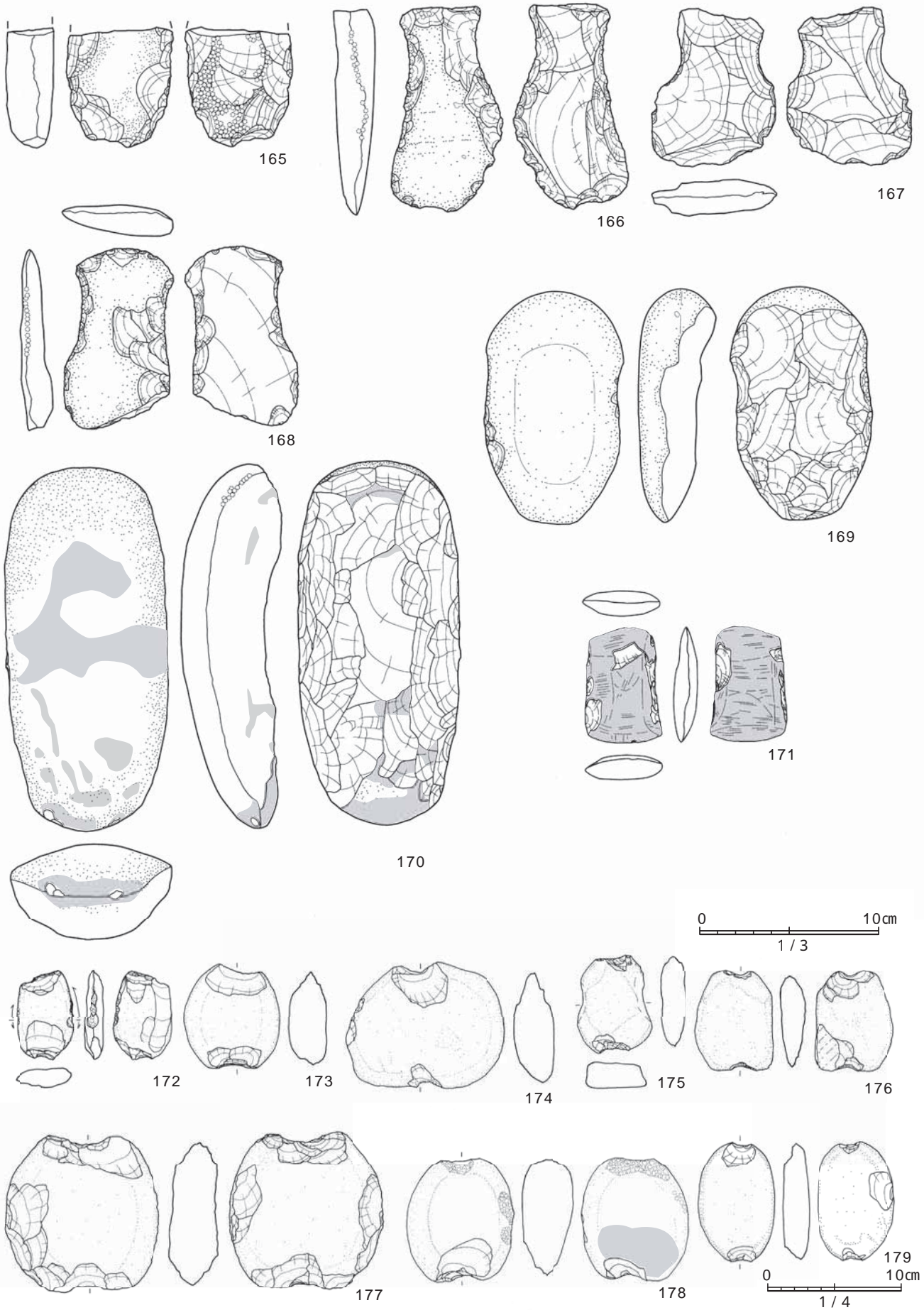
第50図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代石器実測図(1)



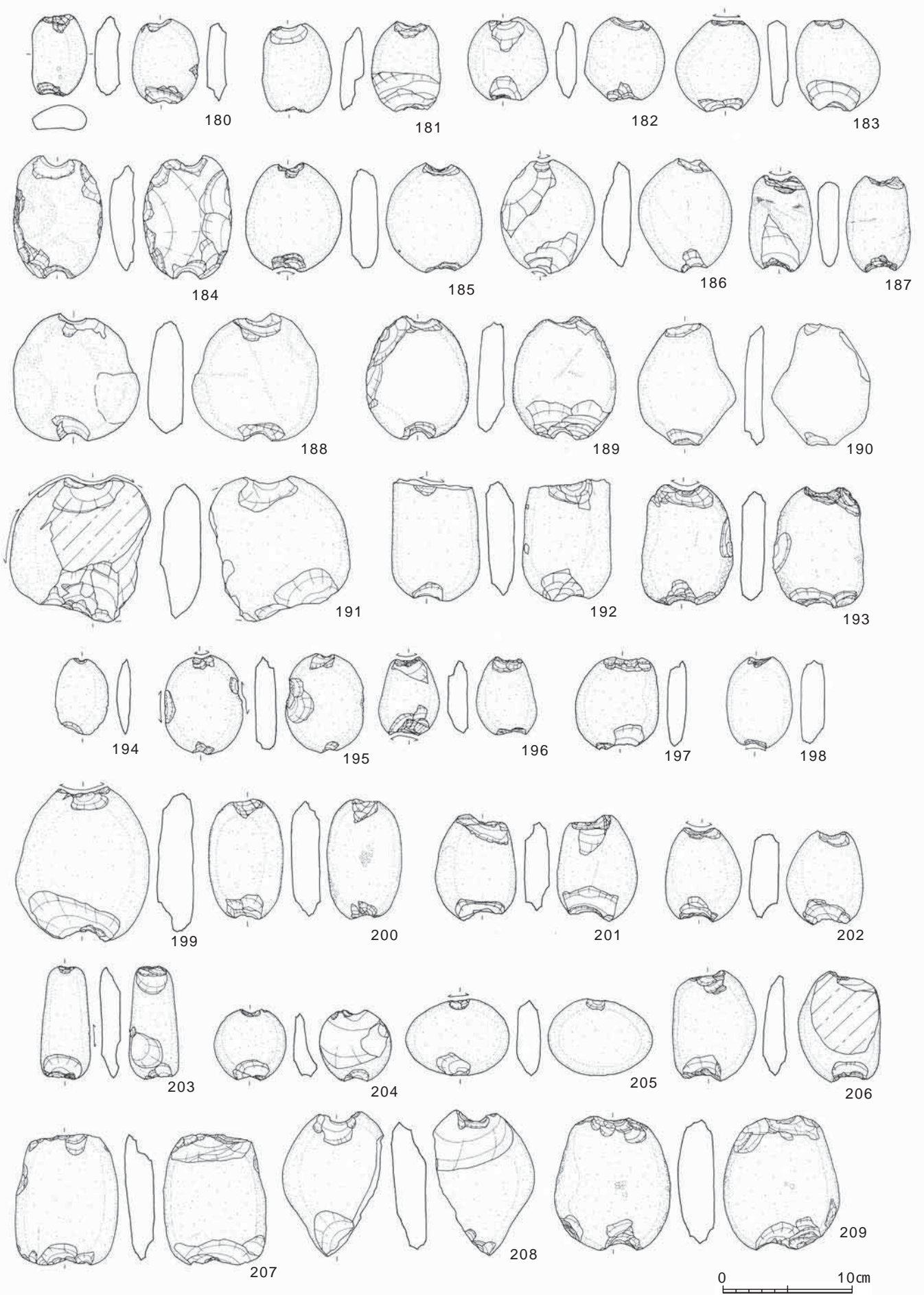
第 51 図 岡遺跡第 7 次調査区 縄文時代石器実測図 (2)



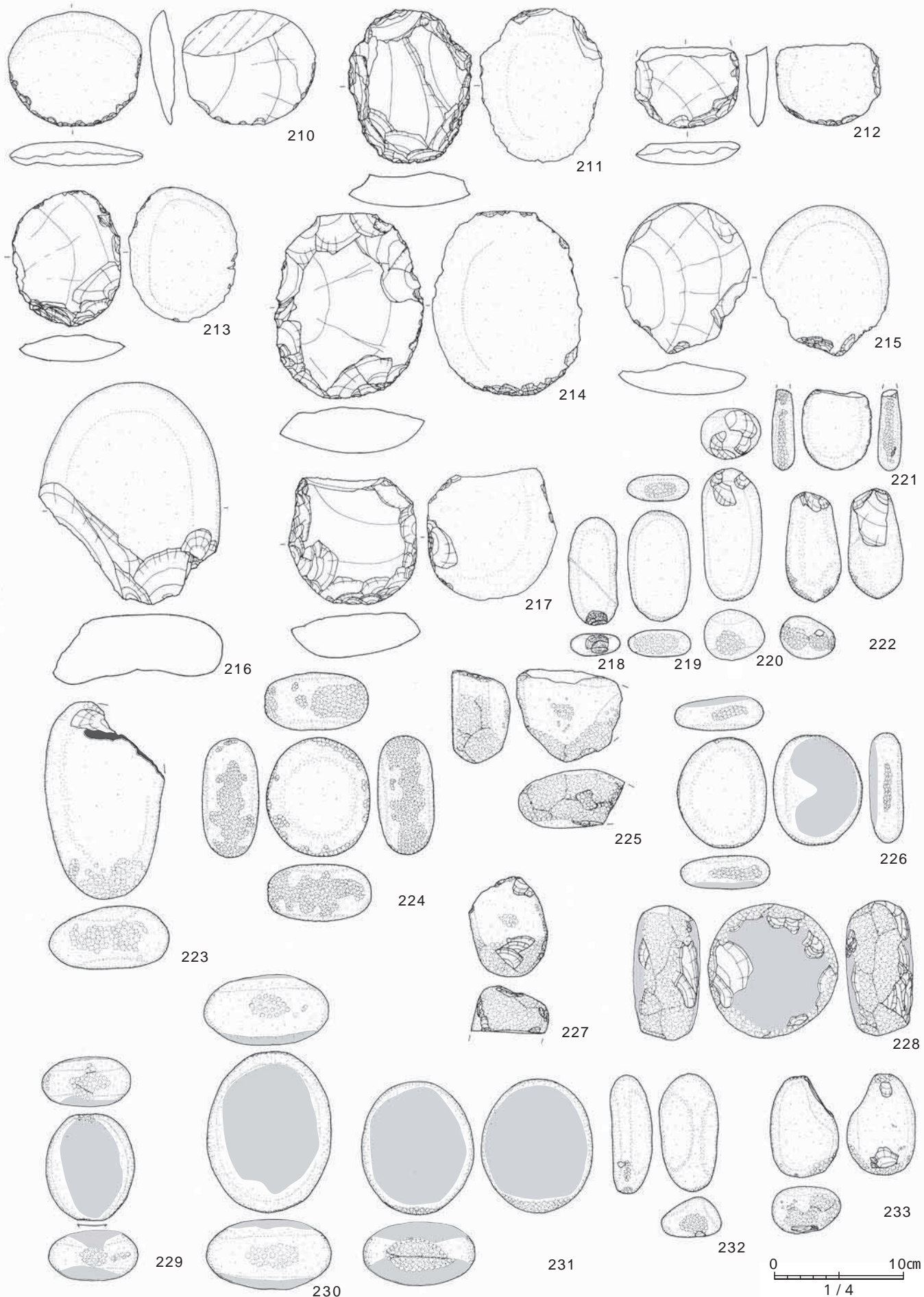
第 52 図 岡遺跡第 7 次調査区 縄文時代石器実測図 (3)



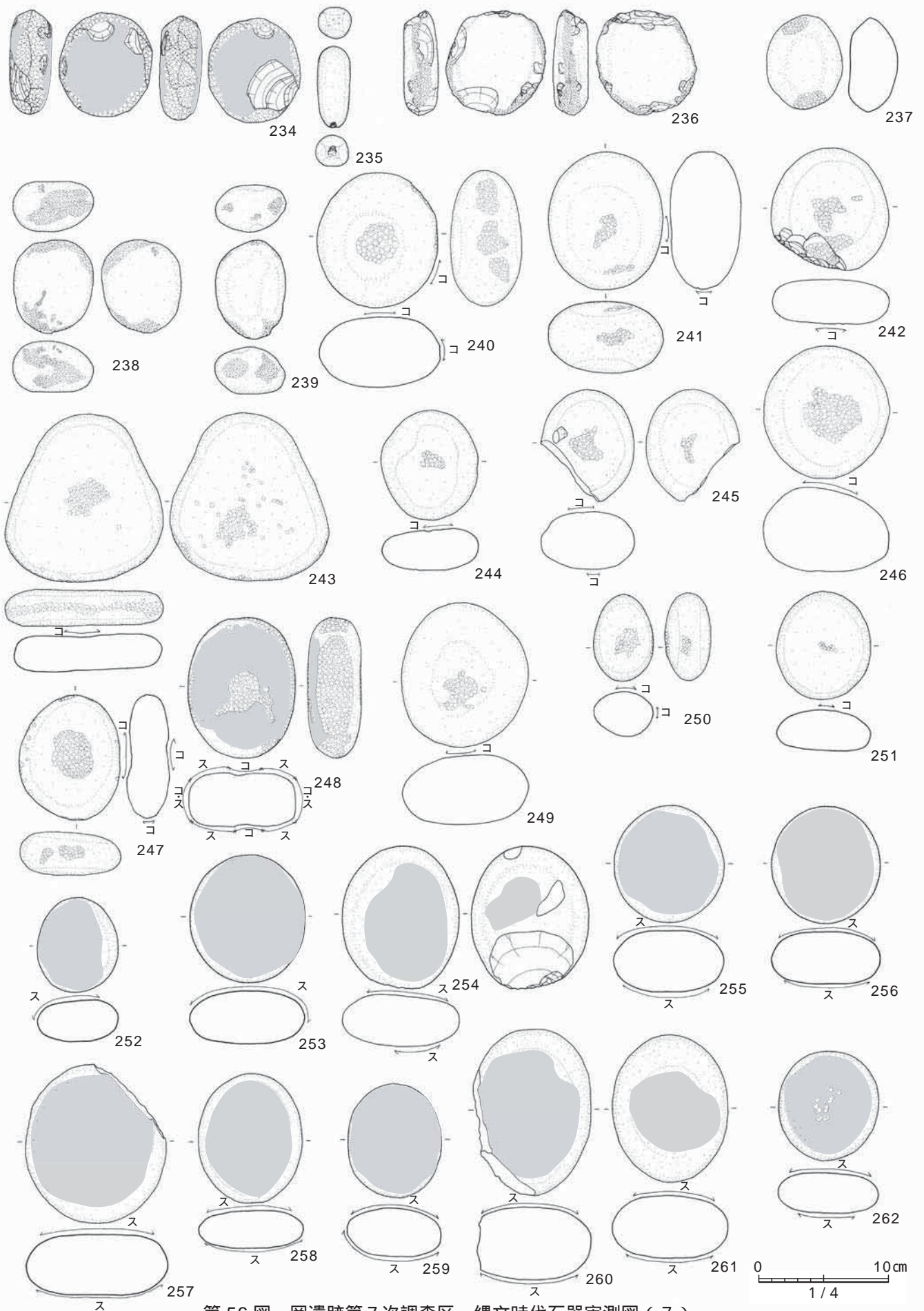
第53図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代石器実測図(4)



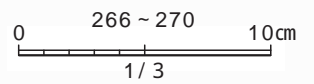
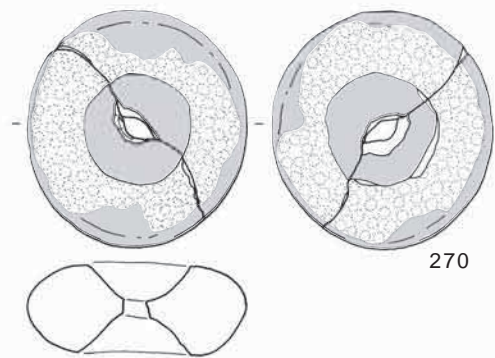
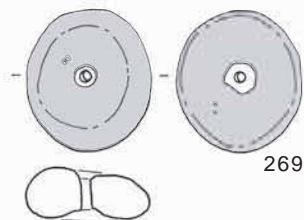
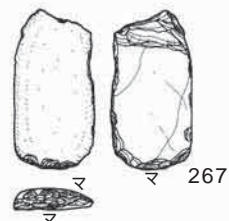
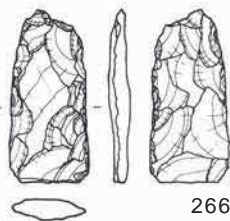
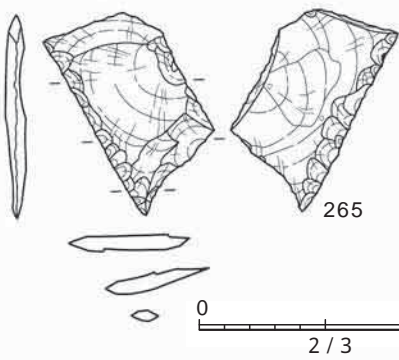
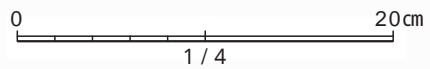
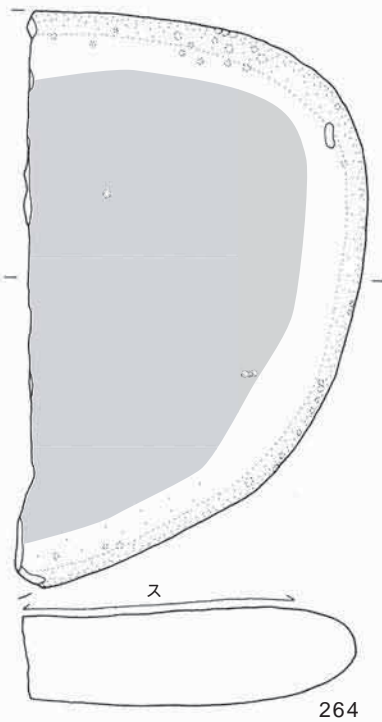
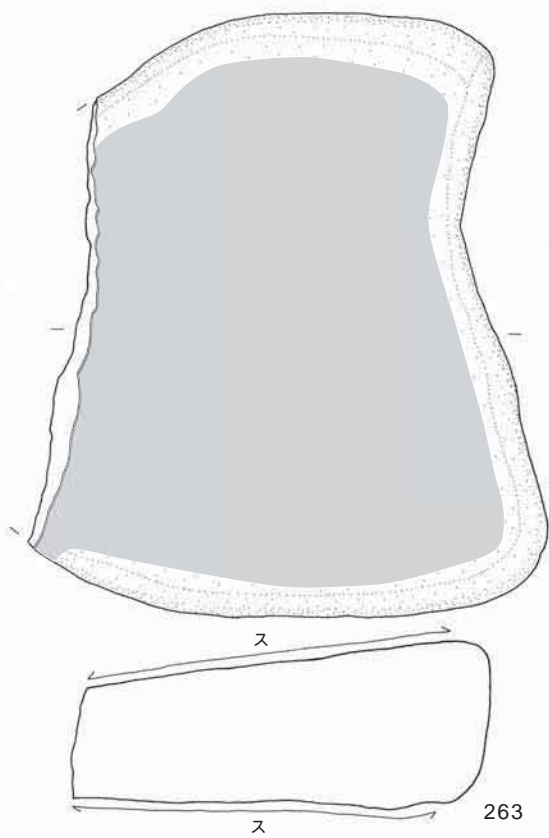
第54図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代石器実測図(5)



第 55 図 岡遺跡第 7 次調査区 縄文時代石器実測図 (6)



第56図 岡遺跡第7次調査区 縄文時代石器実測図(7)



第 57 図 岡遺跡第 7 次調査区 縄文時代石器実測図 (8)

第11表 岡遺跡第7次調査区 縄文土器観察表(1)

遺物番号	注記番号	時期	出土地点(区)	層	器種	部位(復元口径cm)	手法・調整等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
							内面	外面	内面	外面			
1	B3 -277	早期	B-3		深鉢	口縁部	縦位の短凹線文、山形押型文	山形押型文(表面剥落により不明瞭)	褐 (10YR4/3)	にぶい褐 (10YR5/4)	3mm以下の灰色粒を多く、4mm以下のにぶい褐色の粒を少量、微細な透明光沢粒、黒色光沢粒を多く含む	良好	
2	A2 -48	早期	A-2		深鉢	口縁部	口唇部から続く斜位のナデ、沈線文	縦位の山形押型文	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	2mm以下の灰白粒、1mm以下の透明光沢粒・黒色光沢粒を少量含む	良好	
3	B2 -291	早期	B-2		深鉢	口縁部	縦位の短凹線文(口唇付近)山形押型文	山形押型文	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	3mm以下の灰白粒、1mm以下の透明光沢粒・黒色光沢粒を多く含む	良好	
4	A3 -442	早期	A-3		深鉢	口縁部	横位の山形押型文、ナデ	斜位の山形押型文	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の灰白・褐灰粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む	良好	
5	B2 -302	早期	B-2		深鉢	口縁部	風化による表面剥落のため不明	楕円押型文	風化により不明	にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm以下の灰白粒、2mm以下の黒色針状粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む	良好	
6	B2 -248	早期	B-2		深鉢	口縁部	ナデ(風化により不明瞭)	楕円押型文(風化により不明瞭)	橙 5YR6/6	明赤褐 (5YR5/6)	8mm以下の灰白粒、2mm以下の褐灰粒、1mm以下の黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	
7	B2 -175	早期	B-2		深鉢	胴部	ナデ	楕円押型文	にぶい黄橙 (10YR6/4)	赤褐 (5YR4/6)	1mm以下の灰白粒を多く含む	良好	
8	A2 -53	早期	A-2		深鉢	口縁部付近	斜位の沈線文	楕円押型文(風化により不明瞭)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	3mm以下の灰色粒を多く含む	良好	
9	SH17	早期	SH17	SH17	深鉢	口縁部	棒状押圧文	格子目押型文	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下の灰白粒、黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	
10	B3 -52	早期	B-3		深鉢	口縁部	ナデ(風化により不明瞭)	無節縄文(風化により不明瞭)	浅黄 (2.5YR7/4)	黒褐 (10YR2/2)	3mm以下の灰白粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	良好	
11	G19	早期	B-2		深鉢	口縁部	ナデ	無節縄文	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の灰白粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	良好	
12		早期	-		深鉢	胴部	ナデ	撚糸文	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい赤褐 (5YR5/6)	5mm以下の赤褐粒、2mm以下の褐灰・橙粒、黒色針状粒、金色・透明光沢粒を含む	良好	
13	A4 -265	早期	A-4		深鉢	口縁部	貝殻条痕	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	灰黄褐 (10YR4/2)	2mm以下の灰白粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む	良好	円筒系深鉢
14	B2 -170	早期	B-2		深鉢	胴部	貝殻条痕のちナデ	横・縦位の貝殻条痕のちナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下の灰白・橙粒、2mm以下の褐灰粒・透明光沢粒を多く、4mm以下黄褐粒を少量含む	良好	貝殻円筒系深鉢
15	A4 -184	早期	A-4		深鉢	口縁部	ナデ	押圧刻目(口唇部)貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の褐灰粒、黒色針状粒、透明光沢粒を含む	良好	
16	B2 -271	早期	B-2		深鉢	口縁部	横位の貝殻条痕	横位の貝殻条痕	暗赤褐 (5YR3/2)	黒褐 (7.5YR3/2)	1mm以下の灰色粒、黒色・透明光沢粒を含む	良好	
17	B3 -1 + 62 + 166	早期	B-3		深鉢	口縁部	ナデ	貝殻条痕、長さ約5cmの刻目のある粘土紐が複数施されている	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	8mm以下の灰白粒、2mm以下の褐灰粒、透明光沢粒を含む	良好	天道ヶ尾式
18	A4 -111	早期	A-4		深鉢	口縁部	貝殻条痕	工具による刻目(口唇部)連続刺突文	にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下の灰白・橙粒、黒色針状粒、透明光沢粒を含む	良好	塞ノ神式
19	B2 -142 + B2 -137	早期	B-2		深鉢	胴部	ナデ(風化により不明瞭)	斜位の沈線文、貝殻条痕による連続刺突文	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の灰白粒、黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	塞ノ神式
20	B2 -85	早期	B-2		深鉢	底部	風化が著しいため不明瞭	風化が著しいため不明瞭、黒斑あり	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黄橙 (7.5YR8/8)	2mm以下の灰白・赤褐粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	良好	塞ノ神式
21	A4	早期	A-4		深鉢	胴部	ナデ(風化により不明瞭)	貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	橙 5YR6/6	4mm以下の灰白粒、2mm以下の褐灰・橙粒、透明光沢粒を含む	良好	塞ノ神式
22	B2 -149	早期	B-2		深鉢	胴部	ナデ	沈線文、貝殻条痕による3列刺突文	にぶい黄褐 (10YR6/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状粒、1mm以下の黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	塞ノ神式
23	B2 -139	早期	B-2		深鉢	胴部	ナデ(風化により不明瞭)	縦位の貝殻条痕のち沈線文(風化により不明瞭)	黒褐 (10YR3/2)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の灰白粒、2mm以下の黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	塞ノ神式
24	B3 -290	早期	B-3		深鉢	頸部付近	ナデ(風化により不明瞭)	横・斜位の沈線文(風化により不明瞭)	にぶい黄褐 (10YR4/3)	明黄褐 (10YR7/6)	2mm以下の黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	塞ノ神式
25	B2 -155	早期	B-2		深鉢	頸部付近	ナデ	横位の貝殻条痕、横方向に沈線が一本入る	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の灰色粒、黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	塞ノ神式
26	B3 -256	早期	B-3		深鉢	口縁部	ナデ(風化により不明瞭)	工具による押圧刻目(口唇部)貝殻条痕(風化により不明瞭)	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状粒、1mm以下の黒色針状粒、黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	鎌石橋式
27	B2 -316	早期	B-2		深鉢	口縁部	ナデ(風化により不明瞭)	貝殻条痕(風化により不明瞭)	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	4mm以下の灰白・褐灰粒、2mm以下の黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	鎌石橋式
28	B2 -100 + B3 -41 + B3 -89 + B3 -169	早期	B-2、B-3		深鉢	口・胴部	横位の貝殻条痕	押圧刻目(口唇部)縦・横位の貝殻条痕	橙 (7.5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	1mm以下の灰白粒、黒色・透明光沢粒を含む	良好	鎌石橋式
29	B3 -285	早期	B-3		深鉢	口縁部	風化が著しいため不明瞭	風化が著しいため不明瞭	黒褐 (10YR2/2)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	1mm以下の灰白粒・浅黄橙粒・黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	
30	B3 -314	早期	B-3		深鉢	口縁部	風化が著しいため不明瞭	風化が著しいため不明瞭	にぶい黄橙 (10YR7/4)	明黄褐 (10YR7/6)	2mm以下の灰白・明褐粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む	良好	
31	A4	早期	A-4		深鉢	胴部	横位の貝殻条痕	ナデ、半截竹管による連続刺突文	にぶい黄褐 (10YR5/4)	黒褐 (7.5YR3/2)	1mm以下の灰白粒、黒色・透明光沢粒を含む	良好	
32	A4	早期	A-4		深鉢	胴部	横位の貝殻条痕	ナデ、半截竹管による連続刺突文(突帯部分にも同文)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	黒褐 (7.5YR3/2)	1mm以下の灰白粒、黒色・透明光沢粒を含む	良好	
33	B3 -58	早期	B-3		深鉢	口縁部	横位のナデ	半截竹管による押引き文、波状文	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下の灰白粒、金色光沢粒を含む	良好	
34	B2 -304	中期	B-2		台付皿	口縁部	ナデ(風化により不明瞭)	ナデ(風化により不明瞭)	黒褐 (5YR3/1)	黒褐 (5YR3/1)	1mm以下の灰白・橙粒、黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	
35		晩期	-		鉢	口縁部	ナデ	ナデ、突帯文	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下の褐灰・橙粒、透明光沢粒を含む	良好	
36	A4 -277、A4 -140 + 277 + 335	晩期	A-4		鉢	口・胴部	横位のナデ、貝殻条痕(風化のため不明瞭)	横位のナデ、貝殻条痕(風化のため不明瞭)、突帯文	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	6mm以下の黄褐・黒褐の粒、3mm以下の褐色粒、黒色・金色透明光沢粒を含む	良好	
37	A2 -16 + 19 + 22 + A3 -117	晩期	A-2、A-3		鉢	口縁部	横位のナデ、貝殻条痕	横位のナデ、突帯文	にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	2mm以下の灰白・褐灰・淡橙粒、金色光沢粒を含む	良好	
38	A1 -7	晩期	A-1		鉢	口縁部(35.5cm)	横位のナデ	横位のナデ、擬似突帯文	にぶい黄褐 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の灰白・浅黄橙粒、黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	
39	A4 -66	晩期	A-4		鉢	口縁部(32.7cm)	横位のナデ	横位のナデ、擬似突帯文	にぶい黄褐 (10YR5/3)	褐灰 (10YR4/1)	6mm以下の灰白の粒、3mm以下の黒色・透明光沢粒を含む	良好	
40	B3 -170	晩期	B-3		鉢	口縁部(22.2cm)	横位の貝殻条痕	横位のナデ、擬似突帯文	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の黒色・透明光沢粒を多く含む	良好	

岡遺跡第7次調査区 縄文土器観察表(2)

遺物番号	注記番号	時期	出土地点(区)	層	器種	部位(復元口径cm)	手法・調整等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
							内面	外面	内面	外面			
41	A4-138	晩期	A-4		鉢	口縁部(29.7cm)	横位のナデ	横位のナデ、擬似突帯文	黄褐(10YR5/6)	にぶい黄褐(10YR5/4)	2mm以下の灰白・褐灰・橙粒、金色光沢粒を含む	良好	外面に煤付着
42	B2-50+64	晩期	B-2		鉢	口縁部	横位のナデ	横位のナデ、擬似突帯文	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm以下の灰白・褐色粒、無色透明光沢粒を含む	良好	
43	A3-37	晩期	A-3		鉢	口縁部	横位の粗いナデ	横位のナデ、擬似突帯文	黒(10YR2/1)	黒褐(10YR3/1)	2mm以下の灰白・褐色粒、無色透明光沢粒を含む	良好	
44	B3-84	晩期	B-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位のナデ、擬似突帯文	明黄褐(10YR6/6)	橙(5YR6/6)	2mm以下の灰白・褐色粒、無色透明光沢粒を含む	良好	
45	A3-22+C21Gr	晩期	A-3		鉢	口縁部	横位の貝殻条痕文	横位のナデ、擬似突帯文	黒褐(2.5YR3/1)	オリーブ黒(5Y3/1)	1mm以下の灰白・褐色粒、無色透明光沢粒を含む	良好	
46	A3-103	晩期	A-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位のナデ、擬似突帯文	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm以下の灰白・褐色粒、無色透明光沢粒を含む	良好	
47	B3-199	晩期	B-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位の粗い工具ナデ、擬似突帯文	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	3mm以下の浅黄橙・灰白粒、1mm以下の無色透明光沢粒を含む	良好	
48	A3-178	晩期	A-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位の粗い工具ナデ、貼付突帯文	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR6/6)	2mm以下の灰白・褐色粒、無色透明光沢粒を含む	良好	
49	A3-276	晩期	A-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位の粗い工具ナデ、貼付突帯文	明褐(7.5YR5/8)	明褐(7.5YR5/6)	3mm以下の灰白・褐色・黒色粒、無色透明粒を含む	良好	
50	B2-274	晩期	B-2		鉢	口縁部	横位のナデ	横位の粗い工具ナデ、貼付突帯文	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	1mm以下の灰白・褐灰粒、金色光沢粒を含む	良好	
51	A3-228	晩期	A-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位の工具ナデ、貼付突帯文	にぶい黄褐(10YR5/4)	橙(7.5YR6/6)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状光沢粒を多く含む	良好	
52	A3-165	晩期	A-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位の工具ナデ、貼付突帯文	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	1mm以下の灰白・褐灰粒、透明光沢粒を含む	良好	
53	A3-443	晩期	A-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位のナデ、貼付突帯文	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	2mm以下の灰白・褐灰粒、透明光沢粒を含む	良好	
54	B3-143	晩期	B-3		鉢	口縁部(27.8cm)	横位のナデ	横位の粗いナデ、貼付突帯文	灰黄褐(10YR4/2)	黒褐(10YR3/1)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状光沢粒・金色光沢粒を含む	良好	
55	A4-189	晩期	A-4		鉢	口縁部	横位のナデと貝殻条痕文	横位のナデと貝殻条痕文、貼付突帯文	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄褐(10YR5/4)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状光沢粒・無色光沢粒を含む	良好	
56	B2-189	晩期	B-2		鉢	口縁部	横位のナデと貝殻条痕文	横位のナデと貝殻条痕文、貼付突帯文	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm以下の灰白・黒色粒、無色透明光沢粒・金色光沢粒を含む	良好	外面に煤付着
57	A4-374	晩期	A-4		鉢	口縁部	横位のナデと貝殻条痕文	横位のナデ、貼付突帯文	にぶい黄橙(10YR6/4)	明黄褐(10YR6/6)	2mm以下の灰白粒、1mm以下の褐灰粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
58	B2-28	晩期	B-2		鉢	口縁部	横位の工具ナデ	横位のナデ、貼付突帯文	暗灰黄(2.5Y4/2)	灰黄褐(10YR4/2)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状光沢粒・透明光沢粒を多く含む	良好	
59	B2-40+B3-147+148	晩期	B-2、3		浅鉢	口縁部(30.0cm)	横位の貝殻条痕文	横位の工具ナデ、貼付突帯文とその下に未貫通の孔列文	暗灰黄(2.5Y5/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	3mm以下の浅黄橙、1mm以下の黒色光沢粒・無色光沢粒を含む	良好	
60	A4-221+222+229	晩期	A-4		鉢	口縁部	横位の工具ナデ	横位の工具ナデ、貼付突帯文とその下に未貫通の孔列文	黒褐(2.5Y3/1)	黒褐(2.5Y3/1)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
61	B3-252	晩期	B-3		鉢	口縁部	横位の工具ナデ	横位の工具ナデ、貼付突帯文とその下に未貫通の孔列文	褐灰(7.5YR4/1)	褐灰(7.5YR4/1)	1mm以下の灰白・褐灰粒、金色光沢粒を含む	良好	
62	B3-105	晩期	B-3		鉢	口縁部	横位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕文、貼付刻目突帯文とその下に未貫通の孔列文	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm以下の灰白・黒色粒、黒色針状光沢粒・金色光沢粒を含む	良好	外面に煤付着
63	B3-103	晩期	B-3		鉢	口縁部	横位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕文、貼付刻目突帯文とその下に未貫通の孔列文	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm以下の黒色粒、1mm以下の灰白粒、金色光沢粒を含む	良好	外面に煤付着
64	B2-166	晩期	B-2		鉢	口縁部	横位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕文、貼付刻目突帯文	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR7/6)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
65	B3-135	晩期	B-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位のナデ、貼付刻目突帯文	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR5/4)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
66	B3-255+320+321	晩期	B-3		鉢	口縁部(34.1cm)	横位のナデ	横位の工具ナデ(ミガキに近い)、貼付刻目突帯文	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	一箇所穿孔あり
67	B3-113+145+150	晩期	B-3		鉢	口縁部	横位のナデ	横位のナデ、貼付刻目突帯文	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
68	A4-126+275+320	晩期	A-4		鉢	口縁部	横位の工具ナデ	横位の粗い工具ナデ	褐(7.5YR4/4)	黒褐(10YR3/2)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
69	B2-39	晩期	B-2		鉢	口縁部	横位の工具ナデ	横位の工具ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
70	B2-82	晩期	B-2		鉢	口縁部	横位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕文	褐灰(10YR4/1)	黒褐(10YR3/1)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
71	A4-311	晩期	A-4		鉢	口縁部	横位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕文	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
72	B3-99+136	晩期	B-3		鉢	口縁部(23.4cm)	横位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕文	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
73		晩期	-		鉢	底部	横位の工具ナデ	横位の工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR6/6)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
74	B3-36	晩期	B-3		鉢	底部	横位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕文	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(7.5YR7/4) 褐灰(10YR4/1)	2mm以下の灰白・黒色粒、黒色針状光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
75	B2-133	晩期	B-2		鉢	底部	横位のナデ	横位のナデ	黒(2.5YR2/1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・無色透明光沢粒を含む	良好	
76	A4-144+146+382+384	晩期	A-4		鉢	口縁-胴部(36.4cm)	横位の工具ナデ、指押さえ、指ナデ、接合痕あり	横位の工具ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	黒褐色(5YR3/1)	1mm以下の灰白粒、黒色光沢・金色光沢・透明光沢粒を含む	良好	
77	A4-165+251	晩期	A-4		深鉢	口縁-頸部	横位の工具ナデ	斜位(右下がり)の工具ナデ	にぶい黄褐(10YR5/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	1mm以下の灰白・褐灰粒、透明光沢粒を含む	良好	外面に煤付着
78	A4-375	晩期	A-4		深鉢	口縁部	横位の工具ナデ	横位の工具ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	2mm以下の灰白・褐灰粒、透明光沢粒を含む	良好	外面に煤付着
79	A4-375	晩期	A-4		鉢	口縁部	横位の工具ナデ	横位のナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	2mm以下の灰白・褐灰粒、黒色光沢粒・透明光沢粒を含む	良好	外面に煤付着
80	B2-65	晩期	B-2		鉢	胴部	横位の貝殻条痕文、ナデ	横位のナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい褐(7.5YR6/4)	2mm以下の灰白・褐灰・黒色粒、黒色光沢粒・透明光沢粒を含む	良好	風化著しい

岡遺跡第7次調査区 縄文土器観察表(3)

遺物番号	注記番号	時期	出土地点(区)	層	器種	部位(復元口径cm)	手法・調整等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
							内面	外面	内面	外面			
81	B2 -84	晩期	B-2		深鉢	底部底径10.0cm)	貝殻条痕文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm以下の灰白・褐灰・橙粒、黒色針状光沢粒・金色光沢粒を含む	良好	
82	A4 -312	晩期	A-4		深鉢	底部底径8.2cm)	ナデ、工具ナデ	斜位の工具ナデ、底部はナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	1mm以下の灰白・褐灰・黄橙粒、金色光沢粒を含む	良好	
83	A4 -379	晩期	A-4		深鉢	底部底径9.8cm)	ナデ	横位のナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(5YR6/6)	1mm以下の灰白・褐灰・黒色針状光沢・透明光沢粒を含む	良好	風化著しい
84	A4 -167	晩期	A-4		深鉢	底部底径6.4cm)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	1mm以下の灰白・褐灰・黒色・透明粒を含む	良好	風化著しい
85	A1 -34	晩期	A-1		深鉢	底部底径9.6cm)	ナデ、指押さえ痕	ナデ	にぶい黄褐(10YR5/4)	橙(7.5YR6/6)	2mm以下の灰白・褐灰・透明粒を含む	良好	風化著しい
86	B3 -229 +230	晩期	B-3		浅鉢	底部付近	貝殻条痕文、ナデ	組織痕	にぶい黄橙(10YR6/4)	明黄褐(10YR7/6)	2mm以下の灰白・褐灰・黒色粒、黒色針状光沢粒・透明光沢粒を含む	良好	
87	A4 -387	晩期	A-4		浅鉢	底部	貝殻条痕文	組織痕	黒褐(7.5YR3/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm以下の灰白・褐灰・黒色粒、透明光沢粒を含む	良好	
88	A4 -286	晩期	A-4		浅鉢	底部	貝殻条痕文、工具ナデ	組織痕	にぶい黄褐(10YR5/3)	橙(7.5YR7/6)	2mm以下の灰白・褐灰・黒色粒、透明光沢粒を含む	良好	
89	B2 -194	晩期	B-2		浅鉢	底部	ナデ	組織痕	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR7/6)	1mm以下の灰白・褐灰・黒色針状光沢粒・透明光沢粒を多く含む	良好	
90	A4 -334	晩期	A-4		浅鉢	底部	貝殻条痕文	組織痕	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm以下の灰白・褐灰・黒色粒、透明光沢粒を含む	良好	
91	B2 -136	晩期	B-2		鉢	口縁部	縦方向の貝殻条痕文、口唇部は横ナデ	沈線文	明褐(7.5YR5/6)	明褐(7.5YR5/6)	1mm以下の灰白・褐灰・黒色粒、金色光沢粒を含む	良好	
92	+A4 -226	晩期	A-4		浅鉢	口縁部	工具ナデ	ミガキ	にぶい黄褐(10YR5/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm以下の灰白・褐灰・金色光沢粒を含む	良好	
93	l	晩期	-		鉢	口縁部	横方向のミガキ	ナデ	黄灰(2.5Y4/1)	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm以下の灰白・褐灰・浅黄粒を含む	良好	
94	l	晩期	-		浅鉢	口縁部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	黄灰(2.5Y4/1)	灰黄(2.5Y6/2)	1mm以下の灰白・褐灰・浅黄粒・透明光沢粒を含む	良好	
95	A3 -416	晩期	A-3		浅鉢	口縁部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	黄褐(2.5Y5/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	1mm以下の灰白・褐灰・黒色光沢粒を含む	良好	
96	l	晩期	-		浅鉢	口縁部	横方向のミガキ	横方向のミガキ、口唇付近に1mm以下幅の薄い沈線がある	灰褐(5YR4/2)	にぶい赤褐(5YR4/4)	0.5mm以下の灰白粒、金色光沢粒を含む	良好	
97	l	晩期	-		浅鉢	口縁部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	黒褐(10YR3/1)	灰黄褐(5YR4/2)	0.5mm以下の灰白・黒色粒、金色光沢粒を含む	良好	
98	A3 -80	晩期	A-3		浅鉢	口縁部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	褐(7.5YR4/3)	灰褐(7.5YR4/2)	0.5mm以下の灰白・橙粒、金色光沢粒を含む	良好	
99	A3 -7	晩期	A-3		浅鉢	口縁部	横方向のミガキ、工具痕	横方向のミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	褐灰(10YR4/1)	0.5mm以下の灰白粒、黒色光沢粒を含む	良好	
100	B2 20	晩期	B-2		浅鉢	口縁部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5mm以下の灰白・黒色粒、透明光沢粒を含む	良好	
101	B2 -297	晩期	B-2		浅鉢	頸部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい褐(7.5YR5/4)	褐灰(7.5YR4/1)	0.5mm以下の灰白・褐灰・黒色光沢・金色光沢粒を含む	良好	
102	B2 -90	晩期	B-2		浅鉢	胴部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	黒(10YR2/1)	にぶい黄橙(10YR6/3)	0.5mm以下の灰白・褐灰・黒色光沢粒を含む	良好	
103	B3 -92 +178	晩期	B-3		浅鉢	底部	横方向のミガキ、工具痕	横方向のミガキ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	0.5mm以下の灰白・褐灰・黒色光沢粒を含む	良好	
104	A1 -81	晩期	A-1		浅鉢	胴部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	0.5mm以下の灰白・褐灰・赤褐粒、黒色光沢・透明光沢粒を含む	良好	
105	A4 -91	晩期	A-4		鉢	底部	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	1mm以下の灰白・褐灰・黒色粒、透明光沢粒を含む	良好	
106	A2 -2	縄文?	A-2		脚付鉢	脚部底径6.4cm)	ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm以下の灰白・褐灰・黒色針状光沢・透明光沢粒を含む	良好	

第12表 岡遺跡第7次調査区 縄文時代石器計測表(1)

遺物番号	注記番号	出土地点(区)	層	器種	石材	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
107	B2 35	B-2		石核	姫島産黒曜石	2.7	4.3	1.5	15.10
108	h	B-3		石核	姫島産黒曜石	3.5	2.9	1.9	12.80
109	B3 189	B-3		石核	チャート	3.5	2.6	1.0	9.25
110	A2 21	A-2		石核	珪質頁岩	3.5	2.3	1.4	9.30
111	e	A-4		剥片	姫島産黒曜石	5.7	5.2	1.2	31.10
112	B2 60	B-2		剥片	姫島産黒曜石	3.5	6.4	1.3	34.80
113	B2 63	B-2		剥片	姫島産黒曜石	4.8	6.3	1.1	29.60
114	B2 60+B2 63	B-3		接合資料	姫島産黒曜石	4.7	9.6	1.4	64.40
114	B3 79	B-3		?	砂岩	15.4	10.7	3.8	826.40
115	B3 122	B-3		剥片	砂岩	10.4	5.4	1.2	70.90
116	A2 67	A-2		使用痕剥片	珪質頁岩	4.4	5.6	0.9	24.40
117	B3 279	B-3		使用痕剥片	珪質頁岩	5.4	2.4	1.4	18.40
118	B3 57	B-3		石鏃	珪質頁岩	2.9	2.4	0.4	1.98
119	B3 221	B-3		石鏃	チャート	2.6	1.7	0.4	1.71
120	A4 391	A-4		石鏃	チャート	1.6	1.6	0.4	0.79
121	B3 163	B-3		石鏃	凝灰岩	2.4	2.0	0.5	1.54
122	表土	-		石鏃	チャート	1.6	1.7	0.4	0.67
123	B3 301	B-3		石鏃	チャート	2.9	1.7	0.4	1.33
124	A3 197	A-3		石鏃	チャート	1.9	1.4	0.3	0.60
125	B3 45	B-3		石鏃	チャート	1.9	1.3	0.4	0.58
126	B3 317	B-3		石鏃	チャート	2.9	2.3	0.5	2.52
127	B3 232	B-3		石鏃	チャート	2.7	1.7	0.4	1.42
128	B3 318	B-3		石鏃	チャート	2.6	2.0	0.4	1.59
129	A4 345	A-4		石鏃	姫島産ガラス質安山岩	1.5	1.6	0.4	0.67
130	B3 305	B-3		石鏃	チャート	2.4	2.1	0.5	1.77
131	A3 500	A-3		石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.60
132	B3 324	B-3		石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.52
133	A2 97	A-2		石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.8	0.4	1.07
134	B3 56	B-3		石鏃	チャート	2.0	1.5	0.4	0.81
135	B3 303	B-3		石鏃	チャート	2.4	1.4	0.5	1.28
136	G21	A-3		石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.1	0.2	0.15
137	H20	B-3		石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.78
138	表土	-		石鏃	チャート	1.3	1.0	0.2	0.25
139	A3 192	A-3		石鏃	チャート	2.0	1.6	0.4	1.02

第4節 弥生時代～古墳時代の遺物

縄文時代の遺物に比べると数は圧倒的に少ないが弥生時代末葉から古墳時代初頭と古墳時代中期以降に見られる遺物も出土している。

碗（第58図271）

271は底部から口縁部にかけて垂直に立ち上がり、作りはとて粗く指ナデ痕や粘土紐の輪積みの様子ははっきり観察できる。

鉢（第58図272）

272は器高9.6cmの鉢形土器である。内面・外面ともにミガキ調整が見られる。

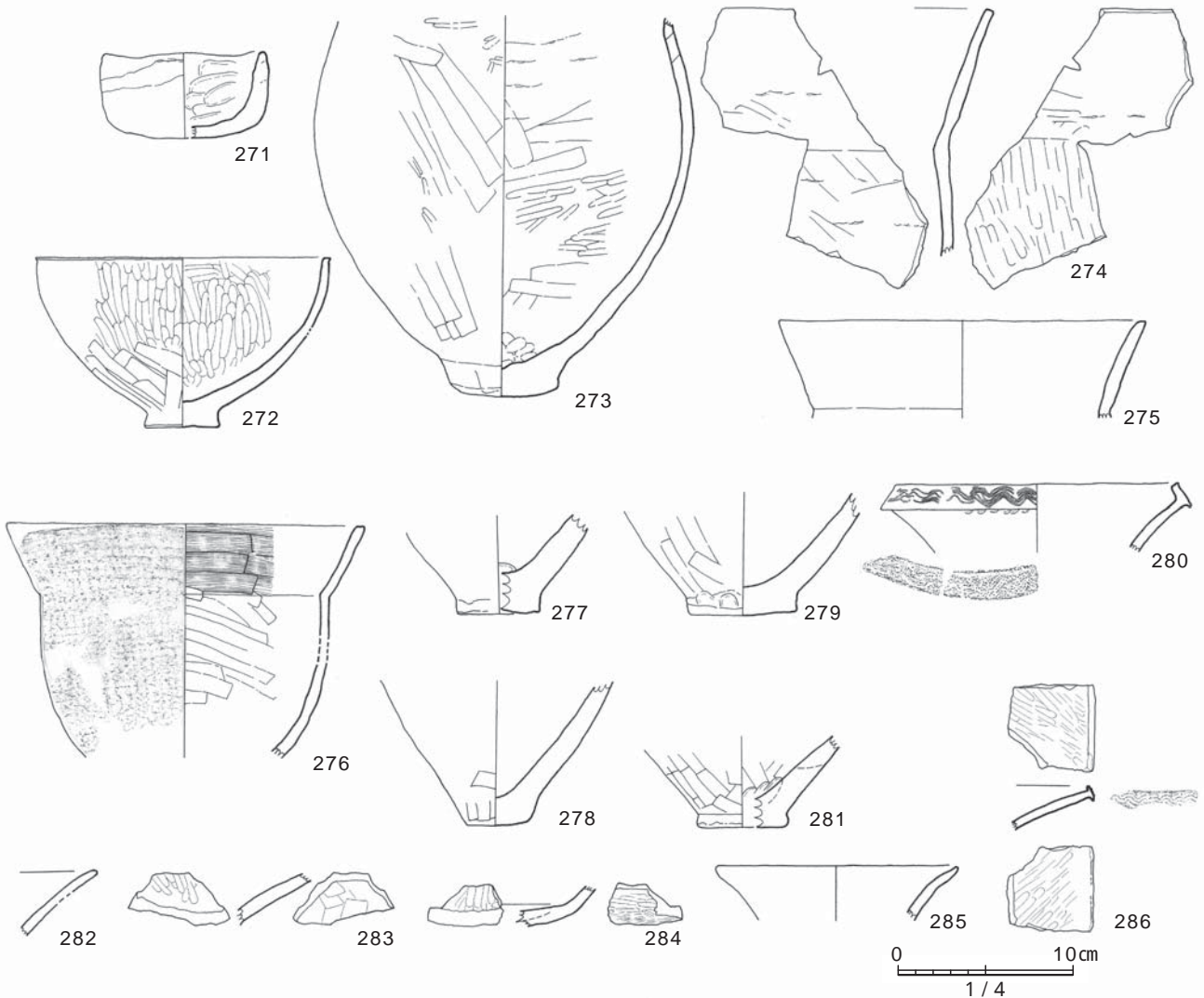
甕（第58図273～279）

273～279は甕である。273は調査区内で出土し

た遺物の中では一番残存率がよい。内面・外面ともに板状の工具によるナデが施され、内面の一部にミガキ調整が見られる。276は内面の調整が8条一単位の八ケ目で施され、外面は格子目タタキ痕が明瞭である。277～279には内面に（279は外面に）指押さえ痕が残る。

壺（第58図280、281）

280は複合口縁壺の口縁部片である。厚みが薄く、口唇部で内側に屈曲しており、櫛描波状文が施されている。281は、内・外面ともに工具ナデがみられ、内面の底部には指ナデ痕も観察できる。



第58図 岡遺跡第7次調査区 弥生時代～古墳時代土器実測図

高坏 (第58図282 ~ 285)

282 ~ 285は高坏の坏部片である。調査区では坏部の口縁部片と底部片のみが出土し、脚部は一片も出土しなかった。内面・外面ともにミガキあるいは工具によるナデ調整が見られる。

装飾高坏 (第58図286)

286は装飾高坏の口縁部片である。内・外面ともに工具によるナデ調整後、さらにミガキ調整をしていることが観察できる。また、口唇部には櫛描波状文が施されている。

第13表 岡遺跡第7次調査区 弥生時代~古墳時代土器観察表

遺物番号	注記番号	出土地点(区)	層	器種	部位 復元口径(cm)	手法・調整等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
						内面	外面	内面	外面			
271	A3-578	A-3		埴	口縁部~底部(底径9.0cm)	横方向の指ナデ	ナデ、接合痕がはっきり見える	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR7/6)	2mm以下の橙粒、1mm以下の灰白・褐灰粒、0.5mm以下の金色粒を含む	良好	
272	I+A4-170+173+257	A-4	I	鉢	口縁部 口径16.9cm -底径 底径4.2cm	縦方向のミガキ、口縁部・底部付近は横ナデ	縦方向のミガキ、底部付近はミガキのち斜位の工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm以下の橙・灰白粒、0.5mm以下の金色粒を含む	良好	器高9.6cm
273	B2-176	B-2		甕	頸部~底径 底径6.3cm	斜・横位の板工具ナデ、ミガキ、粘土の接合痕あり	ミガキのち斜位の工具ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm以下の灰白・褐灰粒、黒色針状光沢を含む	良好	煤付着
274	B2-18+21+27	B-2		甕	口縁部~胴部	口縁付近は横ナデ、板工具ナデ	口縁付近は横ナデ、横・斜・縦位に板状の工具ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	1mm以下の灰白粒、黒色光沢粒を多く含む	良好	煤付着
275	A4-158+159	A-4		甕	口縁部 口径20.9cm	横位の工具ナデ	横位の工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	黒褐(2.5Y3/2)	4mm以下の灰白粒、0.5mm以下の黒色光沢粒を多く含む	良好	
276	I+A3-94	A-3	I	甕	口縁部 口径20.3cm)-胴部	口縁部~頸部は横方向のハケ目(8条1単位) 胴部は斜位の工具ナデ	ナデのち格子目タタキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	4mm以下の褐灰粒、1mm大の赤褐色粒、0.5mm以下の金色粒を含む	良好	煤付着
277	B2-252	B-2		甕	底部 底径4.7cm	ナデ、指押さえ痕	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	5mm以下の褐灰・白・橙粒を多く、0.5mm以下の黒色光沢粒を含む	良好	
278	A421+	A-4		甕	底部 底径3.6cm	ナデ、指押さえ痕	粗い工具ナデ	淡黄(2.5Y8/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	5mm以下の灰黄褐・灰白粒を多く、0.5mm以下の透明光沢粒を含む	良好	炭化物付着
279		-		甕	底部 底径6.0m	粗いナデ	粗い工具ナデ、指押さえ痕あり	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	2mm以下の褐灰・白・橙粒を多く、1mm以下の黒色光沢・透明光沢粒を含む	良好	
280		-		壺	口縁部 口径16.0cm	横ナデ	口唇部に櫛描波状文、指押さえ痕、ナデ	橙(5YR7/6)	橙(2.5Y6/8)	2mm以下の灰白・褐灰粒を多く、1mm以下の黒色光沢・透明光沢粒を含む	良好	複合口縁壺
281		-		壺	底部 底径4.3cm	工具ナデ、指ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	3mm以下の灰白・橙粒、0.5mm以下の金色粒を含む	良好	
282	A3-345	A-3		高坏	口縁部	風化のため調整不明瞭	風化のため調整不明瞭	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	1mm以下の灰白・橙粒を含む	良好	
283	カベ	-	-	高坏	口縁部付近	ミガキ	工具ナデ	橙(5YR7/6)	にぶい橙(5YR7/4)	1mm以下の灰白・赤褐・黒色粒を含む	良好	
284	A3-596	A-3		高坏	坏部	ミガキ	ミガキ	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	0.5mm以下の灰白・赤褐・黒色粒を含む	良好	
285	A3F21	A-3		高坏	口縁部	工具ナデ	工具ナデ	明赤褐(2.5Y5/6)	明赤褐(2.5Y5/6)	1mm以下の灰白・褐灰粒を含む	良好	
286		-		装飾高坏	口縁部	工具ナデのちミガキ	口唇部に櫛描波状文、工具ナデのちミガキ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	1mm以下の灰白・褐灰粒、透明光沢粒を含む	良好	

第5節 古代の遺物

出土した古代の遺物はほとんどが土師器で須恵器が1点出土した。

土師器 (第59図287 ~ 293)

287 ~ 293は土師器で、294 ~ 300は回転台土師器、301は布痕土師器である。

287は埴の底部片で、内・外面ともにナデ調整、外面の一部には指ナデの痕も観察できる。288 ~ 291は甕の口縁部片で、内・外面ともに多くは工具ナデでの調整が施されているが、290・291の内面には工具ケズリの調整も観察できる。288・290・291は口縁部から頸部にかけてくの字に外反している。289は斜め方向に立ち上がり、口唇部がやや外反する。

292・293は甗の可能性がある。292は内・外面ともにナデ調整、また粘土の繋ぎ目が観察できる。293

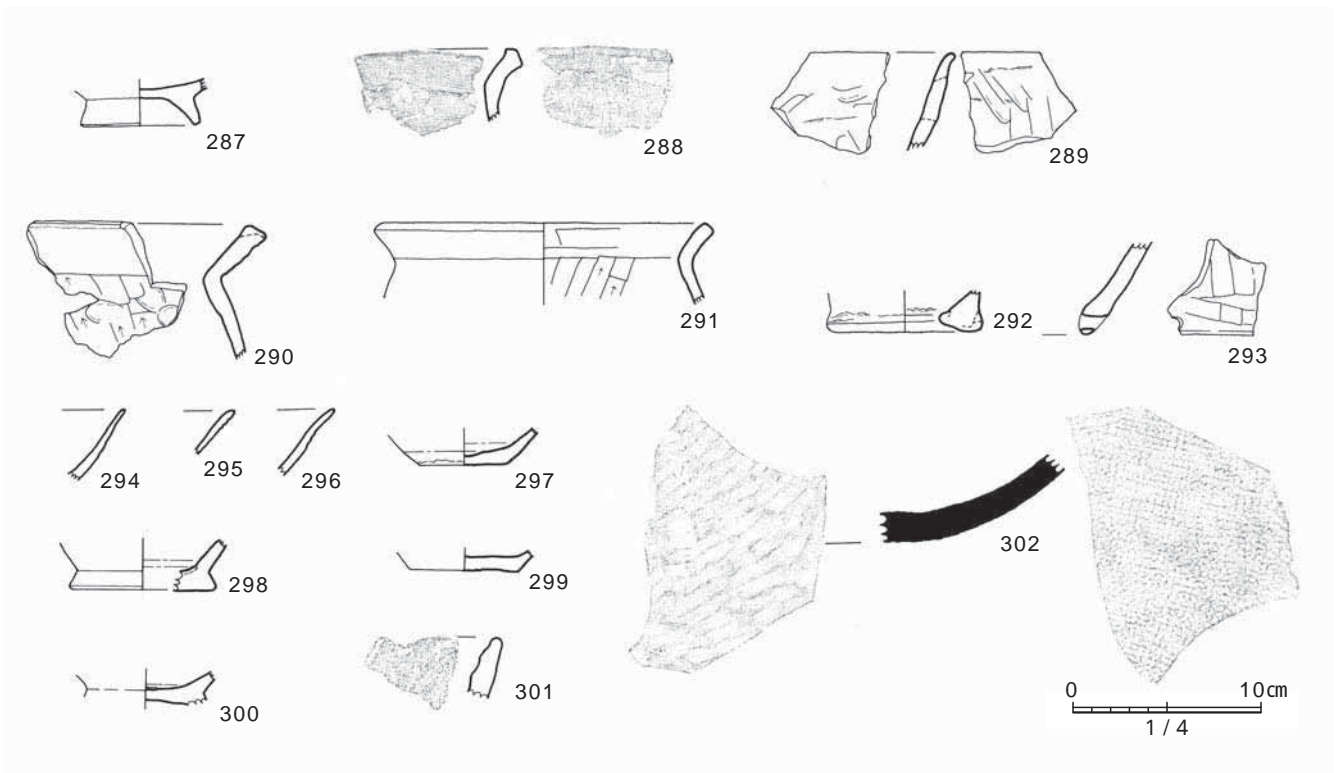
は内・外面ともに工具ナデが施され、また、穿孔も1箇所ある。

294 ~ 300は坏の口縁部片あるいは底部片である。299は坏としているが、皿の可能性も考えられる底部片である。それぞれの底部片はヘラ切り離しである。

301は布痕土師器の口縁部片である。内面に布痕が見られる。外面にはナデ調整が見られるが、風化が進んでいるため不明瞭である。

須恵器 (第59図302)

302は須恵器の甕の底部付近の破片で、内面にはタタキ痕、外面には格子目タタキ痕が明瞭である。



第 59 図 岡遺跡第 7 次調査区 古代土器実測図

第 14 表 岡遺跡第 7 次調査区 古代土器観察表

遺物番号	注記番号	出土地点(区)	層	器種	部位(復元口径cm)	手法・調整等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
						内面	外面	内面	外面			
287	A4-236	A-4		碗	脚部(底径5.6cm)	ナデ	ナデ、指ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm以下の灰白粒、黒色針状光沢・透明光沢粒を含む	良好	
288		-		甕	口縁部	工具ナデ	工具ナデ、指押さえ痕あり	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	1mm以下の灰白粒、透明光沢粒を含む	良好	
289	A1-81	A-1		甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	4mm以下の褐色粒を多く含む	良好	
290		-		甕	口縁部	横方向のナデ、ケズリ、指押さえ痕あり	横方向のナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm以下の灰白・褐灰粒を多く含む	良好	
291		-		甕	口縁部(口径17.0cm)	工具ケズリ	横方向の工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	3mm以下の灰白・褐灰粒を多く含む	良好	
292		-		甕?	底部(底径7.3cm)	ナデ、粘土の繋ぎ目あり	ナデ、粘土の繋ぎ目あり	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	2mm以下の灰白・褐灰粒を含む	良好	
293	A2-42	A-2		甕?	底部	工具ナデ	工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mm以下の灰白・褐灰粒を含む	良好	穿孔あり
294		-		坏	口縁~坏部	回転ナデ	回転ナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	1mm以下の灰白・褐灰粒を含む	良好	
295	B3-114	B-3		坏	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm以下の灰白・褐灰粒を含む	良好	
296		-		坏	口縁~坏部	回転ナデ	回転ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	3mm以下の明赤褐色粒を含む	良好	
297	A4-187	A-4		坏	底部	回転指ナデ、上方向へのナデ	工具による回転ナデ、底部はヘラ切り離し、粘土のかえりあり	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	2mm以下の灰白・赤褐色粒を含む	良好	
298		-		坏	底部	工具による回転ナデ	工具による回転ナデ、底部はヘラ切り離し	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	2mm以下の赤褐色粒を極少量、1mm以下の褐灰粒、黒色光沢粒を含む	良好	
299		-		坏?皿?	底部	工具による回転ナデ	工具による回転ナデ、底部はヘラ切り離し	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	1mm以下の赤褐色粒を含む	良好	
300	A4-123	A-4		坏	底部	回転指ナデ	工具による回転ナデ、底部はヘラ切り離し	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(7.5YR8/4)	1mm以下の褐灰色粒を含む	良好	
301		-		布痕土器	口縁部	布痕	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	3mm以下の灰白粒を含む	良好	
302		-		甕	底部	タタキ	格子目タタキ	灰黄(2.5Y7/2)	灰(7.5Y6/1)	4mm以下の灰白粒を極少量含む	良好	須恵器

第6節 中世～近世の遺構と遺物

6-1. 遺構

A - 3、4区、B - 2、3区の 層上面にて、ピットを81基検出した。これらのピットは、特にA - 3区、B - 2区に集中していた。ピットの埋土はどれも暗褐色（Hue10YR3/4）で、粘性はやや低く、しまりは中程度、灰白・褐灰粒（～4mm程度まで）を含む。中には遺物が混入しているピットもあり、縄文土器片から陶磁器片まで見られた。また、柱痕跡が見られるものもあり、その中から掘立柱建物跡5棟が検出できた。

掘立柱建物（SB）

遺構の埋土中から出土した遺物の中で、洪武通寶が出土したことから、これらのピットや掘立柱建物は洪武通寶の流通以降である室町時代中期～江戸時代初期の遺構ではないかと考えている。

SB1（第61図）

B - 2区、F - 19グリッドで検出された。建物の主軸は南北方向にある。規模は1間（梁行1.90m）×1間（桁行2.72m）、身舎面積は5.17㎡、4本の柱穴から構成される。各柱穴は直径が30～40cm、検出面からの深さは20～40cmを測る。柱穴の埋土中より遺物は出土していない。

SB2（第61図）

B - 2区、F - 19グリッドで検出された。建物の主軸は東西方向にある。規模は1間（梁行2.88m）×2間（桁行3.72m）、身舎面積は10.71㎡、6本の柱穴から構成される。各柱穴は直径が30～40cm、検出面からの深さは40～50cmを測る。P3・P5からは柱痕跡が見られた。P2・P5の埋土には縄文土器が混入していた。

SB3（第62図）

B - 2区、F - 19グリッドで検出された。建物の主軸は東西方向にある。規模は1間（梁行2.83m）×2間（桁行3.95m）、身舎面積は11.18㎡、6本の柱穴から構成される。各柱穴は直径が30～40cm、検出面からの深さは20～50cmを測る。P5からは柱痕跡が見られた。柱穴の埋土中より遺物は出土していない。

SB4（第62図）

B - 2区、F - 19グリッドで検出された。建物の主軸は南北方向にある。規模は1間（梁行3.96m）×3間（桁

行5.96m）、身舎面積は23.60㎡、8本の柱穴から構成される。各柱穴は直径が40～50cm、検出面からの深さは20～55cmを測る。P8からは柱痕跡が見られた。P7の埋土中からは洪武通寶が1枚出土した。

SB5（第62図）

B - 2区、F - 19グリッドで検出された。建物の主軸は東西方向にある。規模は1間（梁行3.76m）×2間（桁行3.56m）、身舎面積は13.39㎡、6本の柱穴から構成される。各柱穴は直径が40～50cm、検出面からの深さは20～40cmを測る。柱穴の埋土中より遺物は出土していない。

6-2. 遺物

調査区で出土した中世から近世にかけての遺物は、主に表土中から出土した。また、数は少ないがピットの埋土中からも遺物が出土した。

土師質土器（第63図303）

303は土師質土器の皿の底部片である。内面は回転指ナデ、外面は回転ナデ、底部はヘラ切り離しである。また底部には粘土のかえりや工具痕も見られる。

東播系須恵器（第63図304）

304は東播系須恵器鉢の口縁部片で、内・外面ともに回転ナデである。また、口唇部には自然釉がかかっている。

青磁・白磁（第63図305～308）

305は鎬蓮弁文碗の口縁部片である。幅の広い片切彫の鎬蓮弁で上田秀夫編年のB-1類⁽¹⁾に該当し、14世紀末～15世紀と思われる。306は端反青磁碗の口縁部片である。内・外面ともに貫入があり、口縁部付近には釉ムラが見られる。307は合子の身の可能性が高い青磁片である。胴部で逆くの字に屈曲する器形で、外面には幅広の鎬蓮弁文が施されており14世紀代と思われる。308は白磁碗の口縁部で、口縁部付近に釉剥ぎが、口唇部には焼成時の溶着痕があり、伏焼の痕跡が見られる。

青花（第63図309・310）

309は青花碗の胴部片で、宝相華唐草文を外面に施す。精緻なつくりである。310は青花碗の底部片で、内・



第 60 図 岡遺跡第 7 次調査区 遺構分布図 (S=1/400)

外面ともに釉薬が施されている。釉はやや黄味がかっており、畳付付近まで施釉する。高台内は朱色に発色している。また、宝相華文が内・外面ともに描かれている。漳州窯の製品と思われる。

国産陶磁器（第63図311～313）

311は備前焼の播鉢の口縁部片である。内・外面ともに釉薬は施されていない。また、見込みには7条1単位の摺り目が施されている。312は国産陶器の甕と思われる。内面には工具による櫛描きが見られ、外面にはタタキ調整が見られる。313は染付皿で、見込に蝶を描く。全面に施釉し、焼成後に畳付の釉を剥ぎ取っている。高台径等から初期伊万里と思われる。

銭貨 洪武通寶（第63図314～316）

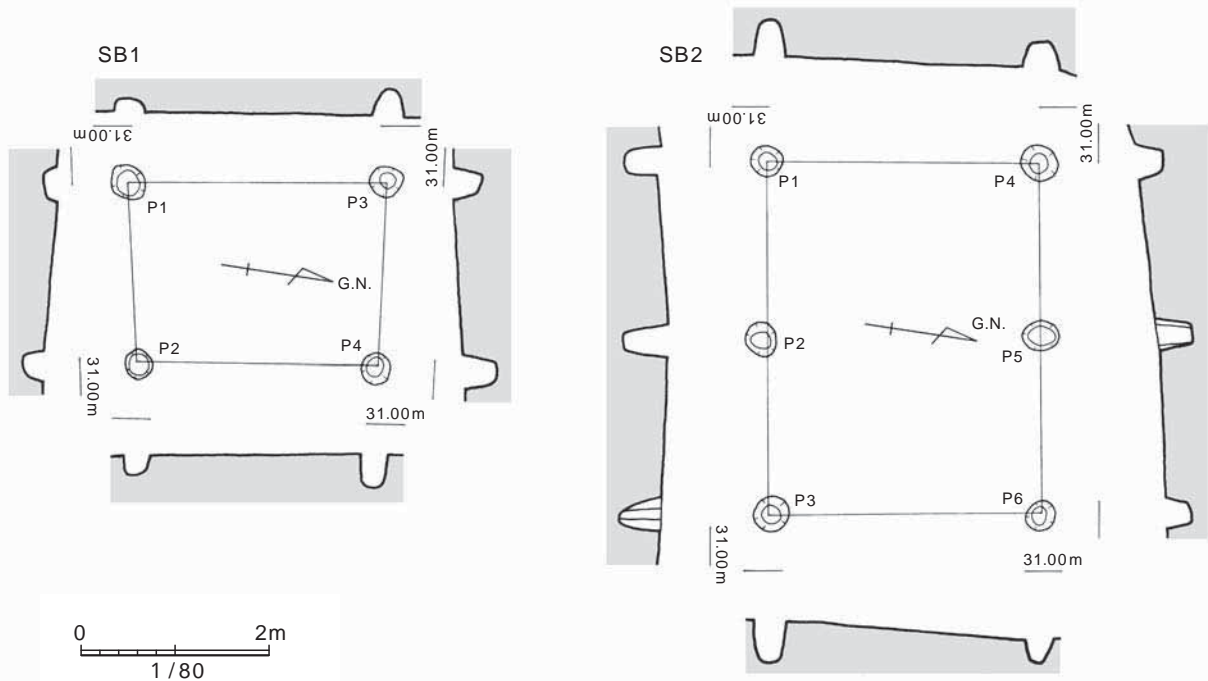
314・315はSH46の埋土中から、316はSB4を形成するP7の埋土中から出土した。いずれも直径2cm強で、

表に「洪武通寶」の文字が見られる。裏には何も刻まれていない。錆化が著しい。

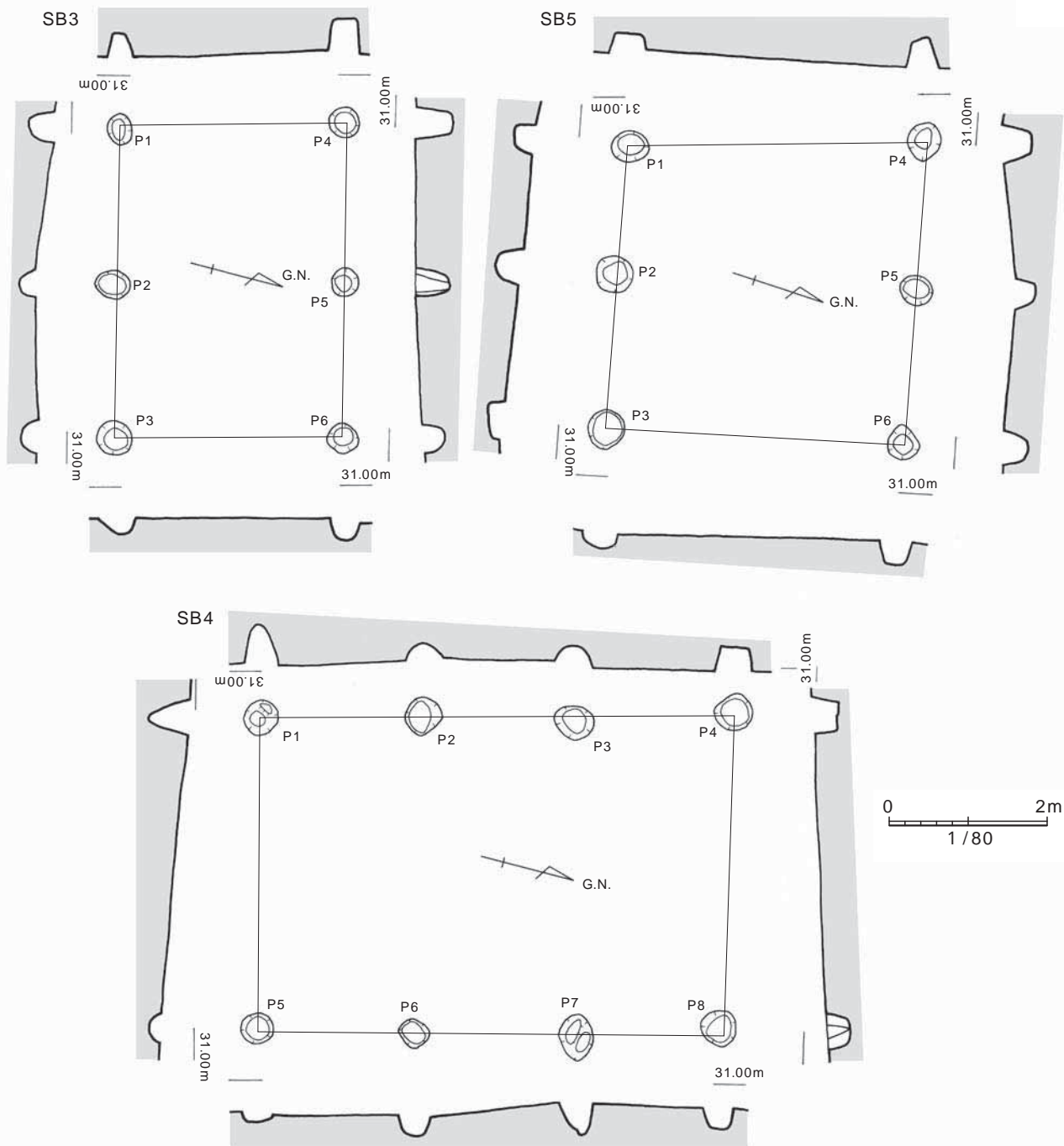
洪武通寶は元々、中国は明時代初期（1368～1398）に鑄工された古銭である。日本ではこれを摸し民間で鑄造された鑿銭といわれる洪武通寶が室町時代中期から「寛永通寶」が流通するまで使われていたとされている。九州では加治木洪武や筑前洪武が有名で、岡遺跡第7次調査区で出土したものは、このどちらの特徴も持ち合わせていないことから、鑄造地は不明である。314はやや反っており、模鑄造の可能性が高い。

火打ち石（第63図317・318）

317・318は近世の火打ち石で、石材は徳島県大田井産のグリーンチャートである。



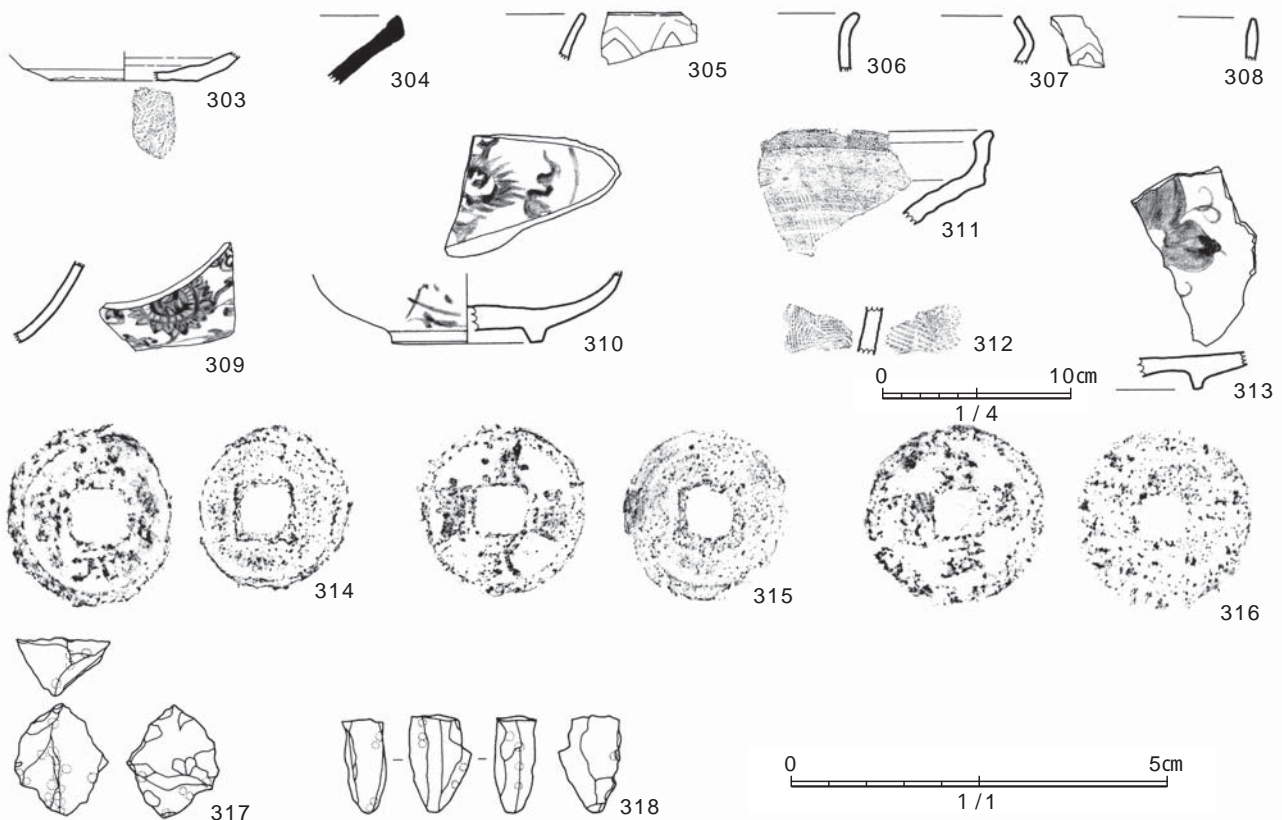
第61図 岡遺跡第7次調査区 掘立柱建物跡実測図(1)(S=1/80)



第 62 図 岡遺跡第 7 次調査区 掘立柱建物跡実測図 (2) (S=1/80)

第 15 表 岡遺跡第 7 次調査区 掘立柱建物跡一覧表

遺構	位置 (グリッド)	方位	身舎面積 (m^2)	梁			桁			柱穴		出土遺物
				規格(間)	梁行(m)	平均柱間(m)	規格(間)	桁行(m)	平均柱間(m)	柱数	柱径(cm)	
SB1	F19	N 10° E	5.17	1	1.90	1.90	1	2.72	2.72	4	34	-
SB2	G19	N 84° W	10.71	1	2.88	2.88	2	3.72	1.85	6	32	縄文土器片
SB3	G20	N 77° W	11.18	1	2.83	2.83	2	3.95	1.98	6	36	-
SB4	G20・21	N 15° E	23.60	1	3.96	3.96	3	5.96	1.99	8	50	洪武通寶
SB5	G20・21	N 77° W	13.39	1	3.76	3.76	2	3.56	1.78	6	48	-



第 63 図 岡遺跡第 7 次調査区 中世～近世遺物実測図

第 16 表 岡遺跡第 7 次調査区 中世～近世遺物観察表

遺物番号	注記番号	出土地点(区)	層	種別	器種	部位(復元口径cm)	技法・調整等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
							内面	外面	内面	外面			
303	B3-75	B-3		土師質土器	皿	底部(底径7.9cm)	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り離しのち工具による調整、粘土のかえり・工具痕あり	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	4mm以下の赤褐粒を極少量、1mm以下の褐灰粒を含む	良好	
304	-	-		東播系須恵器	捏鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ、口唇部は自然釉	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1) 黒褐(2.5Y3/1)	3mm以下の灰白粒を極微量に、0.5mm以下の灰白粒を少量含む	良好	
305	Tr3	Tr3		青磁	碗	口縁部	貫入あり	貫入あり、鎚運弁文	灰オリーブ(7.5Y6/2)	灰オリーブ(7.5Y5/2)	精良	堅緻	
306	SH58	SH58		青磁	碗	口縁部(口径12.4cm)	貫入あり	施釉、貫入あり、口縁部付近に釉ムラあり	灰オリーブ(5Y5/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	精良	堅緻	
307	-	-		青磁	合子身	口縁部	貫入あり	貫入あり、鎚運弁文	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y6/2)	精良	堅緻	
308	A4	A4		白磁	碗	口縁部	伏焼痕あり		灰白(7.5Y8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	堅緻	
309	カベ	-		青花	碗	胴部		宝相華唐草文	明緑灰(10GY8/1)	明緑灰(7.5GY8/1)	精緻	堅緻	
310	-	-		青花	碗	底部	宝相華文	宝相華文	緑灰(2.5GY7/1)	緑灰(2.5GY7/1) 橙(5YR6/8)	精良	堅緻	瓊州窯
311	-	-		陶器	播鉢	口縁部	無釉、見込7条一単位の播目	無釉、回転ナデ	灰赤(2.5YR4/2)	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	0.5mm以下の灰白・黒色粒を少量含む	堅緻	備前
312	-	-		陶器	甕	胴部	工具による櫛描き?	タタキ	褐灰(10YR4/1)	にぶい橙(10YR6/4)	0.5mm以下の灰白粒を少量含む	良好	
313	-	-		磁器	皿	底部	蝶の文様、貫入あり	貫入あり、壘付は釉ハギ	明オリーブ灰(5GY7/1)	明オリーブ灰(5GY7/1)	精良	堅緻	初期伊万里
314	SH46	SH46		銭貨	洪武通寶	-	表面に洪武通寶		-	-	-		直径22mm
315	SH46	SH46		銭貨	洪武通寶	-	表面に洪武通寶		-	-	-		直径23mm
316	SH24	SH24		銭貨	洪武通寶	-	表面に洪武通寶		-	-	-		直径24mm

第 17 表 岡遺跡第 7 次調査区 近世遺物計測表

遺物番号	注記番号	出土地点(区)	層	器種	石材	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
317	A3 503	A-3		火打ち石	徳島県大田井産チャート	1.5	1.2	0.7	0.93
318	ヒ62	-		火打ち石	徳島県大田井産チャート	1.3	0.8	0.5	0.57

第7節 小結

岡遺跡は東側に海を臨む海成段丘上にあり、第7次調査区の北側には小川（高森川）があるため、谷地形が形成されている。調査区の東側は海、北側は小川に挟まれた斜面地に位置している。その地形のため、調査区で見られる土層は幾度となく流れ込んできた土砂の堆積であった。その堆積を見てみると、基本層序としては6層に分けられる。

層の遺物包含層は、鬼界アカホヤ火山灰が遺物を含み2度に渡って流れ込んで形成されたものである。1度目に流れ込んで来たb層には、縄文時代早期～晩期の遺物が確認できた。それ以降の時代の遺物が見られないことから、弥生時代よりも前に流れ込んで来た層であることが分かる。2度目に流れ込んで来たa層には、縄文時代から中世までの遺物を幅広く含むことが確認できた。そのことから、a層は中世以降に流れ込んで来たことが分かる。

第7次調査区では、縄文時代の遺構は検出されなかった。縄文時代の遺物は、宮崎県北部の縄文時代早期に見られるような押型文土器、天道ヶ尾式土器、塞ノ神式土器、鎌石橋式土器などが出土している。

縄文時代晩期の土器としては、突帯文土器、孔列文土器、無文土器、組織痕土器、精製土器などが出土している。この中でも突帯文土器、無文土器は、調査区内で一番多く出土した遺物である。突帯文土器は、岡遺跡周辺での現在までの出土例が少なく、平岩地区では遺跡自体の調査例もあまりないことから、この岡遺跡が初となる。

石器の特徴としては、産地不明の黒曜石製品1点、北九州産黒曜石製品1点を除くすべての黒曜石の製品は大分県姫島産の黒曜石を石材としていた。本遺跡は縄文時代に石器製品の石材として姫島産の黒曜石に重点を置いていたことが分かる。

また、縄文時代晩期の石器の中では、石錘が38点出土している。石錘の重量は100～200gのものが16点出土している。一番大きい石錘は11.6cm×11.4cm、重さ約670gを測る。高森川の川幅が狭いことから、これらの大きく重量のある石錘が活躍できる場とは考えられないため、海での漁撈を目的としていたのでは

ないかと想定される。

結果的には、縄文時代晩期の遺物が調査区で出土した遺物の半数以上を占めていた。

今回の調査では、縄文時代の遺物は出土したが、遺構が検出されなかった。遺物の量や種類から、調査区周辺にある程度の縄文時代集落の存在が想定される。岡遺跡の調査は別地点の調査も進行中であるため、今後の調査成果に期待したい。

弥生時代以降については、今回検出された掘立柱建物跡5棟について、柱穴から出土した洪武通寶から中世末～近世初頭と位置づけたが、第7次調査区以外の23年度調査の調査区内でも掘立柱建物跡が検出されているため、今後の調査成果によって、より明確となるであろう。

註

(1) 上田秀夫1982『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会

参考文献

加藤晋平他1995『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣

熊本県教育委員会1990『天道ヶ尾遺跡』熊本県文化財調査報告書第111集

日向市教育委員会1985『日向市遺跡詳細分布調査報告書』

日向市史編さん委員会2010『日向市史 通史編』日向市

宮崎市教育委員会1999『松添貝塚』宮崎市文化財調査報告書第37集

宮崎県埋蔵文化財センター2000『右葛ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集

宮崎県埋蔵文化財センター2002『白ヶ野第2第・3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第52集

宮崎県埋蔵文化財センター2008『板平遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第176集

宮崎県埋蔵文化財センター2008『尾立第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第169集

宮崎県埋蔵文化財センター2010『野首第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第188集

第8節 第6・7次調査のまとめ

本節では、第6次調査と第7次調査の調査成果を踏まえ、岡遺跡の総括を行ないたい。岡遺跡では、旧石器時代～近世までの遺構や遺物を確認している。以下、時代別にまとめ、日向市域の中で岡遺跡を位置づける。基本層序について

本論に入る前に第6次調査区と第7次調査区の基本層序の対照を行なう(第64図参照)。両調査区とも基本的には一致しており、層に旧石器時代、～層に縄文時代早期、b層に縄文時代晩期～古墳時代初頭、a層に縄文時代早期～古代末、層に中世～近世までの遺物を包含する。第7次調査区では、層に中世、層に縄文時代早期の遺物を包含するが、第7次調査区では全面が畑で、その多くは開墾時の攪乱を受けたものであろうと考えられる。なお、第7次調査区には層以降に遺物包含層がないが、これは該当期の遺跡範囲に入っていないことによるものなのか、現段階では不明である。

以上、岡遺跡の基本層序を示した。以降、必要のある箇所は調査区名を、層名だけを述べる際は岡遺跡全体の基本層序として記述する。

旧石器時代

第6次調査区で礫群1基と石器3点を確認した。礫群は、AT残存範囲外の層上面で検出しており、旧石器時代のものとしたが、石器は流れ込んだ様相をみせることから、出土層位は明確でない。b層の可能性が高いが、第9次調査ではAT下位層から旧石器が出土していることから、AT下位の石器がある可能性もある。現段階での評価は難しい。

第6次調査区		第7次調査区	
a層	表土	層	表土
b層	褐色土(耕作土)	a層	
a層		b層	
b層		c層	K-Ah
c層	K-Ah	層	暗褐色土
層	暗赤褐色土	a	黒褐色土
a	黒褐色土	b	黒褐色土
b	黒褐色土	層	AT火山灰層
層	AT火山灰層	層	褐色土
層	褐色土	層	黄褐色土
層	黄褐色土		

第64図 岡遺跡第6・7次調査区 基本土層比較図

縄文時代早期

第7節で述べたように、縄文時代早期では、貝殻文円筒形系の土器が伴う早期前半と手向山式相当の土器が伴う早期後半の2つの時期があったと考えられる。早期前半では、第6次調査区で、炉穴5基、土坑9基、集石遺構3基、早期後半では、第6次調査区で集石遺構1基を検出している。第7次調査区でも、層から貝殻文円筒形土器や押型文土器、天道ヶ尾式土器(妙見式)が出土していることから、遺物自体が流されてきたとすれば、遺跡範囲自体は、より西側へも広がっていた可能性がある。なお、富高の板平遺跡で炉穴と集石遺構が検出されているが、放射性炭素年代から炉穴・集石遺構を伴う散礫A群を早期前半、集石遺構を伴う散礫B群を早期後半の時期と比定しており、土器も貝殻文土器や手向山式土器が出土している⁽¹⁾。この在り方は、岡遺跡と同一であり、注目される。

縄文時代晩期

晩期は、第6次調査区で土坑1基、埋甕1基が検出され、無刻目突帯文期の遺物が出土している。第7次調査区では、遺構はないものの、層から無刻目突帯文～刻目突帯文の時期の遺物が多く出土している。ただ、第6次調査区では無刻目突帯文期の遺物しか出土していない。両調査区の間は谷が入り、高森川が流れていることが影響していると思われるが、その様相は明確でない。

しかし黒川式期～刻目突帯文期の変遷を考える上で良好な資料が出土しており、重要である。現在継続中の調査の成果も合わせ、その位置づけは課題としたい。弥生時代～古墳時代

弥生時代終末期～古墳時代初頭は、土器のみの出土で、遺構はない。第7次調査区280で出土した櫛描波状文をもつ複合口縁壺(280)、球形甕(273)、第6次調査区で出土した刻目突帯を頸部に、外面にタタキ調整を施す甕(188)などは庄内式併行期に相当し、概ね、弥生時代終末期～古墳時代初頭の時期である。平岩近辺では、別府遺跡で280と同様な複合口縁壺が出土しており、日向市域では、該当期に近い集落が調査された越シ遺跡、後陣遺跡、板平遺跡など、本時期に遺跡が増える傾向をもつ。

なお、古墳時代では第7次調査区の格子目タタキを

もつ甕(276)のように、中期以降と思われる土師器も少数みられる。岩脇古墳群との関係が示唆される。古代～中世初頭

遺構は、第6次調査区で、古代末～中世初頭を上限とした道路状遺構1条をb層上面で検出している。遺物は、主にa層から、須恵器や土師器、布痕土器などが出土している。遺構出土の遺物がないため詳細な時期は不明である。

ただ、遺物の出土からは、2つの注目すべき点がある。1点目は、布痕土器の出土である。その分布は官道沿いに集中する傾向があり⁽²⁾、古代の日向市では、門川～美々津間の駅路について、財光寺から平岩はよくわかっておらず、山際のルートを通っていたとも考えられている⁽³⁾が、布痕土器の出土により、その蓋然性は高まった。ただし、官道が通るような規模を考慮すると、官道は岡遺跡がある中位段丘面ではなく、岡遺跡のある場所から一段下がった、下位段丘面を通っていたと思われる。ただ下位段丘面の財光寺近辺は、後背湿地が広がり官道には向かない点は注意される。なお、岡遺跡の道状遺構は、時期の上限、規模の点から官道との関係は低いと思われる。

2点目は、実測図は掲載してないものの、層から鉄滓と羽口片が出土したことである(写真4)。鉄滓は第6次調査区から⁽⁴⁾、第7次調査区からは、二次被熱、二次剥離のみられる羽口片が出土している。

佐藤忠郎は平岩の字名について「背後に丘陵状に広がる山地と海岸地名からなるが、そのなかで金山、赤木のようなアカ、カネなど鉾山地名を思わせるものと祭祀地名が気になる」⁽⁵⁾とし、金ヶ浜の地名起源に言及し、古代における製鉄遺跡の可能性を説く⁽⁶⁾。実際に字鍛冶屋ヶ平の鍛冶ヶ屋平遺跡では、鉄滓と羽口が表採されており、その可能性が示唆されている⁽⁷⁾が、具体的な時期などは不明であった。そのため、岡遺跡で古代末～中世初頭を上限とする層からの出土によって、平岩近辺における鍛冶が古代にまで遡る可能性が出てきたのは重要であろう。なお、第9次調査では遺構の埋土中に古代の土器と共に羽口片が出土している。

中世～近世

第7次調査区で中世末～近世初頭と考えられる掘立

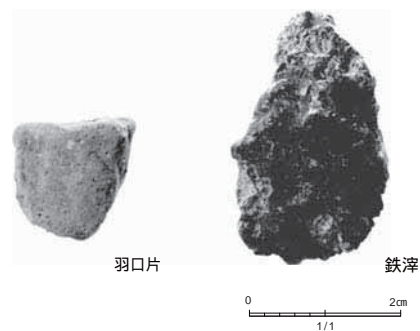


写真4 鍛冶関連遺物

柱建物跡が検出されている。遺物は、層から、中世の東播系の須恵器、青磁・白磁、青花、備前焼、洪武通寶、近世では伊万里焼、火打ち石などが出土している。

中世末～近世初頭の掘立柱建物跡はどのような性格のものであったか、文献資料を参考とするならば、1つ候補に上がるのが、16世紀末に松葉源之丞景守が創建したとされる幸福寺および本村城関連の遺構である。中世末の山城である本村城は別の場所に屋敷が構えられていたと考えられており、その有力な候補として幸福寺が挙げられている⁽⁸⁾。字本村は、かつては平岩の中心集落だったと考えられており、掘立柱建物の構築時期と幸福時近辺という場所が、第7次調査区出土の遺構と齟齬なく一致し、幸福寺・本村城関連の可能性が十分にある。

以上、第6次調査と第7次調査の成果を、旧石器時代～近世までまとめた。これまでは、基本的に表採資料のみによるしかなかった平岩近辺の歴史はその様相が不明な部分が多かったが、岡遺跡の調査により、考古資料による平岩の歴史的評価を可能とするための第一歩となったと考える。

なお、岡遺跡の調査は現在継続中で、ここでまとめたものはあくまでも現段階での成果に基づく予察である。

註

- (1) 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『板平遺跡(第3・4次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第199集
- (2) 森田勉1983 『焼埴壺考』『大宰府古文化論叢』吉川弘文館
- (3) 永山修一2010 『第二章 古代の日向』『日向市史』日向市史編さん委員会
- (4) 第6次調査区は風倒木などの影響で、混入品もあるため、確実ではない。
- (5) 佐藤忠郎1985 『郷土の地名雑録』地域文化研究所
- (6) 上掲(5) p143
- (7) 日向市教育委員会1988 『金ヶ浜遺跡』
- (8) 福島金治 『伊東氏の領国形成と室町期の日向市域』『日向市史』日向市史編さん委員会

第 章 坂元第 2 遺跡調査の成果

第 1 節 調査の方法と経過

1-1. 調査の方法と経過

坂元第 2 遺跡は、日向市大字平岩に所在する。海岸から内陸に約 1 km 入った、標高約 80m の非常に狭小な丘陵鞍部に位置し（第 65 図）、遺跡の南を砂田川が流れ、日向灘に注いでいる。

遺跡の調査面積は 300m² で、平成 23 年 4 月 25 日から平成 23 年 6 月 3 日まで調査を実施した（調査実日数 16 日）。

調査はまず、重機による表土除去を行った後、人力により精査をし、遺構検出を行った。精査していく中で、赤化した礫が集中する箇所が、調査区北西部・中央部・南東部で確認された。遺物は、縄文土器、弥生時代～古墳時代の土器片が数点出土した。

土層は、調査区南東部と南西部にトレンチを設定し、基本層序を 層から 層に分層した（第 18 表）。

遺構は、調査区北西部と中央部、南東部の赤化した礫の集中箇所を中心に調査を進めた。調査区北西部の礫集中箇所については、礫層の露出によるものと見なし、調査除外とした。調査区中央部と南東部の礫集中箇所のうち中央部は、敷石と掘込が見られたことから、1 号集石遺構（S11）と確認した（第 68 図）。S11 で検出された炭化物の放射性炭素年代測定（第 章参照）の年代は、縄文時代早期である。調査区南東部の赤化礫集中箇所を精査した結果、2 号集石遺構（S12）を確認した（第 70 図）。S12 の調査の際、遺構の一部が当初の調査区の南東部壁面にかかることから、調査区の拡張を行った。

遺物については、縄文土器（深鉢）や弥生時代～古墳時代の土器（高坏、甕、壺）、打製石斧や剥片（珪質頁岩製や頁岩製、チャート製）が出土した（第 71・72 図）。これらの遺物は、平板とレベルによる点上げを行った。

その他、調査区内のコンタライン（等高線）図（第 67 図）や、調査区南西部壁面の土層断面図（第 66 図）を作成した。

最後に調査区全景の写真撮影を行い、調査を終了し

た。

なお、整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センター職員で行った。

1-2. 調査日誌抄

- H23. 0425 調査開始。5 本のトレンチを設定。
- 0426 調査区の決定。重機による表土除去。
- 0428 調査区養生。
- 0513 調査区の精査。調査区南東部と南西部に先行トレンチ設定。
- 0516 先行トレンチ掘削。
- 0517 先行トレンチ掘削。調査区北西部赤化礫調査。調査区東部精査。
- 0518 調査区北西部赤化礫調査。調査区南東部赤化礫調査。調査区西部精査。
- 0519 調査区北西部赤化礫（礫層）写真撮影。調査区中央部赤化礫（1 号集石遺構 = S11）精査。調査区拡張 { 調査区南東部赤化礫（2 号集石遺構 = S12）調査のため }。
- 0520 S11・S12 精査、写真撮影。調査区東部精査。
- 0524 S11・S12 実測。調査区東部精査。耐風養生。
- 0525 S11・S12 実測。
- 0527 耐風養生。
- 0530 S11 実測。S12 写真撮影、実測。調査区南西部窪地調査。
- 0531 S11 実測。S12 写真撮影、実測。調査区南西部窪地写真撮影、調査。
- 0602 S11 実測、写真撮影。調査区南西部トレンチ掘削、土層断面図作成。
- 0603 S11 実測、写真撮影。土層断面図作成。遺物点上げ。遺構分布図、遺物出土状況図作成。コンタライン（等高線）図作成。調査区全景写真撮影。撤収。調査終了。



第 65 図 坂元第 2 遺跡 調査区周辺地形図 (S=1/1,000)

第2節 基本層序

調査区は、南部から北東部、北西部に向けて緩やかに傾斜している。調査前は雑木林で、樫や椎、栗の木があった。そのため、調査区には、10～30cm程度の厚さで表土(層)が堆積していた。

調査区南部から南東部の傾斜と南西部の傾斜に沿って先行トレンチを設定し、土層の確認を行ったところ、南西部の土層堆積状況がよく、これをもとに本遺跡の基本層序を確定した。鍵層となる鬼界アカホヤ火山灰層、始良Tn火山灰層の堆積は確認されなかった。地形から、調査区北東部は表土が厚く堆積し、北西部に

は、礫の流れ込みが見られた。

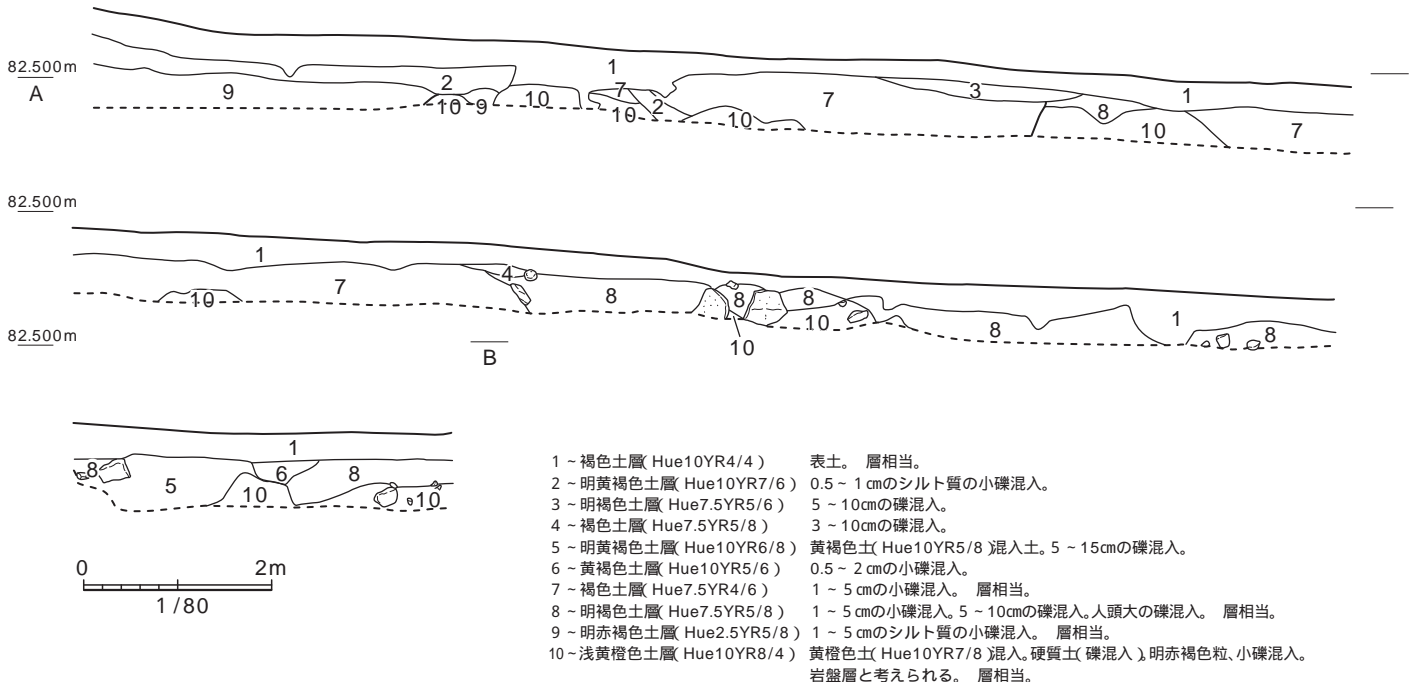
遺物は層中、もしくはその直下から確認されることから、層及び層が遺物包含層と考えられる。

層と層は、土色の差違はあるが、基本的に同じ土層と考えられる。層からは遺構や遺物は確認されなかった。層は、岩盤層である。

それぞれの層の土色や土質、特徴は第18表、土層断面図は第66図のとおりである。

第18表 坂元第2遺跡 基本層序

層	土層名	土質	注記
層	暗褐色土層 Hue10YR3/3	粘性弱・しまり中	表土。
層	褐色土層 Hue7.5YR4/6	粘性強・しまり強	遺物包含層。場所によって5～30cm程度の礫を多量に含む。
層	明褐色土層 Hue7.5YR5/6	粘性中・しまり強	遺物包含層。場所によって5～30cm程度の礫を多量に含む。場所によって1～10cm程度の砂岩性灰色の礫をまばらに含む。
層	明褐色土層 Hue7.5YR5/8	粘性中・しまり強	1～10cm程度の砂岩性灰色の礫をまばらに含む。
層	褐色土層 Hue10YR4/6	粘性中・しまり強	岩盤層。大小様々な礫を多量に含む。



第66図 坂元第2遺跡 土層断面図 (S=1/80)

第3節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、集石遺構が2基検出された。1号集石遺構(SI1)は、炭化物の放射性炭素年代測定(第1章参照)の年代は、縄文時代早期である。2号集石遺構(SI2)も同じ土層面から検出されていることから、同時期の遺構と考えられる。

遺構・遺物分布図は、第67図のとおりである。

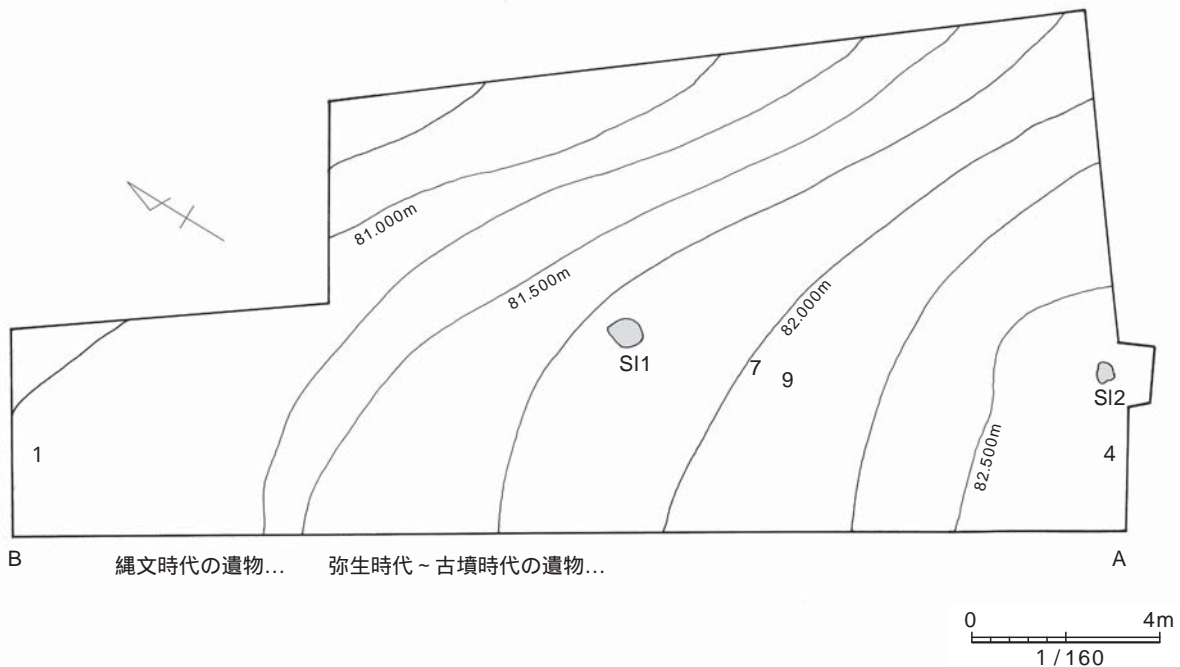
3-1. 遺構(集石遺構)(第68～70図)

本遺跡の集石遺構は、調査区中央部と南東部の層から1基ずつ検出された。2基ともに層まで掘り込まれている。調査区中央部の集石遺構を1号集石遺構(SI1)、調査区南東部の集石遺構を2号集石遺構(SI2)とした。その他、赤化礫が集中する箇所や散在する箇所があったが、地形的な流れ込みによって形成されたものであると判断した。

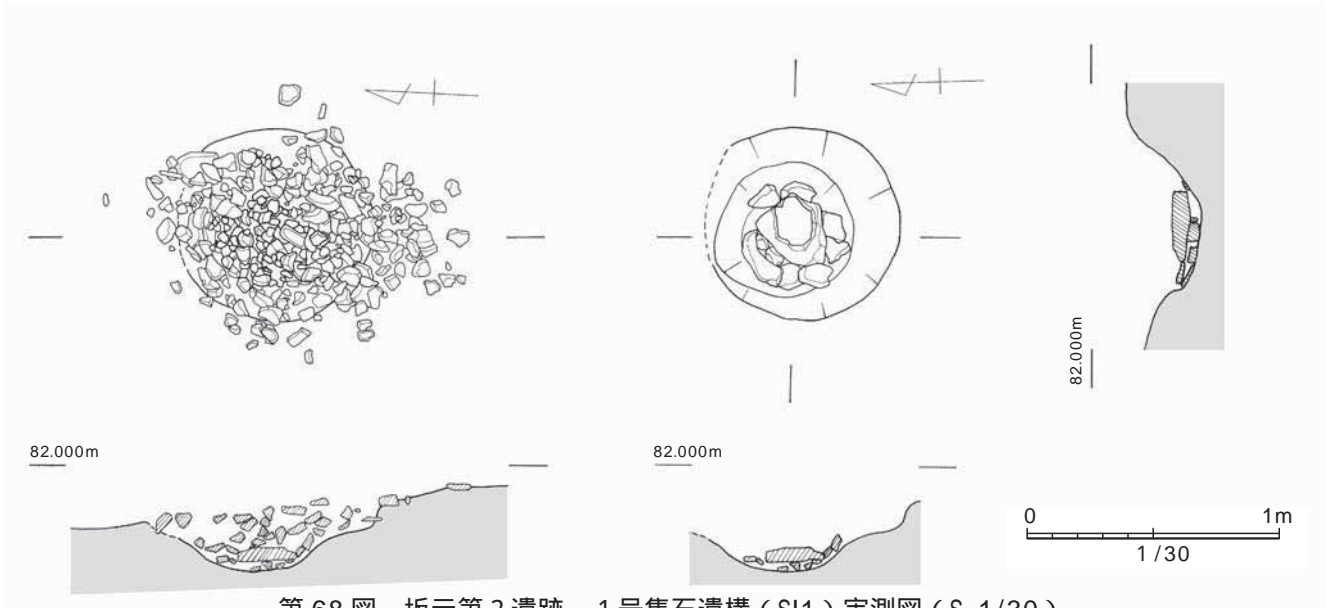
SI1は、長軸約150cm、短軸約100cmの範囲で礫が分布し、掘込を有している。掘込はほぼ円形で長軸、

短軸ともに約80cm、深さ約30cmの規模である。構成礫の密度は薄く、ほとんどが尾鈴山溶結凝灰岩で、砂岩がごく少量混在する。SI1を形成している尾鈴山溶結凝灰岩は、礫の中に同質の礫や砂岩が混ざるものが多く見られることから、火砕流によって生成されたものと考えられる。礫は破碎礫が多く、また、構成礫の7割以上が赤化していることから、この集石遺構は多用されたと考えられる。調査を進めていく中で、人頭大の敷石が確認された。さらに敷石を支えるように、直下から5～6個の礫の集まりが確認され、中には赤化しているものも見られた。小片のため図化は行っていないが、周辺から縄文土器1点と剥片1点が出土した。

SI2は、長軸約80cm、短軸約60cmの範囲で礫が分布する。構成礫やその特徴は、SI1に類似しているものの、明確な敷石や掘込を確認することはできなかった。

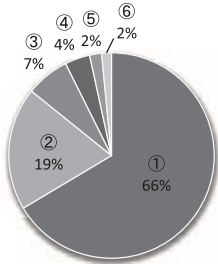


第67図 坂元第2遺跡 遺構・遺物分布図 (S=1/160)



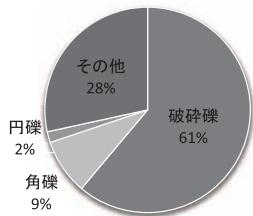
第 68 図 坂元第 2 遺跡 1号集石遺構 (S11) 実測図 (S=1/30)

構成礫重量比

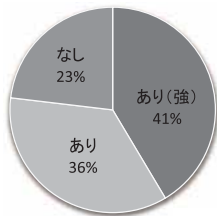


1 ~ 100g	388
101 ~ 200g	113
201 ~ 300g	40
301 ~ 400g	23
401 ~ 500g	11
501g ~	9
総重量 62,801g	総計 584

円磨度 (個数比)

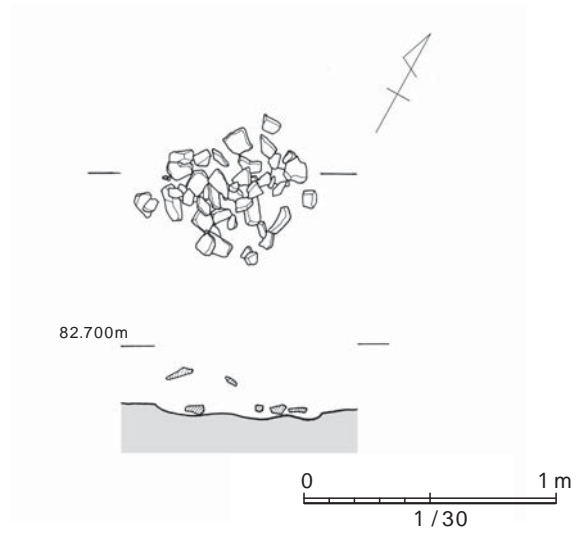


赤化度 (個数比)



但し、各礫の接合はしていない。

第 69 図 坂元第 2 遺跡 1号集石遺構 (S11) 構成礫データ



第 70 図 坂元第 2 遺跡 2号集石遺構 (S12) 実測図 (S=1/30)



S11 検出状況 (東から撮影)



S12 検出状況 (北西から撮影)

3-2. 遺物

(1) 土器 (第71図)

本遺跡で出土している縄文土器は、ほとんどが小破片で、風化が著しい。そのため、文様や形状が不明瞭であり、形式を特定できるものはない。1は、深鉢の口縁部で、内面はナデの後、斜方向の沈線が施されている。

土器観察表は、第19表のとおりである。

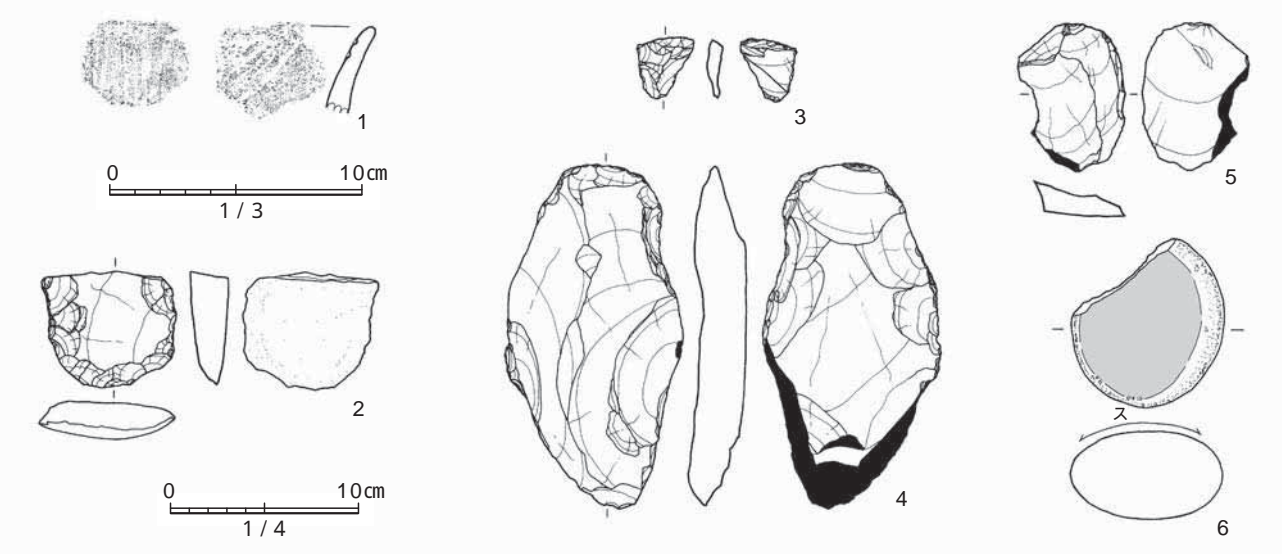
(2) 石器 (第71図)

本遺跡では、縄文時代及びその可能性のある石器が

数点出土している。2は尾鈴山溶結凝灰岩製スクレイパーであり、上部が欠損している。3はチャート製剥片であり、微細剥離痕が見られる。4は頁岩製打製石斧であり、先端部を残し、刃部の大部分が欠損している。5は珪質頁岩製剥片であり、使用石材から旧石器の可能性もある。6は尾鈴山溶結凝灰岩製磨石であり、片面のみ磨面が見られ、縁部に敲打痕がある。

石器計測表は、第20表のとおりである。

その他、姫島産黒曜石の剥片も出土した。



第71図 坂元第2遺跡 縄文時代遺物実測図(1・3～5...S=1/3、2・6...S=1/4)

第19表 坂元第2遺跡 縄文土器観察表

遺物番号	注記番号	時期	層	器種	部位	手法・調整等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
						内面	外面	内面	外面			
1	サカモト2(3)16	縄文		深鉢	口縁	ナデ後・斜方向に沈線文	ナデ	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	1mm以下の無色透明粒、乳白色粒を少量含む。	良好	

第20表 坂元第2遺跡 縄文時代石器計測表

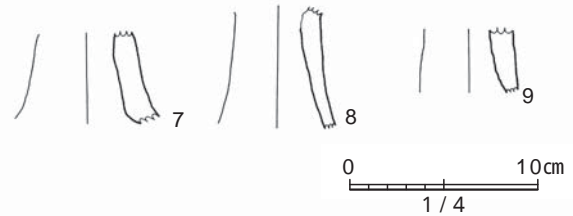
遺物番号	注記番号	層	器種	石材	法量				縮尺	観察所見
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	サカモト2表		スクレイパー	尾鈴山溶結凝灰岩	6.2	7.2	2.0	111.0	1/4	上部欠損あり
3	サカモト2表		剥片	チャート	2.5	2.3	0.7	2.9	1/3	微細剥離痕あり
4	サカモト2(3)1		打製石斧	頁岩	13.6	7.0	2.4	243.0	1/3	刃部の大部分が欠損
5	サカモト2(3)表		剥片	珪質頁岩	5.9	4.2	1.4	34.4	1/3	旧石器の可能性あり
6	サカモト2表		磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	8.9	8.0	4.7	427.9	1/4	片面に磨面、周縁部に敲打痕あり

第4節 弥生時代～古墳時代の遺物(第72図)

本遺跡からは、弥生時代～古墳時代のものと考えられる土器片が出土している。縄文土器と同じく、小破片で風化が著しいものが多い。7・8・9は高坏の脚部であるが、内面・外面ともに風化が著しい。

先に、縄文時代の遺物包含層は 層であると記述したが、これらの土器片も 層から出土している。鍵層である鬼界アカホヤ火山灰層は一時的に堆積したが、地形的に流出したと考えられる。

遺物出土状況は第67図、土器観察表は第21表のとおりである。



第72図 坂元第2遺跡 弥生時代～古墳時代土器実測図 (S=1/4)

第21表 坂元第2遺跡 弥生時代～古墳時代土器観察表

遺物番号	注記番号	時期	層	器種	部位	手法・調整等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
						内面	外面	内面	外面			
7	サカモト2(3)14	弥生～古墳		高坏	脚部	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	2mm以下の灰色、褐色の粒を少量含む。	良好	
8	サカモト2(2)T3	弥生～古墳		高坏	脚部	縦方向ナデ	風化のため不明	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	1mm以下の灰色、白色の粒を少量含む。	良好	
9	サカモト2(3)5	弥生～古墳		高坏	脚部	横方向ナデ	風化のため不明	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	1mm以下の灰色、褐色の粒を少量含む。	良好	

第5節 まとめ

5-1. 縄文時代

1号集石遺構(SI1)より検出された炭化物の放射性炭素年代測定は、暦年代(較正年代)でBC7600～7535(95.4%確率)という結果で、縄文時代早期の可能性が高いことが示された。SI1の特徴として、敷石と考えられる礫の直下に、それを支えるように礫が検出された。延岡市の山田遺跡では、傾き補正のためと考えられるものが見られる⁽¹⁾が、本遺跡の集石遺構とは、形状が異なっている。これと同じ形態の集石遺構は他に類例が見られないことから、今後の調査が待たれる。

5-2. 弥生時代～古墳時代

今回の調査で建物跡等は確認されなかったが、高坏が出土していることから、周辺に弥生時代～古墳時代の集落跡、墳墓があった可能性が考えられる。周辺の坂元遺跡(第2図2)で弥生土器片や土師器片、チッ

プ(チャート製)²⁾、金ヶ浜遺跡(第2図5)で弥生土器や土師器、打製石斧、二次加工剥片等が出土している⁽³⁾ことから、これらの遺跡との関連性も指摘される。

註

- (1) 宮崎県埋蔵文化財センター2007『山田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集
 - (2) 日向市史編さん委員会2009『日向市史(資料編)』
 - (3) 日向市教育委員会1988『金ヶ浜遺跡』市道中別府・坂元線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 参考文献
日向市・日向市教育委員会1986『後陣遺跡・越シ遺跡』亀崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
九州縄文研究会2003『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』第13回宮崎大会
延岡市教育委員会2003『今井野遺跡』延岡市文化財調査報告書27集
日向市史編さん委員会2010『日向市史(通史編)』

第 章 自然科学分析

自然科学分析では、放射性炭素年代測定、テフラ分析を実施した。岡遺跡（第6次）での炭素年代測定対象は、炉穴（SP2～4）、坂元第2遺跡は集石遺構（SI1）である。またテフラ分析は岡遺跡（第6次）より採取したものである。これらのデータは客観性のあるものとして宮崎県日向市域の貴重な資料の一つになると思われる。

各分析の方法・結果等の詳細については、次節以降で報告する。（大嶋）

第1節 岡遺跡第6次調査・坂元第2遺跡の放射性炭素年代測定

1-1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器附着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

1-2. 試料と方法

第22表参照。

1-3. 測定結果

加速器質量分析法（AMS）によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（ ^{14}C ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第23表にこれらの結果を示し第74図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

(1) ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の ^{13}C 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) 放射性炭素（ ^{14}C ）年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いた。

統計誤差（±）は 1σ （68.2%確率）である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

(3) 暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素（ ^{14}C ）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09、較正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代（較正年代）は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 1σ （68.2%確率）と 2σ （95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。（）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

1-4. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、1（岡遺跡SP2）では 9380 ± 30 年BP（2の暦年代でBC8750～8560年）、2（同SP3）では 9490 ± 35 年BP（BC9120～9000, 8920～8900, 8870～8700, 8680～8650年）、3（同SP4）では 9400 ± 30 年BP（BC8770～8600年）、5（坂元第2遺跡SI1）では 8535 ± 30 年BP（BC7600～7535年）の年代値が得られた。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
- Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎・日本先史時代の ^{14}C 年代, p.3-20.

第2節 岡遺跡第6次調査のテフラ分析

2-1. はじめに

宮崎地域の後期更新世以降に形成された地層中には、始良、鬼界、阿蘇などのカルデラ火山や桜島、霧島などの成層火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、火山灰）が認められ、噴出年代が明らかにされている。指標テフラとの層位関係から、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する情報を得ることができる。ここでは、岡遺跡（第6次）の土層断面で認められたテフラ層準について、指標テフラとの対比を試みた。なお、テフラの岩石学的諸特性や年代については新編火山灰アトラス（町田・新井，2003）を参照した。

2-2. 試料

分析試料は、岡遺跡（第6次）の調査区西壁土層断面において、層（暗褐色土）から採取された試料4の1点である。同遺跡の層は、考古学的所見や土層断面の観察結果から、始良Tn火山灰（AT）層準とされている。

2-3. 分析方法

(1) 前処理

超音波洗浄装置を用いて試料を分散させ、水洗しながら250メッシュ篩を用いて篩分けした。乾燥後に粒径1/4mm～1/8mmの粒子を篩別し、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）を用いて重液分離を行い、重鉱物と火山ガラスを含む軽鉱物のフラクションに区分した。

(2) 鉱物組成

偏光顕微鏡下にて重鉱物を250粒に達するまで同定し、重鉱物組成を求めた。不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とした。

(3) 火山ガラスの形態分類

軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子（長石類、石英などの鉱物片や岩石片、風化粒子など）を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求めた。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の3つの型に分類した。バブル型は薄手平板状や泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手

平板状や塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状や気泡の長く伸びた繊維束状のものである。

(4) 火山ガラスの屈折率測定

火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製、MAIOT2000）を用いて屈折率測定を行った。

2-4. 分析結果

テフラの岩石学的諸特性（鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスの屈折率）を第73図および第24表に示す。

試料4の重鉱物組成は、斜方輝石が56.0%、不透明鉱物が33.2%、単斜輝石が4.0%、角閃石が2.4%である。軽鉱物に含まれる火山ガラスの含有率は9.6%であり、軽石型火山ガラスが6.4%、バブル型火山ガラスが3.2%である。なお、軽鉱物では斜長石の鉱物片が比較的多く、岩石片や石英の鉱物片なども含まれている。火山ガラスの屈折率は1.498～1.500の範囲であり、1.499～1.500の狭いレンジに集中する。

2-5. 考察

AT層準とされる層から採取された試料4についてテフラ分析を行った。町田・新井（1976，2003）の記載によると、ATの特徴としては火山ガラスの主体がバブル型と軽石型であること、火山ガラスの屈折率が1.499～1.500の狭いレンジに集中すること、主な斑晶鉱物として斜方輝石が含有されることなどがあげられる。

今回の分析結果は、このような特徴と良く一致していることから、層（試料4）には始良Tn火山灰（AT，約2.6～2.9万年前）に由来するテフラ粒子が含まれていると考えられる。なお、同試料ではATには含有されない角閃石も認められることから、層にはAT以外のテフラに由来する粒子も混在していると考えられる。

参考文献

- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰 - 始良Tn火山灰の発見とその意義・科学46, p.339-347.
町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス - 日本列島とその周辺 - 東京大学出版会, p.58-63.

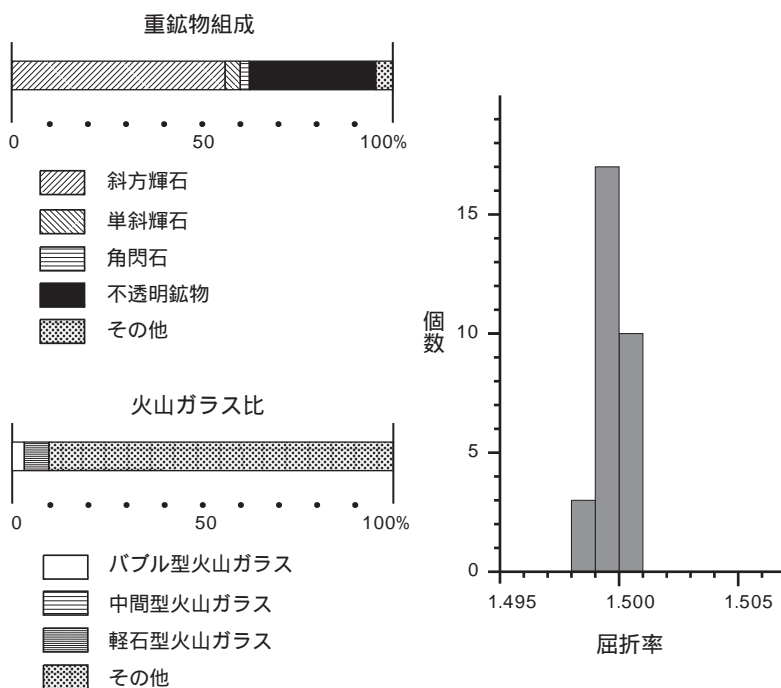
第 22 表 測定試料前処理・調整法および測定法

試料	地点・層準	種類	前処理・調整法	測定法
1	岡遺跡 第 6 次), SP2	炭化材	超音波洗浄 酸-珪加-酸処理	AMS
2	岡遺跡 第 6 次), SP3	炭化材	超音波洗浄 酸-珪加-酸処理	AMS
3	岡遺跡 第 6 次), SP4	炭化材	超音波洗浄 酸-珪加-酸処理	AMS
5	坂元第 2 遺跡, S11	炭化材	超音波洗浄 酸-珪加-酸処理	AMS

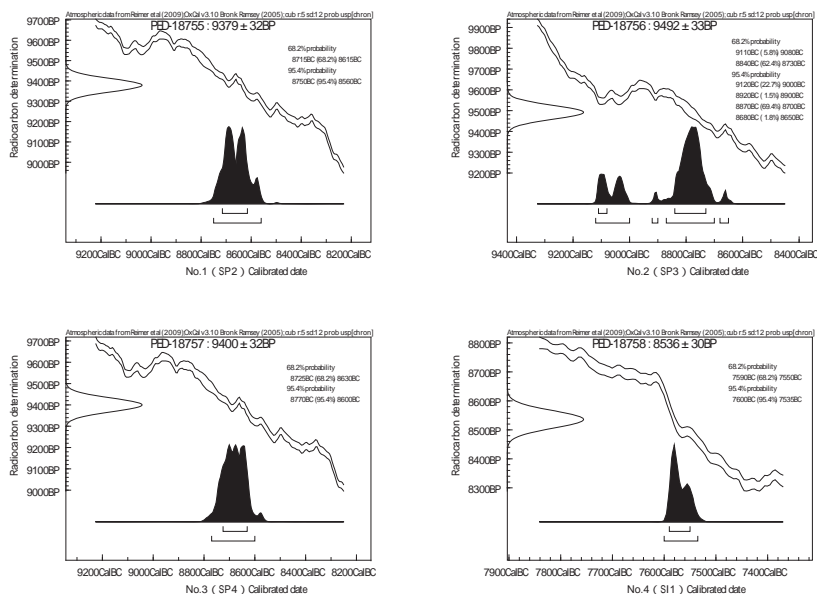
AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

第 23 表 放射性炭素年代測定結果

試料	測定番号 PED-	¹³ C (‰)	暦年較正用年代(年BP)	14C年代(年BP)	暦年代(較正年代)	
					1 (68.2%確率)	2 (95.4%確率)
1	18755	-25.42 ± 0.16	9379 ± 32	9380 ± 30	BC8715-8615(68.2%)	BC8750-8560(95.4%)
2	18756	-25.68 ± 0.19	9492 ± 33	9490 ± 35	BC9110-9080(5.8%) BC8840-8730(62.4%)	BC9120-9000(22.7%) BC8920-8900(1.5%) BC8870-8700(69.4%) BC8680-8650(1.8%)
3	18757	-26.60 ± 0.19	9400 ± 32	9400 ± 30	BC8725-8630(68.2%)	BC8770-8600(95.4%)
5	18758	-26.76 ± 0.18	8536 ± 30	8535 ± 30	BC7590-7550(68.2%)	BC7600-7535(95.4%)



第 73 図 岡遺跡第 6 次調査区におけるテフラ分析結果



第 74 図 暦年較正結果

第 24 表 岡遺跡第 6 次調査区におけるテフラ分析結果

	層(試料 4)	
	個数(個)	比率(%)
重鉱物組成		
斜方輝石	140	56.0
単斜輝石	10	4.0
角閃石	6	2.4
不透明鉱物	83	33.2
その他	11	4.4
合計	250	100.0
火山ガラス比		
バブル型火山ガラス	8	3.2
中間型火山ガラス	0	0.0
軽石型火山ガラス	16	6.4
その他	226	90.4
合計	250	100.0

圖 版

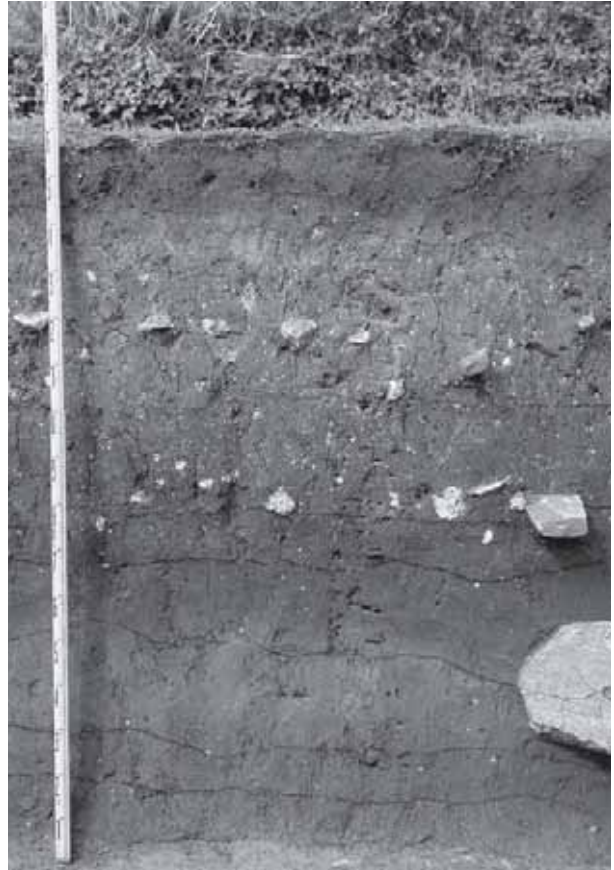
図版 1



調査区遠景(西から)



調査区東壁(北から)



調査区西壁(東から)



谷部巨礫集中部(北西から)



礫集中部(南西から)



SI5(北から)



SI1(北西から)



S12と風倒木(南西から)



S13(西から)



S14と散礫(南から)



SC9 焼土検出(西から)



炉穴状土坑完掘状況(西から)



SC5・SP1 完掘状況(東から)



SP3 完掘状況(東から)

図版 3



SP4・SP5・SP2と地形の関係(西から)



SC10 遺物出土状況(南から)



埋蔵出土状況(北から)



道状遺構検出状況(南から)



層完掘状況(南西から)



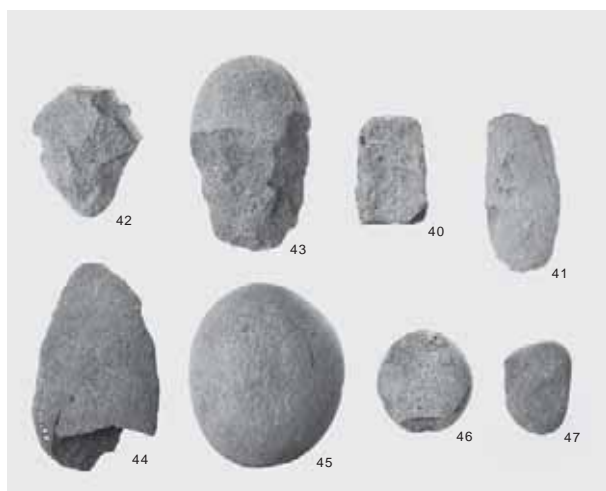
旧石器時代の遺物



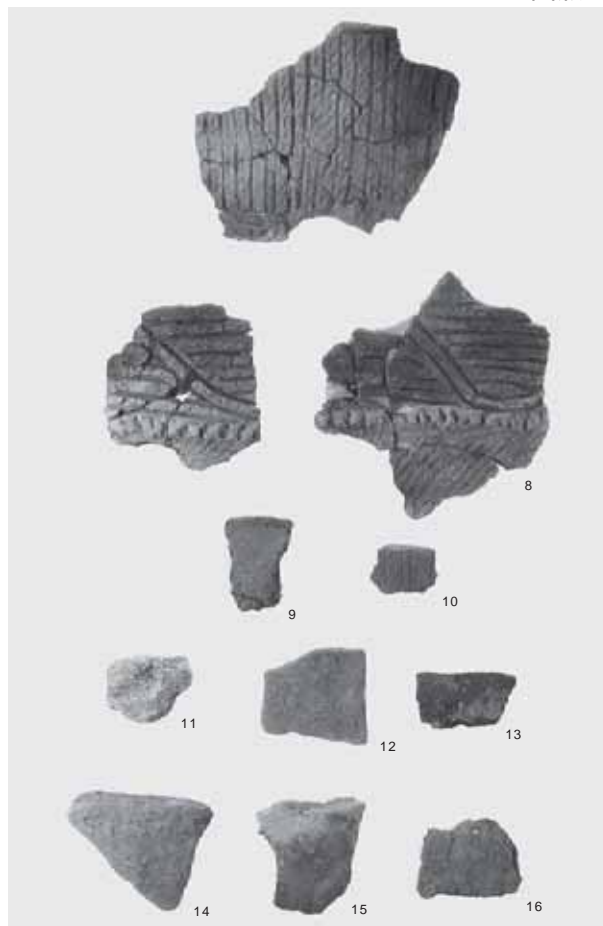
縄文時代早期 遺構出土の遺物



縄文時代早期石器(1)



縄文時代早期石器(3)



縄文時代早期土器

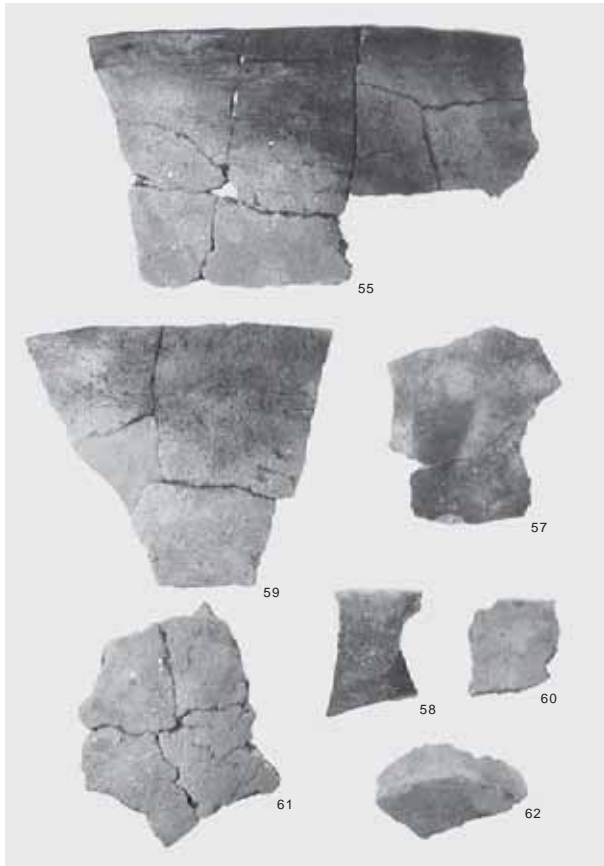


縄文時代早期石器(2)

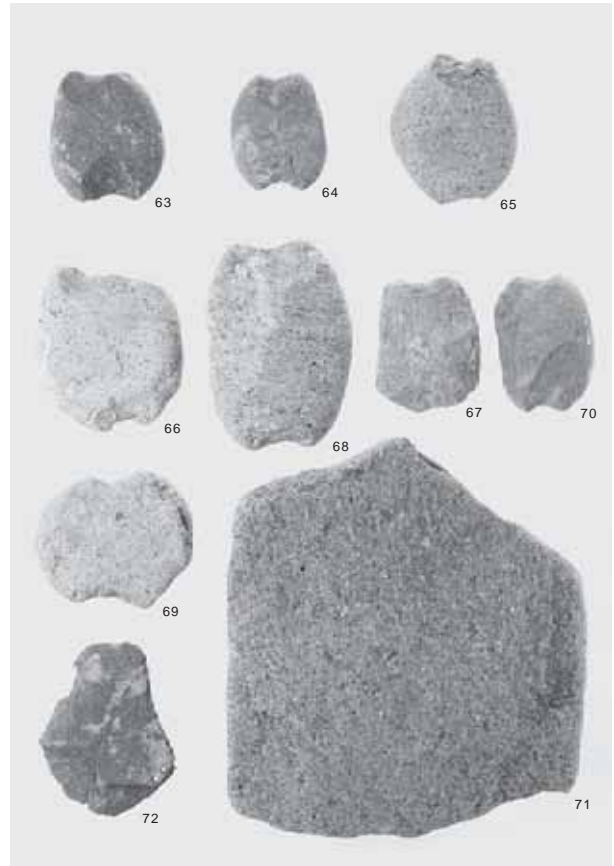


縄文時代早期末～前期土器(4)

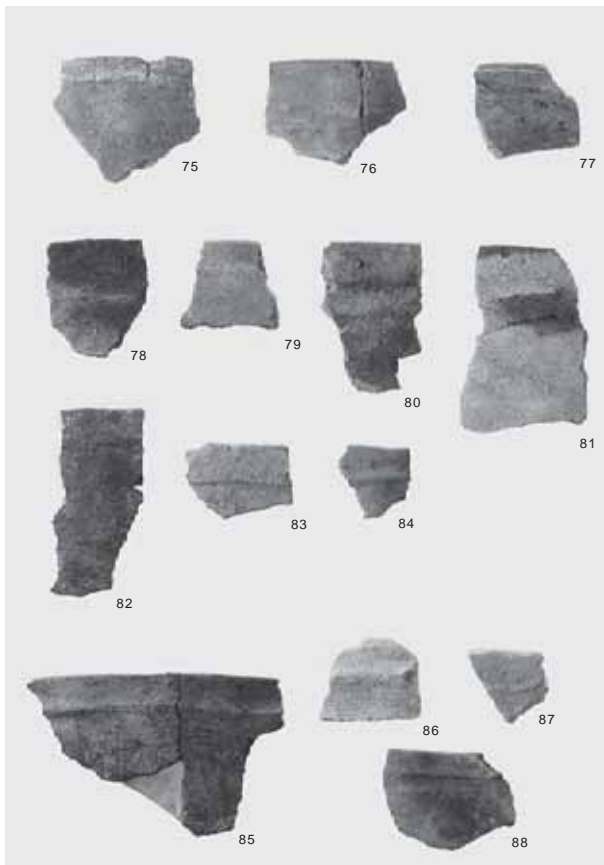
図版 5



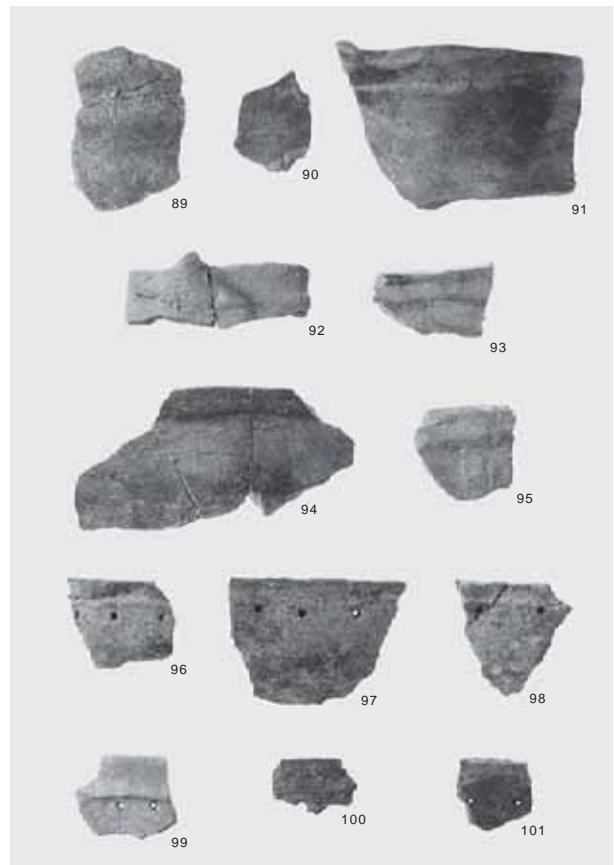
SC10 出土土器



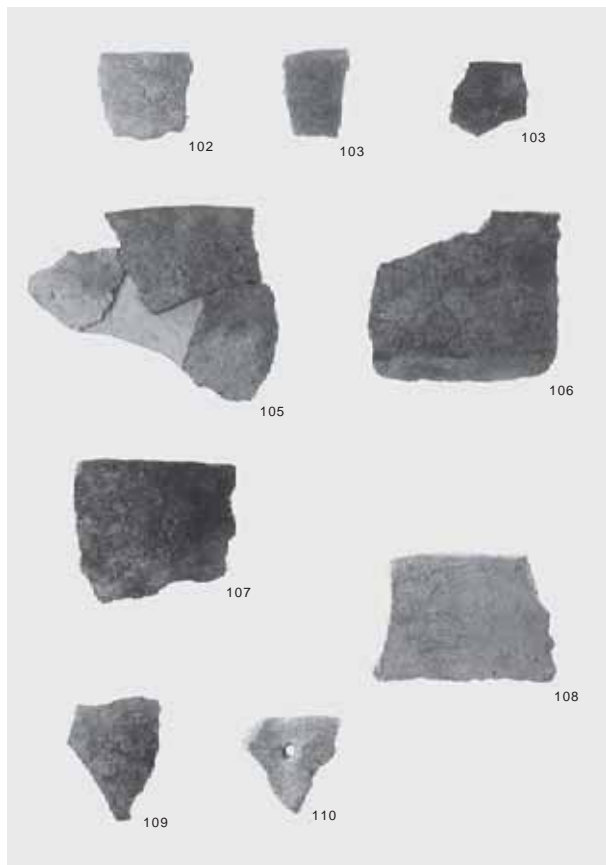
SC10 出土石器



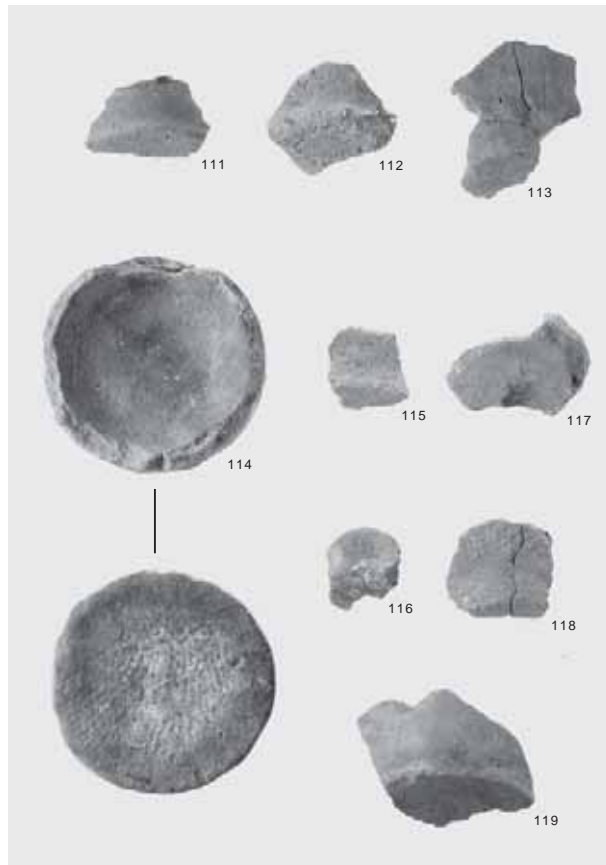
縄文時代晩期土器(1)



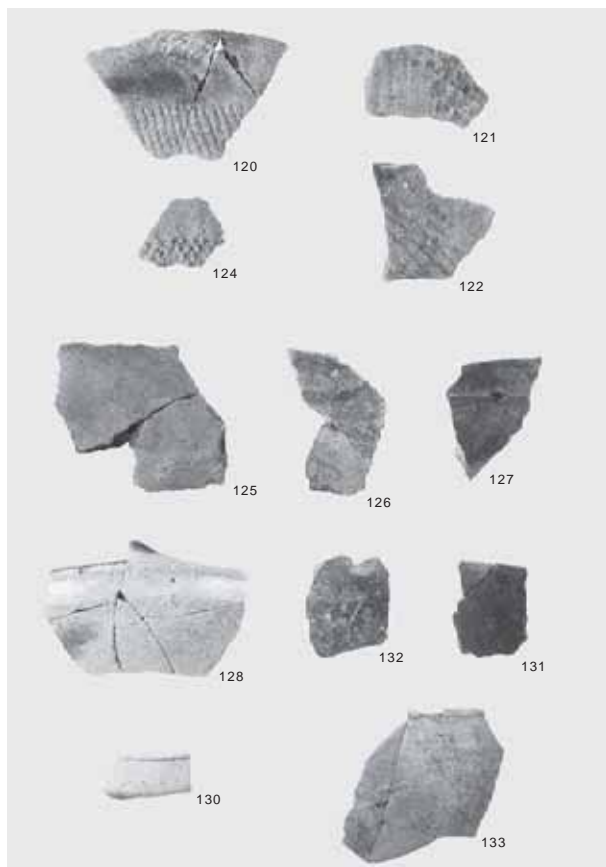
縄文時代晩期土器(2)



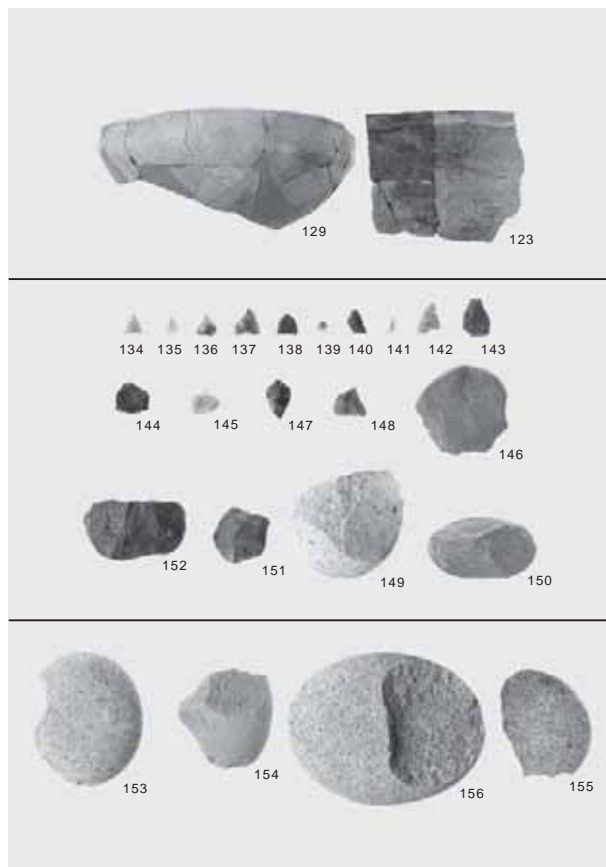
縄文時代晩期土器(3)



縄文時代晩期土器(4)

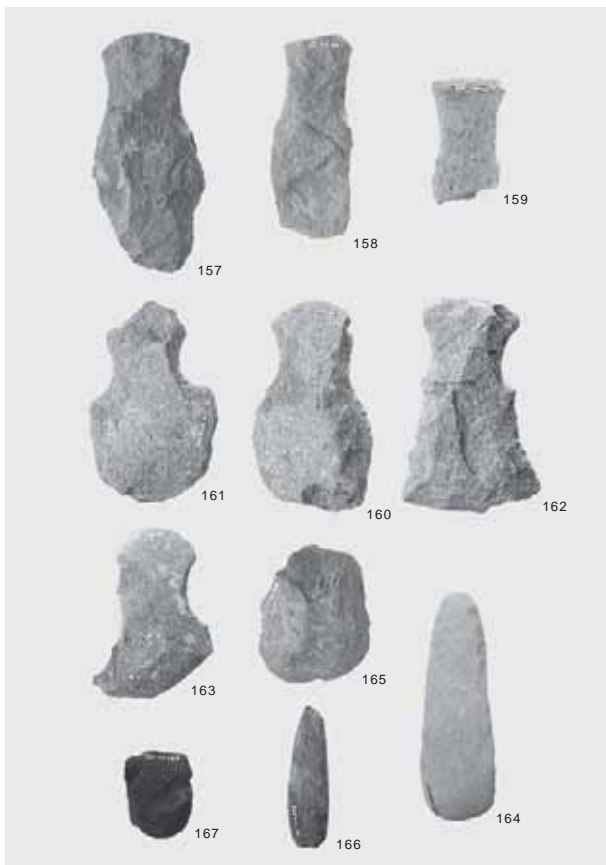


縄文時代晩期土器(5)

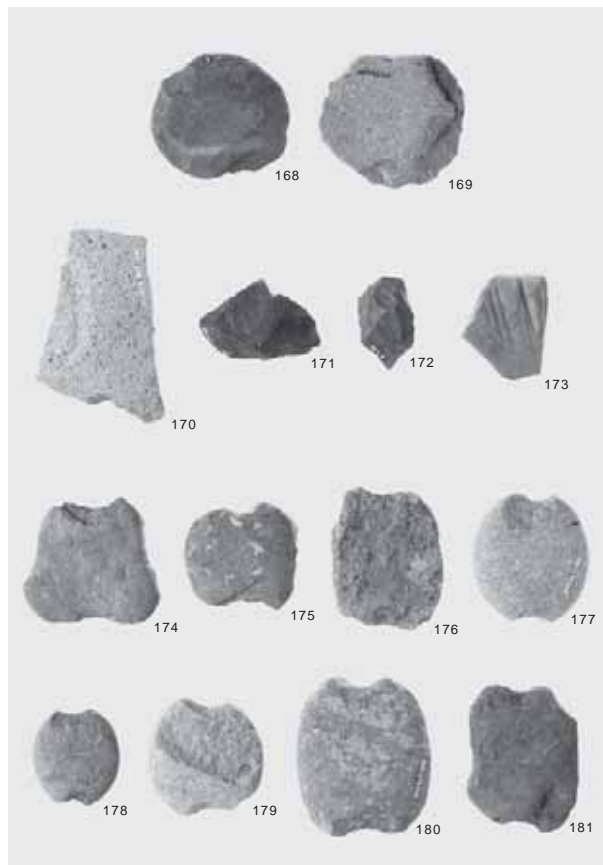


縄文時代晩期土器(6)・石器(1)

図版 7



縄文時代石器(2)



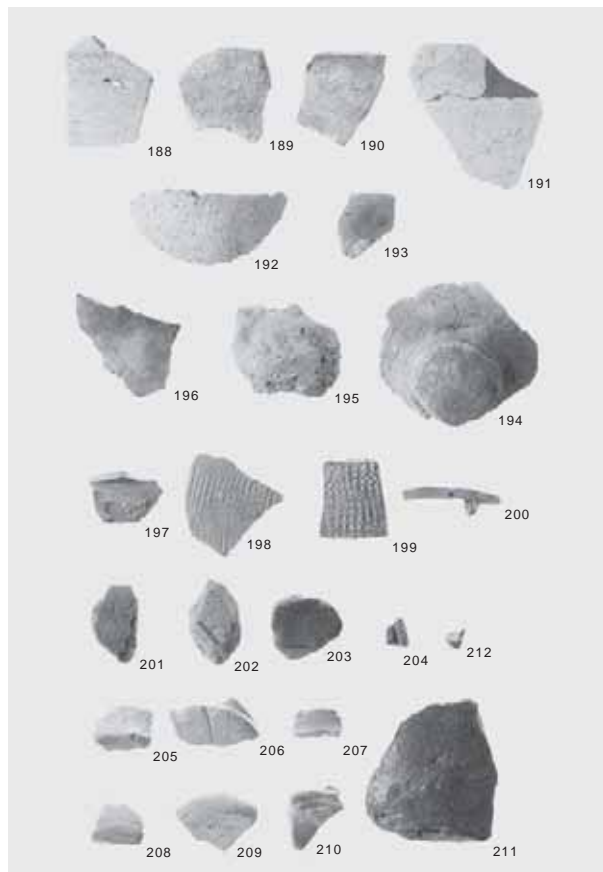
縄文時代石器(3)



縄文時代石器(4)



弥生時代終末期～古墳時代初頭土器



弥生時代～近世遺物



調査区近景(東から)



調査区遠景(南西から)



調査風景



SB1(西から)



SB2(西から)



SB3(西から)

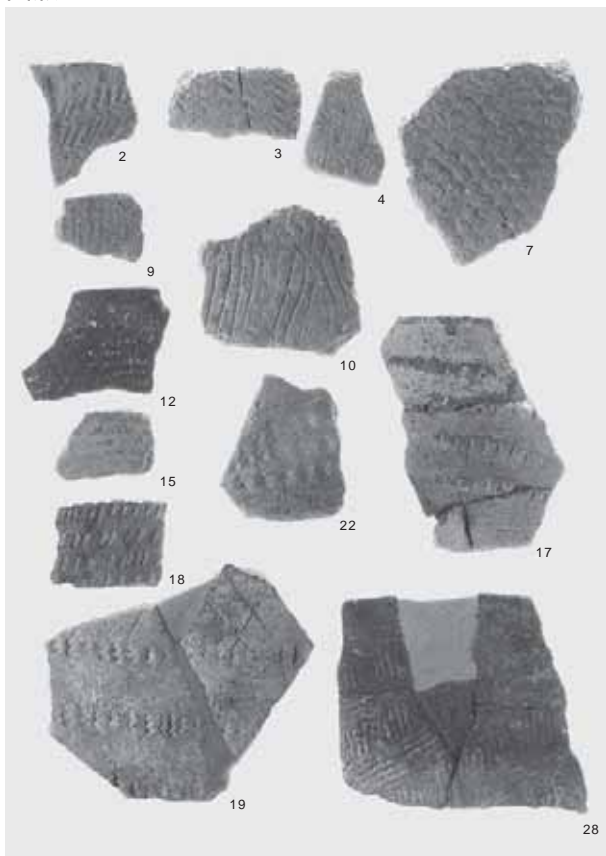


SB4(南から)

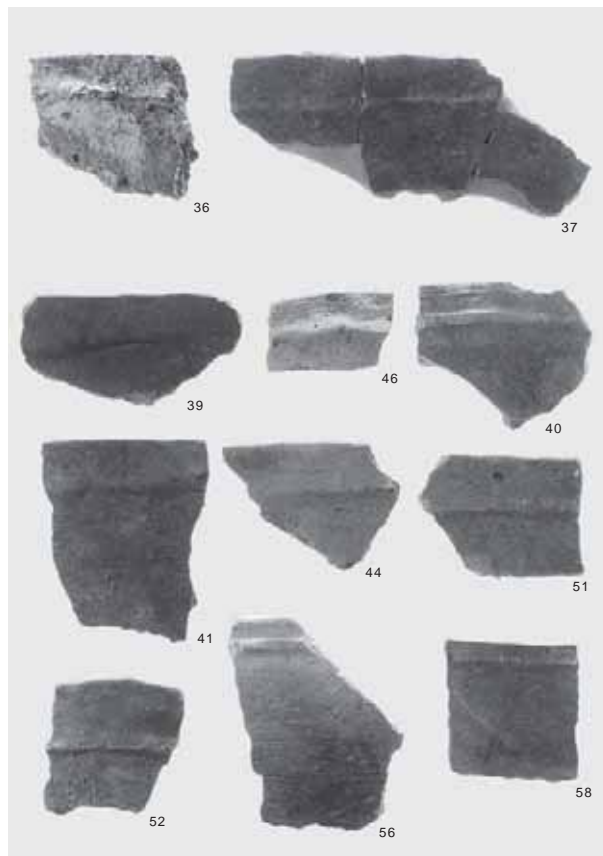


SB5(西から)

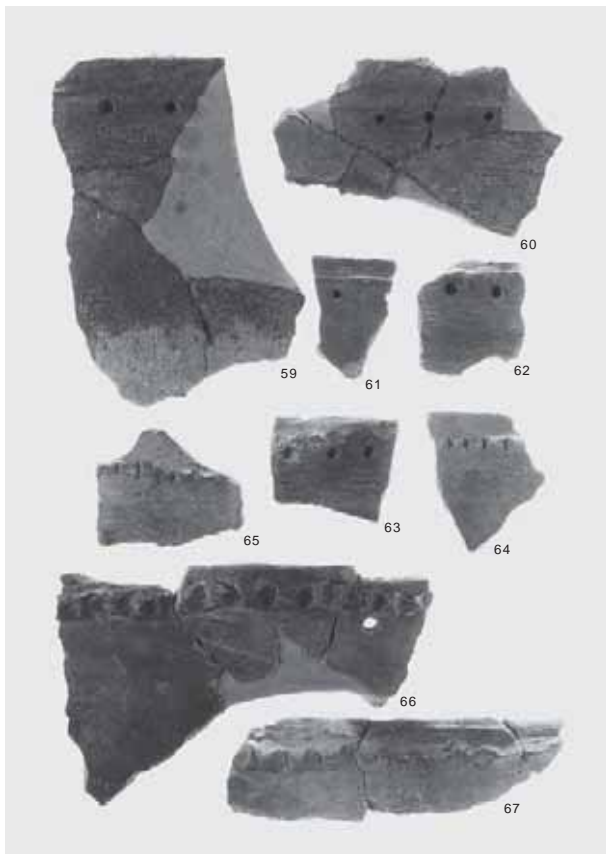
図版 9



縄文時代早期土器



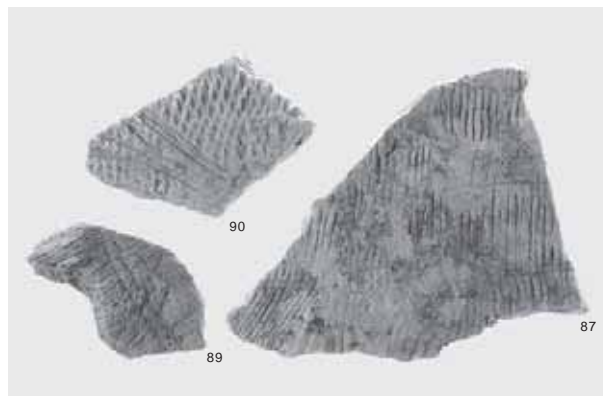
縄文時代晚期土器(突帯文)



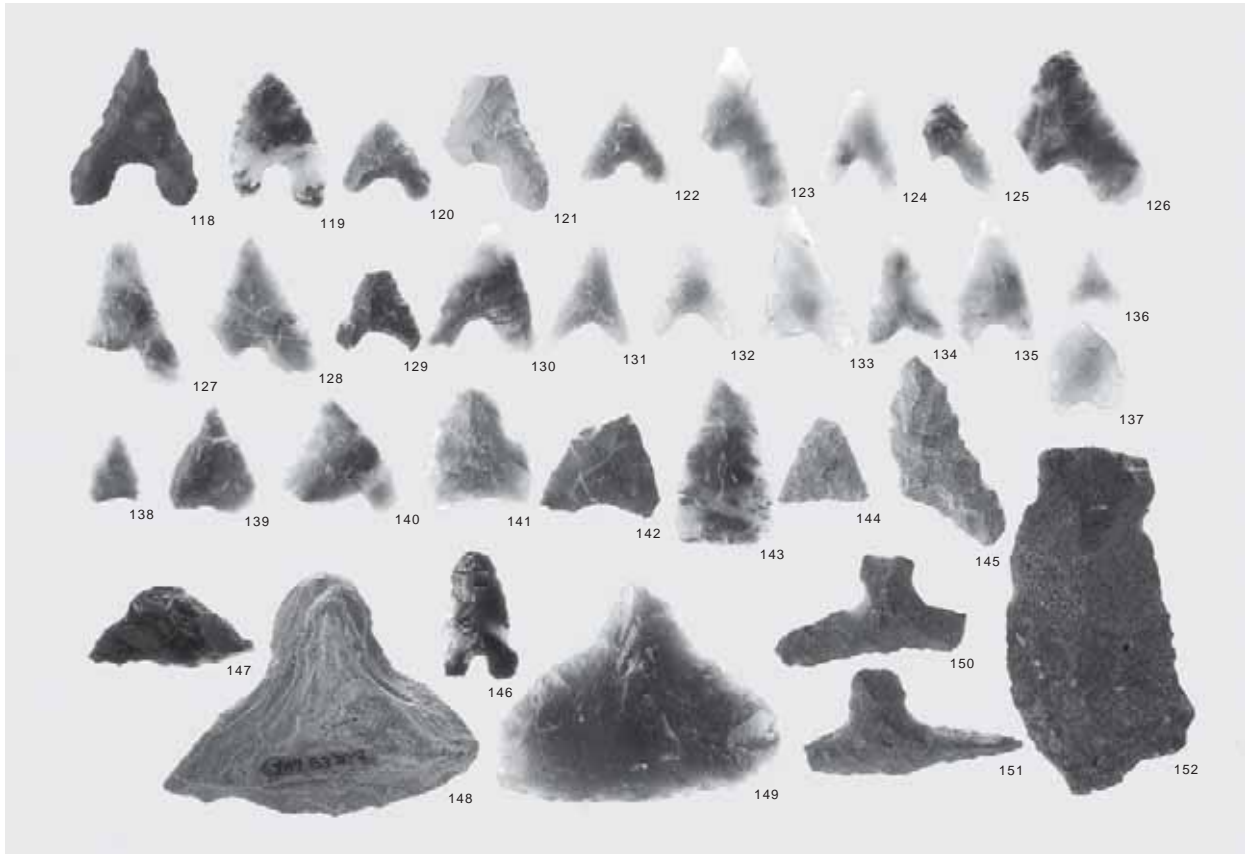
縄文時代晚期土器(刻目突帯文・孔列文)



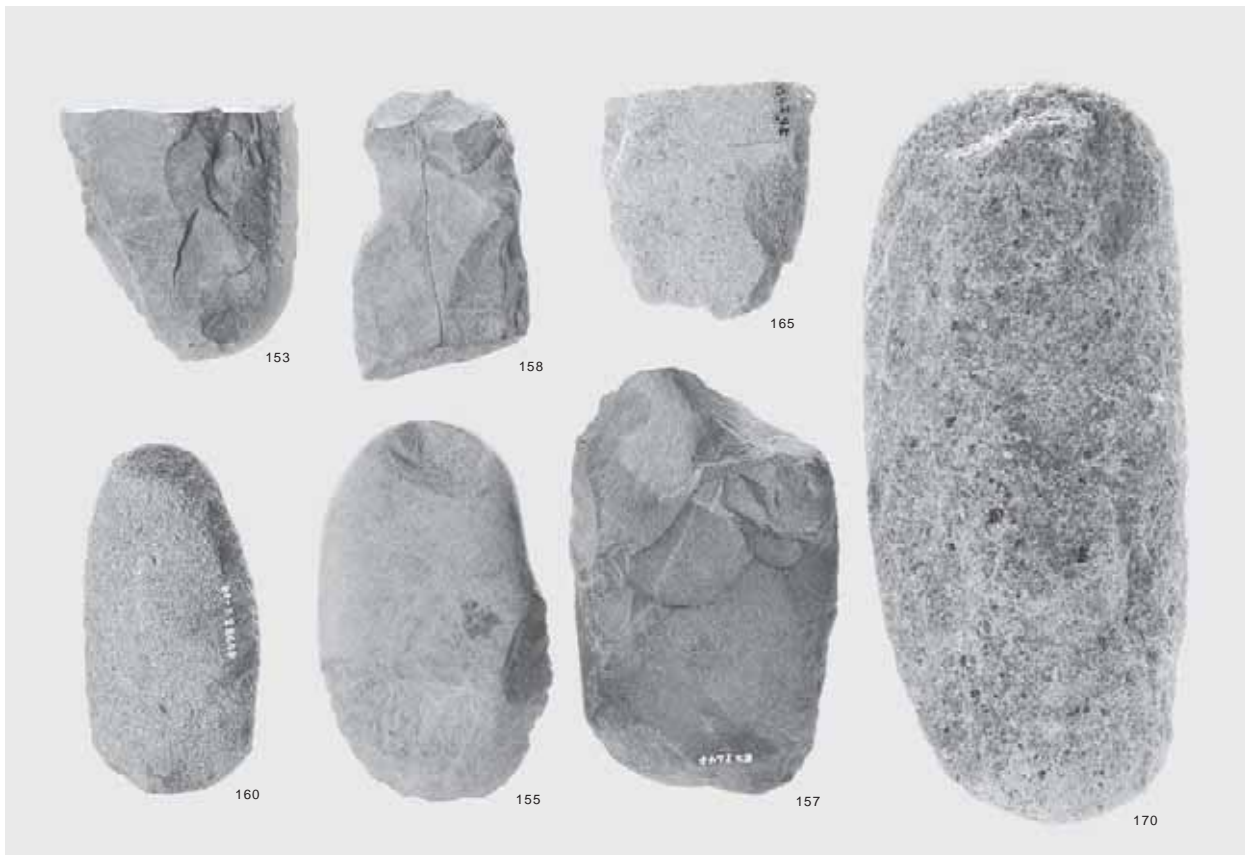
縄文時代晚期土器(組織痕)



縄文時代晚期土器(組織痕)

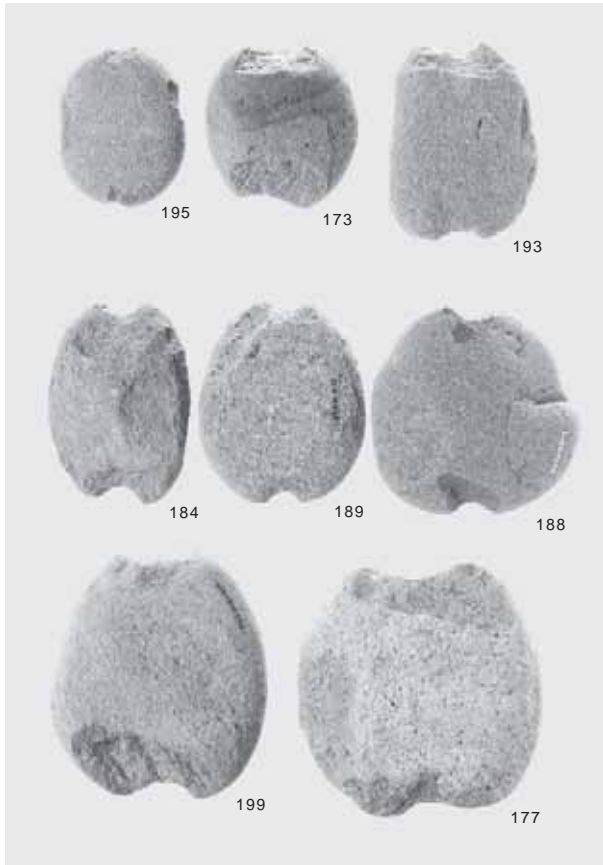


石鏃・石匙

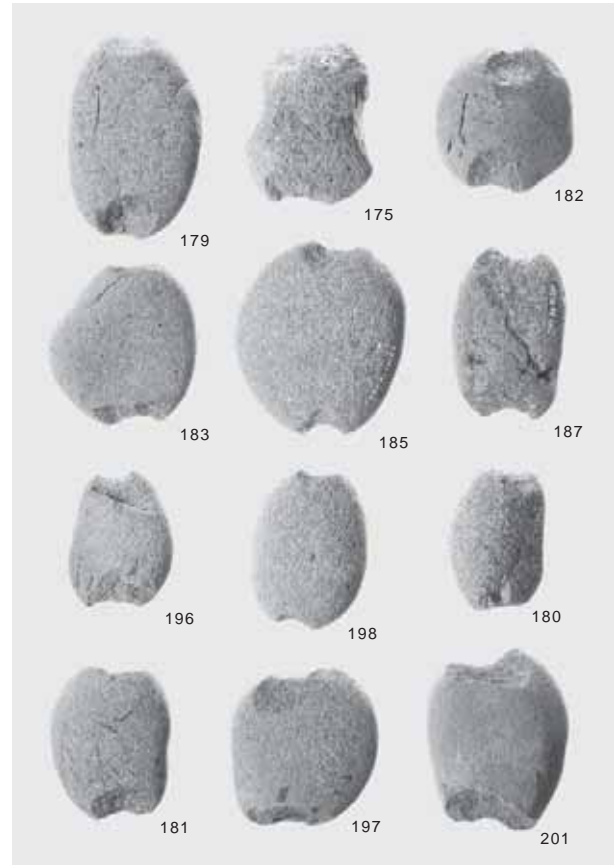


石斧

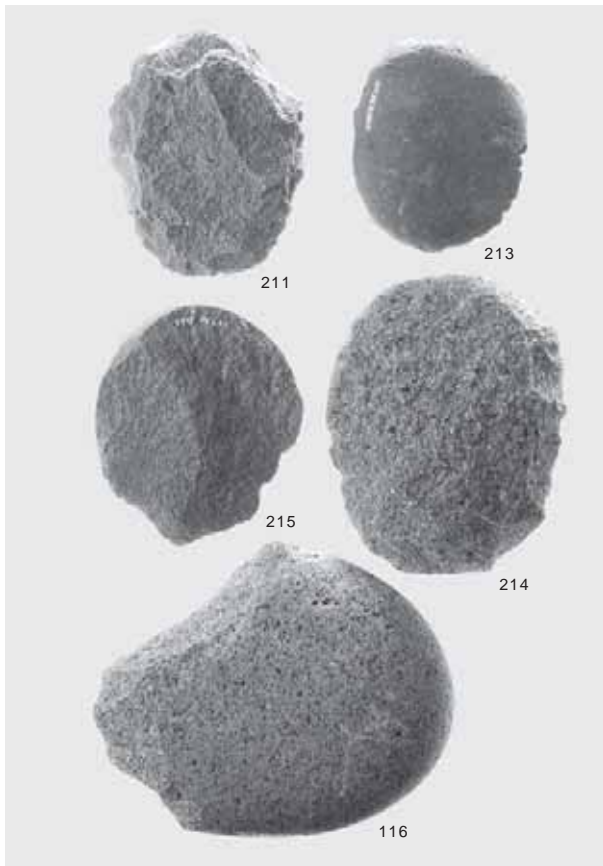
図版11



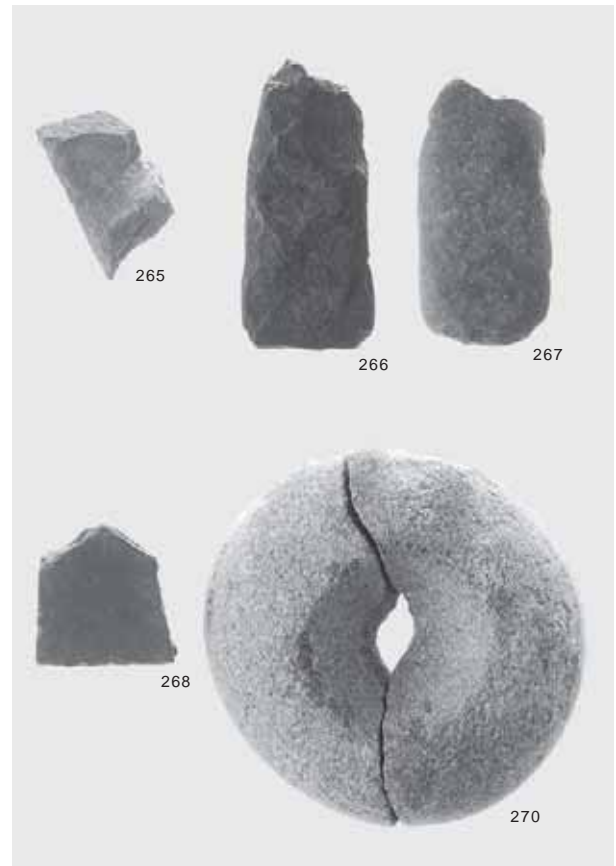
石錘



石錘



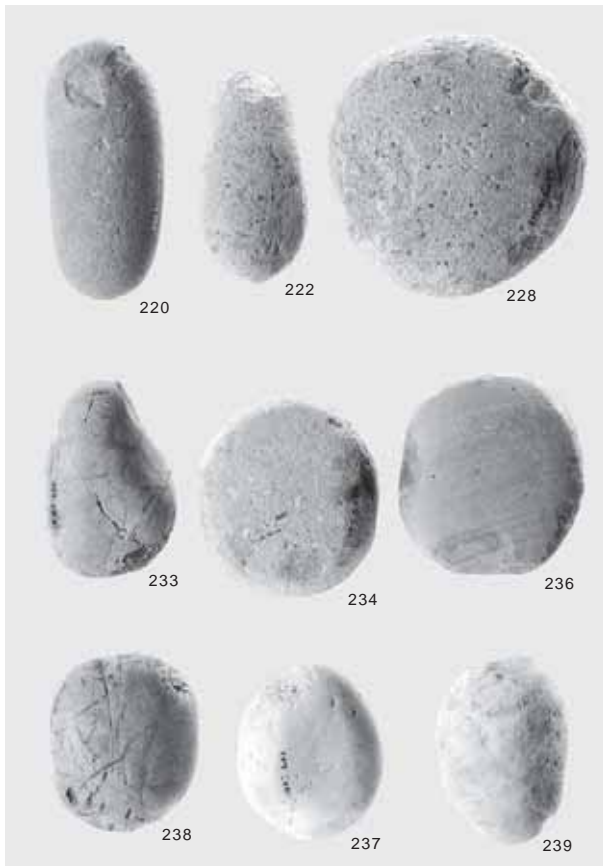
スクレイパー・礫器



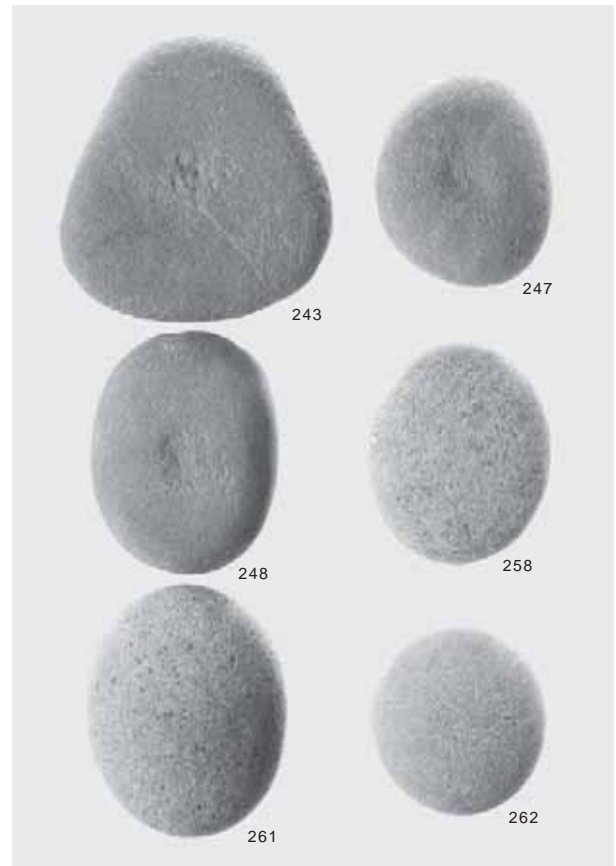
その他の石器



石皿



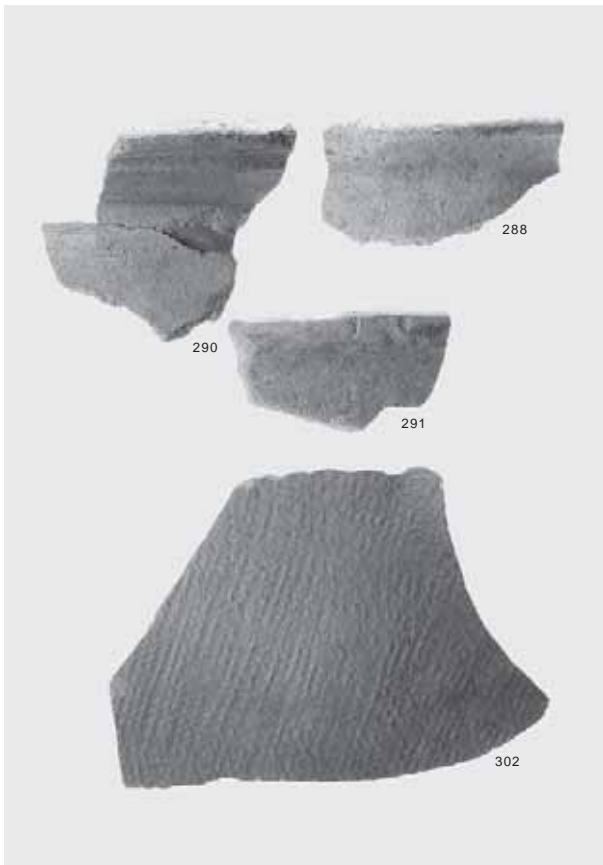
敲石



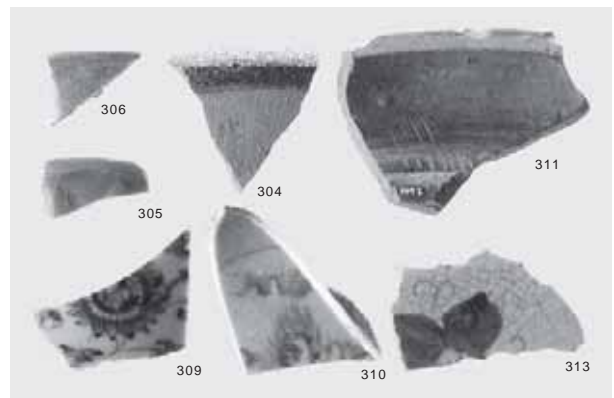
凹石·磨石



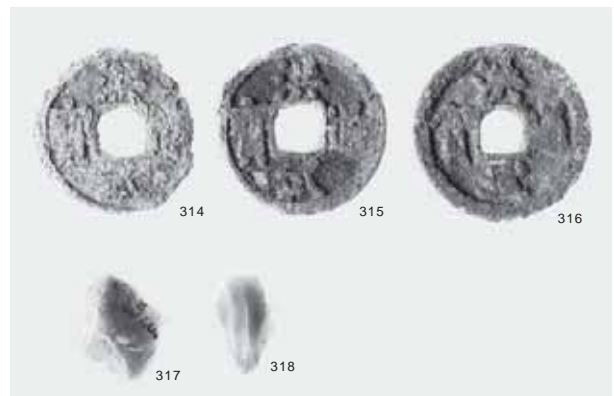
弥生時代～古墳時代土器



古代土器



中世～近世遺物



中世～近世遺物



調査区全景(北西から撮影)



調査区全景(南東から撮影)



調査風景(2011年4月)



調査風景(2011年6月)



S11検出状況(北から撮影)



S11敷石検出状況(北から撮影)



S11敷石下礫検出状況(北から撮影)



S11完掘状況(北から撮影)

図版15



SI2検出状況(北西から撮影)



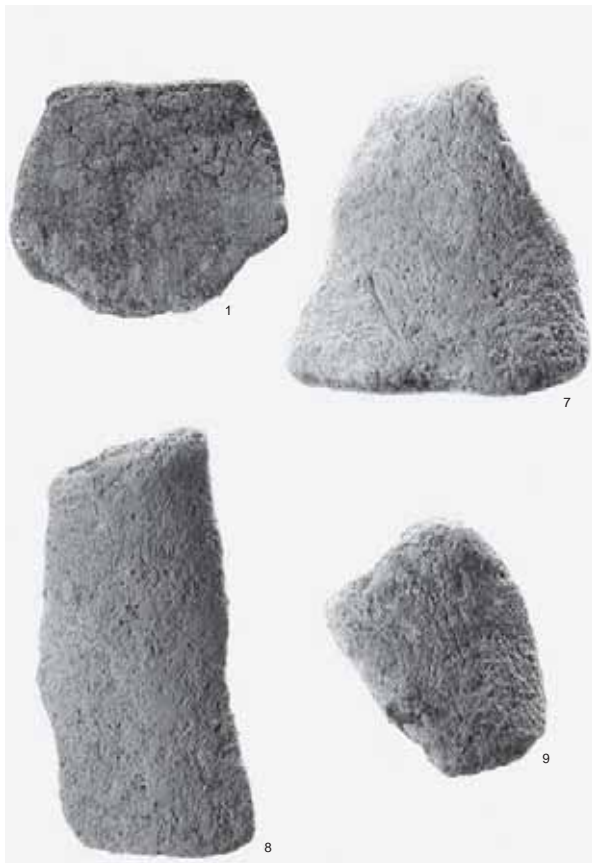
SI2完掘状況(北西から撮影)



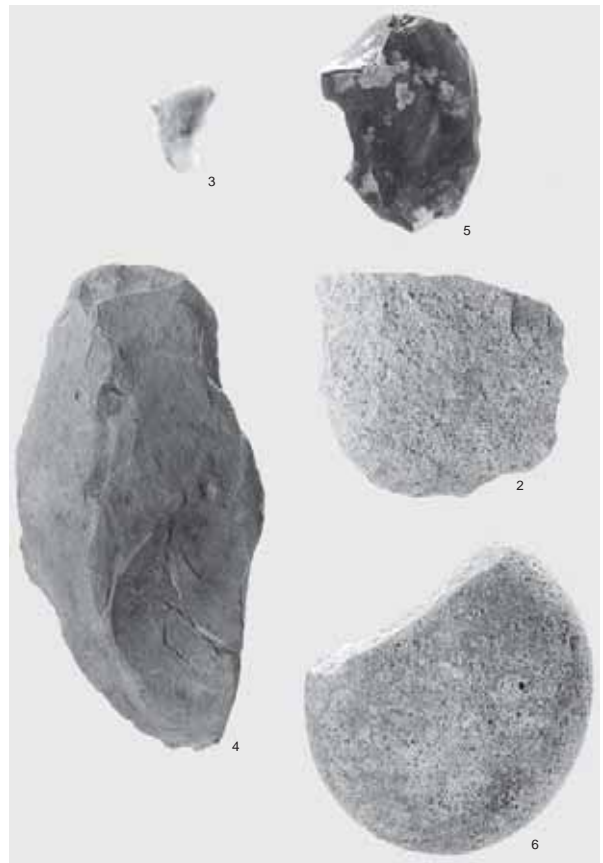
調査区南西部壁面土層堆積状況(北から撮影)



調査区南西部壁面土層堆積状況(東から撮影)



出土土器



出土石器

報告書抄録

ふりがな	おかいせきだいろく・ななじちょうさ		さかもとだいにいせき					
書名	岡遺跡(第6・7次調査)		坂元第2遺跡					
副書名	東九州自動車道(日向～都農間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第212集							
執筆・編著者名	大嶋昭海・中川みな子・松浦朋彦							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	2012年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかいせき 岡遺跡 だい6じちょうさ (第6次調査)	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 おおあざひらいわあざ 大字平岩字岡	45206	6005	32度 22分 57秒	131度 37分 14秒	2010.7.7 ~ 2011.2.25	1,870m ²	記録保存 調査
おかいせき 岡遺跡 だい7じちょうさ (第7次調査)	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 おおあざひらいわあざ 大字平岩字 たにくち 谷口			32度 22分 51秒	131度 37分 13秒	2010.7.20 ~ 2010.11.19	3,560m ²	
さかもとだいにいせき 坂元第2遺跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 おおあざひらいわあざ 大字平岩字 ながそ ナガソ			32度 21分 30秒	131度 36分 50秒	2011.4.25 ~ 2011.6.3	300m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岡遺跡 (第6次調査)	散布地 集落	旧石器時代	礫群1基	剥片・搔器	無刻目突帯文土器 の深鉢や浅鉢の完 形品が出土			
		縄文時代早期	炉穴5基、集石遺構4基、土坑9基	縄文土器・石鏃・スクレイパー				
		縄文時代晩期	埋甕1基、土坑1基	縄文土器・石鏃・石斧・スクレイパー・ 石錘・砥石				
		弥生時代終末～ 古墳時代初頭		弥生土器				
	古代～近世	道路状遺構1基、溝状遺構2条、土坑3基、 小穴1基	土師器・布痕土器・須恵器・陶器・土錘・ 火打石					
岡遺跡 (第7次調査)	散布地 集落	縄文時代		縄文土器・石鏃・石匙・石斧・石錘・砥石・ 磨石	トロトロ石器や環 石が出土			
		弥生～古墳時代		弥生時代～古墳時代土器				
		古代		土師器・須恵器				
		中世～近世	ビット81基・掘立柱建物跡5棟	陶磁器・銭貨				
坂元第2遺跡	散布地 集落	縄文時代	集石遺構2基	縄文土器・剥片・石斧・礫器・スクレイパー・ 磨石	非常に狭小な丘陵 鞍部に位置			
		弥生時代～古墳 時代		弥生時代～古墳時代土器				
要約	日向市大字平岩に位置する岡遺跡、坂元第2遺跡の発掘調査報告書である。 岡遺跡第6次調査区では、縄文時代早期の炉穴や集石遺構、縄文時代晩期の埋甕や土坑などが検出された。 岡遺跡第7次調査区は、主に遺物包含層の調査が主体であった。他、遺物包含層上面にて中世～近世のビットや掘立柱建物跡を検出した。 坂元第2遺跡では、縄文時代早期の集石遺構が2基、縄文土器が確認された。この他、弥生時代～古墳時代の土器も出土したが、中には高坏の脚部があり、周辺に集落跡や墳墓跡があった可能性がある。							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第212集

日向市所在

岡遺跡（第6・7次調査）

坂元第2遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4

2012年2月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880 0212

宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 有限会社 宮崎新生社印刷

〒880 0124

宮崎市新名爪中牟田766番地

TEL 0985(39)6148 FAX 0985(39)4240
